

平安京右京三条三坊

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊

1990

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

平安京が延暦 13 年 (794) に創設され、その京に抛り、行われた親政から、建久 3 年 (1192) に、源頼朝が征夷大將軍となり鎌倉幕府を開いたといっても、京制を変えられることなく、またそれがこわされることもなかった。京制 (日本の首都である京の制度、主として土地道路・区画の制度。法制史家滝川政治郎氏が使われている) を基にした平安の都の生活が次第に変わり、生活の変わることにつれて、埋没してしまったとみられる。埋没したものなら、発掘調査すれば、その京制の状況が知られるであろう。あわよくば生活の変わりもわかることになろう。その変りは平安京と呼ばれていたものが京都と呼ばれるようになったことを意味する。発掘調査を京都の地に行っているということは、京都に居た人、居る人の生活、その生活が都市を形成したから、その都市と生活を明らかにすることにほかならない。当研究所はそのような目的をもっている。京都市が財団法人として設立したのは、昭和 51 年 (1976) 11 月であった。

さて、島津製作所三条工場の位置は平安京制の右京三条三坊にあたり、大正 7 年 (1918) に第一期購入された。当時の地名、京都府葛野郡朱雀野村字桑原の地は、京制では三条三坊一町・二町・三町・四町地にあたる。京の西堀川は、その地点より約 240m 東に流れるべきものが、いつ頃かの氾濫で、購入地の西側を流れていた。その後、工場地は五・十六町の地に広げられ、当初木造を主体にした工場も耐震耐火、半永久の建築に昭和 12 年頃に替えられた。これらの建築は、昭和 50 年 (1970) 代には再改築の必要にせまられるようになったのである。

このような機会にさすが島津製作所である。建築の関係から地下へ深く掘り下げることを見越し、平安京の遺構をこわすことをおそれて、工場を建て替える都度、発掘調査を学術的に行うことをもくろまれ、その調査を当研究所に依

託されたのである。工場は先にも述べたように三条三坊に広がる。それを完全に行ったあかつきには、平安京が京都へと変り行く資料が十分に得られる。成果の大きいことはいうまでもなからう。そう考えて研究所はお引き受けしたのである。その第一次が、本文で示す十町地区で、昭和 54 年 (1979) に着手し、大きな成果を得た。以後続けて昭和 64 年 (1989) に至るまで、発掘調査は 6 次、試掘・立会調査が 34 次と数えるに至り、なお終らないとすれば、あと何年かかるのだろうか。それを考えれば、10 年を区切り、その成果をまとめ、総括した考察を行い報告することが必要と考えた。

調査 10 年の歳月を経て、こまかには本文に述べられているが、総括すれば、第一次調査において建築跡を得たことは、右京は記録が少ないことから、そのようなものはなかろうという考えがあったのを根底からくつがえし、右京も当初は多くの人が住んでいたと考えねばならないこと、そこに生活があることが明かになった。このような成果は、島津製作所のとられた処置に対しての大きな報償であって、当調査研究所は改めてお礼申しあげたい。

平成 2 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

凡 例

- 1 本書は当研究所が、昭和54年(1979)から60年(1985)にかけて平安京右京三条三坊で行った発掘、試掘、立会調査の報告である。各調査の原因者は文末の別表のとおりである。
- 2 本書で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図1/2,500および1/30,000を調整したものである。
- 3 方位および座標は平面直角座標系VIにより、標高は海拔高(T.P.)を使用している。
- 4 遺構番号の前に付した略記号は奈良国立文化財研究所の用例にしたがった。
- 5 遺物には出土した地区ごとに通し番号を付し、各番号の最初の数字は地区を表す。
- 6 本書作成にあたっての整理作業参加者は以下のとおりである。

調査員 加納敬二 鈴木久男 中村 敦 平尾政幸 吉崎 伸
牛嶋 茂(写真) 岡田文男(保存科学)

調査補助員 東 洋一 角村幹雄 小谷 裕 児玉光世 布川豊治 藤村敏之
藤村雅美 山口 眞
村上 勉 出水みゆき 田中利津子 中村享子 多田清治(復元)
幸明綾子 村井伸也(写真)

- 7 写真撮影は主に牛嶋が、自然遺物については岡田が担当した。
- 8 遺物の実測は平尾、山口が、図版の作成、トレースは平尾が行った。
- 9 表の作成は中村、児玉の補助を受け、平尾、山口が行った。
- 10 本書の執筆分担は以下のとおりである。
第I章 1、2、3、4A・C 平尾、4B 加納
第II章 1A～D、2、3 平尾、1E 加納
第III章 1A 鈴木、1B～F、2、3 平尾
第IV章 岡田
第V章 1、2A、3、5 平尾、2B 鈴木、2C、4 岡田
- 11 本書の構成、編集は杉山信三、田辺昭三、永田信一の指導のもとに平尾が行った。
- 12 本書の作成にあたり、以下の団体や諸氏の協力、助言を得た。記して謝意を表したい。
荒木 実 伊藤孝明 大林達夫 小野善裕 上村憲章 川島將生 岸井 尚 北九州市立考古博物館 木村有作 京都国立博物館 京都市考古資料館 京都市歴史資料館 京都大学埋蔵文化財研究センター 京都府立山城郷土資料館 粉川昭平

小平和夫 小牧市教育委員会 小森俊寛 斎藤孝正 笹嶋貞夫 柴尾俊介
 清水芳裕 高橋美久二 高橋俊之 田口頌二 多治見市教育委員会 巽淳一郎
 塚本瑠一 中嶋 隆 長野県教育委員会 名古屋市見晴台考古資料館
 名古屋大学考古学研究室 奈良国立文化財研究所 橘崎彰一 日進町教育委員会
 野沢則幸 萩本 勝 橋本清一 長谷川行孝 原 明芳 原山充志 平安京調査会
 防府市教育委員会 前川 要 増子康真 松沢 修 峰 巍 宮沢恒之 三好町歴
 史民俗資料館 森 郁夫 安田幸一 山崎澄雄 若尾正成 (五十音順 敬称略)

番号	調査方法	調査期間(昭和)	面積	原因者
1	広域立会	55年 6月17日～56年3月27日	2139㎡	京都市
2	立会	55年 7月16日	50㎡	株式会社大阪ガス
3	発掘	55年 4月10日～7月15日	1125㎡	株式会社島津製作所
4	発掘	56年 8月 6日～10月 5日	732㎡	株式会社島津製作所
5	発掘	60年10月21日～12月 5日	1115㎡	株式会社島津製作所
6	立会	57年11月30日	35㎡	株式会社大阪ガス
7	立会	55年10月13日	128㎡	個人宅
8	立会	61年 5月24日	80㎡	個人宅
9	立会	57年 6月17日	42㎡	株式会社広瀬製作所
10	発掘	54年 5月31日～8月 2日	1864㎡	株式会社島津製作所
11	立会	59年 4月20日	11㎡	株式会社大平工業
12	発掘	59年 6月25日～7月 6日	378㎡	株式会社島津製作所
13	立会	56年11月 4日	3㎡	株式会社島津製作所
14	立会	57年 2月10日	60㎡	京都市
15	立会	60年10月17日	180㎡	株式会社出光興産
16	広域立会	55年 6月 3日～12月 5日	916㎡	京都市
17	広域立会	55年 4月18日～56年3月30日	213㎡	京都市
18	広域立会	55年 3月 6日～10月20日	454㎡	京都市
19	試掘	60年 9月 6日	44㎡	個人宅
20	立会	57年 6月25日	17㎡	株式会社京都薬品工業
21	立会	58年 6月27日	79㎡	個人宅
22	試掘	56年10月 7日	20㎡	株式会社京都薬品工業
23	立会	62年 2月20日、2月25日	55㎡	個人宅
24	広域立会	55年 1月28日～11月 7日	629㎡	京都市
25	立会	58年11月21日	35㎡	個人宅
26	立会	59年11月22日	51㎡	個人宅
27	試掘	60年11月22日	106㎡	株式会社千代田土地
28	立会	59年 2月14日	99㎡	個人宅
29	立会	59年 3月28日	184㎡	株式会社大黒絲業
30	立会	58年 1月10日	62㎡	株式会社材栄
31	試掘	54年10月 3日	59㎡	個人宅
32	立会	55年 6月15日～6月25日	250㎡	京都市
33	立会	59年11月14日	356㎡	京洛ヤクルト販売
34	広域立会	57年 6月21日	22㎡	株式会社島津製作所
35	広域立会	55年 2月20日～56年4月 9日	405㎡	京都市

※番号は第1章 表1と同じ

本文目次

第Ⅰ章 右京三条三坊の調査	1
1 はじめに	1
2 平安京の条坊と遺跡の位置	2
A 条坊復元の経緯	2
B 測量成果による条坊復元と遺跡の位置	3
3 調査に至る経過	5
4 主要な調査の経過と概要	9
A 調査組織の構成	9
B 発掘調査の概要	11
C 試掘・立会調査の概要	16
D 調査日誌（抄）	17
第Ⅱ章 遺構	25
1 平安時代の遺構	25
A 三町地区の遺構	26
B 四町地区の遺構	28
C 五町地区の遺構	32
D 十町地区の遺構	34
E 試掘・立会調査で検出した遺構	37
2 平安時代以前の遺構	38
3 平安時代以降の遺構	39
第Ⅲ章 遺物	41
1 平安時代前期の遺物	41
A 瓦甎類	41
B 土器類	44
C X46 出土遺物	68

D	墨書土器・線刻土器	69
E	硯	72
F	その他の遺物	74
2	平安時代以前の遺物	75
A	石器	75
B	土器類	75
C	石製品	76
3	平安時代後期以降の遺物	78
第IV章 自然遺物		79
1	右京三条三坊出土自然遺物	79
A	植物遺体	79
B	昆虫遺体とその他の自然遺物	82
2	植物遺体の検討	83
A	植物遺体の成因と属性	83
B	調査地周辺の木本（庭園樹）	84
C	調査地周辺の草本	87
D	食用植物	89
3	植物遺体からみた環境	90
A	庭園樹による景観	90
B	草本からみた周辺の環境	91
C	食用食物について	93
4	小結	94
第V章 考 察		99
1	平安時代前期の土器	99
A	土師器主要小型器形の変化（供膳形態を中心とする型式編年）	99
B	破片数データからみた土器の様相	104
2	右京三条三坊の平安時代遺物の検討	110
A	9世紀代の土器類	110

B	瓦類	119
C	漆製品の技法について	119
3	平安時代の遺構	124
A	遺構の時期と配置	124
B	遺跡周辺の旧地形	126
4	植物遺体からみた平安京の環境	127
A	平安京内の井戸埋土の分析例	127
B	平安京における植物種実の出土傾向	131
5	まとめ	133
	出土遺物観察表	139

挿 図 目 次

挿図 1	平安京と長岡京	1
挿図 2	右京三条三坊の条坊カード(部分)	3
挿図 3	遺跡位置図	4
挿図 4	平安京跡発掘調査地点分布図	5
挿図 5	調査地点位置図	6
挿図 6	十町地区遺構配置模式図	11
挿図 7	十町地区土層図	12
挿図 8	三町地区の土層	13
挿図 9	三町地区遺構配置模式図	13
挿図 10	SD11 付近の土層	13
挿図 11	四町地区遺構配置模式図	13
挿図 12	五町地区遺構配置模式図	14
挿図 13	五町地区土層図	14
挿図 14	十二町地区遺構配置模式図	15
挿図 15	十二町地区土層図	15
挿図 16	立会調査風景	16
挿図 17	道祖大路地区流路の土層	16
挿図 18	十町地区調査風景	17
挿図 19	十町地区の写真撮影	18
挿図 20	SX07 の調査	19
挿図 21	SE06 の実測	19
挿図 22	SD11 の調査	20
挿図 23	十二町地区調査風景	22
挿図 24	五町地区調査風景	22
挿図 25	SD28 の土層	23
挿図 26	SE06 井戸部材の刻印	27
挿図 27	SD11 断面図	29

挿図 28	SD11 の護岸に使用されていた各種の杭	30
挿図 29	SD12、SD13 と整地層 2	31
挿図 30	SE26 実測図	33
挿図 31	SX46 木棺模式図	37
挿図 32	SD48・SD49 実測図	38
挿図 33	三町地区の小溝群	39
挿図 34	カセ型の痕跡	42
挿図 35	文字瓦	44
挿図 36	SD11A 出土土器	44
挿図 37	SB29・SB31・SB32 出土土器	45
挿図 38	四町地区整地層 2 出土土器	47
挿図 39	SD19 出土白色無釉陶器	53
挿図 40	SD19 出土黒釉陶器	54
挿図 41	SD20・SD23 出土土器	54
挿図 42	SD22 出土土器	55
挿図 43	SE26 出土土器	56
挿図 44	五町地区南部遺物包含層出土土器	56
挿図 45	SD38 出土土器	58
挿図 46	十町地区遺物包含層出土輸入陶磁器	59
挿図 47	SK18 出土土器	59
挿図 48	SX47 出土土器	60
挿図 49	SD11・12・13 最上層出土土器	61
挿図 50	四町地区整地層 3 出土土器	62
挿図 51	SX07 出土須恵器甕	64
挿図 52	SX07 出土陰刻花文緑釉陶器	65
挿図 53	SX07 出土陰刻花文緑釉陶器蓋	66
挿図 54	SX07 出土白色無釉陶器	66
挿図 55	SX07 出土輸入陶磁器	67
挿図 56	SB01・SB04 出土土器	68
挿図 57	SE06 出土土器	68

挿図 58	SX46 出土土器	69
挿図 59	SX46 出土遺物	69
挿図 60	硯	72
挿図 61	硯	73
挿図 62	SX07 出土銅銭	74
挿図 63	石器	75
挿図 64	三町地区出土古墳時代の土器	76
挿図 65	石製品	76
挿図 66	SD49 出土土器	77
挿図 67	土師器小型供膳形態の変化	101
挿図 68	土師器小型器形の口縁端部の変化	111
挿図 69	施釉陶器の底部の形態分類	115
挿図 70	湿地・川の分布	126
挿図 71	資料採集地点位置図	127

表 目 次

表 1	調査一覧	7
表 2	平安時代の遺構一覧	25
表 3	SK14 出土土器破片計数表	46
表 4	SK14 土師器法量分布	46
表 5	SD11B 出土土器破片計数表	48
表 6	SD11B 土師器法量分布	48
表 7	SD12B 出土土器破片計数表	50
表 8	SD13B 出土土器破片計数表	50
表 9	SD19 土師器法量分布	50
表 10	SD19 出土土器破片計数表	51
表 11	SD19 緑釉陶器法量分布	53
表 12	SD19 灰釉陶器法量分布	54
表 13	SE26 土師器法量分布	55

表 14	SX07 出土土器破片計数表	63
表 15	SX07 土師器法量分布	63
表 16	SX07 黒色土器法量分布	63
表 17	SX07 緑釉陶器法量分布	65
表 18	SX07 灰釉陶器法量分布	66
表 19	墨書土器一覧	70
表 20	線刻土器一覧	71
表 21	SX07 出土銅銭計測値	74
表 22	右京三条三坊出土木本種実計数表	80
表 23	右京三条三坊出土草本種実計数表	81
表 24	右京三条三坊に生育していた木本（庭園樹）	84
表 25	右京三条三坊の草本（植生による分類）	88
表 26	栽培植物を中心とする食用植物	89
表 27	右京三条三坊の庭園樹出現率の比較	90
表 28	右京三条三坊の庭園樹の樹高分布（ツル植物を除く）	90
表 29	草本の性質と調査地別の出現率	92
表 30	平安京出土土器破片の比	104
表 31	小型供膳形態の比	105
表 32	平安京各所の出土土器破片の比	106
表 33	各時期の土師器を除く小型供膳形態の比	109
表 34	須恵器小型器形の形態別の比	113
表 35	緑釉陶器の底部の形態	116
表 36	緑釉陶器のミガキの部位	116
表 37	灰釉陶器の底部の形態	118
表 38	灰釉陶器の施釉部位の比較	118
表 39	右京三条三坊の庭園樹と他地域の比較	129
表 40	右京三条三坊の草本と他地域の比較	130
表 41	平安京内の木本（庭園樹）出土状況	132
表 42	北白川追分町遺跡出土木本内容	132

図 版 目 次

- 図版 1 遺構（三町・四町地区） 遺構実測図
- 図版 2 遺構（五町地区） 遺構実測図
- 図版 3 遺構（十町地区） 遺構実測図
- 図版 4 遺構（四町地区） SD11 実測図
- 図版 5 遺構（三町地区） SE06 実測図
- 図版 6 遺構（十町地区） SX46 実測図
- 図版 7 遺物 軒瓦拓影・実測図
- 図版 8 遺物（四町地区） SK14 出土土器実測図
- 図版 9 遺物（四町地区） SD11B 出土土器実測図
- 図版 10 遺物（四町地区） SD11B・12・13 出土土器実測図
- 図版 11 遺物（五町地区） SD19 出土土器実測図
- 図版 12 遺物（五町地区） SD19 出土土器実測図
- 図版 13 遺物（五町地区） SD19 出土土器実測図
- 図版 14 遺物（五町地区） SD19 出土土器実測図
- 図版 15 遺物（五町地区） SD19 出土土器実測図
- 図版 16 遺物（五町地区） SD19 出土土器実測図
- 図版 17 遺物（五町地区） SD19 出土土器実測図
- 図版 18 遺物（十町地区） SX44・SK43 出土土器実測図
- 図版 19 遺物（十町地区） 遺物包含層出土土器実測図
- 図版 20 遺物（三町地区） SX07 出土土器実測図
- 図版 21 遺物（三町地区） SX07 出土土器実測図
- 図版 22 遺物（三町地区） SX07 出土土器実測図
- 図版 23 遺物（三町地区） SX07 出土土器実測図
- 図版 24 遺物（三町地区） SX07 出土土器実測図
- 図版 25 遺物 墨書・線刻土器実測図
- 図版 26 遺物 土製品・石製品・金属製品実測図

写真図版目次

- 写真図版 1 遺跡 1 平安京跡右京北西部（南から）
2 右京三条三坊付近（南から）
- 写真図版 2 遺構 1 三町地区 調査区全景（西から）
2 三町地区 東半建物群（北西から）
- 写真図版 3 遺構 1 三町地区 建物 SB01・04・05（北西から）
2 三町地区 建物 SB02（西から）
- 写真図版 4 遺構 1 三町地区 井戸 SE06
2 三町地区 井戸 SE06 断ち割り断面（西から）
- 写真図版 5 遺構 1 三町地区 溝 SD09 と落込 SX07（北から）
2 三町地区 落込 SX07 堆積状況（北から）
- 写真図版 6 遺構 1 四町地区 調査区全景（西から）
2 四町地区 溝 SD11B・建物 SB15・門 SB16（東から）
- 写真図版 7 遺構 1 四町地区 溝 SD11B と橋 SX17（北から）
- 写真図版 8 遺構 1 四町地区 溝 SD11B 護岸状況（南西から）
2 四町地区 溝 SD11A（北から）
- 写真図版 9 遺構 1 四町地区 溝 SD11B と SD12（南東から）
2 四町地区 溝 SD11B と SD13（北東から）
- 写真図版 10 遺構 1 四町地区 土壌 SK14（南東から）
2 四町地区 土壌 SK18（南から）
- 写真図版 11 遺構 1 四町地区 溝 SD11 断面（南から）
2 四町地区 橋 SX17 柱根（北から）
- 写真図版 12 遺構 1 五町地区 調査区全景（北東から）
2 五町地区 建物 SB20 と溝 SD19（北東から）
- 写真図版 13 遺構 1 五町地区 建物 SB20（西から）
2 五町地区 建物 SB21（北東から）
- 写真図版 14 遺構 1 五町地区 溝 SD22・23・24 と柵 SA25（北西から）
2 五町地区 井戸 SE26（東から）

- 写真図版 15 遺構 1 五町地区 溝 SD19 遺物出土状況（北東から）
- 写真図版 16 遺構 1 十町地区 2区全景（西から）
2 十町地区 建物群（東から）
- 写真図版 17 遺構 1 十町地区 建物 SB29（北から）
2 十町地区 建物 SB31（南東から）
- 写真図版 18 遺構 1 十町地区 建物 SB32（北から）
2 十町地区 建物 SB33（北から）
- 写真図版 19 遺構 1 十町地区 建物 SB34（東から）
2 十町地区 建物 SB35（西から）
- 写真図版 20 遺構 1 十町地区 溝 SD38 と柵 SA41（西から）
2 十町地区 溝 SD39（北東から）
3 十町地区 落込 SX44 遺物出土状況（東から）
4 十町地区 1区全景（西から）
- 写真図版 21 遺構 1 十町地区木棺墓 SX46 棺蓋撤去前（北から）
2 十町地区木棺墓 SX46 棺内（北から）
3 十町地区木棺墓 SX46 化粧道具出土状況（南から）
- 写真図版 22 遺構 1 十町地区溝 SD48 と川 SD49（北から）
2 十町地区溝 SD48 断面（北から）
- 写真図版 23 遺物 右京三条三坊出土瓦
- 写真図版 24 遺物 右京三条三坊出土瓦
- 写真図版 25 遺物 右京三条三坊出土瓦
- 写真図版 26 遺物 十町地区 SB29・31・32 出土土器
- 写真図版 27 遺物 四町地区 SK14 出土土師器
- 写真図版 28 遺物 四町地区 SK14 出土須恵器
- 写真図版 29 遺物 四町地区 SD11 出土土師器
- 写真図版 30 遺物 四町地区 SD11 出土土器
- 写真図版 31 遺物 四町地区 SD11・12・13 出土土器
- 写真図版 32 遺物 四町地区 SD11・12・13 出土土器
- 写真図版 33 遺物 五町地区 SD19 出土土師器
- 写真図版 34 遺物 五町地区 SD19 出土土師器

- 写真図版 35 遺物 五町地区 SD19 出土土師器
- 写真図版 36 遺物 五町地区 SD19 出土土師器
- 写真図版 37 遺物 五町地区 SD19 出土土師器、黒色土器
- 写真図版 38 遺物 五町地区 SD19 出土須恵器
- 写真図版 39 遺物 五町地区 SD19 出土須恵器
- 写真図版 40 遺物 五町地区 SD19 出土須恵器
- 写真図版 41 遺物 五町地区 SD19 出土緑釉陶器
- 写真図版 42 遺物 五町地区 SD19 出土緑釉陶器
- 写真図版 43 遺物 五町地区 SD19 出土緑釉陶器、灰釉陶器
- 写真図版 44 遺物 五町地区 SD19 出土灰釉陶器
- 写真図版 45 遺物 五町地区 SD19・22 出土土器
- 写真図版 46 遺物 五町地区 SE26 出土土器
- 写真図版 47 遺物 十町地区 SD38・SK43 出土土器
- 写真図版 48 遺物 十町地区 SX44 出土土師器、黒色土器
- 写真図版 49 遺物 十町地区遺物包含層出土土器
- 写真図版 50 遺物 十町地区遺物包含層出土土器
- 写真図版 51 遺物 十町地区 SX47 出土土器
- 写真図版 52 遺物 三町地区 SX07 出土土師器
- 写真図版 53 遺物 三町地区 SX07 出土土師器
- 写真図版 54 遺物 三町地区 SX07 出土土師器
- 写真図版 55 遺物 三町地区 SX07 出土黒色土器
- 写真図版 56 遺物 三町地区 SX07 出土黒色土器
- 写真図版 57 遺物 三町地区 SX07 出土須恵器
- 写真図版 58 遺物 三町地区 SX07 出土緑釉陶器
- 写真図版 59 遺物 三町地区 SX07 出土緑釉陶器
- 写真図版 60 遺物 三町地区 SX07 出土緑釉陶器
- 写真図版 61 遺物 三町地区 SX07 出土灰釉陶器
- 写真図版 62 遺物 三町地区 SX07 出土灰釉陶器
- 写真図版 63 遺物 三町地区 SX07 出土輸入陶磁器
- 写真図版 64 遺物 三町地区 SB01・04・SE06 出土土器

- 写真図版 65 遺物 十町地区 SX46 出土遺物
- 写真図版 66 遺物 墨書土器
- 写真図版 67 遺物 墨書土器・線刻土器
- 写真図版 68 遺物 硯
- 写真図版 69 遺物 硯・金属製品
- 写真図版 70 遺物 石製品・土製品
- 写真図版 71 遺物 漆器漆膜断面
- 写真図版 72 遺物 施釉陶器の高台形態
- 写真図版 73 遺物 植物遺体（木本）
- 写真図版 74 遺物 植物遺体（木本）
- 写真図版 75 遺物 植物遺体（木本・草本）
- 写真図版 76 遺物 植物遺体（草本）
- 写真図版 77 遺物 植物遺体（草本）
- 写真図版 78 遺物 昆虫遺体その他
- 写真図版 79 遺物 石器
- 写真図版 80 遺物 十町地区 SD48 出土土師器
- 写真図版 81 遺物 十町地区 SD48 出土須恵器

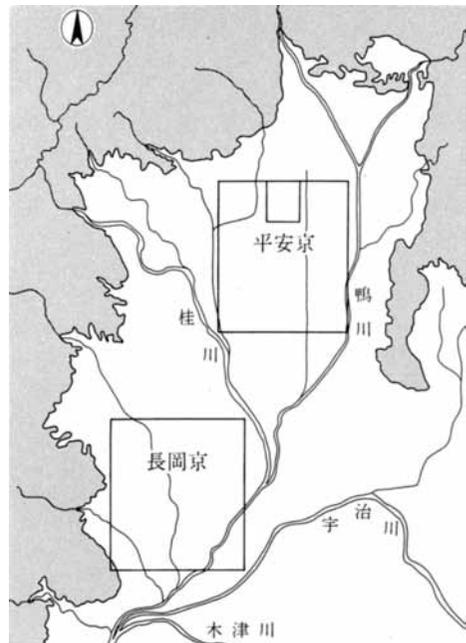
第 I 章 右京三条三坊の調査

1 はじめに

京都盆地には長岡京と平安京の二つの古代都城遺跡がある。長岡京は、延暦三年(784)、山背の国乙訓郡の桂川、宇治川、木津川合流点の北方に造営された。この新京は遷都後わずか10年で廃され、延暦十三年(794)、新たに平安京が造営された。このように短い期間で長岡京が廃都された原因については水害や怨霊など、さまざまな説があり、いまのところ決定するにはいたっていないが、長岡京の置かれていた地理的条件からみて水害説には説得力があり、平安遷都の原因の一つとみてよいだろう。

一方、平安京の置かれた葛野、愛宕の両郡にまたがる地域は、三方を山に囲まれた京都盆地の北端近く、北方から盆地へ流れ込む旧鴨川、天神川などが形成した扇状地上に位置する^{註1}。鴨川と桂川にはさまれたこの地域は標高50m～20mの、北東から南西に向かう緩い傾斜面をなしており、平安京造営以前には、盆地内を流れる河川によって形成された自然堤防や小沼が点在する豊かな自然環境をもっていたと思われる。

周知のごとく平安京はわが国で最後に造営された古代都城である。以後、明治にいたるまでの約1100年間、京都は都としての位置を保ち続けてきた。しかし、それは平安京の都市構造や機能がそのまま現在まで継続したことを意味するものではなく、遷都以来この都市がさまざまな歴史的变化に対応してその姿を変えてきたことは言うまでもないだろう。東西約4.5km、南北約5.2kmの区域の北辺中央に大内裏を置き、縦横に配された大路小路により左右対称に整然と区画されていたこの都も、やがて右京が徐々に荒廃し、生活、文化の中心が左京に移ってゆく。さらに、院政期には鴨東に六勝寺を中心とする街区が、京南郊の鳥羽一帯には離宮が相次いで造営されるなどの変化をたどるのであるが、



挿図1 平安京と長岡京

本書に収録した遺跡調査の成果から、右京の衰退に関するいくつかの具体的な事実を知ることができた。この点については第V章で述べることとし、まず平安京の条坊と遺跡の位置関係を明らかにしたい。

2 平安京の条坊と遺跡の位置

A 条坊復元の経緯

平安京を研究する上で、条坊の復元は基本的な課題の一つである。これについては古くから多くの検討が加えられてきたが、その代表的なものに『大内裏図考証^{註2}』がある。しかし明治以前になされたこれらの多くが、残された京図や文献をもとにした平安京そのものの平面構造に対する研究に終始しているのに対し、明治28年(1895)に刊行された『平安通誌^{註3}』所載の「平安京旧址実測全図」は、測量をもとにした京都市域の現況図に、『延喜式』の京程に示される条坊を重ね合わせた最初のものとして評価される。これ以後も文献的、地理的な観点からの条坊研究は数多くなされてきたが、発掘調査例が少ないことから、実際の平安京の遺構に基づいて行われた研究はほとんどなかったといっても過言ではないだろう。その後、昭和30年(1955)代を境に市街地再開発が急速に進み、それに伴い増加した発掘調査によって、平安京の遺構が次々と検出され始めた。これらの遺構が平安京のどの位置にあたるかを推定する上で、より正確な平安京の条坊の復元と定位が重要な課題となり、従来行われてきた文献的研究に加え、遺構に基づく実証的な条坊細部の検討も活発に行われるようになった。こうした中で、昭和39年(1964)杉山信三が提示した条坊復元案^{註5}は平安京条坊の復元に大きな見通しを付けたものといえよう。杉山は発掘調査で得た西寺の中軸線と、現存する東寺の中軸線間を実測し、その結果と『延喜式』の京程に記載された二つの寺院間の距離から、平安京の造営尺および方位を導き出した。そしてその成果をもとに1/3,000地形図上に平安京の条坊を復元した。この杉山の復元図あるいはこれをもとに作成された1/2,500の条坊復元図に沿っていくつかの発掘調査が行われ、検出された条坊関係の街路や側溝などによりこの復元案の精度が検証された^{註6}。しかしその後の調査例の増加に伴い、この復元図にうまく合致しない遺構も多く検出されるようになった。このため条坊復元を再度検討する必要性が生じてきたが、この時点では検出した遺構位置の記録方法やそれを1/2,500の地形図上に落とす際の技術的な限界あるいは地図そのものの誤差など、復元案の修正にはいくつかの解決すべき問題が残されていた。

B 測量成果による条坊復元と遺跡の位置

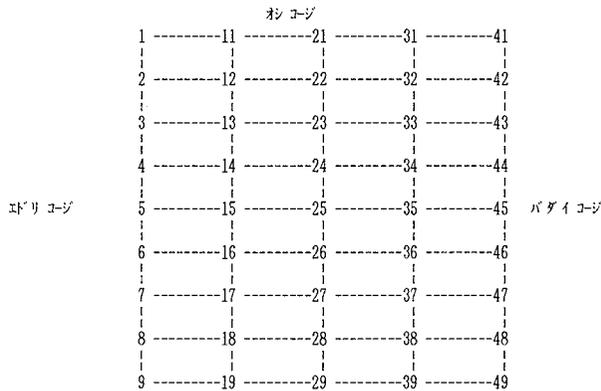
昭和 53 年 (1978) に京都市遺跡測量基準点が設置され、遺跡の位置の記録が国土座標^{註7}によって行われることになった。この方法は、従来行われていた平板測量などに比べ、記録の精度を著しく高めたばかりでなく、広い地域にわたる遺構相互の位置関係を正確に押さえることができる点で、特に条坊関係の遺構にとって有効な手段となった。ただし、この基準点を使用し始めた当初は、基準点から求めた遺構の座標数値をもとにその位置を 1/2, 500 の地形図上に落とすことにより条坊復元を行っていたため、前項で指摘した問題点のいくつかは依然として残されたままであった。しかも地図に表示されている座標数値は新設した遺跡測量基準点^{註8}に比べ大きな誤差をもつことが判明し、地図上での条坊復元の限界性がより明らかになった。また資料数が増加するにつれ、各遺構間の相対的な位置関係に矛盾が生じ、条坊の細部や条坊区画内の遺構を検討するための新たな方法が必要となった。そこで新設した測量基準点から得た明確な条坊関係遺構の座標データを用いて平安京の数値モデルを作成することによりこの問題の解決を試みた。条坊モデルは基本的に杉山の復元案をもとに『延喜式』京程に記載された数値と 32 箇所の遺構の座標値を用いて平均計算（最小自乗法による逐次平均）

<<< ウキョウ 3 ジョウ 3 ボウ 10 チョウ >>>

MODEL 60

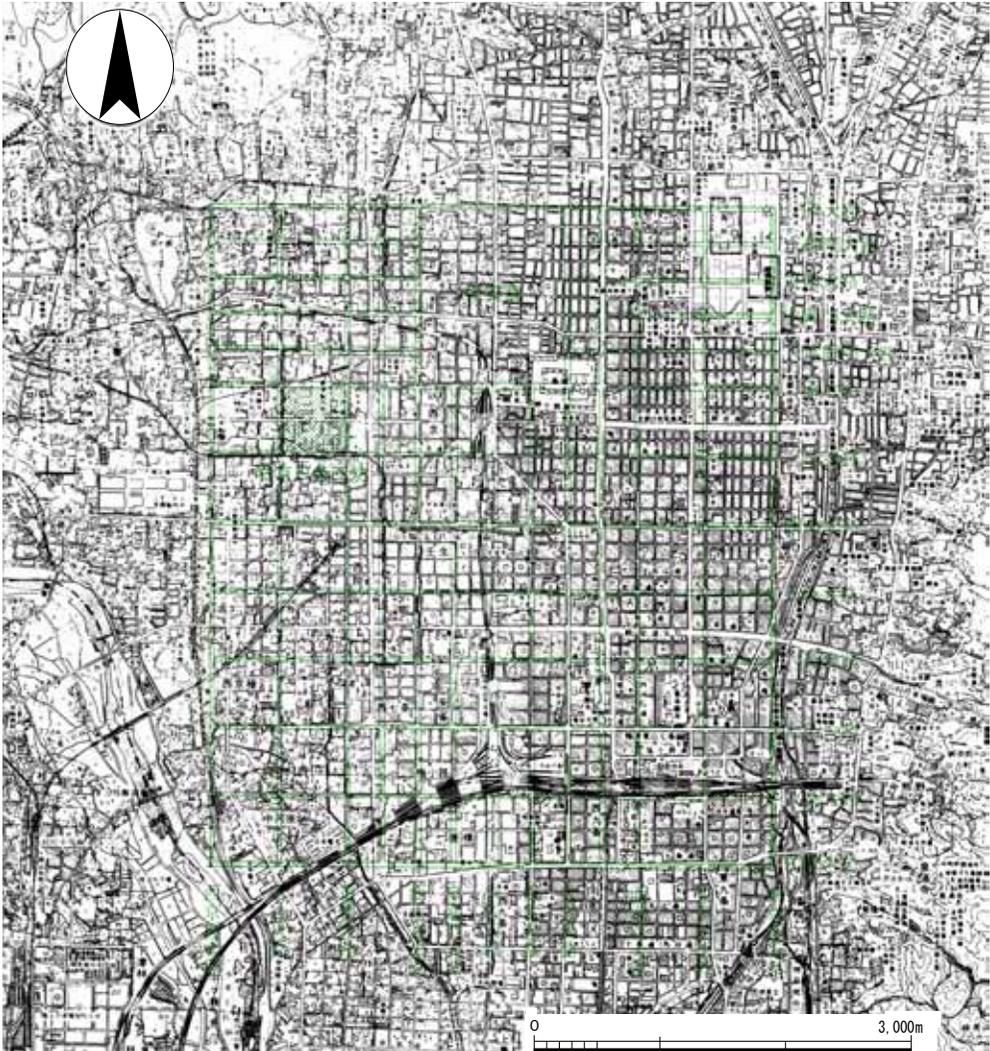
デウスビク = 29.84708cm
 デウイノル = -0-14-03
 X = -109788.02m
 Y = -23237.75m

X, Y ワズクノチュウシン and ニジョウミタノウジノチュウシン



サンジョウホウケンヨジ									
1	X=-109925.64 Y=-24777.31	11	X=-109925.52 Y=-24747.46	21	X=-109925.40 Y=-24717.62	31	X=-109925.27 Y=-24687.77	41	X=-109925.15 Y=-24657.92
2	X=-109940.56 Y=-24777.25	12	X=-109940.44 Y=-24747.40	22	X=-109940.32 Y=-24717.56	32	X=-109940.20 Y=-24687.71	42	X=-109940.08 Y=-24657.86

挿図 2 右京三条三坊の条坊カード (部分)



挿図3 遺跡位置図 (1:60,000)

を行い、各遺構が最も少ない誤差でとらえられる造営尺、造営の振れ、各条坊の座標値を求めたものである (Model 32)。その後新たに検出した遺構を加え資料数を 52、さらに 60 にして (Model 52、60) 検証したところ、Model 32 で得た数値と大きな変動はなく、この復元の妥当性が証明されたばかりでなく、平安京の造営精度がかなり高いものであったことが判明した。現在、当研究所ではこの Model 60 による数値を採用しており、四行八門制による区画の数値を表示した町単位の条坊カード (挿図 2) を作成し、平安京の調査に供している。したがって、本書で扱う右京三条三坊の位置やその中の四行八門制による区画は Model 60 の数値によるものである。^{註10}

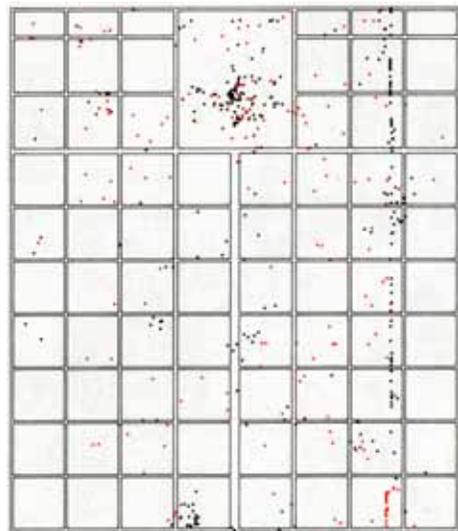
3 調査にいたる経過

当研究所が平安京右京三条三坊の地域内で最初に実施した遺跡調査は、株式会社島津製作所新工場建設に伴う十町地区の発掘調査である。この調査を実施した昭和54年(1979)頃までの平安京城での埋蔵文化財調査は、地下鉄烏丸線をはじめとする市街地再開発がさかんに進められていた左京に偏っており、右京を対象にした調査は少なかった。しかもそれまでに右京城で実施された47件の発掘調査のうち大半は西寺跡など、いわゆる周知の遺跡に対するもので、ほかの右京城に対する調査例は非常にわずかである。

しかし少ない件数ではあるが、こうした調査を通じて、朱雀院跡^{註11}、右京北辺三坊、四条二坊^{註13}、三条二坊^{註14}などで条坊関係の道路や溝、建物、井戸といった平安時代前期の遺構が次々と検出されるにおよんで、千年をこえる都市としての生命を持ち続け開発が繰り返された左京に比べ、比較的早い時期に放棄され都の周辺地域となった右京には、湿地で居住に適さないとみられていた地帯にも、造営時あるいはそれに近い姿で、平安京の遺構が良好に残っているという認識が得られつつあった。

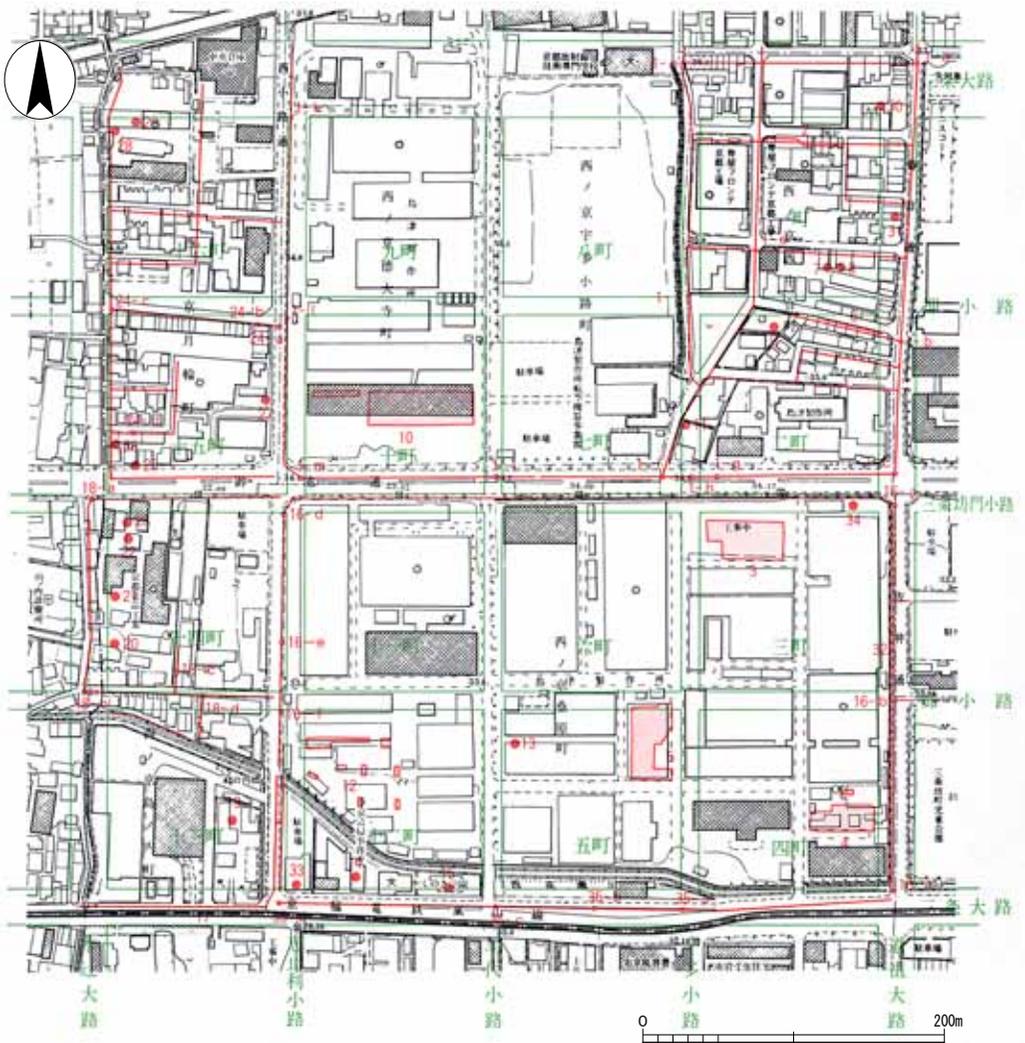
十町地区の調査もこの認識の上に立ち、まず平安時代の遺構を確認すべく工事予定地に試掘トレンチを設けた。その結果、予想以上に遺構の残存状況が良かったため、工事予定地全域を対象とする発掘調査を実施した。この調査では第II章で述べるように、建物、溝、土壌など平安時代の邸宅の一部とみられる遺構を検出したが、この調査とはほぼ時を同じくして行われた、右京一条三坊九町の発掘調査^{註15}でも、平安時代前期の整然とした建物配置をもつ1町規模の邸宅跡が検出されるなどの成果があげられた。こうした発見例の増加によって右京城に対する先の認識はさらに強められることになった。

それ以降、昭和62年(1987)3月31日までに当研究所が右京三条三坊内で実施した調査は、十町地区の調査を含め、発掘5件、試掘4件、立会26件の計35件にのぼる。このうち発掘調査は十町のほか、三町、四町、五町、十二町で実施したが、これらはすべて株式会社島



挿図4 平安京跡発掘調査地点分布図
(赤点は昭和54年以前のもの)

津製作所社屋建設に伴い、同社の委託を受け実施したものである。試掘調査は、明確な遺構が検出された場合、発掘調査に移行することを前提にした遺跡の確認調査で、十三町、十四町、十五町、道祖大路の4地区で実施した。立会調査には下水、ガスなどの埋設管敷設路線網を対象にした広域のもの、個人住宅建設などに伴う小区域のものがある。以下に、各調査の位置と概略を挿図5と表1に示したが、調査地の区分は記述の便宜上、平安京の条坊に基づく町、街路の単位でまとめた。したがって広域の立会調査のように複数の地区にまたがるものについては該当する地区ごとに扱い、記述すべき事項のある地点に関しては英小文字で表記した。



挿図5 調査地点位置図 (1:5,000)

表 1 調査一覧

調査地区	番号	調査方法	調査期間（昭和）	面積	遺構 遺物
一 町	1	広域立会	55 年 6 月 17 日～56 年 3 月 27 日	424 m ²	1-d 付近で黄褐色砂泥（平安時代の遺構基盤層）を検出。
	2	立会	55 年 7 月 16 日	50 m ²	表土下 0.3m 以下流路状堆積。
	7	立会	55 年 10 月 13 日	128 m ²	流路状の堆積を確認。
	8	立会	61 年 5 月 24 日	80 m ²	表土下 0.5m 以下流路状堆積。
二 町	1	広域立会	55 年 6 月 17 日～56 年 3 月 27 日	324 m ²	1-g 付近で湿地あるいは流路状堆積。
	6	立会	57 年 11 月 30 日	35 m ²	検出せず。
	9	立会	57 年 6 月 17 日	42 m ²	湿地状の堆積を確認。
三 町	3	発掘	55 年 4 月 10 日～7 月 15 日	1,125 m ²	第 II、III 章参照
四 町	4	発掘	56 年 8 月 6 日～10 月 5 日	732 m ²	第 II、III 章参照
五 町	5	発掘	60 年 10 月 21 日～12 月 5 日	1,115 m ²	第 II、III 章参照
	13	立会	56 年 11 月 4 日	3 m ²	検出せず。
七 町	1	広域立会	55 年 6 月 17 日～56 年 3 月 27 日	164 m ²	1-i 付近で流路状堆積。
十 町	1	広域立会	55 年 6 月 17 日～56 年 3 月 27 日	119 m ²	十町東端および西端付近で流路状堆積。
	10	発掘	54 年 5 月 31 日～8 月 21 日	1,864 m ²	第 II、III 章参照
十二町	12	発掘	59 年 6 月 25 日～7 月 6 日	378 m ²	第 II、III 章参照
	14	立会	57 年 2 月 10 日	60 m ²	湿地状堆積。
	15	立会	60 年 10 月 17 日	180 m ²	湿地状堆積。
十三町	16	広域立会	55 年 6 月 3 日～12 月 5 日	104 m ²	検出せず。
	17	広域立会	55 年 4 月 18 日～56 年 3 月 30 日	75 m ²	〃
	18	広域立会	55 年 3 月 6 日～10 月 20 日	75 m ²	〃
	19	試掘	60 年 9 月 6 日	44 m ²	表土下 1.2～1.4m で土師器、須恵器など平安時代の遺物包含層。その下部に黄褐色砂泥（平安時代の遺構基盤層）を検出。
十四町	16	広域立会	55 年 6 月 3 日～12 月 5 日	119 m ²	16-e 付近で平安時代の遺構基盤層を確認。
	18	広域立会	55 年 3 月 6 日～10 月 20 日	31 m ²	18-c 付近で平安時代の遺物包含層。
	20	立会	57 年 6 月 25 日	17 m ²	検出せず。
	21	立会	58 年 6 月 27 日	79 m ²	〃
	22	試掘	56 年 10 月 7 日	20 m ²	表土下 0.6m で土師器、瓦など室町時代以降の遺物包含層。
	23	試掘	62 年 2 月 20 日, 2 月 25 日	55 m ²	表土下 0.8m～1.4m で黄褐色砂礫（平安時代の遺構基盤層）を検出。

十五町	1	広域立会	55年 6月 17日～56年 3月 27日	105 m ²	1-1 付近で湿地状堆積。
	24	広域立会	55年 1月 28日～11月 7日	303 m ²	24-a で平安時代前期の南北溝。24-b で土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器など平安時代前期の遺物包含層。十五町西南部でも包含層を確認した。
	25	立会	60年 11月 21日	35 m ²	平安時代の土壌および遺物包含層を検出。
	26	立会	59年 11月 22日	51 m ²	平安時代の土壌を検出。
	27	試掘	60年 11月 22日	106 m ²	鎌倉～室町時代の土壌、土師器、緑釉陶器、瓦など平安時代の遺物包含層、古墳時代の溝。表土下 0.5m で火山灰 (A. T.) を検出。
十六町	1	広域立会	55年 6月 17日～56年 3月 27日	119 m ²	1-k 一帯に土師器、須恵器など平安時代の遺物包含層を検出。
	24	広域立会	55年 1月 28日～11月 7日	267 m ²	検出せず。
	28	立会	59年 2月 14日	99 m ²	〃
	29	立会	59年 3月 28日	184 m ²	表土下 1.5m で黄褐色砂泥 (平安時代の遺構基盤層) を検出。
道祖大路	1	広域立会	55年 6月 17日～56年 3月 27日	299 m ²	1-a ～ 1-c にかけて流路。
	16	広域立会	55年 6月 3日～12月 5日	289 m ²	16-a ～ 16-c にかけて平安時代の流路 (東西 10m 以上、深さ 1m 以上)。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、瓦などが出土。
	31	試掘	54年 10月 3日	59 m ²	湿地あるいは流路状堆積。
	32	立会	55年 6月 15日～ 6月 25日	250 m ²	調査区全域にわたり平安時代の流路。須恵器、灰釉陶器、瓦などが出土。
宇多小路	1	広域立会	55年 6月 17日～56年 3月 27日	213 m ²	1-e で湿地状、1-f、1-h で流路状堆積。
	11	立会	59年 4月 20日	11 m ²	湿地あるいは流路状堆積。
馬代小路	1	広域立会	55年 6月 17日～56年 3月 27日	12 m ²	1-j で湿地状堆積。
恵止利小路	1	広域立会	55年 6月 17日～56年 3月 27日	14 m ²	1-1、1-m 付近で湿地あるいは流路状堆積。
	33	立会	59年 11月 14日	356 m ²	表土下 0.6m で黄褐色泥砂 (平安時代の遺構基盤層) を検出。
木辻大路	18	広域立会	55年 3月 6日～10月 20日	136 m ²	検出せず。
二条大路	1	広域立会	55年 6月 17日～56年 3月 27日	346 m ²	1-e から南にかけて平安時代の遺物包含層を検出。
	24	広域立会	55年 1月 28日～11月 7日	59 m ²	検出せず。
	30	立会	58年 1月 10日	62 m ²	湿地あるいは流路状堆積。
三条坊門小路	16	広域立会	55年 6月 3日～12月 5日	404 m ²	宇多小路との交差部付近で流路。
	18	広域立会	55年 3月 6日～10月 20日	135 m ²	検出せず。
	34	広域立会	57年 6月 21日	22 m ²	湿地状堆積を確認。

姉小路	18	広域立会	55年 3月 6日～10月 20日	77 m ²	18-d で黄褐色砂泥（平安時代の遺構基盤層）を確認。
三条大路	17	広域立会	55年 4月 18日～56年 3月 30日	138 m ²	検出せず。
	35	広域立会	55年 2月 20日～56年 4月 9日	405 m ²	35-a、35-c で黄褐色砂泥（平安時代の遺構基盤層）を確認。東端付近で流路状の堆積。

4 主要な調査の経過と概要

A 調査組織の構成

右京三条三坊の調査に携わった財団法人京都市埋蔵文化財研究所の構成は以下のとおりである。（昭和62年3月まで）

所長（理事） 杉山信三（51.11～）

嘱託員（理事） 木村捷三郎（61.4～）

嘱託員 清水孝次（61.5～62.3）

調査部長（理事） 田辺昭三（～62.3）

課長 永田信一（61.4～）

資料部長（理事） 木村捷三郎（～61.3）

課長 江谷 寛（～61.3）

総務部長 松井克也（～55.3） 小林 博（55.4～57.4） 勝西温二（58.4～61.10）

杉原和彦（62.4～）

課長 西崎健次（～56.3） 勝西温二（56.4～58.3）

主任 福西 喬（～59.3） 片山 巖（59.4～）

課員 菅田悦子（51.11～） 上村京子（51.11～） 村木節也（51.11～）

鎌田雅啓（～59.3） 本田憲三（54.5～） 金島恵一（55.4～）

小松佳子（56.5～） 河本 昭（57.5～60.3） 東藤 昭（60.4～）

十町地区発掘調査担当者

調査員 磯部 勝 加納敬二 辻 裕司 平尾政幸 平方幸雄 吉川義彦

牛嶋 茂（写真） 岡田文男（保存科学）

調査補助員 青木信昭 油小路隆直 アニーアブラモヴィッチ 石崎一之 石橋敬一

市田雅樹 伊藤紀二 井上慶一 井上周三 上田栄治 上野 宏

浦瀬佐津紀 浦瀬尚美 浦瀬裕嘉 大井一知 大川 真 大八木克美

尾川弘祐 荻本久徳 小黒満郎 加柴洋子 加藤昭二 川上智史 川上恭生
川辺英孝 川村篤雄 木村 薫 栗田晃夫 栗林聡明 小島照海 小垂亮爾
坂本 豊 (故)桜井忠男 卜田健司 杉山雅宏 関 研一 高井康光
高橋 衛 高橋繁行 巽 俊郎 田中和史 田中久司 堤 康 中出 進
中西光晴 中村嘉久 奈佐公夫 (故)西岡千代治 西岡ヨシエ 西沢 徹
西谷謙二 端 大志 橋本雅隆 広谷誠子 藤波充生 細野高一 堀内寛昭
松井克博 松島吉三郎 丸田将幸 丸野 清 村上貞一 山田英二
山本 岳 山本敏夫 山本有一

三町地区発掘調査担当者

調査員 石井 望 牛嶋 茂(写真) 岡田文男(保存科学)
調査補助員 青山 均 浅野信之 東 洋一 池見裕満 泉田実智子 今村健次
上田栄治 逢坂芳子 蛙田節生 角村幹雄 加藤正一 神成美登里
河野幸子 木皮 優 喜多悦雄 北川和子 木下康雄 小島照海
小島克啓 沢田孝彦 白石 泉 白石喜則 関根正純 田島康晴 中村卓郎
(故)西岡千代治 西岡ヨシエ 野村喜代松 藤宮省明 藤村敏之 藤村雅美
松原 勲 三宅秀雄 村上靖彦 山口文吾 山口 眞 山下俊彦 吉崎 伸
渡辺弘明

四町地区発掘調査担当者

調査員 中村 敦 平尾政幸 牛嶋 茂(写真) 岡田文男(保存科学)
調査補助員 東 洋一 天井喜一 石崎一之 伊藤洋之 太田吉男 大立目 一
大槻明義 小黒満郎 尾崎とう子 角村幹雄 木下秀一 小谷 裕
(故)桜井忠男 高橋たまき 高橋富之助 田川巴在 巽 俊郎 田野邦夫
月森六三 津田佳史 土屋智子 津々池惣一 堤 康 富永知香 豊原平行
中津宏典 奈佐公夫 西野 淳 藤村敏之 藤村雅美 堀内寛昭 三宅康教
宮下則子 牟田正義 室井隆宏 安田育代 安田ちえの 弥永弘典 山口 眞

十二町地区発掘調査担当者

調査員 辻 純一(測量) 平尾政幸
調査補助員 永田宗秀

五町地区発掘調査担当者

調査員 平尾政幸 本弥八郎 牛嶋 茂(写真) 辻 純一(測量)

調査補助員 角村幹雄 河合巴在 小谷 裕 高橋富之助 藤村敏之 藤村雅美
堀内寛昭 宮原健吾 山口 眞

立会調査担当者

調査員 大矢義明 加納敬二

調査補助員 石塚美和子 井本武雄 鹿野真理子 須藤隆昭 西谷健次 野村篤美
端 大志 松尾雅章 吉本健吾

試掘調査担当者

調査員 家崎孝治

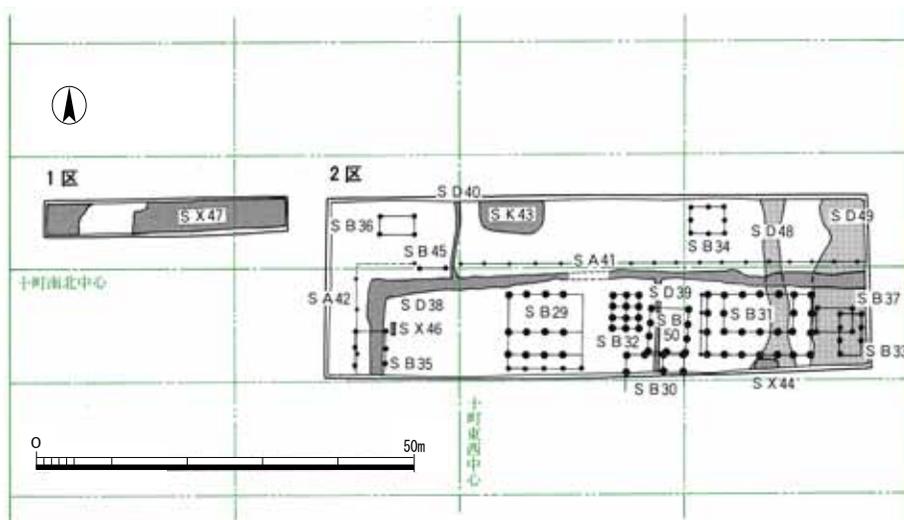
調査補助員 野村篤美 尾藤德行 松尾武彦 松尾雅章 吉本健吾 竜子正彦

B 発掘調査の概要

発掘調査は、三町、四町、五町、十町、十二町の 5 地区で実施した。これらの調査では十二町地区を除いて、各地区とも平安時代前半代、とりわけ平安時代初期の遺構を多数検出した。そのほか古墳時代の遺構や遺物、縄文時代、旧石器時代の石器などが出土した地区もある。以下、地区ごとに調査の概要を記す。

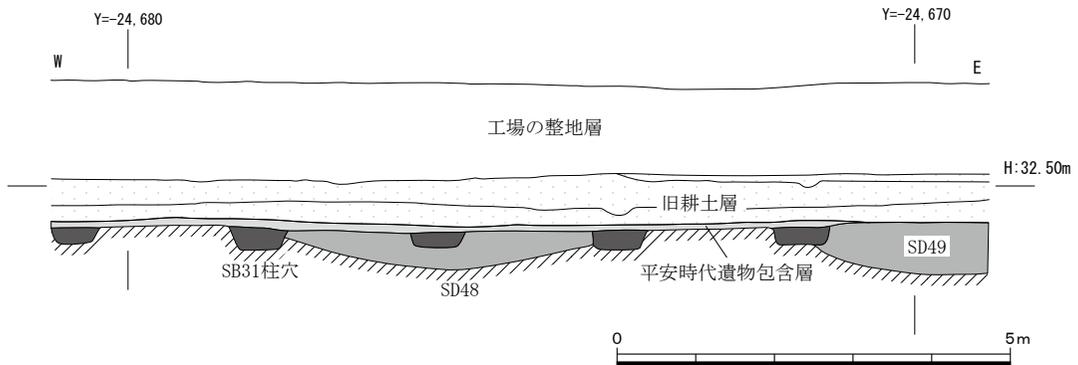
十町地区の調査

調査区は三条坊門小路推定地の北約 50m に位置し、十町の南北中心付近に該当する。敷地東西の境界は十町の推定範囲とほぼ一致し、東が馬代小路西側溝、西が恵止利小路東側



挿図 6 十町地区遺構配置模式図 (1:1,000)

溝の推定位置と重複している。工事予定地内の東西2箇所を試掘した結果、西側では湿地状の堆積を認め、遺構の存在は不明であったが、東側で遺構の一部と思われる茶褐色砂泥や平安時代の遺物を含む土層を確認した。このため東側に工事予定地の幅に沿った調査区(2区)を設定し、西側では幅4.0mの東西方向のトレンチ(1区)を設け、遺構の有無を探った。2区では平安時代の遺構面は地表下約1.8mで検出したが、これにいたる層序は厚さ約1.5～1.6mの盛土と0.2～0.3mの旧耕土の単純な堆積からなる。調査区東部のSB31以東では厚さ0.05mの遺物包含層が遺構面を覆っていたが、おおむね旧耕土の直下で平安時代の遺構を検出した。遺構のベースは淡黄褐色の粘性を帯びた砂泥で、平安時代およびそれ以前の遺構はすべてこの面で検出した。平安時代の遺構には掘立柱建物SB29、SB30、SB31、SB32、SB33、SB34、SB35、SB36、SB7、柵SA41、SA42、溝SD38、SD39、SD40、土壌SK43、SX44、墓SX46、門SB45、湿地SX47などがあり、SB36、SB37、SX46を除いてはいずれもほぼ同時期に属するものである。平安時代以前の遺構には、建物SB50や古墳時代の川SD48、あるいは遺物が出土しなかったため時期は不詳だがこれ以前の川SD49がある。



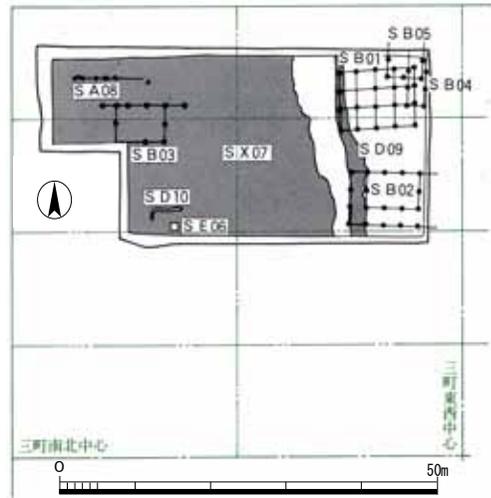
挿図7 十町地区土層図(1:100)

三町地区の調査

調査地は三条坊門小路に面する三町の北西隅にあたる。東西41m、南北25mの調査区を設定し、工場の整地および旧耕土層を除去した後、調査を行った。表土下約1.6mに暗灰色砂泥層を検出したが、この面では数条の小規模な溝を検出しただけで、この土層も旧耕土の一部とみられる。さらに掘り下げたところ調査区ほぼ全面にわたって黒灰色の粘性を帯びた泥土を検出したが、この層の上面では遺構が不明瞭であったため、わずかに掘り下げ、遺構検出を試みた。その結果、調査区東寄り掘立柱建物SB01、SB02、SB04、SB05などを、その西寄りに溝SD09、湿地状の落込SX07、調査区南部に井戸SE06や溝SD10を



挿図 8 三町地区の土層



挿図 9 三町地区遺構配置模式図 (1:1,000)

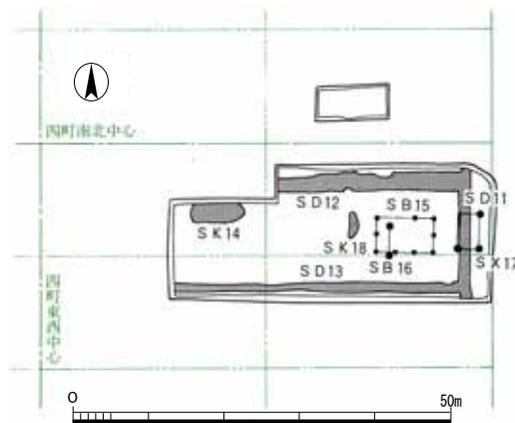
検出した。その後 SE06 の北方に検出した柱跡の並びを追求するため北西部を拡張し、建物 SB03、柵 SA08 を検出した。SX07 からは多量の土器類が出土しており、SE06、SD09 の埋土からは種実などの植物遺体を採取した。また、SX07 下層から旧石器さらにその下部の自然堆積層から火山灰 (A. T. 0 50m を検出した。^{註16}

四町地区の調査

調査地は、道祖大路の西側に面した四町の南北中央やや南寄りにあたる。東端付近には道祖大路の西側推定線が通る。調査区は東西 44m、南北 18m で工場の整地層、および旧耕土層を除去した後に平安時代の整地層とみられる遺物を含む土層 (整地層 3) のほか、建物 SB15、土壇などを、さらにこの整地層の下部にも溝 SD11、SD12、SD13、門 SB16、橋



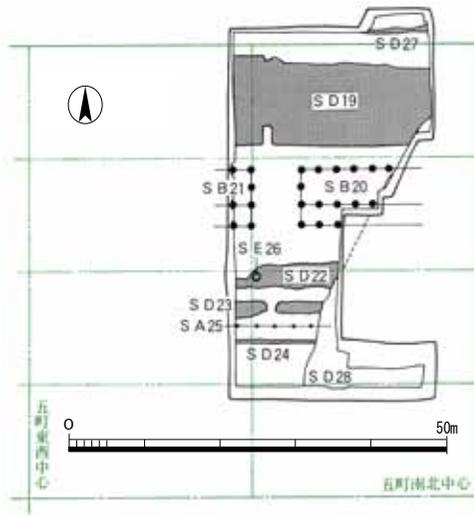
挿図 10 SD11 付近の土層



挿図 11 四町地区遺構配置模式図 (1:1,000)

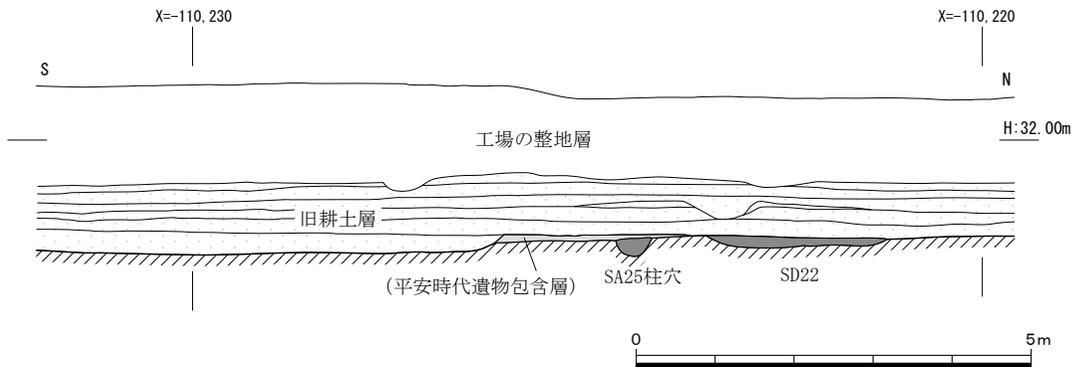
SX17、土壙SK14や整地層（整地層1、2）などの遺構を検出した。SD11、12、13は整地層2との関係からそれぞれ2時期にわたっていることが判明した。各遺構や整地層からは土器類を主とする遺物が出土しているが、特にSK14からは平安時代初頭の土器類が多量に出土した。

五町地区の調査



挿図12 五町地区遺構配置模式図 (1:1,000)

調査地は五町の北東隅に該当する。敷地北端付近に姉小路の南側溝が推定されたため、調査区はそれを含む東西28m、南北50mに設定した。表土を除去している過程で、敷地北東から南西にかけて旧天神川の流路（SD28）により平安時代の遺構が一部失われていることが判明した。このため調査区南部では断面観察を行うにとどめ、当初の予定より調査区の東西幅を縮小したが、北部では川が東方に反れていたため予定どおりの幅を確保することができた。平



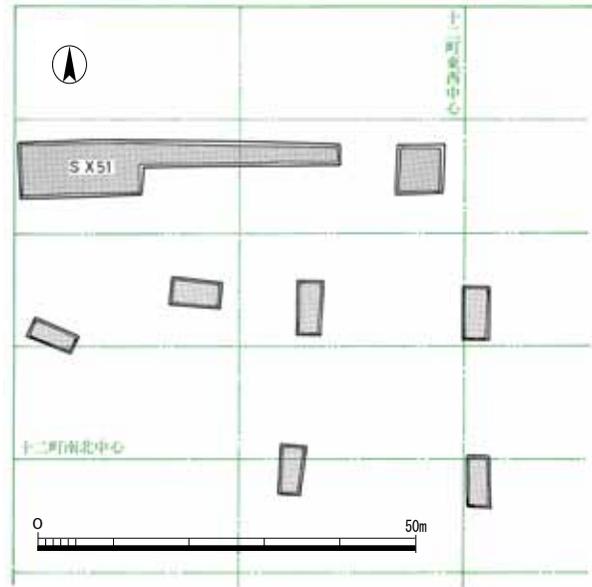
挿図13 五町地区土層 (1:100)

安時代の遺構面にいたる層序は比較的単純で、工場の整地の下部に約0.8mの旧耕土があり、その直下で遺構を検出したが、南部では平安時代の遺構面と旧耕土の間にわずかに遺物包含層が分布していた。平安時代の遺構としては、姉小路南側溝推定地に東西方向の溝SD27、その南に溝SD19、SD22、SD23、SD24、建物SB20、SB21、柵SA25、井戸SE26などを

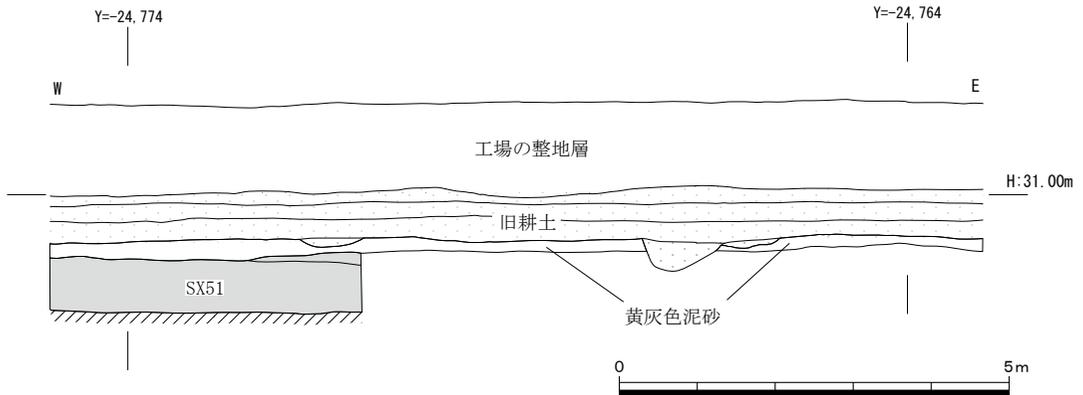
検出した。SD19 からは多量の土器が出土した。

十二町地区の調査

この地区では周辺で行った立会調査の結果から、湿地あるいは流路の存在が予想されたため、まず調査対象地に 8 箇所の試掘トレンチを設定し、遺構の有無を調べた。その結果調査地北西隅のトレンチ (1 区) で黄灰色砂泥層を検出したが、ほかのすべてのトレンチでは旧耕土下に湿地状の堆積が認められ、平安時代の遺構はまったく検出されなかった。1 区ではトレンチを東



挿図 14 十二町地区遺構配置模式図 (1:1,000)



挿図 15 十二町地区土層図 (1:100)

に延長し、黄灰色砂泥層の広がりや遺構の有無を追求したが、その後この層も湿地 (SX51) 堆積した土層であることが判明したため、全トレンチとも湿地の底部の砂礫層まで掘り下げたのち、断面の記録を取り調査を終了した。遺物は旧耕土層から室町～江戸時代の土師器や陶器、1 区の湿地の一部から古墳時代の土師器、須恵器が少量出土した。

C 試掘・立会調査の概要

右京三条三坊で実施した試掘・立会調査は30件で、事業別にみると国庫補助23件、原因者負担7件である。国庫補助調査23件のうち、試掘4件、立会17件が宅地造成や建て替え工事に伴うもので、ほかの2件の立会調査はガスエ事に伴うものである。原因者負担による7件はいずれも立会調査で、その内訳はガスエ事1件、広域下水道工事6件（以下広域立会）である。以下に主なものについて調査の概要を述べることにする。

道祖大路地区の調査 広域立会(1)、(16)、立会(30)、(32)、試掘(31)では調査区全面に平安時代の遺物を含む流路状の堆積を確認した。調査範囲が限定されていたため幅は確認できなかったが、道祖大路の推定地に沿って南北の流路があることが判明した。

十五町地区の調査 広域立会(24)で平安時代前期の南北溝および遺物包含層を、立会(25)、(26)では、平安時代の土壌および遺物包含層、また試掘(27)では平安時代の遺物包含層や鎌倉時代から室町時代の土壌などを検出し、この地区での遺構および遺物包含層の残存状況が良好であることを確認した。

ほかの地区の調査 十三町、十四町、十六町地区の広域立会(1)、(18)、十三町地区の試掘(19)で平安時代の遺物包含層を、一町、二町、七町および三条大路地区では広域立会(1)、(35)、立会(2)、(7)、(8)、(9)、(11)で中世から近世にかけての南北流路を確認した。



挿図 16 立会調査風景



挿図 17 道祖大路地区流路の土層

D 調査日誌（抄）

十町地区の調査（昭和54年5月31日～8月21日）

5/31 工事予定地内の2箇所を試掘を行う。表土下1.5～1.7mで平安時代の遺物包含層および遺構の一部とみられる茶褐色砂泥を検出。発掘調査の実施を検討する。

6/4 島津製作所と協議。旧建物の解体を待ち、調査開始を決定する。

6/11 機材の搬入、調査区の設定。調査地に南北24m、東西110mの区画を設定した。試掘で湿地を検出した西側は区画の北端に沿って幅4.0m、長さ60m(1区)、遺構を確認した東側は区画の幅で長さ50m(2区)の調査区を設定した。

6/12 表土の掘削開始。表土および旧耕土の上部を重機で排除する。1区は湿地状の堆積の広がりを見て、西から36mで一旦中断し、2区寄りの東端部から掘り下げることにする。

6/13 1区の機械掘削終了、2区の掘削開始。1区は東からの掘削を20mで止め、結果的に西側と4.0m隔てた東西二つの調査区となる（後に東側の調査区は、拡張の結果2区に含まれる）。

6/14 2区の掘削開始。



挿図18 十町地区調査風景

6/15～6/18 2区の掘削、1区旧耕土の排除および壁面整備、排水溝の設置。

6/19 2区北東部に排水溝を掘り下げ中、古墳時代の土師器が出土する（後にSD48の一部と確認する）。

6/20～6/25 2区旧耕土の排除。耕土から染付など近世以降の遺物が出土。1区遺構検出作業。耕土に伴う暗渠を多数検出、1区は中央西寄り的一部に地山を確認したほかは、暗灰色の泥土が広がり、湿地状を呈する(SX47)。

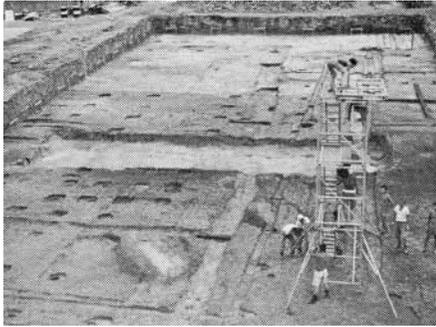
6/26～7/4 2区遺構検出、西寄りに建物SB29を、その東側にSB32、北側に溝SD38を検出するが、以東は平安時代の遺物包含層が堆積しているため遺構は不明。暗渠を多数検出。

7/5～7/7 調査区外にのびるSB29の広がりを追求して2区を西側に拡張する。その結果、2区は、1区東側部分を含む幅24m、長さ72mの規模になる。

7/8～7/10 1区、2区の暗渠の掘り下げと遺構検出を行う。1区、遣方設置。

7/11～7/14 1区、SX47の掘り下げ。底部に砂礫層を検出、一部が流路になっていたらしい。2区遺構検出続行。SB32の北東にSB34、SD38の北側に東西方向の柵とみられる柱穴列を検出(SA41)。

7/15～7/21 1区、SX47の掘り下げ続行。底部に凹凸があり深さは一定しないが、最も深いところで約0.8m。腐植土を含む泥土や砂礫が互層



挿図 19 十町地区の写真撮影

堆積。遺物はあまり多くないが、土師器や緑釉・灰釉陶器など平安時代の土器類が出土する。2区、遣方設置、暗渠群の掘り下げおよび遺構検出。東側は包含層が広がり、暗渠以外の遺構は不明瞭、暗渠群の完掘、実測を待ち、掘り下げの予定。西側の遺構検出の結果、SD38が南に方向をかえることがわかり、その西側に並行して柵 SA42、SD38にまたがるように建物 SB35を検出。SA42はSA41と一連のものと考えられるが、間の柱穴が不明瞭で一応別に扱うことにする。

7/23～7/27 1区、SX47の掘り下げ続行。2区、暗渠を掘りあげた部分から包含層の掘り下げ、および遺構検出。SB31、SB35、SD49、SD50などを検出。SB31は三面に廂の付く建物。SD38の一部を掘りはじめる。深さは0.2～0.3m。

7/28 1区の掘り下げ終了、清掃の後、写真撮影。

2区、SD38の掘り下げ。

7/29～7/31 1区、平面および壁面の実測。2区、

三町地区の調査（昭和55年4月10日～7月15日）

4/10 調査区の設定、機材の準備。

4/11～4/20 機械掘削、表土および上部の旧耕土を除去。地表下1.6mで暗灰色砂泥の面が

SD38、39、40の掘り下げ。

8/1 1区の調査終了。2区、建物群の柱穴掘り下げ、SK43、SX44の調査。SK43は浅い土壌で、遺物は少ないが、陰刻花文緑釉陶器や墨書土器が出土。SX44からは土師器が出土した。

8/2～8/3 2区、建物群の柱穴掘り下げ、壁面の清掃。

8/4～8/5 遺構群の掘り下げ完了、全景写真のため清掃。

8/6 写真撮影をはじめますが、雨のため中断。

8/7～8/8 全景写真のため再度清掃を行う。

8/9 全景写真撮影。撮影時、ヤグラ上からの観察でSD38南北方向部分の東側に長方形の土層の違いを確認、調査の結果、木棺墓(SX46)と判明。

8/10～8/12 建物群柱穴の断ち割り、断面実測およびSX46の調査。SX46の木棺はよく遺存しており、棺内から漆器や銅鏡などの副葬品が出土した。

8/15～8/16 平面実測およびSD48の調査、古墳時代の土器や石製品が出土。

8/17～8/18 平面および壁面の実測ならびにSD49の調査、砂礫層の厚い堆積がみられ、川状の様相を呈するが、遺物はない。

8/19～8/21 壁面の実測完了、断ち割りなどの補足を行い、調査を終了する。

広がる。この土層も旧耕土の一部と思われる。

湧水が激しく、調査区の壁沿いに排水溝を設ける。

4/21～4/2、3 遺構検出、遣方設置。農耕用暗渠を多数検出。

4/24 暗灰色砂泥上面の遺構全景写真撮影。

4/26～5/6 暗灰色砂泥の掘り下げ、追って遺構検出。雨のため作業がはかどらない。

5/7～5/9 引続き暗灰色砂泥の掘り下げ、および遺構検出。調査区全面に黒灰色泥土が広がり、遺構が不明瞭。調査区北東部に建物(SB01)を検出。

5/10～5/15 土層観察用の畦を残し、黒灰色泥土をわずかに掘り下げる。

5/16 調査区南東部にSB02検出。西部は掘り下げと遺構検出を続行する。

5/17 SB01の西側に溝(SD09)検出。排水溝の整備。この作業中に調査区西寄りの南壁沿いで井戸(SE06)の木枠を検出。掘形は不明瞭だが、木枠の残存状況からみて黒灰色泥土を切っているものと考えられる。

5/18～5/20 井戸の掘り下げ、平面実測。

5/21～5/25 建物柱穴の一部を実測、SD09の掘り下げ。

5/26～6/1 SD09断面写真撮影および実測、調

査区北西部、SX07の上層をわずかに掘り下げる。

6/2～6/6 排水溝の整備、南西部、SX07上層掘り下げ。

6/7～6/9 SX07断面写真撮影実測。

6/10～6/13 SX07の畦のとりはずし。排水溝をさらに掘り下げる。

6/14～6/16 調査区壁面の整備、全景写真のため清掃。

6/17 全景写真撮影。

6/18 平面図作成。建物柱穴の掘り下げと断面実測。

6/19～6/20 建物柱穴の断面実測、SE06立面図作成。

6/21～6/25 SX07掘り下げ、遺物が多く出土する。調査区北西部で建物(SB03)の一部検出。

6/26～6/29 SB03の西側を追求するため調査区北西部を拡張する。

6/30～7/2 拡張区の遺構検出、暗渠の掘り下げ。

7/4 SX07黒灰色泥土掘り下げ、拡張区の写真撮影、実測。

7/5～7/7 SX07、黒灰色泥土掘り下げおよび



挿図 20 SX07 の調査



挿図 21 SE06 の実測

断面実測、下層に砂礫層検出。

7/8～7/10 雨のため遺物洗浄等の室内作業。

7/11 SX07 断面実測。

7/12～7/14 南壁沿いの断ち割り、火山灰を

四町地区の調査（昭和56年8月6日～10月5日）

8/6～8/13 調査区の設定、機械掘削。表土および旧耕土の上部を除去。

8/14～8/16 遺構検出、農耕用の暗渠と思われる溝や土壌を多数検出する。

8/17～8/19 暗渠、土壌などの掘り下げおよび実測。土壌の壁面観察によると、この耕土の下にもう一層耕土と思われる土層がある。調査区東部では、さらにその下に茶灰色砂泥層が認められる。

8/20～8/23 上層の耕土掘り下げ、遺構検出を行う。上層と同様に暗渠を検出、南北方向のものが多い。暗渠掘り下げの後、実測。

8/24～8/25 下層の耕土掘り下げ。

8/26～8/27 遺構検出を行う。調査区西側で土器を多量に含む土壌（SK14）を検出。東側は汚れた茶灰色砂泥面が広がり、遺構が明瞭に現れないため、畦を残し掘り下げる。

8/28～8/29 茶灰色砂泥の掘り下げ。この土層は砂礫を含む部分など数層からなり、整地層（整地層3）かと思われる。

8/30～9/3 整地層3除去後の遺構検出。

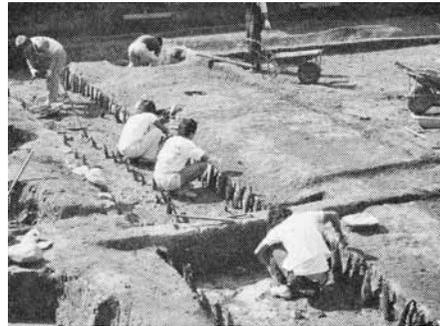
SD11B、SD12B、SD13B、SX17などを検出する。

SD11Bの両肩には杭列が並ぶ。

9/4 SD11B以東の遺構検出。砂礫をわずかに含んだ暗茶褐色砂泥が広がる。この土層は後世の

検出する。壁面実測。

7/15 土壌サンプルの採集、記録の点検の後調査終了。



挿図22 SD11の調査

土壌の壁面観察によれば、2～3枚の薄い層からなる。南北に並ぶ2個の柱跡を検出。遺方を設置する。

9/5～9/6 SD11BとSD12B、SD13Bの関係を調べるため、交点に畦を残して最上層を掘り下げる。切り合いはなく合流していたようである。SD11Bの護岸を検出。

9/7～9/9 SD11B、SD12B、SD13Bの掘り下げ。SD11Bの護岸は杭の後ろに横板を当てたもので、良好に残っている。SD12B、SD13Bの取り付け部は開いている。

9/10～9/12 引続きSD11B、SD12B、SD13Bの調査。SD11B中央に杭列を検出する。

9/13～9/15 調査区中央部からSD11Bにかけて再度遺構検出。SD11B西肩の掘形は不明。SK14の清掃、遺物出土状況の写真撮影。

9/16～9/17 SD11B、SD12B、SD13Bの掘り下げ

完了。土層の堆積状況からみて、下層にそれぞれ対応する溝があるらしい。SK14、遺物取り上げ後完掘。非常に浅い。

9/18～9/19 SD11B 護岸の写真撮影。SD11B、SD12B、SD13B の実測。

9/20～9/23 調査区中央部から SD11B にかけて遺構が不明瞭なためわずかに掘り下げた後遺構検出を行う。SB16 検出。

9/24 SB16 の柱穴掘り下げ。全景写真のため清掃を行う。

9/25 全景写真撮影。平面図作成の後、調査区中央部から SD11B にかけて再び掘り下げた結果、SD11A、SD13A の肩部を確認。この土層は SD11A と SD13A の接続部に向かって厚く堆積し、SD11B の西側護岸裏込めと連続している。溝の改修と一連の整地層（整地層 2）と思われる。掘り下げ中に SB15、SK18 を検出したが、畦の観察からこの二つの遺構は、整地層 3 を切って成立していることを確認した。

9/26～9/27 整地層 3 および SD11B 裏込めの掘り下げ。SD11B 西側裏込め部に柱根を検出。

十二町地区の調査（昭和 59 年 6 月 25 日～7 月 6 日）

6/25～6/26 基準点測量、試掘トレンチの配置計画。

6/27 現地の測量、調査区の設定。8 箇所を試掘トレンチ設定する（1 区～8 区）。

6/28 1～8 区の機械掘削、1 区を除く全トレンチで旧耕土層の下部に湿地状の堆積を検出、旧耕土層から中近世の土器片が少量出土したが、下層の湿地には遺物はまったく含まれていない。1 区の西部で黄灰色砂泥の面を検出。

6/29 1 区昨日検出した黄灰色砂泥の広がりを追求するため、東にトレンチを延長する。遺構検出の結果、この面では暗渠を数条検出したが、ほかの遺構は認められない。

6/30 1 区東部の掘り下げ、下層にほかの調査区と同様な湿地状の堆積を認める。西部の黄褐色砂泥はこの湿地の上部に堆積した土層である

SD11B 東側の柱穴に対応する位置にあり、溝中央の杭列と共に橋の遺構と思われる。

9/28 SD11A、SD12A、SD13A の掘り下げ。SD11A は中央部に小ピットが南北に並ぶ。SD11B と同様に橋の施設の一部か。

9/29 SB15、SK18 の写真撮影および実測。

9/30～10/1 SD11 北端および南端部の護岸の調査。これらの部分では、SD12、SD13 の合流点の間とは異なり、護岸に角材を使用している。

10/2 SD11A、SD12A、SD13A の写真撮影、実測。SB16、SX17 の柱穴掘り下げ。SX17 の東南柱穴には柱根が残る。

10/3～10/4 SD11 東側の断ち割り。整地層の断面観察および記録。調査区壁面の清掃、実測。点検後、平面図の補足などを行う。SD11 東側の整地層（整地層 3）は礫を含むよく締まった数層からなる。

10/5 調査区の北に小トレンチを設け遺構の状況を確認するが、顕著な遺構は検出できなかった。本日で調査終了。



挿図 23 十二町地区調査風景

ことを確認する。

7/1～7/3 2、3、6区の壁面清掃、写真撮影、

五町地区の調査（昭和60年10月21日～12月5日）

10/21～10/23 基準点測量、資料作成などを行う。

10/24～10/28 調査区南部から表土、旧耕土を重機で排除、地表下1.8～2.0mで平安時代の遺構や遺物包含層を検出。南東部で川（SD28）を検出したが、この部分では平安時代の遺構は望めないため、調査区の形を一部変更、西側はこの川跡の状況をみながら掘り下げを進めることにする。

10/29 機械掘削続行。調査区南部に溝SD22、SD23、その北部に東西方向の柱穴列を検出。

10/30 機械掘削続行。調査区中央から北へ遺構検出、昨日検出した柱穴列は東西方向の建物（SB20）の廂部分と判明。

10/31～11/2 SB20の北部に土器類を多量に含む溝状落込SD19を検出。

11/5 SD19、SB20の延長を確認するため東へ一部拡張する。機械掘削は本日で終了。

11/6 壁面の整備、遣方設置、遺構検出。

実測。その後、湿地の掘り下げ、底を確認する。遺物はまったく出土しない。

7/4 1区の写真撮影、実測および東部の調査。一部に流路状の堆積がみられ、古墳時代のものと思われる土師器、須恵器の小片が出土。壁面実測。

7/5 4、5、7、8区の清掃、写真撮影。

7/6 4、5、7、8区の断ち割りおよび壁面実測。調査終了。

11/7～11/8 SD19北肩部付近の旧耕土および暗渠群の掘り下げ。姉小路南側溝推定地にSD27を検出。

11/9 SD19、南肩部付近に堆積した遺物群を残して掘り下げをはじめ。

11/11～11/12 SD19の掘り下げ、北肩寄りには遺物は少ない。調査区南部の暗渠などの掘り下げ。

11/13 SB20の西側にSB21を検出、SB20同様、東西棟と思われるが、西壁外にのびており不明。南部の遺物包含層の掘り下げ、SA24、SD25を検



挿図 24 五町地区調査風景

出。

11/14～11/15 建物、柵などの柱穴の掘り下げ、SD19の遺物検出および清掃。

11/16～11/18 SD22、SD27の掘り下げ。SD22下層にSE26を検出。SB21の西側柱穴を確認するため一部拡張する。

11/19～11/20 写真撮影のため清掃。

11/21 全景およびSD19の写真撮影。

11/22～11/27 平面実測、柱穴断ち割り、断面実測。

11/28～12/3 SD19遺物出土状況実測および遺物の取り上げ、壁面実測。



挿図 25 SD28の土層

12/4 壁面実測。

12/5 点検、壁面図などの補足後調査を終了する。

註

- 1 石田志朗「京都盆地の扇状地」『古代文化』第34巻12号 古代学協会 1982
- 2 寛政九年(1790)裏松固禪による編纂
- 3 明治28年(1895)京都市参事会発行 平安遷都1100年を記念して湯本文彦、和田英松らを中心に編纂された。
- 4 こうした研究の流れや内容については井上満郎『研究史平安京』吉川弘文館 1978に詳細に述べられている。参照されたい。
- 5 杉山信三「平安京の造営尺について」『史迹と美術』34-2 1964
- 6 昭和49年に始まった地下鉄烏丸線の調査も、この図を基本的に参考にして調査区を設定した。杉山自身も昭和49年右京北辺三坊の調査で推定位置に木辻大路など平安京の街路を検出している(註12)。
- 7 基準点は主に公共建物の屋上に、昭和53年(1978)から54年にかけて設置された。その後地上点なども整備され、現在約200点ある。これは平安京内のあらゆる調査地点から数百メートルの距離に少なくとも2点以上の基準点が設置されていることになる。田中 琢・田辺昭三「平安京を中心とした京都市域の埋蔵文化財発掘調査記録方法の改善について」『京都市文化観光資源調査会報告書』京都市文化観光局 1977
- 8 地図にはこのほか、湿度による用紙変形などの誤差の要因がいくつかある。
- 9 昭和57年(1982)、平均計算は内田賢二が行った。

- 10 辻 純一「平安京の条坊復元」『京都府埋蔵文化財情報』第 27 号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
- 11 永田信一「朱雀院跡発掘調査概要」『平安京研究』平安京調査会 1974
- 12 杉山信三・鈴木廣司「平安京右京土御門木辻」『住宅公団花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所 1975
- 13 昭和 50 年(1975)、平安京調査会の調査で西大宮大路の路面や側溝が検出された。未報告。
- 14 平尾政幸「平安京右京三条二坊跡」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財概要集 1978』京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978
- 15 平良泰久ほか「平安京跡(右京一条三坊九・十町)発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会 1981
- 16 始良火山灰、鑑定は京都大学理学部笹嶋貞雄教授に依頼した。

第Ⅱ章 遺 構

1 平安時代の遺構

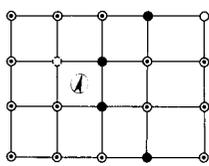
右京三条三坊の発掘調査で検出した平安時代の遺構には、建物、柵、門、橋、溝、井戸、土壌や流路、湿地などがある。各地区別の内容は表2に示したとおりであるが、特に十町^{註1}地区では柵と溝で区画された地域に柱筋を揃えて配置された建物群を、四町地区では護岸施設をよく遺存した溝や、それにかかる橋跡を良好な状態で検出した。また、試掘・立会調査でも土壌や溝、流路あるいは湿地の一部を検出した。

表2 平安時代の遺構一覧

地 区 種 類	三 町	四 町	五 町	十 町	十二町	十五町	道祖大路
建 物	SB01 SB02 SB03 SB04 SB05	SB15	SB20 SB21	SB29 SB30 SB31 SB32 SB33 SB34 SB35 SB36 SB37			
柵	SA08		SA25	SA41 SA42			
門		SB16		SB45			
橋		SX17					
井 戸	SE06		SE26				
溝	SD09 SD10	SD11 SD12 SD13	SD19 SD22 SD23 SD24 SD27	SD38 SD39 SD40		SD53	
土 壌		SK14 SK18		SK43		SK2	
流路・湿地	SX07			SX47	(SX51) <small>註2</small>		SD54
そ の 他				SX44 SX46			

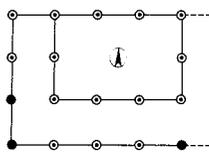
A 三町地区の遺構

SB01 (図版一・写真図版2、3)



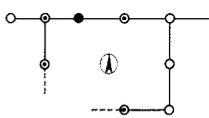
調査区北東部に位置する東西4間(9.9m)×南北3間(7.5m)の掘立柱建物。柱間^{註3}は東西が東から2.7m(9尺)、2.4m(8尺)、2.4m(8尺)、2.4m(8尺)、南北が北から2.4m(8尺)、2.4m(8尺)、2.7m(9尺)と変則的である。西側第2柱列の北第2柱を確認できなかったほかはすべて柱筋に柱穴がある。東西と南北の柱筋は直行しない(南北はほぼ方位に沿い、東西はそれに対して約5° 11′西偏する)。柱掘形は一辺0.8～0.7mの方形のものや径0.5～0.4mの円形ものが混在する。

SB02 (図版一・写真図版2、3)



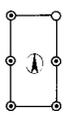
調査区東南部に位置する東西4間(9.15m)以上×南北3間(6.9m)の掘立柱建物。身舎は2間×3間で、柱間は梁・桁ともに2.25m(7.5尺)等間。西側と南側に廂が付くが東側は調査区外へのびており不明。廂の出はそれぞれ2.4m(8尺)。柱掘形は身舎が一辺0.4m前後、廂が一辺0.6m前後の方形。約1° 53′東偏する。

SB03 (図版1)



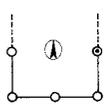
調査区北西部から拡張区にかけて位置する東西3間(6.0m)×南北2間(4.5m)の掘立柱建物。柱間は東西が東から2.25m(7.5尺)、2.25m(7.5尺)、1.5m(5尺)、南北が2.25m(7.5尺)等間。北側柱列の延長上に東西1個ずつ柱穴が並ぶが、柱間は東が2.4m(8尺)、西が1.8m(6尺)と不揃いである。柱掘形は一辺0.6m前後の方形と、径0.4mほどのものがある。1° 15′東偏する。

SB04 (図版1・写真図版2、3)



調査区北東隅に位置する掘立柱建物。東西1間2.4m)×南北2間(4.8m)を確認したが、北および東側が調査区外のため全体は不明である。柱間は梁・桁ともに2.4m(8尺)等間、柱掘形は一辺0.4m～0.5mの方形。2° 40′ほど東偏している。

SB05 (図版1・写真図版2、3)



調査区北東隅に位置する掘立柱建物。東西2間(4.5m)×南北1間(2.4m)を確認したが、北側が調査区外にのび、全体は不明である。柱間は東西が2.25m(7.5尺)、南北が2.4m(8尺)で、柱掘形は径約0.3mの円形。約3° 05′東偏する。

SB04、SB05と重複するが、直接の切り合いがないため前後関係は不明。

SE06 (図版1、5・挿図26・写真図版4)

調査区南西部、SB03の東柱列のほぼ真南に位置する井戸である。掘形は一辺1.6mの方形で、深さは約1.4mである。井戸枠は内法で東と南側が0.75m、北と西側が0.8mとやや



挿図26 SE06 井戸部材の刻印 (1:3)

歪んでいる。四隅に角材を立て、各面に二段ずつほぞ組みの横棧を取り付け、外側に縦板を各面6～7枚ずつあて、さらにその外側に薄板を多数重ねている。部材は上部が腐蝕していたが、下部は良好に遺存しており、㊦と刻印されているものもあった。井戸内の埋土は粘質の黒灰色泥土(7.5Y3/1)で、土器や瓦片のほか種子などの自然遺物が出土した。

SX07 (図版1・写真図版2、5)

調査区の西3分の2を占める湿地状の落込。SB01、SB02の西約4.0mに、西方に下がる肩口の一部を検出したが、ほかの部分は調査区外にのび、全体の形や規模は不明である。深さはおよそ0.2～0.4m、その肩口に沿って深い部分があり、調査区南部では0.7mほどの深さになる。堆積土は粘質の黒灰色泥土(7.5YR2/1)であるが、肩口寄りの深い部分には砂礫層が認められ、一部が流路状になっていたことがうかがえる。SB03やSE06はこの湿地が埋まった後に成立しているが、特に整地などの形跡は認められなかった。9世紀中葉～後葉の遺物が多量に出土した。

SA08 (図版1)

調査区北西部から拡張区、SB03の北側約3.3mに東西に並ぶ柱穴群。各柱穴は正確に一線上に並ばず、また柱間寸法も一定しないが、南北に関連する柱穴もなく、ここでは柵として扱った。柱掘形は径0.3m前後の円形である。

SD09

調査区東部に検出した南北溝。幅は約1～2.5m、南側が広く、深さは0.2～0.3m堆積土は暗灰色砂泥(10Y3/1)と砂礫の互層で、最下層に腐植土が堆積している部分もあり、自然流路と思われる。9世紀中葉の土器類や種子など自然遺物のほかに、古墳時代の土器や須恵器、石製品が出土した。

SD10 (図版1)

調査区南西隅、SE6の北西部に位置する鉤型の溝。幅0.3m、深さ0.3m。長さ東西に約4.0m、南北に1.6m、形状や配置からみてSE06に関連するものであろう。

B 四町地区の遺構

整地層 (挿図27、29)

SD11の西側と東側、さらにその上層に埋没後の溝を覆う3層の整地層を検出した。東側のものを整地層1、西側のものを整地層2、上層のものを整地層3と呼称する。整地層1は砂礫をわずかに含んだ暗茶褐色砂泥(10YR4/4)で、場所によって異なるが、よくしまっ

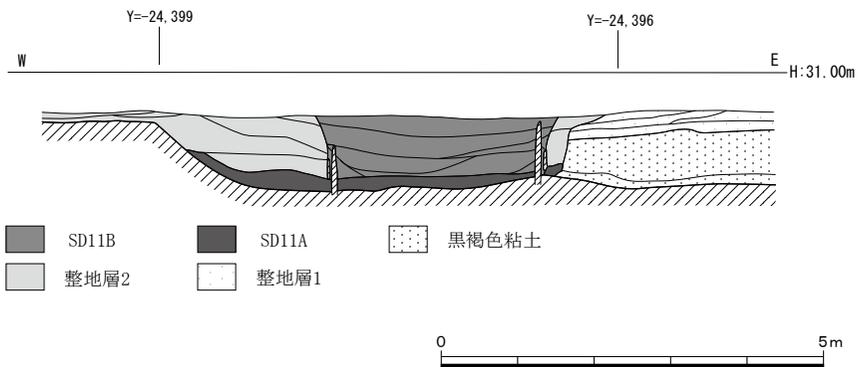
た2～3枚の薄い層で構成されている。平安京内の調査でしばしば検出される路面状の堆積である。整地層2は礫層・砂礫を含んだ茶褐色砂泥層(2.5Y5/3)などで、SD11以西から調査区ほぼ中央あたり、特にSD13寄りに厚く分布する。SD11Bの護岸裏込めやSD13の埋土と連続しており、この整地と溝の改修が同時期に行われたことを示している。整地層3はSD11から西にかけて薄く分布する茶灰色砂泥(10YR5/2)。SB15やSK18はこの層を切っ成りしている。

SD11A (図版1、4・挿図27、28・写真図版8)

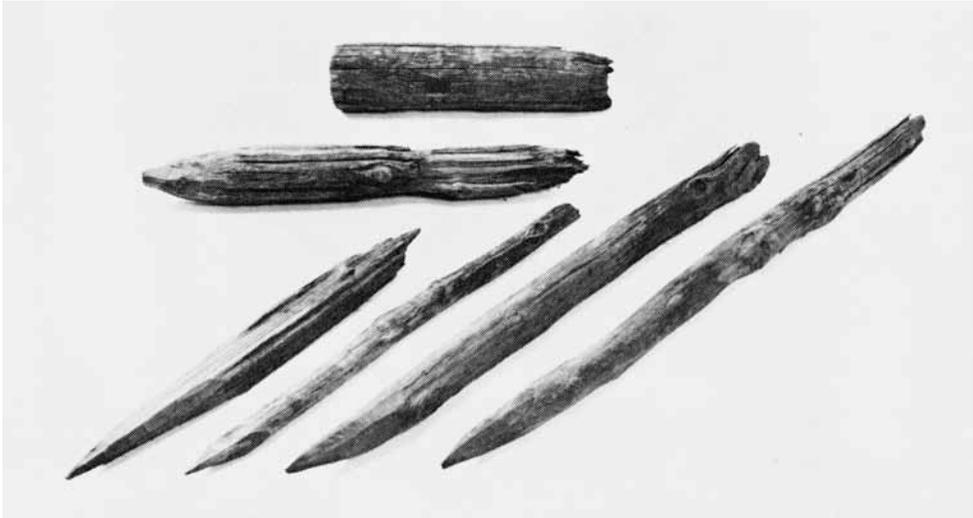
調査区東部に位置する南北溝。整地層1を切り成りしている。調査区北端と南端付近で、東西方向の溝SD12、SD13が合流している。SD12の合流点より北は幅1.0m、SD13の合流点より南は幅1.25m、その間の約12mは西側が広がり、約2.6mの幅をもつ。深さは約0.5m。SD12、SD13の合流点より北と南は、一辺0.15mほどの角材を横に用いて護岸されている。ほぼ中央に径0.2～0.3mのピットが南北に13個並ぶ。後に改修しているが、最下層の暗灰色シルト層(10Y4/1)が残り、9世紀初頭の土器や土馬などが少量出土した。

SD11B (図版1、4・挿図27、28・写真図版6、7、8、9、11)

SD11Aを改修し、護岸を施した溝。SD12、SD13合流点の護岸は、SD11Aのものをそのまま継承しているが、溝幅を縮小し、新たに護岸している。東西の護岸の幅は約1.5m。深さ約0.4m。両岸とも約0.2m間隔で丸杭を打ち、その外側に横板を二段当て、礫を含んだ茶褐色砂泥(2.5Y5/3)で裏込めをしている。西側の裏込めの土はSD11Aの肩をこえ、整地層2と連続する。護岸の板はかなり腐蝕していたが、杭はよく遺存しており、全部で147本検出した。^{註4}溝中に露出していた上部約0.3mを除き、打ち込まれていた先端部約



挿図27 SD11断面図(1:100)



挿図 28 SD11 の護岸に使用されていた各種の杭

0.7～0.8mの残存状態は非常に良好で、加工痕がよく観察できる。溝内の埋土は下層から、腐植土を含んだ青灰色の砂層(5BG5/1)、礫を含んだ青灰色シルト(10BG4/1)、茶褐色砂泥(2.5Y4/2)で、主に最下層とその上面から多量の土器類や種子などの植物遺体が出土した。

SD12A・SD12B (図版1・挿図29・写真図版6、9)

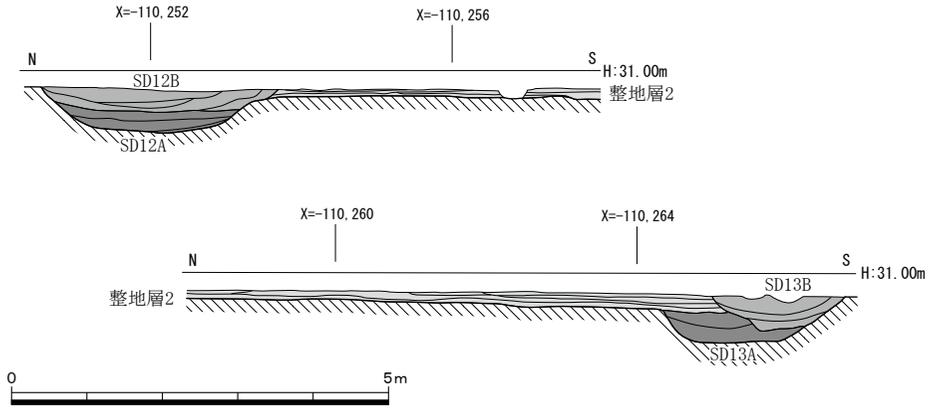
調査区北部に位置する東西溝。東でSD11に合流する。堆積状況から、間に整地層をはさんだ2時期に分けることができ、それぞれSD11A、SD11Bに対応している。下層のSD12AはSD12Bに切られているため、当初の規模は不明だが、幅約2.4m、深さ約0.3m、SD12Bは幅約3.0m、深さ約0.25mを確認している。SD12Aはほとんど遺物を含まず、SD12Bから9世紀前葉の土器類や瓦片が出土したが、量は少ない。

SD13A・SD13B (図版1・挿図29・写真図版6、9)

調査区南部に位置する東西溝。東でSD11に合流する。堆積土および整地層との関係からSD12同様2時期に分かれる。SD13Aは幅1.6m前後、深さ0.4m。SD13Bは幅1.2～1.5m、深さ0.4m。SD13A内の整地層を切り込み、やや南側に掘り替えられている。SD13Bから9世紀前葉の土器類が出土している。

SK14 (図版1・写真図版10)

調査区西北隅に検出した浅い土壌。東西約7.2m、北側は調査区外にのびているが、検出分で南北約3.0mある。深さは約0.1～0.2mで、埋土は炭を多く含んだ暗褐色砂泥

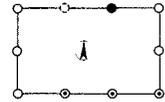


挿図 29 SD12、SD13 と整地層 2(1:100)

(5YR3/4)。9世紀初頭の土器類が多量に出土した。

SB15 (図版1・写真図版6)

調査区中央東寄りに位置する東西3間(7.5m)、南北2間(4.5m)の掘立柱建物。柱間は東西が2.5m(8.3尺)等間、南北2.25m(7.5尺)等間。柱掘形は径0.4～0.5mの円形。SD11、SD12、SD13が埋没した後の整地とみられる整地層3を切って成立している。



SB16 (図版1・写真図版6)

調査区中央やや東寄り、SB15と重複する位置にある一対の柱穴からなる門。棟門と考えられる。柱間は南北に3.6m(12尺)、柱掘形は一辺0.8mの方形。北側の柱穴には柱根がわずかに残っていた。

SX17 (図版1、4・写真図版6、7、11)

調査区東端部、SD11の東側に南北に並ぶ一対の柱穴、それに対応してSD11Bの西肩部に検出した柱根と、SD11Bの中央に南北に並ぶ杭列からなる遺構。SD11Bにかかる橋と考えられる。柱間は南北4.5m(15尺)、東西3.0m(10尺)、東側の柱掘形は一辺0.8～1.0mの方形。南柱穴には径0.4mの柱根が残る。西南に検出した柱根には掘形がないが、それはSD11Aを縮小する際に、裏込めの部分に柱を立て、埋め戻した結果と理解できる。西北部の柱痕跡は確認できなかったが、柱の推定位置付近にこれと関連するものとみられる長径0.2mほどの石を検出した。

SK18 (図版1・写真図版10)

調査区ほぼ中央に位置する、東西1.2m、南北3.3mの土壇。深さは0.2～0.3m。層位関

係からSB15と同時期のものと考えられる。埋土は腐植土を含んだ暗灰色砂泥(10Y4/2)で、少量の土器類や軒平瓦などの瓦類が出土した。

C 五町地区の遺構

SD19 (図版2・写真図版12、15)

調査区北方に検出した東西方向の溝状落込で、幅11～12m、深さ0.2～0.3mで部分的に0.6mほどのところがある。南肩の約3.0m南に建物SB20、SB21が並ぶが、この2棟の建物の間にあたる部分の肩部が、幅1.2m、長さ2.4mほど北へ張り出す。埋土は基本的に、炭をわずかに含んだ暗灰色砂泥(10Y3/1)と暗青灰色シルト(10BG3/1)の2層に分層できるが、深い部分ではその下層に淡灰褐色砂礫層(5Y6/1)が認められた。暗青灰色シルト層からは9世紀前葉の土器類を主とする遺物が多量に出土したが、特に南肩寄り、SB20の北側付近に幅約3.0～4.0mにわたって集中的に分布していた。遺物群上層の暗灰色砂泥層からは、腐蝕して形状をとどめないが、承和昌寶とみられる銅銭が出土している。

SB20 (図版2・写真図版12、13)

調査区ほぼ中央、SD19の南側に位置する東西方向の掘立柱建物。東西5間以上(5間で12.0m)×南北3間(7.2m)、南に廂が付くが、東側は調査区外にのび、全体は不明である。柱間は東西が2.4m(8尺)等間、南北が2.25m(7.5尺)等間、廂の出は2.7m(9尺)。柱掘形は一辺0.7～0.8mの方形で径0.3m前後の柱痕跡が認められた。廂の柱穴は3個検出したがいずれも抜き取り痕を残す。

SB21 (図版2・写真図版12、13)

調査区ほぼ中央の西寄り、SB20の西側4.5m(15尺)に位置する掘立柱建物。東西1間以上(2.4m)×南北3間(7.2m)、南に廂が付く。柱間は東西2.4m(8尺)、南北2.25m(7.5尺)等間、廂の出2.7m(9尺)。柱掘形は一辺0.7～0.8mの方形。西側の大部分が調査区外のため全体は不明だがSB20と柱筋が揃うことや、柱間が一致する点などからみれば同様の規模と形態をもつ可能性があり、SD19に沿って東西棟を並べた建物配置が想定できる。

SD22 (図版2・写真図版12、14)

調査区中央南寄りに位置する東西方向の溝。北側に浅く広がった部分があるが、本体は幅約1.8m、深さ0.2～0.4m。埋土は暗褐色砂泥(7.5YR4/3)で、9世紀前半の土器が出土した。

SE26 を切って成立している。

SD23 (図版2・写真図版12、14)

SD22の南約2.0mに位置する東西方向の溝。SB20と21の間に対応する部分の約1.0mが途切れる。幅約2.0m、深さ0.2～0.3m。堆積土は暗褐色砂泥(7.5YR3/3)。遺物は調査区西寄りて瓦片が集中して出土したほか、少量の土器類がある。

SD24 (図版2・写真図版12、14)

調査区南寄り、SD23の南約3.5mに位置する東西溝。当初不整形な暗褐色砂泥(7.5YR4/3)層の広がりともみられたが、約0.05m掘り下げた結果、幅0.6m、深さ0.1～0.2mの溝を検出した。溝内の埋土は暗茶褐色砂泥(10YR4/4)。遺物は非常に少ない。

SA25 (図版2・写真図版12、14)

SD23とSD24の中間に位置する東西方向の柱穴群。東は中世の川SD28に切られ、西は調査区外にのびているため全長は不明。柱間は2.4m(8尺)等間で4間分検出した。

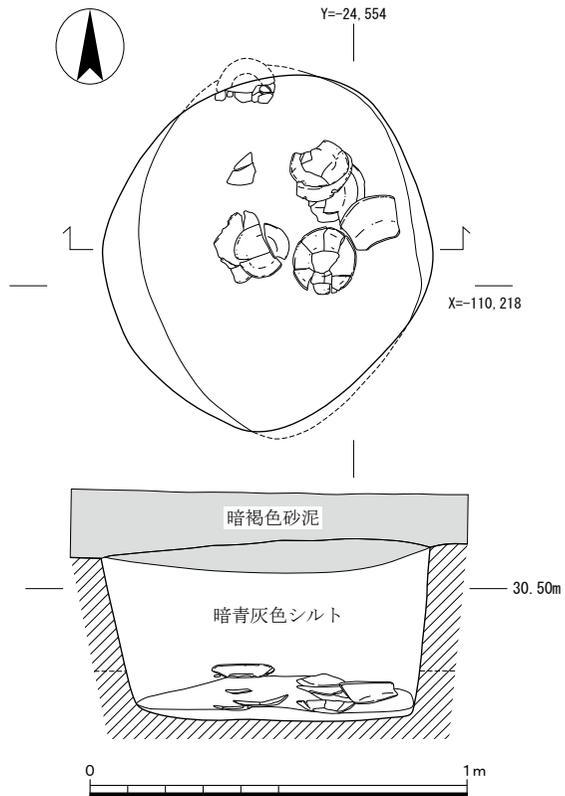
柱掘形は一辺0.4～0.5mの方形。

SE26 (図版2・挿図29・写真図版12、14)

SD22と重複する径約0.9m、深さ約0.5mの円形の素掘り井戸。堆積土は、底部直上の厚さ0.05mほどの細砂を除き、ほとんどが腐植土をわずかに含む暗青灰色シルト(5B4/1～2)。砂層上面から土師器、須恵器などが重なって出土した。

SD27 (図版2)

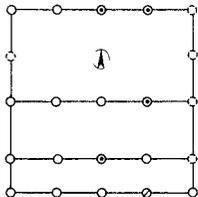
調査区北端に検出した東西方向の溝。北側は後世の建物の基礎に切られており、幅は不明。深さ約0.2m。出土遺物が少なく時期推定が困難だが、位置は姉小路の南側溝推定位置と一致する。



挿図30 SE26実測図

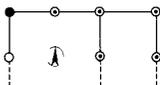
D 十町地区の遺構

SB29 (図版3・写真図版16、17)



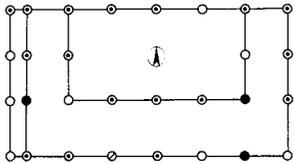
調査区中央やや西寄りに位置する東西4間(9.6m)×南北4間(9.6m)の掘立柱建物。身舎の妻柱は未確認で1間×4間。南側に廂と縁が付く。柱間南北4.8m(16尺)、東西2.4m(8尺)等間。廂、縁の出はそれぞれ3.0m(10尺)、1.8m(6尺)。柱掘形は一辺0.7～0.8mの方形。縁の掘形は径0.3m前後の円形。

SB30 (図版3・写真図版16)



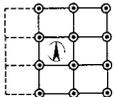
調査区中央南壁沿いに一部を検出した。東西3間(7.8m)×南北1間以上(1間で2.4m)。東に廂の付く南北方向の掘立柱建物と思われるが、南の大部分が調査区外のため全体は不明である。身舎の柱間は2.4m(8尺)等間。廂の出は3.0m(10尺)。北側柱筋がSB29の廂柱筋に揃う。柱掘形は一辺0.7～0.8mの方形。

SB31 (図版3・写真図版16、17)



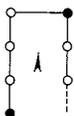
調査区西寄りに位置する東西6間(13.8m)×南北3間(7.8m)の掘立柱建物。北を除く三面に廂が付く。身舎は2間×4間で柱間は、東西が西から2.25m(7.5尺)、2.4m(8尺)、2.4m(8尺)、2.25m(7.5尺)、南北が2.4m(8尺)等間、廂の出は東西が2.25m(7.5尺)、南が3.0m(10尺)。柱掘形は一辺0.7～0.8mの方形。西廂柱筋さらに西0.9mに縁とみられる径0.2～0.3mの小柱穴が対応して並ぶ。北側柱筋がSB29、SB32の北側柱筋と、南側柱筋がSB29の廂柱筋、SB30の北側柱筋に揃う。

SB32 (図版3・写真図版16、18)



調査区中央部に位置する東西2間(3.6m)×南北3間(4.5m)、総柱の掘立柱建物。柱間は東西が1.8m(6尺)等間、南北が1.5m(5尺)等間、柱掘形は一辺0.8m前後の方形。北側柱筋がSB29、SB31の北側柱筋に揃う。

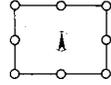
SB33 (図版3・写真図版16、18)



調査区東側北寄りに位置する東西2間(4.8m)×南北2間(3.6m)の掘立柱建物。柱間は東西2.4m(8尺)等間、南北1.8m(6尺)等間。柱掘形は一辺0.3m前後の方形もしくは径0.2mほどの円形。東西の中心が、SB31の西廂柱筋に揃う。

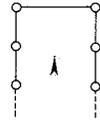
SB34 (図版3・写真図版16、19)

調査区東側北寄りに位置する東西2間(4.8m)×南北2間(3.6m)の掘立柱建物。柱間は東西2.4m(8尺)等間、南北1.8m(6尺)等間。柱掘形は一辺0.3m前後の方形もしくは径0.2mほどの円形。東西の中心が、SB31の西廂柱筋に揃う。



SB35 (図版3・写真図版16、19)

調査区南西隅に位置する東西1間(4.2m、14尺)×南北2間以上(2間で4.2m)の掘立柱建物で、SD38の南北部分にまたがる。南北方向の柱間は2.1m(7尺)等間。柱掘形は径0.6m前後でほとんど削平され不整形。



SB36・SB37 (図版3)

調査区北西部(SB36)と南西部(SB37)に検出した1間×1間の掘立柱建物。柱間は南北がSB36で2.4m(8尺)、SB37で3.0m(10尺)と異なるが、いずれも東西方向の柱間が4.8m(16尺)と非常に長い点が共通し、ほかの建物群とは異質な形態をもつ。柱掘形はSB36が径0.6m、SB37が径0.4m前後の円形、SB37はSB33と重複するが、直接の切り合いがなく前後関係は不明である。

SD38 (図版3・写真図版16、20)

調査区中央付近を東西に横切り、西端で南へ折れる鉤形の溝。東および南は調査区外へのびる。東西方向を約66m、南北方向を約12m検出した。東西部分は中央付近がやや北側に弓なりにふくらむが、SB29、SB31、SB32の北側に沿った位置にある。幅は0.6～0.8m、深さ0.15～0.3m、底部は西側が低い。溝内の堆積は炭片をわずかに含んだ暗灰褐色砂泥(2.5Y4/2)で9世紀前葉の土器片を多量に含んでいた。東西部分は十町の南北中心推定線に近い位置にあたる。

SD39 (図版3・写真図版16、20)

調査区中央やや東寄り、SB31とSB32の間に位置する南北方向の溝。SB30と重複するが直接切り合わず、前後関係は不明である。幅0.5m、深さ0.3m。南は調査区外へのびるが、北でSD38と接続する。長さ約12mを検出。堆積土は暗灰褐色砂泥(2.5Y4/2)。量は多くないがSD38同様9世紀前葉の遺物が出土した。

SD40 (図版3・写真図版16)

調査区北西部に検出した南北溝。北は調査区外へのびるが、南でSD38と合流する。幅0.5～0.7m、深さ0.15～0.2m。十町の東西中心推定線のやや西側に位置する。溝内の堆積は暗灰褐色砂泥(2.5Y4/2～3)。遺物は非常に少ない。

SA41 (図版3・写真図版16、20)

SD38の東西部分の北側に並行する柱穴列。柱間は3.0m(10尺)の部分と3.3m(11尺)の部分(SB29以西)がある。SA42と一連のものと考えられるが、SB45以西の柱穴が確認できず、ここでは別に扱った。柱掘形は一辺0.3～0.4mの方形。十町の南北中心推定線のやや北側に位置する。

SA42 (図版3・写真図版16)

調査区西端付近、SD38の南北部分西側に並ぶ柱穴群。柱間は3.0m(10尺)柱掘形は径0.3m前後の円形。

SK43 (図版3)

調査区北辺の中央から西寄りに検出した土壌。北側は調査区外にのびる。東西8.6m、南北4.2m以上、深さ0.2m。埋土は暗褐色砂泥(5YR3/1)で、土師器・須恵器のほか、陰刻花文を施した緑釉陶器や、「海厨」と墨書された灰釉陶器が出土した。

SX44 (図版3・写真図版20)

調査区南西部、SB31の南側に位置する落込状の遺構。明瞭な掘形はなく、東西約3.2m、南は調査区外にのびるが南北1.2mの範囲がわずかに窪み、土師器などが集中して出土した。下層に古墳時代の溝(SD48)があり、その跡の窪みに沿って堆積したようである。

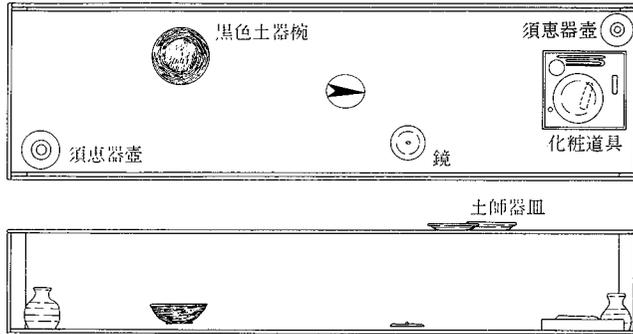
SB45 (図版3)

調査区西寄り、SD40とSD38の合流点の西側に位置する東西方向の一对の柱穴。柱筋はSA41よりやや南を通り、柱間は3.6m(12尺)、柱掘形は径0.5～0.6mの円形。SD41との位置関係からみてSA41に取り付く門と考えている。

SX46 (図版3、6・挿図31・写真図版21)

調査区西部、SD38の南北部分の東側に位置する木棺墓。掘形は南北1.8m、東西0.6m、深さ0.3m。木棺は掘形の底部に幅0.4m、長さ1.65mの板を敷き、その四隅に沿わせて幅0.03～0.05m、長さ0.3m程の板を立て、隅柱とする。その外方から板を各面一枚ずつ当て側板とし、さらに蓋板を覆せていたようであるが、蓋は棺内に落ち込んでいた。底板と蓋板は比較的保存状態が^{註5}良かったが、側板はほとんど腐蝕しており、外壁に痕跡をとどめるだけであった。棺内の埋土は底部から、落ち込んだ蓋のやや上部にかけて、暗青灰色の粘質土(10BG4/1)、その上部に茶褐色泥砂(2.5Y5/3)、暗灰色砂泥(2.5Y5/2)の順に堆積しており、被葬者の痕跡は認められなかった。副葬品は棺内の北東および南西隅に須恵器壺、北端部に漆皮の折敷とその上に漆器合子、皿、ピンセット状の銅製品(毛抜き?)、串状

木製品、墨、玉 2 個、中央やや北東寄りに銅鏡、南寄りに黒色土器椀、棺蓋上に土師器皿 2 枚が置かれていた。棺内の遺物のうち銅鏡、須恵器壺、漆皮折敷は底板上で検出し、黒色土器椀、銅鏡は底板から 0.02m ほど上で検出した。特に銅鏡の鏡面には布と木痕が



挿図 31 SX46 木棺模式図

残っており布にくるんだ後、箱に入れ、遺体の上に置かれたものであろう。

SX47 (写真図版 20)

1 区で検出した湿地状落込。場所によって底部に砂礫層があり、一部が流路状になっていたことがうかがえるが、全体に腐植土を含む粘質の砂泥や粘土層が堆積しており、広範囲な湿地の一部とみられる。9 世紀中葉～後葉の遺物が出土した。

E 試掘・立会調査で検出した遺構

試掘・立会調査で検出した遺構には、土壌、溝、流路がある。また遺物包含層も検出している。以下主要な遺構と遺物包含層について述べる。

SK52 十五町地区 (25) で検出した土壌。東西幅 2.3m、深さ 0.8m、南北幅は 1.3m を確認した。堆積土は上層が黒褐色砂泥、下層は黒灰色砂泥。上層から土師器皿、甕片が出土。

SD53 十五町地区 (24-a) で検出した平安時代前期の南北溝。東肩部は攪乱を受け破壊されていた。規模は幅 1.5m 以上、深さ 0.8m、長さ 5.0m を確認した。堆積土は上層が黒褐色砂泥、下層は茶灰色砂泥。上層から土師器、緑釉陶器が出土した。

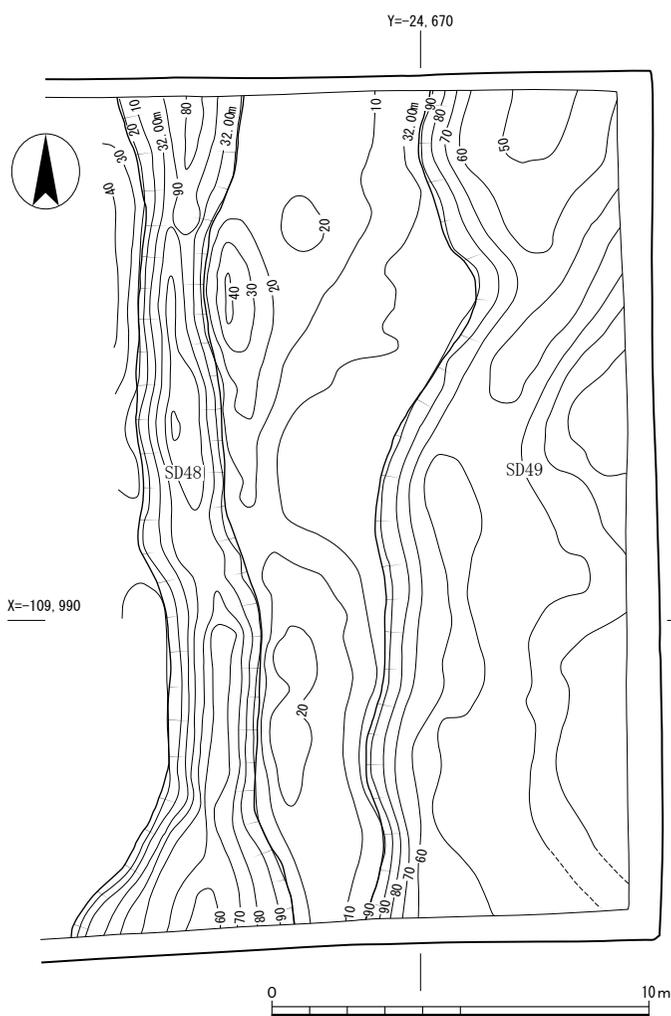
SD54 道祖大路地区 (1-a ~ 1-c、16-a ~ 16-c、31、32) で約 550m にわたり確認した南北方向の流路^{註6}。深さは 1.25m ~ 2.2m、明確な肩部を検出してないが、幅は 1-a、16-c の堆積状況からみて、東西 10m 内外と考えられる。32 の全域で地表下 0.6 ~ 0.7m に平安時代前期の遺物を含む灰色砂礫層を検出したが、遺物はすべて磨滅した状態で出土した。

遺物包含層

十三町地区 (19)、十四町地区 (18-c)、十五町地区 (24-a ~ 24-b、25、27)、十六町地区 (1-k)、二条大路 (1-e 付近) の各地点で検出した。これらの遺物包含層からは平安時代前期の土師器、須恵器、緑釉陶器、製塩土器、瓦などが出土したが量は少ない。

2 平安時代以前の遺構

SD48 (図版 3・挿図 32・写真図版 22)



挿図 32 SD48・SD49 実測図 (1:200)

十町地区の2区西寄りに検出した南北方向の流路。わずかに蛇行しており、幅も1.5～6.0mと一定でない。

深さは0.4～0.7mで、中央が極端に深まり、断面が漏斗形を呈する。堆積土は上層が暗褐色砂泥(10YR3/2)、下層が同色の砂礫層で、古墳時代の土師器、須恵器などの土器類のほか、滑石製の石器製の模造品が出土した。

SD49 (図版 3・挿図 32・写真図版 22)

十町地区の2区西端部、SD48の西側に位置する南北方向の流路跡。西肩部から約7mを検出したが、東肩は調査区東壁外にのび、幅は不明である。深さは約0.5m。層位関係か

らSD48以前の流路であることは明らかであるが、遺物は弥生土器と思われる底部の破片が1点出土しただけで時期は確定できない。

SB50 (図版3)

十町地区の2区中央やや西寄り、SB31とSB32の間に位置する掘立柱建物。東西2間、(5.1m)×南北3間(5.94m)。北側妻柱は現代の土壌によって削平されており未確認。柱間は東西2.55m等間、南北1.98m等間。東西の柱筋はほぼ方位に沿うが、南北の柱筋はそれに対して約3°56′東偏する。SB30に切られており、それより古い遺構であるが、遺物が出土せず時期は不明である。

SX51 (挿図14、15)

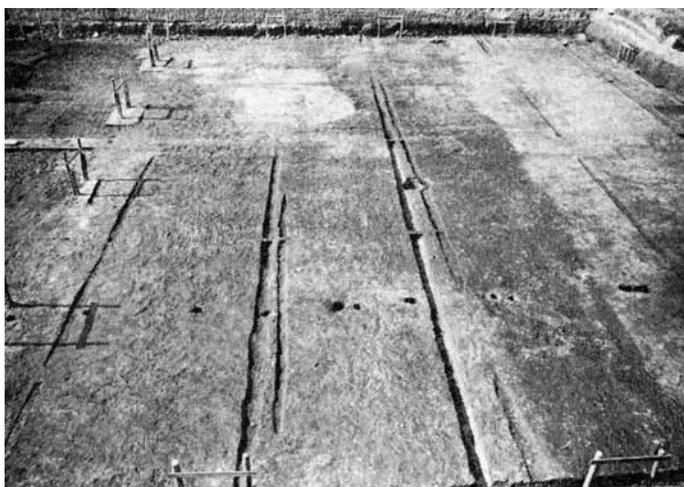
十二町地区の調査範囲全域に広がる湿地。一部に流路状の細砂や砂礫層が堆積する。遺物は非常に少ないが1区から古墳時代の土師器や須恵器の小片が出土した。

3 平安時代以降の遺構

SD28 (図版2・挿図33)

五町地区の調査区東部で検出した川。旧天神川の流路である。現在の天神川はこの地点から北東約700mで付け替えられ、そこから西流している。検出した最も古い流路は西肩寄り幅1.5m、深さ0.7mの部分で、室町時代後半の遺物が出土した。その後当地に工場が建設される直前まで存続していたようである。東へ広がっているが、調査区内では全体の幅は確認できなかった。堆積層はほとんど砂および砂礫層で、上部は現表土まで達している。付け替え直前の川床は、周辺の地表より高い、いわゆる天井川で、当時の地形図に土堤状に記録されている。周辺の旧耕土層の間にこの川から流出した砂礫が堆積しており、何度か氾濫を繰り返した状況が認められる。

このほか平安時代以降の遺構としては、各発掘調査区で旧耕土層およびそれに伴う暗渠や水路と



挿図33 三町地区の小溝群

思われる小溝群や土壙、また試掘・立会調査では流路や湿地の一部を検出した。

註

- 1 本書に収録した四町地区の遺構は『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和56年度』で報告しているが、今回改めて遺構に通番を付したため、遺構番号が本書とは異なっている。

以下に番号を対照する。

本 書	概 要	本 書	概 要
SD11A、B	SD101	SB15	SB132
SD12A、B	SD102	SB16	SX133
SD13A、B	SD103	SX17	SX134
SK14	SK106	SK18	SK131

- 2 SX51 は本文中では平安時代以前の遺構としているが、平安時代にも存在した可能性があるため本表に加えた。
- 3 本文中の建物柱跡の記号凡例は次のとおりである。○柱掘形のみ確認、●柱痕跡を確認したもの、●柱根が残るもの、○柱抜き取り痕を確認したもの、○推定
- 4 杭の材種は主としてヒノキで、ほかにスギ、イヌガヤ?が少量ある。
- 5 木棺の材種はヒノキである。
- 6 その後当研究所が行った調査で、同一の流路とみられる川を右京区西院西今田町（右京四条二坊）、下京区西七条名倉町（右京七条二坊）、で確認しており、道祖大路に沿って川が存在したことが明らかになった。昭和63年調査、未報告。

第三章 遺物

右京三条三坊で実施した 35 件の調査を通じて、整理箱に約 370 箱（調査終了時）の遺物が出土した。その種類には土器類、瓦類、木製品、漆器、石製品、石器、金属製品、土製品や自然遺物など多様なものがある。このうちの大部分を平安時代の遺物が占め、その他に量は少ないが旧石器時代、縄文時代、古墳時代や平安時代以降のものもある。今回の報告では、これらの中からまず量的にまとまりのある平安時代前半期のものについてふれ、後にほかの時代の遺物について述べることにしたい。

1 平安時代前期の遺物

各遺構や遺物包含層から出土した平安時代前期の遺物には、瓦類、土器類、漆器、木製品、金属製品、石製品、土製品のほか、動植物遺体などの自然遺物がある。量的には土器類が圧倒的多数を占め、瓦類がそれに次ぐ。その他のものは非常に少ない。土器類は種類も豊富で、一つの遺構からまとめて出土した例が多い。以下にこれらの遺物について、種類別に説明を加えるが、自然遺物については第IV章で述べることにする。

A 瓦類

総破片数 10,158 片の瓦類が出土した。これらのほとんどは小片で、遺構に伴うものは少なく、大部分が遺物包含層から出土したものである。このうち軒瓦が 107 点あるが、小片になっているものや、表面が磨滅して文様が不明なものが多い。その他に文字瓦や緑釉を施した丸瓦、平瓦が少量ある。以下に主なものについて記す。

軒丸瓦（図版 7・挿図 34・写真図版 23）

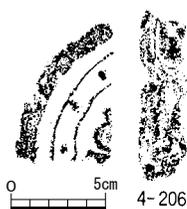
複弁八弁蓮華文軒丸瓦 (3-363) 内区と外区との間に 2 本の圈線が巡る。中房は低く盛り上がり、各弁の子葉も盛り上がる。珠文は小粒で弁と間弁に相応して配されている。離れ砂のあるものとないものがある。瓦当外周および裏面は丁寧なナデ。焼成良好。平安京古瓦図録^{註1} 36・37 型式である。SE06 出土。この形式の瓦はほかに SX07 から小片が 6 点出土しているが、その中には岸部窯産^{註2}と西賀茂窯産^{註3}の二種が認められる。

蓮華文軒丸瓦 (3-364) 中房は一段低くなり大粒の蓮子を配する。外区を分ける圈線は太く、珠文は小さい。外区外縁の内側に線鋸歯文が巡る。砂の混入が目立つ。焼成良好。平城宮^{註4} 6282 型式である。SX07 出土。

単弁十五弁蓮華文軒丸瓦 (4-204) 中房は一段低く、蓮子は大粒で1+6を配する。中房および内外区を隔てる圏線は太い。弁の先端はすべて圏線に接する。外区内線は内区より低く、大粒の珠文を密に配する。裏面には若干の凹凸があるが、ナデは丁寧に施している。胎土は砂粒を含みやや軟質だが焼成良好。同型式のものが四町地区整地層3から2点、SX07から3点出土している。

複弁七弁蓮華文軒丸瓦 (3-365・366) 珠文は大粒で、平安京古瓦図録36型式よりもその間隔が狭く、子弁は長い。外周および裏面はやや粗くナデている。外周に範の痕跡が残るものもある。範はA I型、砂の混入が多く、焼成良好。同一個体か、平安京古瓦図録38型式。同型式のものがSX07からこれ以外に3点、SD11、12、13から6点、四町地区整地層3から1点出土している。

蓮華文軒丸瓦 (4-206) 蓮弁は一段盛り上がり、内外区を分ける圏線は蓮弁の形にそって花卉状に曲線を描く。裏面はケズリ、外周にカセ型の痕跡とみられる凸線が認められる。砂粒を多く含み、やや軟質。同範例から「大伴」銘をもつものと思われる。四町地区整地層3出土。同型式のものがSX07、SD12に各1点、SD23に2点ある。



挿図34 カセ型の痕跡(1:4)

蓮華文軒丸瓦 (5-341) 蓮弁は菊花状で18弁。弁の中央はやや凹む。中房は低く盛り上がり1+4の蓮子を配する。外区内線は幅広く、珠文をやや間隔をあけて巡らす。範はA型で、カセ型使用の可能性もある。調整はきわめて丁寧で、外縁の周り、側面には丁寧なナデ調整を施す。瓦当範には粘土板を挿入しており、糸切り痕が残る。丸瓦部の接合位置は比較的高い。砂粒はほとんど含まず、焼成良好。乙訓寺に同範例がある。SD19出土。

軒平瓦(図版7・写真図版24・25)

唐草文軒平瓦 (3-359) 3反転する各唐草の先端は水玉状を示す。いわゆる「二葉ワラビテ」といわれるものであるが、3反転目の上部支葉は逆に巻く。(類例によると対向C字の中央に「近」の正文字を入れる。平安京古瓦図録335型式に比べて珠文の間隔が広く、布目は細かい。)瓦当部凹面と、顎から顎裏面にかけてヨコ方向に丁寧なナデ、側面はケズリの後にナデる。顎に「×」のへら記号がある。砂の混入が多い。焼成良好。平安京古瓦図録336型式、西賀茂角社瓦窯東群に同範例がある。SX07出土。

唐草文軒平瓦 (3-360) 珠文は比較的大粒である。中心飾りに「↓」を配する。支葉数は2で3反転し、3反転目の上部支葉は反対に巻く。いわゆる二葉ワラビテ文である。範

はB型を使用、離れ砂がわずかに認められる。瓦当凹面はヨコ方向のケズリ。顎は丁寧なヨコ方向のナデ、顎から平瓦部凸面にかけては、タテ方向のケズリの後にヨコ方向のナデ。小石、砂を若干含み、焼成良好。平安京古瓦図録 335 と同範。SX07 出土。

唐草文軒平瓦 (3-361) 唐草の彫りに高低差がない。瓦当中心に「↓」の飾りを置く。珠文は大粒で比較的密に配する。調整はきわめて丁寧である。砂、小石を点々と含む。焼成良好。同範例は西賀茂醍醐の森瓦窯と西賀茂角社瓦窯東群から出土している。SX07 出土。

唐草文軒平瓦 (3-362) 支葉の先が二又に分かれる。類例から中心飾りは対向のC字形である。側面のケズリ、顎のケズリとも丁寧である。瓦当部凹面のナデもきわめて丁寧である。若干の砂と小石を含みやや軟質。焼成良好。SB01 出土。

唐草文軒平瓦 (4-199・4-201・4-202) 中心飾りに「↓」を置く。中心飾りの上端部はY字状にその先端が分かれる。唐草文は細かく先端まで同じ。両側面にヨコ方向の縄タタキの痕跡を残す。調整は丁寧に施す。砂、小石を含む。焼成良好。4-199 と 4-202 は同範であるが、胎土などが 4-202 とは異なっており 4-199 は西賀茂、4-202 は岸部瓦窯産と思われる。SK18 出土 (4-199・4-202)。四町地区整地層 2 出土 (4-201)。同型式のものがほかにSD19 から 3 点、SX07、SD11B、SD12B から 1 点ずつ出土している。

唐草文軒平瓦 (4-200) 「大伴」銘軒平瓦^{註8}の一部。大粒の珠文が比較的まばらに巡る。各唐草はその先端が玉状を呈する。唐草は中心飾りの上部から始まり 2 反転する。磨滅が著しいが残存部でみる限り調整は丁寧である。布目は細かい。砂粒等の混入はわずかで、焼成良好。四町地区整地層 2 出土。このほかに SX07 から同型式のものが 1 点出土している。

唐草文軒平瓦 (4-203) 主葉は脇の圈線に接する。珠文は大粒で密に配する。砂の混入は少ない。焼成良好。平城宮 6664 型式である。四町地区整地層 3 出土。

唐草文軒平瓦 (5-340) 大粒の珠文をまばらに置く。唐草は巻き込みが強く先は玉状になる。内区は狭い。調整はきわめて丁寧であり、ミガキが施されているのか光沢がある。砂を点々と含む。焼成良好。平安京古瓦図録 353 型式 (広隆寺出土) である。SD23 出土。

唐草文軒平瓦 (10-224) 残存部分では主葉は強く巻き込み先端は玉状になる。文様の流れや表現法は平安京古瓦図録 310 型式 (六角堂出土) に近い。側面、顎裏面はタテ方向のやや粗いケズリでナデ調整は施さない。砂の混入はない。焼成良好。SX47 出土。

文字瓦 (挿図 35、写真図版 25)

「木工」(3-367) 平瓦の凹面に右下がりの「木工」を陰刻している。右側にも「木工」を押している。SX07 出土。

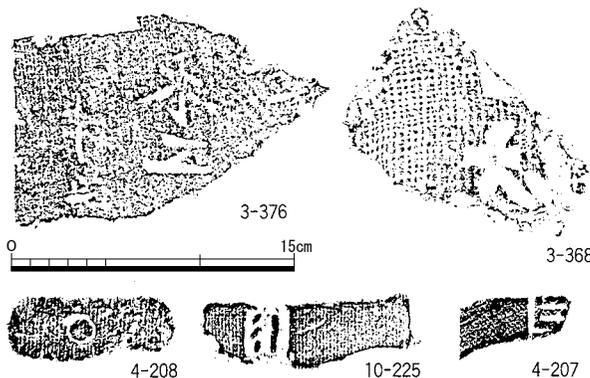


表 35 文字瓦 (1:4)

朱雀院^{註9}、平城宮^{註10}にある。SD11B 出土。

「𠄎」(10-225) 「修」の字の異体字。縦 1.2cm × 横 1.1cm の大きさである。平瓦の端面に押されている。同范例は平城宮^{註11}にある。十町地区包含層出土。

「右坊」(3-368) 平瓦の凹面に「右坊」の逆文字を陰刻している。SE06 出土。

「○」(4-208) 平瓦の端面に、直径 7.5 mm の円形の印を押している。印は鈍く、線の太さも 0.5 mm と細い。SK18 出土。

「目」(4-207) 丸瓦部の端面に、「目」文字の陽刻を押す。同范例は

B 土器類

出土遺物の大部分を土器類が占めることは先にも述べたが、ここではそれらの土器類について出土した遺構ごとに説明する。ただし SX46 出土土器については副葬品としての一括性を考慮して次項でほかの遺物と共に述べ、硯やその他の土製品についても後にまとめることにする。各土器群が属する時期は第 V 章で行う土師器の小型器形を中心とする型式編年に基づいている。小型器形の名称は、原則的に奈良国立文化財研究所の用例に準ずる。また施釉陶器等の底部の形態に関しても第 V 章の底部の形態分類に従う。

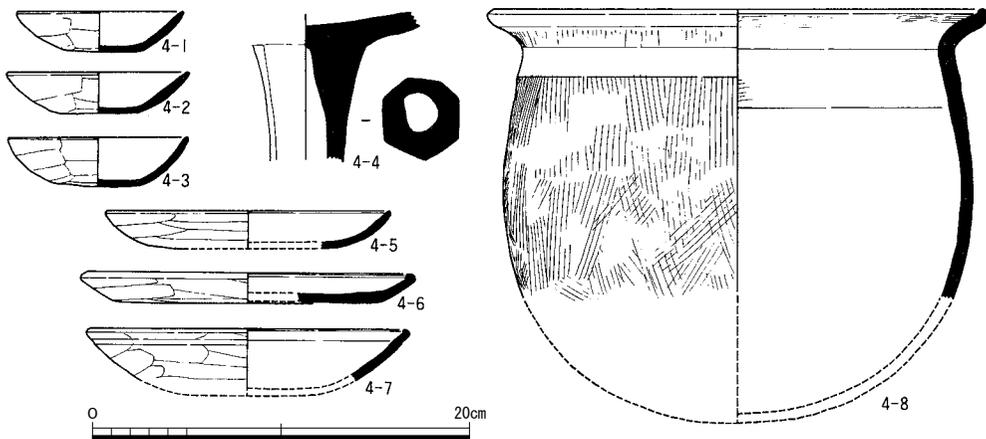


表 36 SD11A 出土土器 (1:4)

なお文中に表記した法量は本書作成にあたって計測した全資料の平均値である。したがって観察表に収録した土器だけの平均値とは若干異なる場合がある。

SD11A 出土土器（図版 26・挿図 36・写真図版 29、30・70・観察表 1、29）

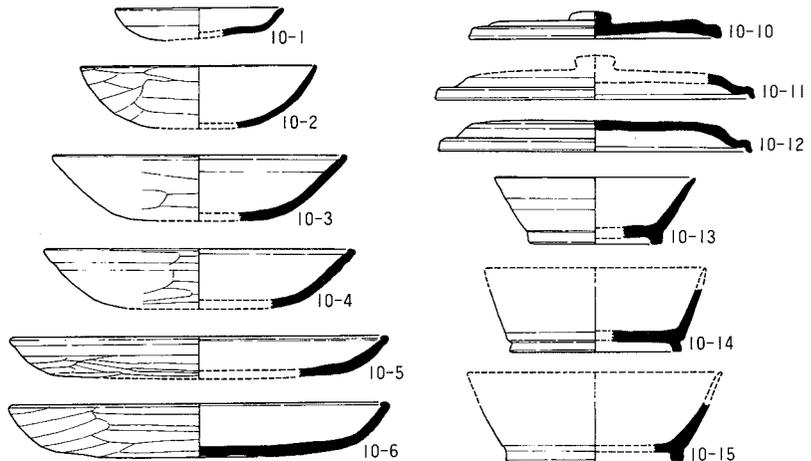
土師器の椀 A II（4-1～3）、皿 A I（4-6）、皿 A II（4-5）、杯 A（4-7）、高杯（4-4）、甕（4-8）などのほか須恵器の小片や土馬（4-193）がある。SD11A は改修されているため遺物は少ないが、ここから出土した土器群は四町地区から出土したものの中で最も古く、I 中に位置づけられるものである。

SB29 出土土器（挿図 37・写真図版 26・観察表 2）

土師器皿 A I（10-5、6）のほか、須恵器杯等があるが小片のため形態は不明である。SD11A 出土土器同様 I 中に位置づけられる。

SB31 出土土器（挿図 37・写真図版 26・観察表 2）

土師器椀 A I（10-2）、杯 A（10-4）、甕（10-8）、須恵器杯蓋（10-11、12）、杯 B（10-15）などがある。このほか小片の土器があるが、いずれも I 中に位置づけられる。



SB32 出土土器（挿図 37・写真図版 26・観察表 2）

土師器皿（10-1）、杯 A（10-3）、甕（10-9）、黒色土器杯 A（10-7）、須恵器杯蓋（10-

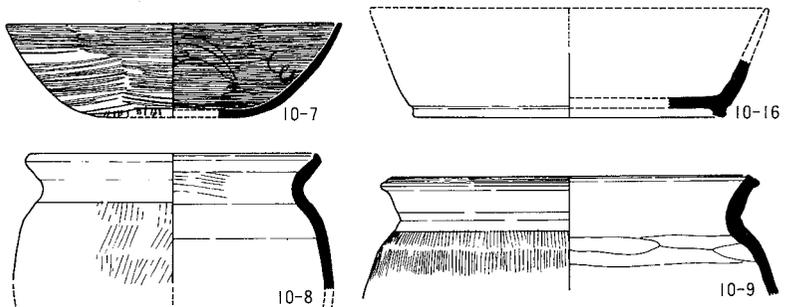


表 37 SB29・SB31・SB32 出土土器（1:4）

10)、杯B(10-13、14、16) などがある。10-1の皿は平安京ではあまり出土例をみないが、ほかの土器はI中の資料として一般的なものである。

SK14 出土土器 (図版8、25・写真図版27、28、66・観察表3)

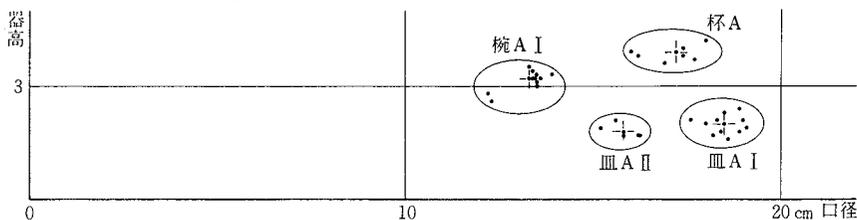
土師器、須恵器のほか、少量の黒色土器が出土した。総破片数11,227片の内容は表3のとおりである。接合の結果完全に復元できるものや、それに近いものが多い。型式はI中である。

土師器椀A I (4-17～22)は口径13.3cm、高さ3.2cm、外面の調整はすべてヘラケズリによるが、口縁端部の形態により単に丸くおさめるもの(a類)と、小さくつまみ上げるもの(b類)に分類できる。a類とb類の比率はほぼ2:1である。a類には口径がやや小さく、器壁の厚いものも多く、b類には口縁部外面のナデが残っているものが多い。杯A(4-23～27)は口径17.2cm、高さ3.9cm、外面の調整はすべてヘラケズリ。椀A I b類同様口縁部外面のナデが残っているものが多い。皿A I (4-13～16)は口径18.5cm、高さ2.0cm、4-16を除いてすべて外面をヘラケズリする。4-16は口縁端部の形態もほかと異なる。皿A II (4-9～12)は口径15.8cm、高さ1.8cm、外面の調整はすべてヘラケズリ。ほとんどのものが口縁端部を丸くおさめるが、わずかに肥厚するものもある。蓋は図示した大型のもの(4-28)以外にいくつかの法量のものがあるようだが、計測に耐えるものはない。観察できるものについては、すべて天井部にヘラミガキが施されている。杯Bについても4-29以外に数点出土したが、計測できるものはない。すべて外面にヘラミガキが認

表3 SK14 出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	10,201	95.1
	高杯・盤・鉢	46	0.4
	甕・釜・鍋	467	4.4
	その他	7	0.1
	不明	2	0
	小計	10,723	100
黒色土器	杯・椀・皿	6	75
	甕	2	25
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	8	100
須恵器	杯・椀・皿	175	35.5
	壺・瓶	113	22.9
	鉢	79	16.0
	甕・大型壺	98	19.9
	その他	7	1.4
	不明	21	4.3
	小計	493	100
緑釉陶器	杯・椀・皿	0	
	壺・瓶	0	
	鉢	0	
	その他	0	
	不明	0	
	小計	0	0
白色無釉陶器	杯・椀・皿	0	
	高杯	0	
	盤	0	
	その他	0	
	不明	0	
	小計	0	0
灰釉陶器	杯・椀・皿	0	0
	壺・瓶	3	100
	鉢	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	3	100
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	
	壺・瓶	0	
	鉢	0	
	その他	0	
	不明	0	
	小計	0	0
その他		0	0
総数		11,227	100

表4 SK14 土師器法量分布

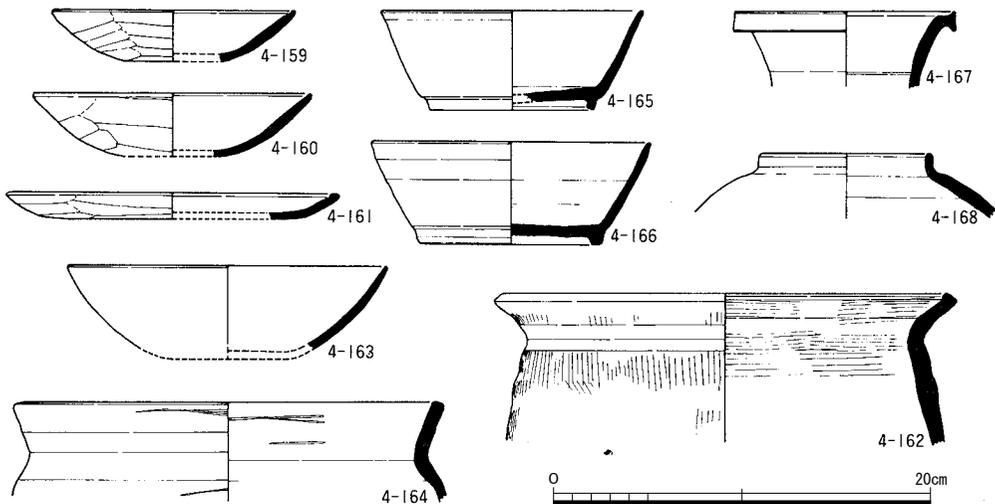


められる。高杯(4-33、34)には全形を知り得るものはないが、すべて杯部や裾部外面にヘラミガキを施す。脚部の成形には芯を用い、断面が7角形(3例)と、8角形(1例)のものがある。盤(4-30)は台部の破片で、平安京では類例の少ない資料である。甕(4-31、32)は小型食器類について破片数は多く、口縁部の破片からみるといくつかの法量に分かれるようだが、計測できる個体は少ない。外面の調整には、ハケメ、ハケメをナデ消す、タタキの三種がある。

須恵器杯蓋(4-41～44)には口径13.0cm、16.0cm、20.0cm前後のものがある。大半が天井部中央に偏平なツマミをもつが、ツマミの付かないものもわずかにある。杯A(4-45～47、50～52)は口径13.2cm、高さ3.4cm、杯Bと比べ軟質のものが多い。底部外面に墨書したもの(4-50～52)が3点ある。杯B(4-48、49)には全形を知り得るものはないが、高台径から二種に分けられる。壺には体部が筒型のもの(4-35)と、ほぼ球状のもの(4-40)がある。口縁部や底部の破片からみると、数量は後者の方が多く前者はわずかである。鉢には丸みのある体部と屈曲する口縁部をもつもの(4-37、38)と、体部が直線的に開くもの(4-39)がある。前者には大小の二種があり、小型のものはやや軟質である。須恵器にはこのほか、壺蓋(4-36)や甕片があるが、甕には計測に耐えるものはない。

四町地区整地層2出土土器(挿図38・観察表4)

型式はSD11A出土のもの同様に属すが、層的にはSD11AとSD11Bの間に位置づけられる土器群である。総破片数797片、種類別の比率は、土師器61.2%、黒色土器0.5%、



挿図38 四町地区整地層2出土土器(1:4)

須恵器 38.1%、灰釉陶器 0.1% である。土師器は椀 A I (4-159)、杯 A (4-160)、皿 A I (4-161)、甕 (4-162) などが出土している。黒色土器には杯 (4-163) や甕 (4-164) があるが、甕の口縁部の形態は通常平安京で出土するものとやや異なる。須恵器には杯 B (4-165、166)、壺 (4-167)、短頸壺 (4-168) のほか、甕片などがある。

SD11B 出土土器 (図版 9、10、25・写真図版 29～32、66・観察表 5)

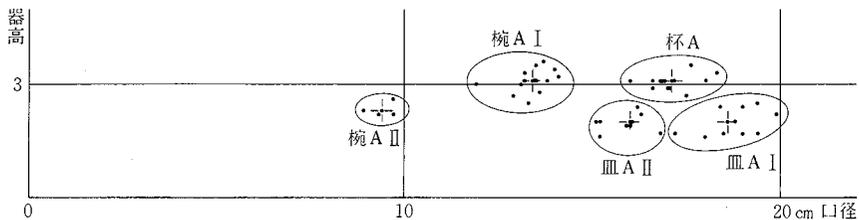
総破片数 5,069 片の土器が出土した。種類別の比率は表 5 のとおりである。型式は I 新に属する。

土師器椀 A I (4-60～64) は口径 13.4cm、高さ 3.1cm、外面の調整はすべてヘラケズリ。口縁形態には SK14 出土のものと同様、a 類と b 類の二種がある。椀 A II は口径 9.4cm、高さ 2.3cm、手法など法量以外の特徴は椀 A I と共通する。杯 A (4-65～69) は口径 17.1cm、高さ 3.1cm、SK14 のものに比べ、口縁部外面にナデが残り、体部が強く外傾するものが多い。皿 A I (4-57～59) は口径 18.6cm、高さ 2.0cm、外面の調整はオサエによるものもあるが、ほとんどヘラケズリで非常に浅いものが多い。皿 A II (4-54～56)、口径 16.0cm、高さ 2.0cm、口縁端部の形態が椀 A I の b 類と同様のものもある。外面の調整はすべてヘラケズリ。皿にはこのほか小型のもの (4-53) もわずかにある。蓋 (4-70、71) には大型、小型の二種あるが、全形は不明である。天井部外面にはすべてヘラミガキが認められる。杯 B (4-72～74) には口径 18.1cm、高さ 4.6cm、のほか大型のものがあるが小片のため計測できない。観察できるものは、す

表 5 SD11B 出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率 (%)
土師器	杯・椀・皿	3,588	90.0
	高杯・盤・鉢	62	1.6
	甕・釜・鉢	300	7.5
	その他	0	0
	不明	38	1.0
	小計	3,988	100.1
黒色土器	杯・椀・皿	45	59.2
	甕	29	38.2
	その他	1	1.3
	不明	1	1.3
	小計	76	100.0
須恵器	杯・椀・皿	206	23.9
	壺・瓶	138	16.0
	鉢	64	7.4
	甕・大型壺	430	50.0
	その他	2	0.2
	不明	21	2.4
	小計	861	99.9
緑釉陶器	杯・椀・皿	47	90.4
	壺・瓶	5	9.6
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	52	100.0
白色無釉陶器	杯・椀・皿	5	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	5	100.0
灰釉陶器	杯・椀・皿	44	57.1
	壺・瓶	31	40.3
	その他	1	1.3
	不明	1	1.3
	小計	77	100.0
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	0	0
その他	製塩土器	10	100.0
	小計	10	100.0
総数		5,069	100.0

表 6 SD11B 土師器法量分布



べて外面にヘラミガキを施す。高杯(4-77)には脚部の断面が7角形(5例)と8角形(1例)のものがある。杯部外面にはヘラミガキを施す。甕(4-75、76)には口径18.0cm前後のものが多い。外面の調整にはハケメ、ハケメをナデ消す、タタキの三種があり、ハケメのものが多い。 黒色土器には皿(4-78)、椀(4-79、80)、杯(4-81)、鉢(4-82、84)、短頸壺(4-83)がある。4-79、83はB類、ほかはすべてA類である。

須恵器杯蓋(4-99～102)には、口径10.0cm～18.9cmのものがあるが出土量が少なくここでは分類しない。杯A(4-105～109)には口径が14.0cm前後と18.0cm前後のものがある。軟質で灰白色のものが多く、底部外面に墨書されたもの(4-123～126)もある。杯B(4-103、104、127)には全形わかるものはない。杯A同様、底部外面に墨書されたもの(4-104、127)がある。椀(4-110)の形態は緑釉陶器椀に似るが、調整は粗い。須恵器にはこのほか、皿(4-112～114)、壺(4-118、119、122)、壺蓋(4-121)、鉢(4-116、117)、高杯(4-120)、甕(4-115)などがある。

緑釉陶器には椀(4-85～87、90)と壺(4-88、89)がある。4-90の内面には陰刻花文が施されている。

灰釉陶器には椀(4-92～96)、段皿(4-91)および小壺(4-98)、水瓶(4-97)などがある。椀皿類の底部の形態は、4-96がII Ba、ほかはすべてII Bb1である。

白色無釉陶器は出土したすべてが小片で、計測できるものはない。

SD12 出土土器(図版10・写真図版31、32・観察表6)

この土器群は主にSD11Bとの合流点近くから出土しており、層位関係からもSD11B出土のものとはほぼ同時期に位置づけられ、各土器の特徴も共通している。総破片数は4,155片で種類別の比率は表7のとおりであるが、計測できるものは少ない。土師器椀A I(4-131)、皿A I(4-134)、黒色土器杯(4-136)、須恵器皿(4-142)、緑釉陶器皿(4-143、144)、蓋(4-145)、三足盤(4-147)、灰釉陶器壺蓋(4-146)などを図示したが、ほかに須恵器の甕や無釉陶器の椀がある。4-142は緑釉陶器の皿に近似した形態をもつが、調整は粗く、ヘラミガキしない。4-144は底部外面に「大」と線刻されている。

SD13 出土土器(図版10、25・写真図版31、32・観察表7)

SD12 出土土器と同様に、SD11Bに対応する時期の土器群で、内容は表8のとおりである。土師器には椀A I(4-130)、杯A(4-132)、皿A I(4-133)、皿A II(4-150)、高杯(4-135)などがある。須恵器には杯蓋(4-137、138)杯A(4-139、140)、杯B(4-141)、や壺、鉢、甕などの破片がある。その他、緑釉陶器の皿(4-149)、浄瓶(4-148)や白色無釉陶器の椀

表7 SD12B 出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	2,290	79.2
	高杯・盤・鉢	101	3.5
	甗・釜・鍋	460	15.9
	その他	2	0.1
	不明	37	1.3
	小計	2,890	100.0
黒色土器	杯・椀・皿	50	67.6
	甗	24	32.4
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	74	100.0
須恵器	杯・椀・皿	182	18.2
	壺・瓶	107	10.7
	鉢	136	13.6
	甗・大型壺	564	56.3
	その他	0	0
	不明	12	1.2
	小計	1,001	100.0
緑釉陶器	杯・椀・皿	84	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	84	100.0
白色無釉陶器	杯・椀・皿	3	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	3	100.0
灰釉陶器	杯・椀・皿	65	66.3
	壺・瓶	31	31.6
	その他	1	1.0
	不明	1	1.0
	小計	98	99.9
輸入陶磁器	杯・椀・皿	0	
	壺・瓶	0	
	その他	0	
	不明	0	
	小計	0	0
その他	製塩土器	5	100.0
	小計	5	100.0
総数		4,155	100.1

表8 SD13B 出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・椀・皿	1,583	81.3
	高杯・盤・鉢	65	3.3
	甗・釜・鍋	289	14.9
	その他	2	0.1
	不明	7	0.4
	小計	1,946	100.0
黒色土器	杯・椀・皿	36	62.1
	甗	21	36.2
	その他	1	1.7
	不明	0	0
	小計	58	100.0
須恵器	杯・椀・皿	175	25.3
	壺・瓶	204	29.4
	鉢	57	8.2
	甗・大型壺	241	34.8
	その他	1	0.1
	不明	15	2.2
	小計	693	100.0
緑釉陶器	杯・椀・皿	35	97.2
	壺・瓶	1	2.8
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	36	100.0
白色無釉陶器	杯・椀・皿	23	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	23	100.0
灰釉陶器	杯・椀・皿	28	87.5
	壺・瓶	4	12.5
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	32	100.0
輸入陶磁器	杯・椀・皿	1	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	1	100.0
その他	製塩土器		
	小計		0
総数		2,789	99.9

などがある。4-148の外面および4-149の内面には陰刻花文が施されている。

SD19 出土土器（図版 11～17、25・挿図 39、40・写真図版 33～45、66～69・観察表 8）

この土器群はSB20 寄りにまとまって出土し、接合の結果、完全に復元できるものが多い。型式はI新に属する。総破片数および種類別の比率は表10のとおりである。

土師器椀A Iは口径14.0 cm、高さ3.2 cm、外面の調整はすべてヘラケズリである。口縁形態にはSK14などと同様にa類(5-25～28)、b類(5-29～38、56、57)があるが、b類の中にはケズリが粗く、口縁部がやや屈曲し、外面のナデが全周しているものがある(5-38)。

表9 SD19 土師器法量分布

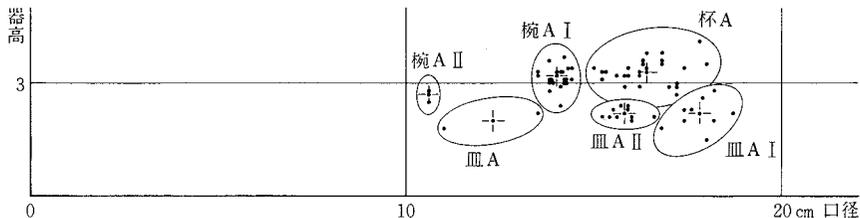


表 10 SD19 出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	32,891	88.6
	高杯・盤・鉢	696	1.9
	甕・釜・鍋	3,272	8.8
	その他	11	0
	不明	253	0.7
	小計	37,123	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	350	67.2
	甕	169	32.4
	その他	1	0.2
	不明	1	0.2
	小計	521	100.0
須恵器	杯・碗・皿	999	46.6
	壺・瓶	216	10.1
	鉢	357	16.6
	甕・大型壺	493	23.0
	その他	1	0
	不明	80	3.7
	小計	2,146	100.0
緑釉陶器	杯・碗・皿	766	99.4
	壺・瓶	1	0.1
	その他	0	0
	不明	4	0.5
	小計	771	100.0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	2	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	2	100.0
灰釉陶器	杯・碗・皿	338	93.9
	壺・瓶	22	6.1
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	360	100.0
輸入陶磁器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	1	100.0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	1	100.0
その他	製塩土器	1	100.0
	小計	1	100.0
総数		40,925	100.0

a 類に比べ、b 類の方が多い。碗 A II (5-23、24) 口径 10.6cm、高さ 2.7cm、法量以外の特徴は碗 A I と共通する。杯 A (5-39 ~ 55) は口径 16.4cm、高さ 3.3cm、外面の調整はオサエによるもの (5-54、55) もあるが大半がヘラケズリ。口縁部は碗 A の b 類と共通するものが多い。皿 A I (5-7、12 ~ 19) は口径 17.8 cm、高さ 2.2 cm、外面の調整はオサエの 5-19 を除き、すべてヘラケズリであるが、口縁部にナデの残るものも多い。皿 A II (5-3 ~ 6、8 ~ 10、21、22) は口径 15.8 cm、高さ 2.2 cm、外面はすべてヘラケズリで、口縁部にナデの残るものもある、口縁端部の形態は碗 A の a、b 類に共通するもののほかに、皿 A I と共通するもの (5-8 ~ 11) があるが、法量の点からここでは皿 A II に含めておく。皿にはこのほかに小型のもの (5-1、2) や大型のもの (5-20) があるが、量は少ない。また皿 A II の中には底部に小孔をあけたもの (焼成後) が 2 点ある。5-22 は中央に長方形の孔を一つ、5-21 は全面に円形の小孔を 24 箇所あける。蓋 (5-61 ~ 66) は口径 18.8 cm と 25.0 cm の 2 種類に分けることができる。天井部外面は丁寧にヘラケズリされているが、ヘラミガキはない。杯 B は法量により I (5-73)、II (5-69 ~ 72)、III (5-67、68) の 3 群に分けられる。杯 B I は口径 26.5cm、高さ 8.8cm、杯 B II は口径 23.3cm、高さ 6.1cm、杯 B III は口径 17.8cm、高さ 4.5cm、外面はヘラミガキを施す 5-70 を除きヘラケズリ。高杯 (5-78 ~ 86) は杯部の口径 32.4cm、高さ 25.2cm、ほかに口径 24.4cm の小型品が 1 点ある。杯部外面の調整は、脚の付け根から口縁端部までケズリのおよぶものと口縁部にナデを残すものがあり、後者にはヘラミガキを省略したものがある。ヘラミガキのないものとあるものの比は約 1:5 である。裾部の調整もナデだけのものとヘラミガキを施すものがあり、その比は 4:1 である。いずれも脚の成形には芯を用い、断面形は 7 角形 (6 例) と 8 角形 (1 例) がある。壺は口径 14.6cm のもの (5-75) と 5.8cm のもの (5-87、88) があり、後者には外面をヘラミガキするものとししないものがある。皿 B には口縁部が内弯気味のもの (5-76) とやや外反するもの (5-77) があるが、出土量は少ない。鉢 (5-74) の形態、法量は杯 B I に似るが、調整は粗く、外面に粘土紐の接合痕を残す。甕 (5-89 ~ 96) には全形のわかる

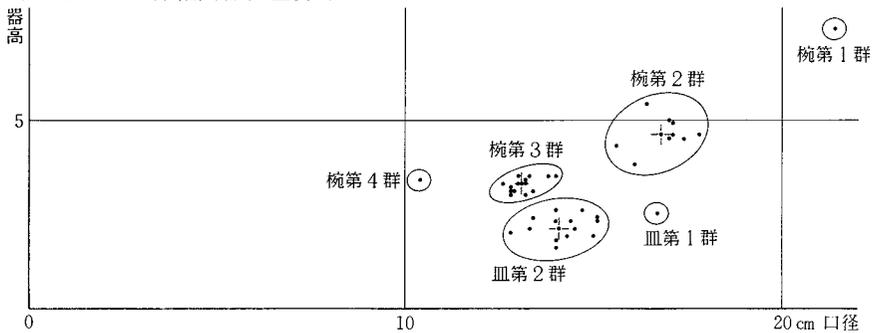
資料が少なく、法量分類はできなかったが、口径で少なくとも3群に分かれるようである。外面の調整にハケメとタタキの2種類があり、後者にも頸部にハケメをもつものが多い。内面に同心円状の当て具痕を残すものもある。

黒色土器には椀A(5-102～105)、椀B(5-99～101)、杯(5-106)、皿A(5-97)、皿B(5-98)、甕(5-107～112)のほか、大型の盤あるいは鉢と思われる破片が数点ある。椀、杯、皿の内面のミガキは密であるが、外面は粗いものやミガキを施さないものもある。皿Aを除いてすべてA類である。

須恵器杯蓋は口径により3群に分かれる。杯蓋Ⅰ(5-124～126、131、132)は口径19.1cm、杯蓋Ⅱ(5-121～123、127～130)は口径15.1cm、杯蓋Ⅲ(5-113～120)は口径11.9cmで、ⅠとⅡの中にはツマミの付かないもの(6例)がある。杯A(5-144～146)には口径13.7cm、高さ3.7cmとそれよりやや大型のものがある。底部だけの比較では杯Bよりやや多いが、全体のわかるものは少ない。杯Bは口径により3群に分かれ、蓋Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに対応する。Ⅰ(5-141～143)は口径18.3cm、高さ7.5cm、Ⅱ(5-134～140)は口径15.2cm、高さ5.3cm、Ⅲ(5-133)は口径10.9cm、高さ4.2cm。皿Aには口径15.0cm、高さ2.1cmのもの(5-147)と口径19.1cm、高さ1.7cmのもの(5-148、149、170)がある。5-170は底部内面に墨書されている。須恵器の小型器形にはこのほか、緑釉陶器の椀皿類に近似した形態をもつ一群(5-151～165)や皿B(5-150)がある。これらは底部外面に糸切りを残す例が多いが、ヘラケズリした後ヘラミガキを施すもの(5-164、165)もある。壺蓋(5-172～175)には口径12.7cmのものと同口径19.5cmの二種がある。後者は調整が粗い。壺(5-176～188)は5-183以外全形は不明である。卵形の体部をもつもの(5-176～182)がほとんどで、法量も数種あるが、小型のものが最も多い。底部は糸切り未調整のものと高台を付けるものが相半ばしている。壺類にはこのほか、短頸壺(5-187)や口頸部に沈線を巡らせ、肩部に櫛状の工具で施文したもの(5-184)が1点ある。鉢には口縁部が屈曲するもの(5-190、191)と、外方へ大きく開くもの(5-192)のほかに、口縁部が断面三角形の玉縁状で、小型のもの(5-189)がある。甕には全形のわかる資料はまったくない。口縁部2点(5-193、194)と高台の付く底部(5-195)を図示したが、5-195は大型の壺の可能性もある。大半が、外面に平行のタタキメ、内面に同心円状の当て具痕を残すが、丁寧にナデ調整されているものもある。

緑釉陶器には椀、皿、壺などがある。椀、皿類の底部の形態についてみると0A(3例)、ⅠA(40例)、ⅠBa(13例)、ⅠBb(6例)、ⅠC(2例)、ⅡBa(4例)、ⅡBb1(10例)、ⅡBb2(2例)、ⅡBb3(1例)となっている。Ⅰ類の高台をもつ椀には口径13.1cm、高さ3.2cm

表 11 SD19 緑釉陶器法量分布



のもの (5-196 ~ 207) と、口径 17.1cm、高さ 4.5cm のもの (5-208 ~ 210、212 ~ 216)、口径 21.4cm、高さ 7.4cm (5-211) の三種がある。Ⅱ類の碗 (5-232 ~ 238、248) には、口径 10.4cm、高さ 3.4 cm の小型のもの (5-232) と、口径 15.3 cm、高さ 4.3cm で体部、口縁部が直線的に開くもの (5-235、236)、口径 17.4cm、高さ 5.4 cm で口縁部が外反するもの (5-234) がある。Ⅰ類の高台をもつ皿には口径 14.0cm、高さ 2.2cm のもの (5-217 ~ 227) と、口径 15.0cm、高さ 1.9cm のもの (5-221) があり、口縁部は外反している。Ⅱ類の皿 (5-239 ~ 245) では口径 14.5 cm、高さ 2.2 cm のもの (5-239 ~ 242、251) と、口径 17.0cm、高さ 2.5cm のもの (5-243、244、249) があり、口縁部は上位で小さく外反する。ほかに、方形皿 (5-247) や段皿 (5-246) がある。高台Ⅰ類に属するものに対しⅡ類に属するものは調整が丁寧で、釉薬も厚くかけられているものが多い。内面に陰刻花文が施されているもの (5-249 ~ 251) が 3 例ある。碗皿類には、底部外面に「大」、「口」などと線刻されたものが 12 例ある。壺 (5-228、229) と小碗 (5-230)、無高台の皿 (5-231) の 4 点は、ヘラミガキせず、胎土も軟質で、釉色も異なるなど、ほかに比べやや異質な一群である。

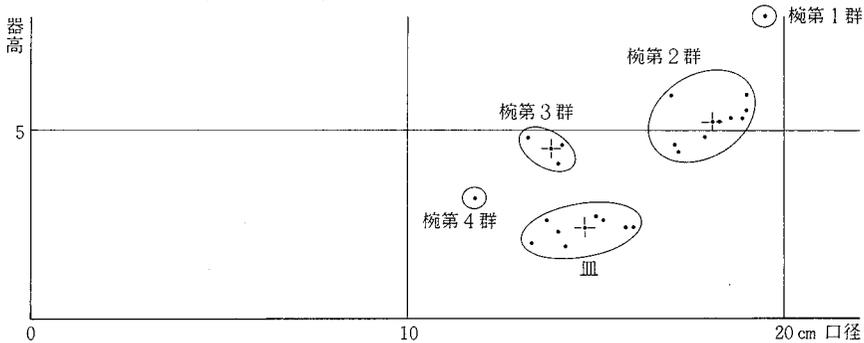
白色無釉陶器は皿 (5-293) が 1 点ある。直接接合しないがⅠAの底部と口縁部の破片が出土している。



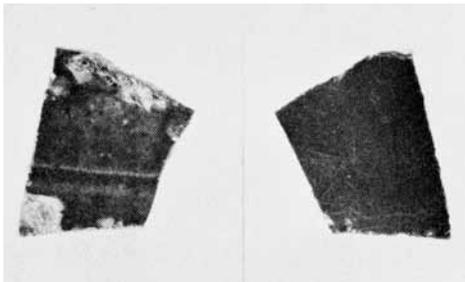
挿図 39 SD19 出土白色無釉陶器 (1:4)

灰釉陶器には碗、皿、段皿、耳皿、壺蓋などがある。碗、皿類の底部は、大半がⅡ Bb1 (29 例) で、ほかにはⅡ Bb2 (4 例) がある。碗には口縁部が外反する a 類 (5-263 ~ 272、287、288) と、口縁部が外反せずやや深い b 類 (5-273 ~ 277)、体部下半の張りが強く口縁部がわずかに外反する c 類 (5-278) に分けることができる。a 類は口径 18.3cm、高さ 5.1cm (5-265 ~ 272、287、288)、口径 14.0cm、高さ 4.1cm (5-264)、口径 11.8cm、高さ 3.2cm (5-263) の 3 群に分類できる。b 類には口径 13.6cm、高さ 4.7cm のもの (5-273 ~ 275) と、口径 19.5cm、高

表 12 SD19 灰釉陶器法量分布



さ 8.0cm のもの (5-276、277) の二種がある。c 類のうち全形のわかるものは図示した 1 点 (5-278) だけである。皿には口径 13.3cm、高さ 2.0cm で、口縁部が外反する a 類 (5-252) と、口径 13.7cm、高さ 2.6cm で、口縁部が外反しない b 類 (5-253) および、口径 15.1cm、高さ 2.4cm で、口縁部が内方へ折れ曲り小さく外反する c 類 (5-254 ~ 259、289、291) に分けることができる。段皿には口径 14.8cm、高さ 2.7cm (5-260)、口径 17.7cm、高さ 2.8cm のもの (5-261、262) があり、いずれも内面にのみ段を付ける。耳皿には大型 (5-279、280) のものと小型のもの (5-281、290) がある。腕皿の施釉部位は 5-278 は両面、ほかはすべて内面のみの



挿図 40 SD19 出土黒釉陶器

施釉である。壺蓋には口縁部が短く垂下するもの (5-283) と深いもの (5-284) がある。壺類は出土点数も少なく全形のわかるものはない。浄瓶 (5-282)、平瓶 (5-285) の口頸部、壺底部 (5-286) などを図示した。このほか、黒釉陶器の壺片 (挿図 40) が 1 点ある。

SD20 出土土器 (挿図 41・観察表 9)



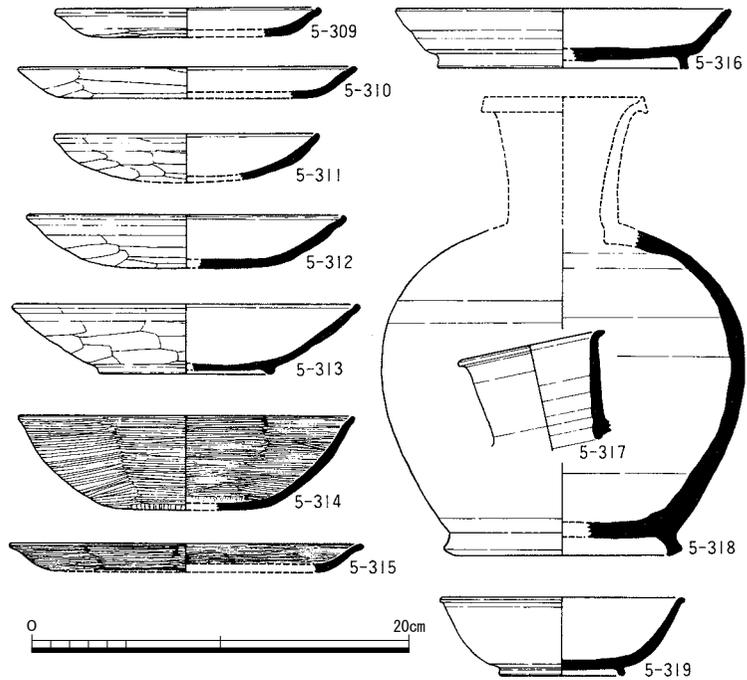
挿図 41 SD20・SD23 出土土器 (1:4)

土師器、須恵器、灰釉陶器などがある。いずれも小破片で形態のわかるものはないが、SD19 同様、I 新に属する。建物の時期を示す資料として須恵器鉢 (5-321) と灰釉陶器皿 (5-322) を図示した。

SD22 出土土器 (挿図 42・写真図版 45・観察表 10)

出土量は少ない。総破片数は 450 片で種類別の比率は、土師器 85.1%、黒色土器 1.8%、須恵器 10.2%、緑釉陶器 2.4%、灰釉陶器 0.4% である。計測可能な個体は少な

いが、土師器椀 A I (5-311)、杯 A (5-312)、皿 A I (5-310)、皿 A II (5-309)、杯 B (5-313)、黒色土器椀 A (5-314)、皿 A (5-315)、須恵器皿 B (5-316)、壺 (5-318)、平瓶 (5-317)、緑釉陶器椀 (5-319) を図示した。型式は I 新に属する。



SD23 出土土器 (挿図 41・観察表 11)

挿図 42 SD22 出土土器 (1:4)

土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土しているが、図示した灰釉陶器段皿 (5-320) を除きすべて細片で形態のわかるものはない。

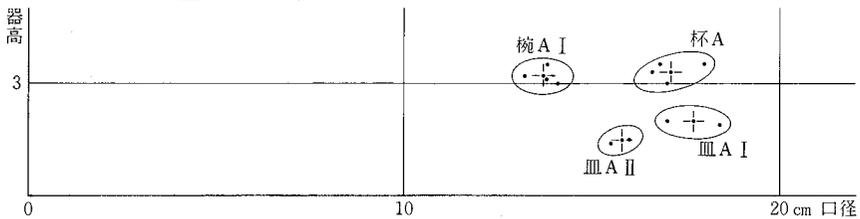
SE26 出土土器 (挿図 43・写真図版 46・観察表 12)

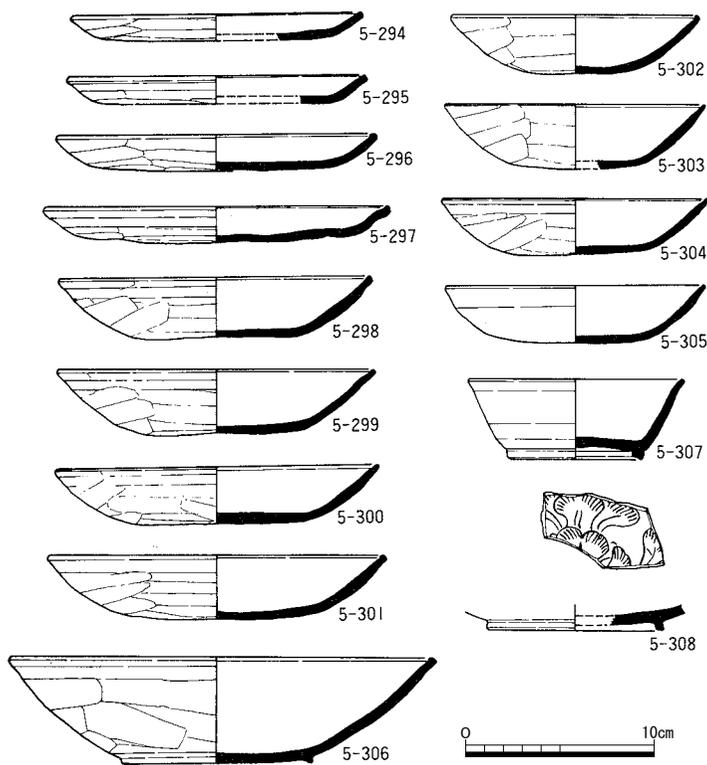
井戸底から重なって出土した。ほとんどのものが完全に復元でき、一時に投棄されたものと考えられる。内容は土師器椀 A I (5-302 ~ 305)、杯 A (5-298 ~ 301)、皿 A I (5-296、297)、皿 A II (5-294、295)、杯 B (5-306)、須恵器杯 B (5-307) のほか、陰刻花文を施した緑釉陶器の皿 (5-308) が 1 点ある。土師器の外面の調整は椀 A I の 1 点 (5-305) を除いてすべてヘラケズリである。口縁形態が a 類で外面にナデを残すものが多い。型式は I 新。

五町地区南部遺物包含層出土土器 (挿図 44・観察表 13)

土師器 (5-323)、黒色土器、須恵器 (5-324、325)、緑釉陶器 (5-326 ~ 328)、灰釉陶器

表 13 SE26 土師器法量分布





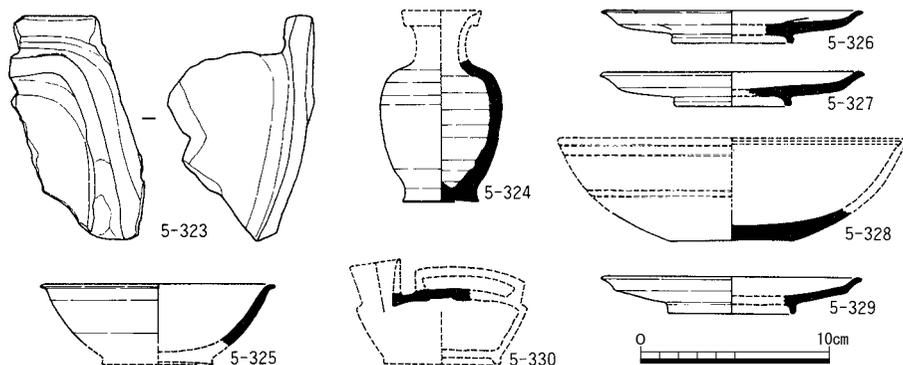
挿図 43 SE26 出土土器 (1:4)

(5-329、330) などがあるが、ほとんどが小片である。形態のわかるものはすべて I 新に属する。

SX44 出土土器 (図版 18・写真図版 48・観察表 14)

総破片数 689 片で種類別の比率は、土師器 83.5%、黒色土器 1.7%、須恵器 10.4%、緑釉陶器 1.9%、無釉陶器 1.5%、灰釉陶器 1.0% である。土師器を除いて形態のわかるものは少ない。I 新に属する。土師器碗 A I は口径 13.7cm、高さ 3.1cm で口縁端部の形態に a 類、

b 類の二種がある。外面の調整はオサエのもの (10-20～23) とヘラケズリするもの (10-24～27) がある。杯 A (10-29～33) は口径 17.4cm、高さ 3.3cm で、外面の調整はナデのものが 1 点 (10-29) あるほか、すべてヘラケズリである。ほとんどの個体が口縁部外面にナデを残す。皿 (10-17～19) は小破片のものばかりのため、法量のまとまりはつかめなかった。



挿図 44 五町地区南部遺物包含層出土土器 (1:4)

椀、杯、皿など小型器形の外面の調整比率はオサエによるものが32%、ケズリのものが68%である。その他土師器には杯B(10-28)、高杯(10-34)や甕片などがあるが、小片である。黒色土器には図示した椀(10-35)のほかに甕の小片がある。須恵器には杯(10-36)、鉢(10-37)のほか壺、甕の破片がある。

SK43 出土土器（図版18・写真図版47・観察表15）

土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、白色無釉陶器、灰釉陶器があるが総数は少ない。土師器には形態のわかるものがほとんどなく、杯A(10-38)、椀X(10-39)を図示するとどめた。須恵器には杯B(10-40)、壺(10-41～43)、甕(10-44)などがある。黒色土器はすべて小片で形態は不明である。緑釉陶器には椀(10-52、53)や香炉蓋(10-51)があり、10-51、53には陰刻花文が施されている。灰釉陶器は椀(10-47～49)、皿(10-45、46)、耳皿(10-50)などがある。10-50の底部外面には「海厨」と墨書されている。白色無釉陶器には皿(10-54)のほか椀の小片がある。I新に属する。

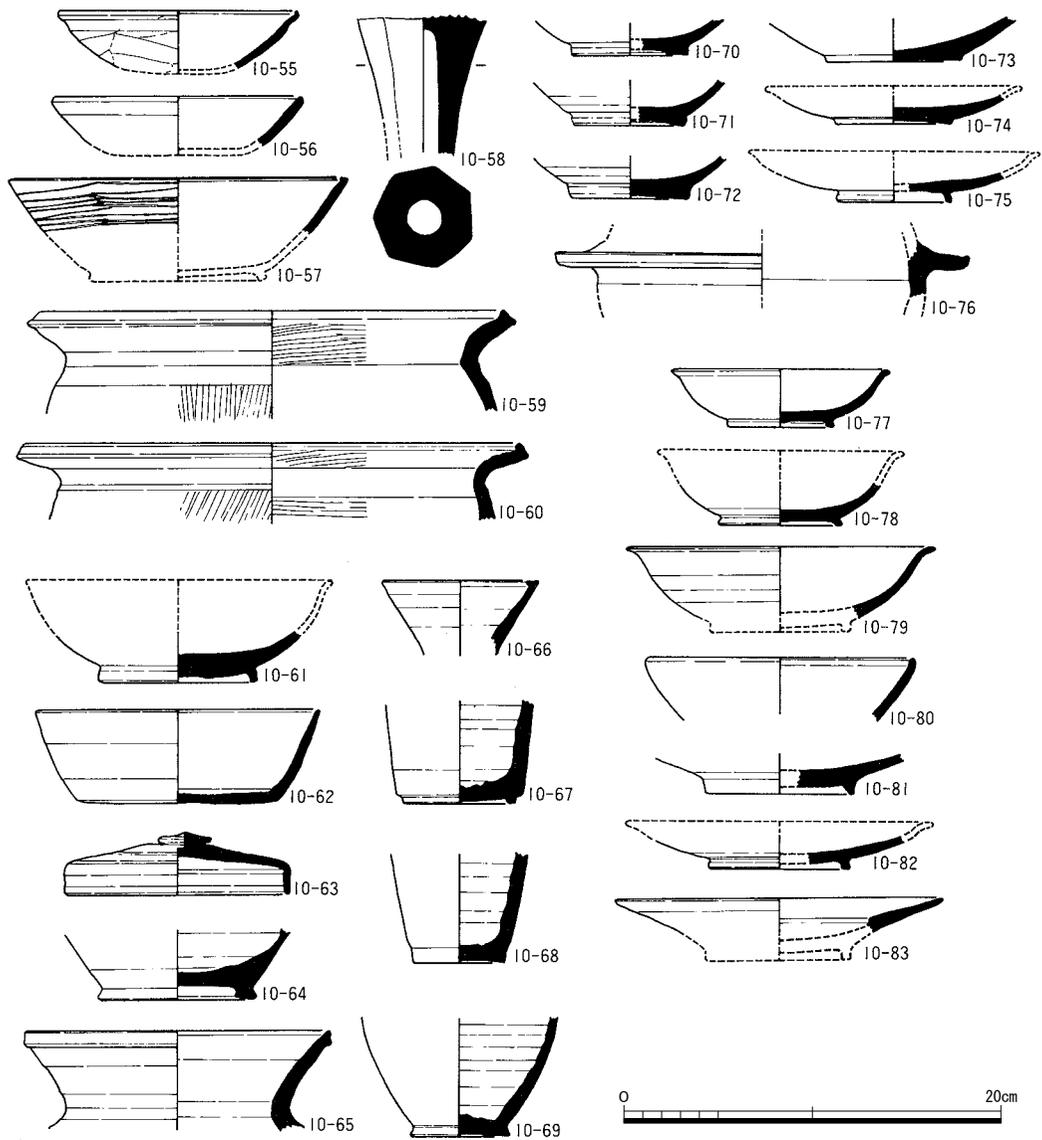
SD38 出土土器（挿図45・写真図版47・観察表16）

総破片数1,586片で種類別の比率は、土師器55.4%、黒色土器3.6%、須恵器27.6%、緑釉陶器5.6%、白色無釉陶器0.4%、灰釉陶器7.3%、輸入陶磁器0.1%である。I新を主体にI中～II古に属するものが出土している。

土師器には椀A(10-55、56)、杯B(10-57)、高杯(10-58)、甕(10-59、60)などがある。小型器形について外面の調整をみるとオサエとケズリの比率は72%と28%で、オサエのものが多い。黒色土器には椀、甕があるが小片のため図示できなかった。須恵器には杯A(10-62)、椀(10-61)、壺蓋(10-63)、壺(10-64、66～69)、甕(10-65)などがある。10-61は緑釉陶器の椀に近似した形態で、器面をヘラミガキする。緑釉陶器には椀(10-70～73)、皿(10-74、75)のほかに羽釜(10-76)があるが、全形のわかるものはない。白色無釉陶器には椀などがあるが計測できるものはない。灰釉陶器には椀(10-77～80)、皿(10-81、82)、段皿(10-83)などがある。輸入陶磁器には白磁と青磁があるが、小片のため形態は不明である。

十町地区包含層出土土器（図版19・挿図46・写真図版49、50・観察表17）

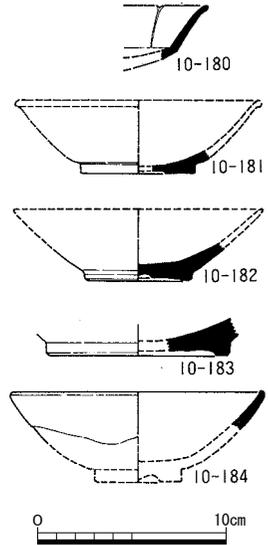
この土器群は調査区東部の遺構群を覆う遺物包含層から出土したもので、I中～II古までの各期のものを含んでいるが、主体はI新に属するものである。総破片数2,735片で種類別の比率は、土師器45.0%、黒色土器1.1%、須恵器39.3%、緑釉陶器6.1%、白色無釉陶器0.1%、灰釉陶器8.2%、輸入陶磁器0.2%である。



挿図 45 SD38 出土土器 (1:4)

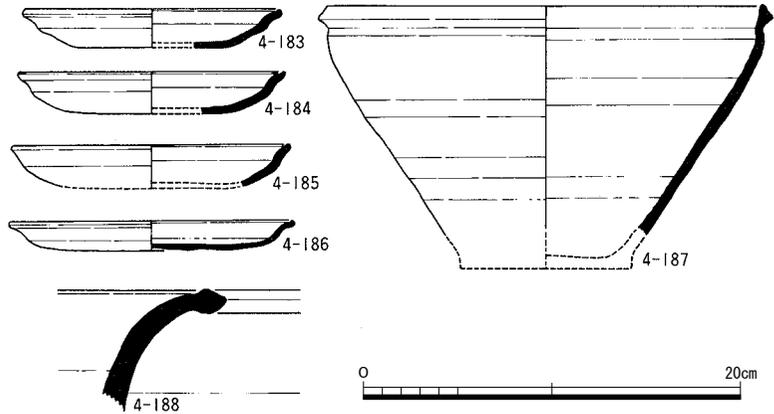
土師器には碗 A I (10-129 ~ 131)、杯 A(10-132)、皿 A(10-127、128)、杯 B(10-133)、甕 (10-134 ~ 136) などがあるが全形のわかるものは少ない。碗、杯、など小型器形の外面の調整は、ヘラケズリとオサエのものがあり、その比率は 22.8%と 77.2%である。黒色土器には形態のわかるものはない。須恵器は杯蓋 (10-140 ~ 142)、杯 B(10-147、148)、

皿 A(10-143、144) や緑釉陶器に近い形態の椀 (10-146)、皿 (10-145) のほか壺 (10-137 ~ 139)、鉢 (10-149、150) などが出土している。緑釉陶器には椀 (10-155 ~ 158)、皿 (10-153、154)、耳皿 (10-162)、香炉 (10-159、160)、唾壺 (10-161)、鉢 (10-163) などがある。椀、皿類の底部の形態には OA(5 例)、I A(34 例)、I Ba(28 例)、I Bb(20 例)、II Ba(3 例)、II Bb1(2 例)、II Bb2(2 例)、II Bb3(2 例) がある。10-151 の底部外面には「三」の線刻、10-152 の底部内面には陰刻花文が施されている。白色無釉陶器は椀 (10-179)、皿などがあるが、いずれも小片である。灰釉陶器には椀 (10-166 ~ 169)、皿 (10-164、165)、三足盤 (10-176)、蓋 (10-174、178)、壺蓋 (10-171 ~ 173)、香炉 (10-175)、唾壺 (10-177)、浄瓶 (10-170) などがある。椀、皿類の底部の形態には II Ba(14



挿図 46 十町地区遺物包含層出土輸入陶磁器 (1:4)

II Bd2(30 例)、II Bd3(1 例)、II Bb4(1 例)、II Be1(2 例)、II Be2(1 例)、II Bf(1 例) がある。輸入陶磁器には白磁椀 (10-188、181)、青磁椀 (10-182、183)、黄釉陶器椀 (10-184) がある。



挿図 47 SK18 出土土器 (1:4)

SK18 出土土器 (挿図 47・観察表 18)

土師器皿 A II (4-183 ~ 186) のほか、須恵器鉢 (4-187)、甕 (4-188) があるが、出土量は少ない。土師器皿は口径 14.5cm、高さ 1.9cm、外面の調整はオサエ。資料数が少なく時期を限定し難いが法量や口縁形態からみて II 古~中 に当てはまるものであろう。

SX47 出土土器 (挿図 48・写真図版 51・観察表 19)

総破片数 1,697 片で種類別の比率は、土師器 55.6%、黒色土器 5.4%、須恵器 29.2%、緑釉陶器 6.5%、白色無釉陶器 0.1%、灰釉陶器 3.0%、輸入陶磁器 0.2% である。II 古~

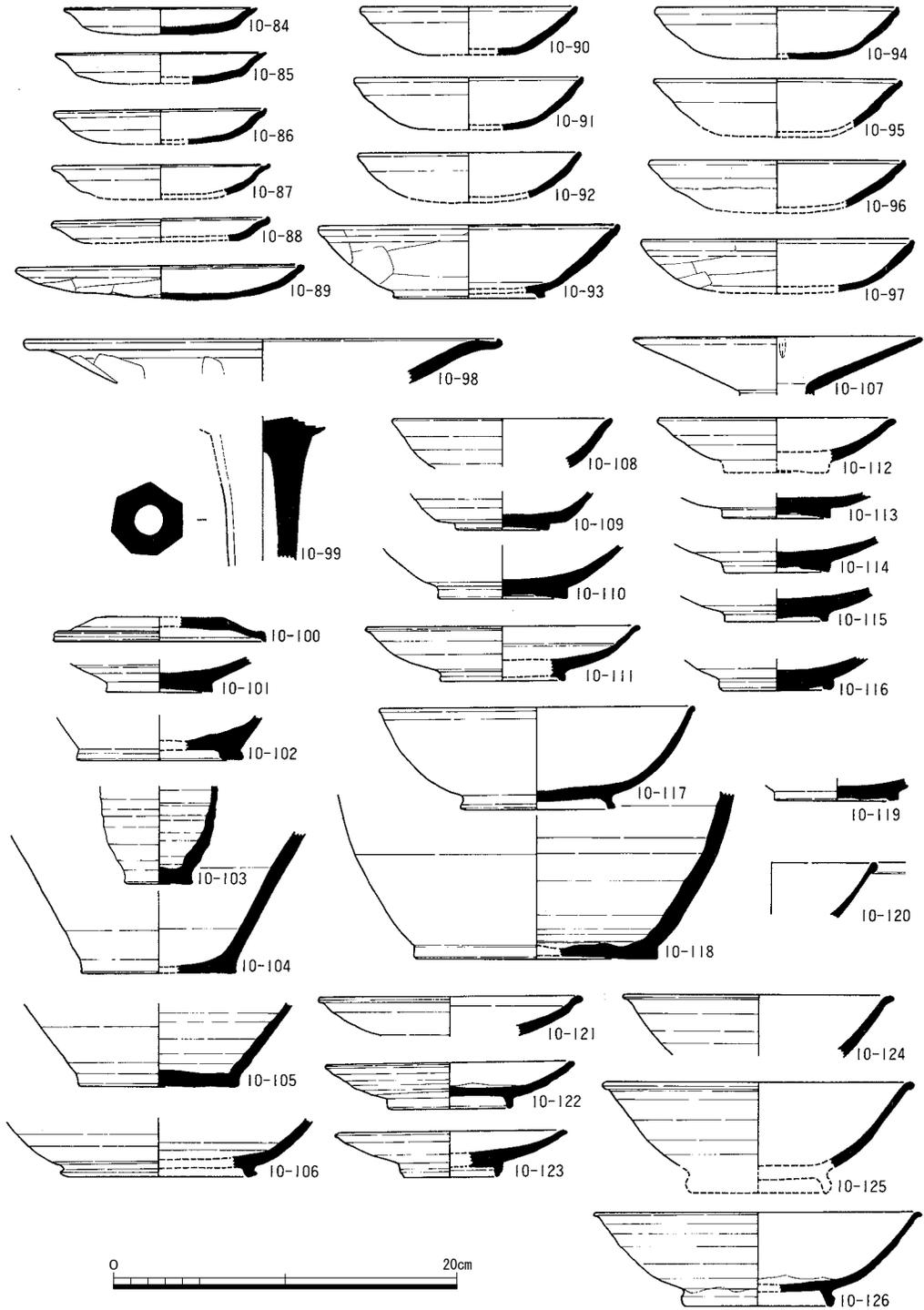


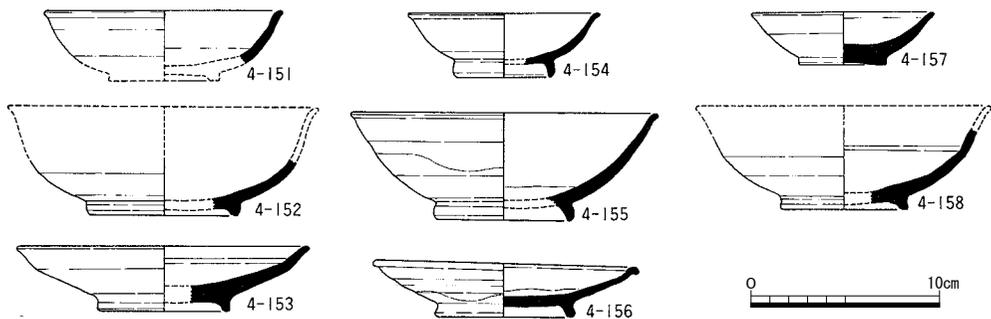
插图 48 SX47 出土土器 (1:4)

中に属する。

土師器碗 A(10-90～92) は口径 13.2cm、高さ 2.9 cm、外面の調整はすべてオサエ。杯 A(10-94～97) は、口径 15.0cm、高さ 3.0cm、外面の調整はヘラケズリのものが 1 点あるほか、すべてオサエである。皿 A(10-84～88) はこの型式に属する皿としては口径が小さい。外面の調整はオサエによるものが 9 割以上を占める。皿 A I (10-89) は図示したもの 1 点だけである。このほか土師器には杯 B(10-93)、高杯(10-98、99) や盤、甕などがある。黒色土器には碗、甕などがあるが、すべて小片で形態のわかるものはない。すべて A 類である。須恵器には、杯蓋(10-100)、皿(10-101)、碗(10-106)、壺(10-102、103)、鉢(10-104、105) などがある。緑釉陶器には碗(10-108～110、116、117)、皿(10-111～115)、壺(10-118)、唾壺(10-107) などがある。碗、皿類の高台形態には I A(2 例)、I Ba(5 例)、I Bb(3 例)、II Bb3(1 例) がある。白色無釉陶器には碗(10-119) のほか、皿の破片が出土している。灰釉陶器には、碗(10-124～126)、皿(10-121～123) などのほか、壺などがある。碗、皿類の底部形態には II Bb1(1 例)、II Bb4(1 例)、II Bd2(3 例)、II Bd4(1 例)、II Be2(1 例) がある。このほか白磁碗(10-120) がある。

SD11・12・13 最上層出土土器(挿図 49・観察表 20)

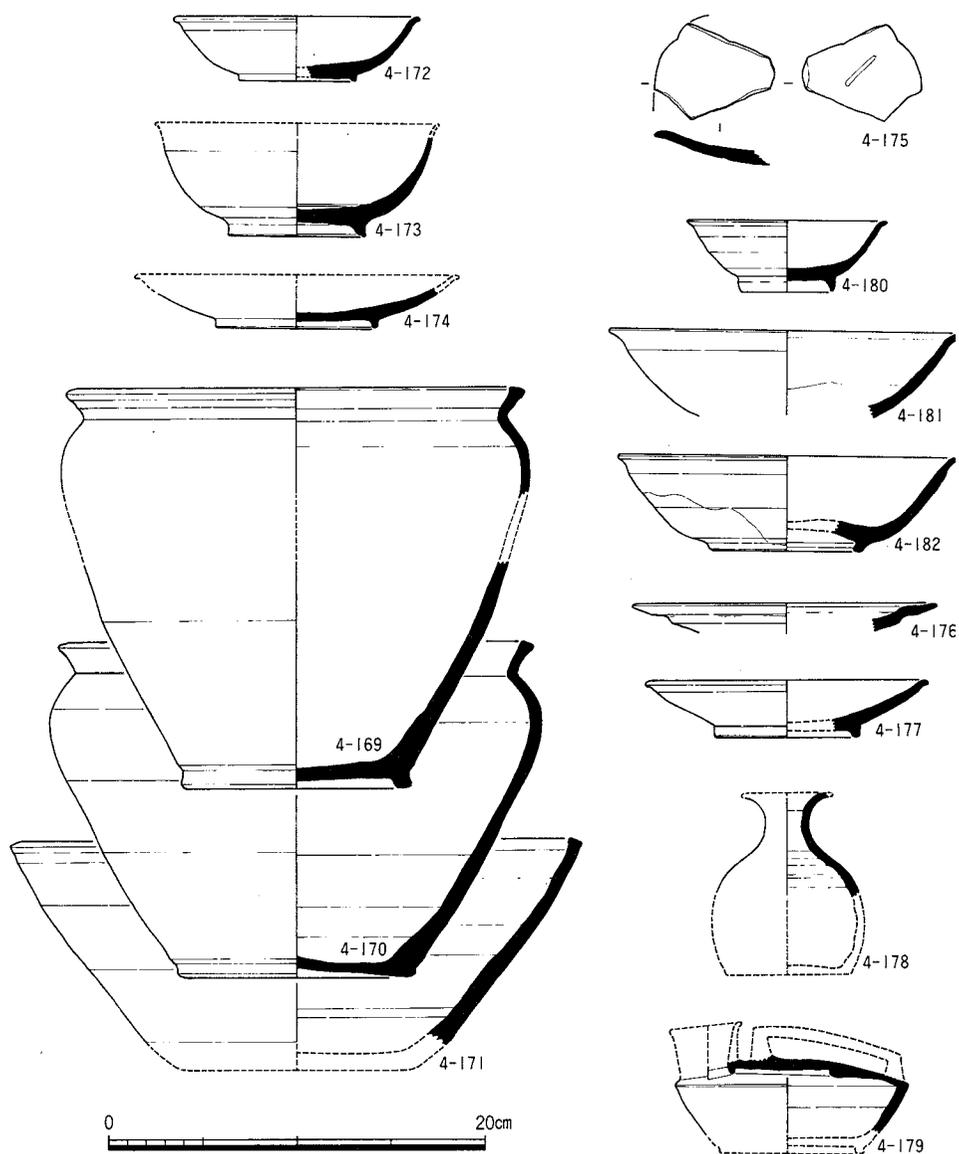
この土器群は溝埋没後の窪みに堆積した土層中から出土したもので、層的には整地層 3 出土土器に近い位置づけができるものである。土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがあるが、細片のため計測できるものは少ない。須恵器(4-151～153)、緑釉陶器(4-157、158)、灰釉陶器(4-154～156) の碗、皿類について図示した。



挿図 49 SD11・12・13 最上層出土土器(1:4)

四町地区整地層 3 出土土器(挿図 50・観察表 21)

この土層は SD11B、12B、13B などが廃絶した後の整地層で、出土土器には I 新から II 古に属するものがある。総破片数 10,830 片で種類別の比率は、土師器 44.2%、黒色土器 2.8%、



挿図 50 四町地区整地層 3 出土土器 (1:4)

須恵器 44.0%、緑釉陶器 3.6%、白色無釉陶器 1.3%、灰釉陶器 4.0%、輸入陶磁器 0.1% である。出土量はかなり多いが、ほとんどが小片で、特に土師器には接合後も計測可能な個体がなかった。須恵器鉢 (4-169 ~ 171)、緑釉陶器椀 (4-172、173)、皿 (4-174、175)、灰釉陶器椀 (4-180 ~ 182)、皿 (4-177)、段皿 (4-176)、平瓶 (4-179)、壺 (4-178) を図示した。

SX07 出土土器 (図版 20 ~ 25 ・ 挿図 51 ~ 55 ・ 写真図版 52 ~ 63、66、67 ・ 観察表 22)

総破片数 18, 142 片の II 古 ~ 中の土器類が出土した。種類別の比率は、表 14 のとおりである。

表 14 SX07 出土土器破片計数表

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	9,469	78.7
	高杯・盃・鉢	604	5.0
	甕・釜・鍋	1,895	15.7
	その他	10	0.1
	不明	61	0.5
	小計	12,039	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	1,011	82.3
	甕	215	17.5
	その他	3	0.2
	不明	0	0
	小計	1,229	100.0
須恵器	杯・碗・皿	299	10.1
	壺・瓶	813	27.6
	鉢	310	10.5
	甕・大型壺	1,451	49.3
	その他	7	0.2
	不明	66	2.2
	小計	2,946	99.9
緑釉陶器	杯・碗・皿	820	96.1
	壺	17	2.0
	その他	15	1.8
	不明	1	0.1
	小計	853	100.0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	101	100.0
	高杯	0	0
	盃	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	101	100.0
灰釉陶器	杯・碗・皿	693	74.4
	壺・瓶	238	25.6
	その他	17	1.8
	不明	0	0
	小計	931	100.0
輸入陶磁器	杯・碗・皿	35	94.6
	壺・瓶	1	2.7
	その他	1	2.7
	不明	0	0
	小計	37	100.0
その他	製塩土器	5	83.3
	その他	1	16.7
	小計	6	100.0
総数		18,142	100.0

土師器碗A(3-13～21)は口径13.8cm、高さ2.6cm、口縁が屈曲したものが多く、端部はすべてb類である。杯A(3-22～33)は口径15.6cm、高さ2.8cm、口縁は碗Aに共通する特徴をもつ。皿A(3-4～12)は口径14.1cm、高さ1.5cmのものが多く、ほかに口径12.1cm、高さ1.5cmのもの(3-2、3)がわずかにある。碗Aや杯A同様の口縁形態をもつ。このほか皿には小型のもの(3-1)が1点ある。これらの土師器小型器形の外面の調整は、杯Aにヘラケズリをもつものがわずかにあるほか、すべてオサエである。杯Bには、全形のわかるものは2点(3-35、36)だけで、法量のまとまりはつかめなかった。破片観察では、外面の手法にはヘラケズリするものとオサエのものがあり、ほぼ1:1の比率を示す。高杯の杯部(3-37～39)は口径25.3cmで、ヘラミガキを施したものはまったくなく、外面をヘラケズリするものとオサエで仕上げ

げるものがほぼ3:1の比率である。ヘラケズリも口縁端部までおよばないものが多い。脚(3-42～44)の成形にはすべて芯を用いている。脚断面形には六角形(1例)、七角形(13例)、八角形(7例)、九角形(2例)などがあり、ケズリが裾部の接合部にまでおよばず、脚中位から始まっているものもある。裾部(3-40、41)にもヘラミガキを施した例はなく、

表 15 SX07 土師器法量分布

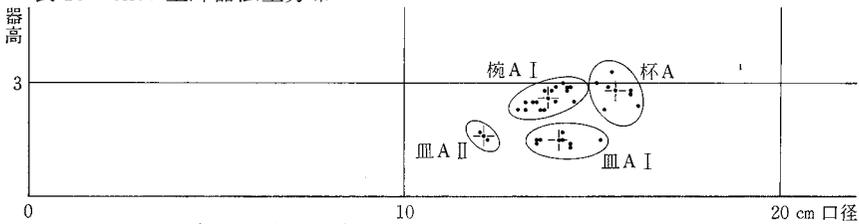
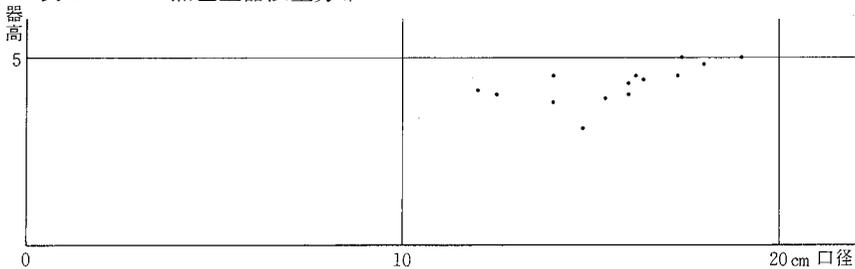


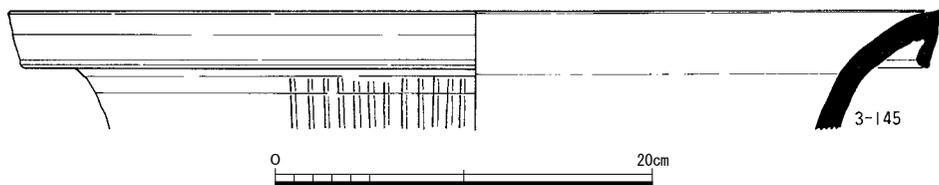
表 16 SX07 黒色土器法量分布



すべてナデ調整されている。盤には外方へ広がる高い高台がつくもの(3-45)と低い高台がつくもの(3-46)がある。甕には全形のわかる個体がほとんどないが、口縁形態や調整技法によりいくつかに分けることができる。外面の調整にはハケメ(3-47)、オサエ(3-51、52、54、55)、タタキがあり、タタキには平行のもの(3-48、49、53)と無文のもの(3-50)がある。外面オサエ調整の甕には、端部が肥厚せず短い口縁部をもつものが多い。

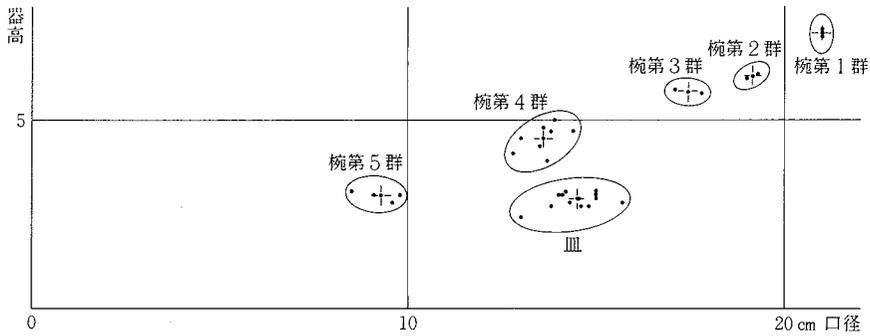
黒色土器には椀、甕、鉢などがある。椀には底径が大きく、やや浅めで丸味の少ない体部をもつもの(3-56～63)と、それに比べ体部の丸味が強く、底径の小さいもの(3-64～85)がある。また外面にヘラミガキを施すものと、ケズリだけのものがある。いずれも内面のヘラミガキは丁寧で、暗文を施すものも多い。また口縁端部内側に沈線を巡らせるものと沈線のないものがほぼ1:2の比率で見られる。甕には口径15.0cm前後のもの(3-86、88、89)と、19cm前後のもの(3-87)がある。前者の口縁部の形態には3種類ある。鉢には鉄鉢型のもの(3-90)や、体部がほぼ直立するもの(3-91～94)があり、後者の中には大型のものがある。このほか、黒色土器には器形不明の脚部(3-95、96)や把手(3-97)がある。

須恵器の小型器形には杯蓋(3-98)、皿A(3-99)、杯B(3-100、101)、杯A(3-102～104、109、110)などのほかに、体部のロクロ目が強く、調整が鉢と類似する椀(3-105～108)や、緑釉陶器の椀皿類に近似した形態をもつもの(3-111～121)が多くみられる。また杯Aの中にも調整が鉢類に共通するもの(3-109、110)がある。壺(3-122～134、347)には全形のわかる資料はほとんどない。卵形の体部をもつものが多いが、底部に高台を付けるものと付けないものがある。その比率はほぼ1:2で、高台を付けるものにも糸切り痕を残すものがある。底部の径から4群に分けることができる。鉢(3-135～139)は口縁形態により四種に分けることができ、端部の断面形が三角形を呈するもの(3-136)が多い。甕(3-140～145)には全形のわかるものがまったくない。主な口縁形態をもつものを図示したが、各形態に対応する体部の特徴はつかめなかった。

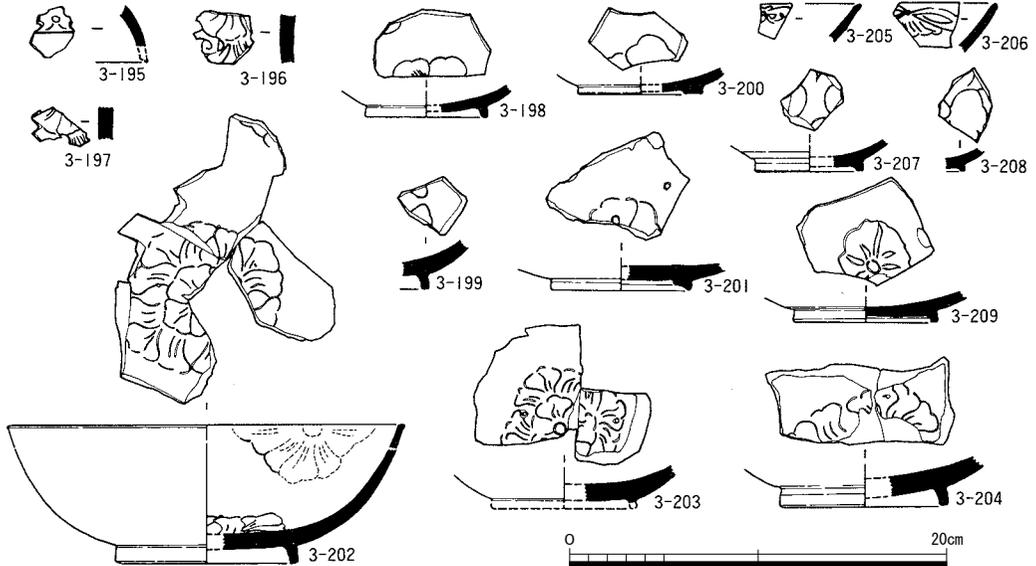


挿図 51 SX07 出土須恵器甕 (1:4)

表 17 SX07 緑釉陶器法量分布



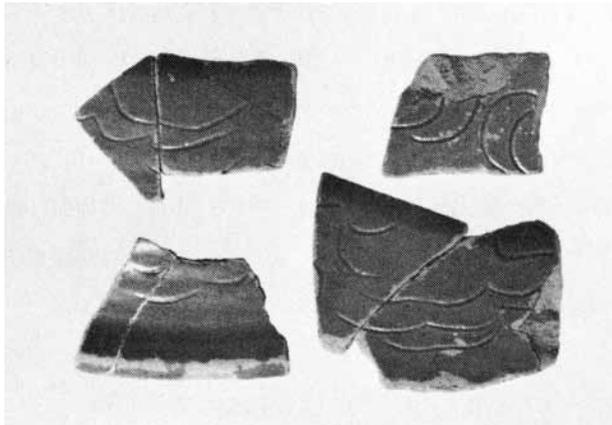
緑釉陶器の碗、皿類の高台形態には 0A(22 例)、I A(47 例)、I Ba(57 例)、I Bb(167 例)、II Ba(6 例)、II Bb1(20 例)、II Bb2(3 例)、II Bb3(43 例)、II Bb4(8 例)、II Bc2(4 例)がある。0 類の底部は耳皿(3-146、147)と口径 9.3cm、高さ 3.1cm の碗(3-148 ~ 151)に限られる。I 類の高台をもつ碗は口径 13.3cm、高さ 4.4cm(3-154、158、167、168)、口径 17.5cm、高さ 5.8cm(3-169、170)、口径 19.2cm、高さ 6.2cm(3-155、159)、口径 21.0cm、高さ 7.2cm(3-171)の 4 群に分けることができる。体部中位に稜が付くものや、口縁部を輪花にするものがある。II 類の高台をもつ碗には口径 14.0cm 前後(3-178 ~ 182、188、189)と、やや大きなもの(3-183、184)、さらに大型のもの(3-191、202)があるが、資料が少なく法量のまともりは不明である。体部は丸味をもつものばかりで底部内面に圈状



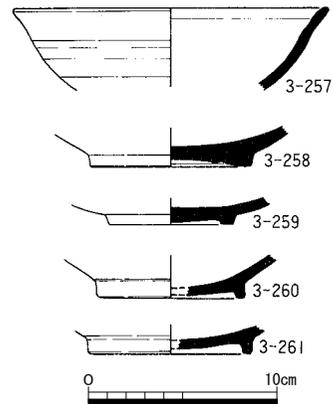
挿図 52 SX07 出土陰刻花文緑釉陶器 (1:4)

の凹線をもつものが多く、口縁部を輪花にするものもある。Ⅰ類の高台をもつ皿(3-152、153、156、157、160～166)は口径14.2cm、高さ2.8cmで椀同様体部中程に稜をもつものや、口縁部を輪花にするものがある。Ⅱ類の高台をもつ皿(3-172～177、190)は口径14.9cm、高さ2.8cm。体部中程に稜の付くものと、口縁部を輪花にしたものがそれぞれ1例ずつある。緑釉陶器にはこのほか、段皿(3-185～187)、三足盤(3-194)、唾壺(3-193)、香炉蓋(3-195～197)や壺片があり、椀、皿類や香炉、蓋(3-195～210)には陰刻花文を施した例がある。

白色無釉陶器には椀(3-257、258、260、261)、皿(3-259)がある。いずれも全形のわかるものはないが、高台の形態は緑釉陶器のⅠB類に共通する特徴をもつ。



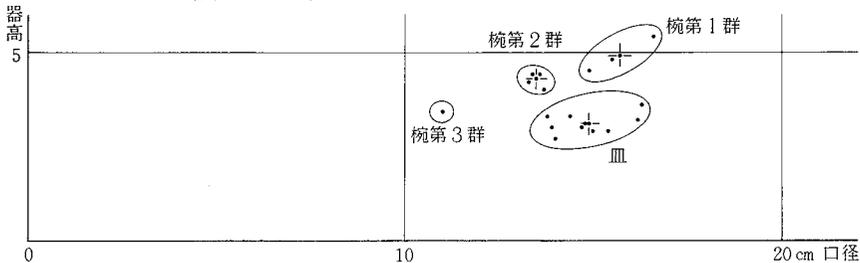
挿図 53 SX07 出土陰刻花文緑釉陶器蓋(3-21)



挿図 54 SX07 出土白色無釉陶器(1:4)

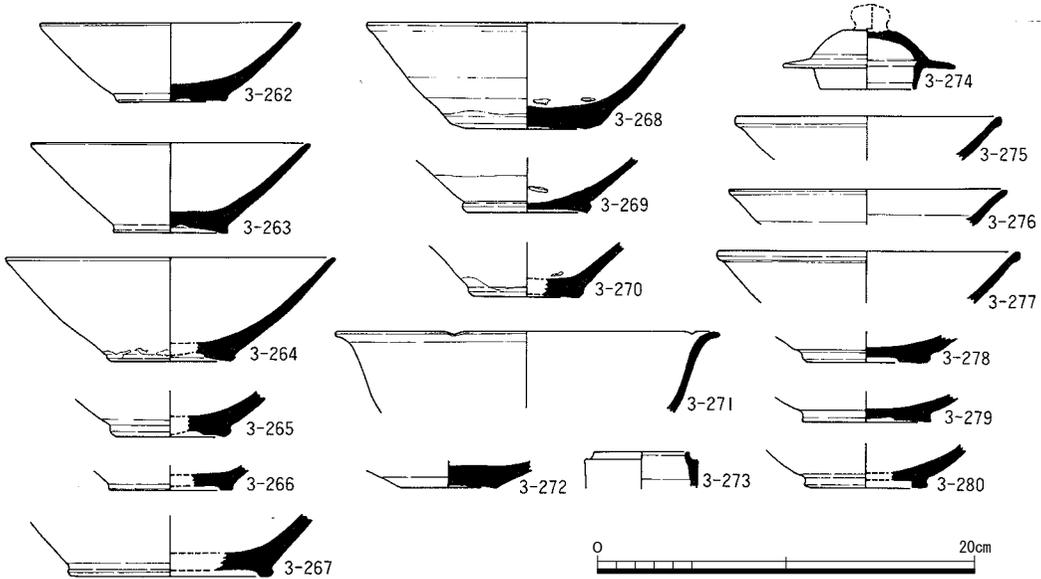
灰釉陶器には、椀、皿、耳皿(3-212、213)、段皿(3-227)、鉢、蓋、壺などがある。椀(228～240、256)には口径11.0cm、高さ3.4cm(3-229)、口径13.5cm、高さ4.3cm(3-230～232、256)、口径15.5cm、高さ5.0cm(3-233～235、238)、口径19.8cm(3-237)のもの、皿(214～226)には口径14.5cm、高さ2.7cm(3-214、215、217～221、225)口径16.2cm、高さ3.3cm(3-216、222、223)、口径19.0cm(3-224)のものがある。

表 18 SX07 灰釉陶器法量分布



これら碗、皿類の底部には0C(1例)、ⅡBa(8例)、ⅡBb1(17例)、ⅡBb2(8例)、ⅡBb3(19例)、ⅡBb4(2例)、ⅡBd1(9例)、ⅡBd2(263例)、ⅡBd3(2例)、ⅡBd4(4例)、ⅡBe1(4例)、ⅡBf(11例)があり、ⅡBd2が大多数を占める。鉢(3-241)は碗を大きくした形態である。外面の調整は粗い。蓋には天井部に段の付く特殊なもの(3-242)と壺蓋(3-243)がある。壺類(244～255)には短頸壺(3-244、248、249)、長頸瓶(3-251、252)や体部下半がふくらむ瓶(3-245～247、250)などもあるが、全形のわかるものはない。3-250には把手が付く。

輸入陶器には青磁碗(3-262～271)、皿(3-272)、合子(3-273)と白磁蓋(3-274)、碗(3-275、277～280)、皿(3-276)がある。出土量が少なく小片のものが多く、計測できたものについては図示した。青磁碗には体部が直線的に外上方へ開くものと口縁部が外反するものなどがある。白磁碗には口縁が玉縁状になるものと稜をもち外反するものがある。



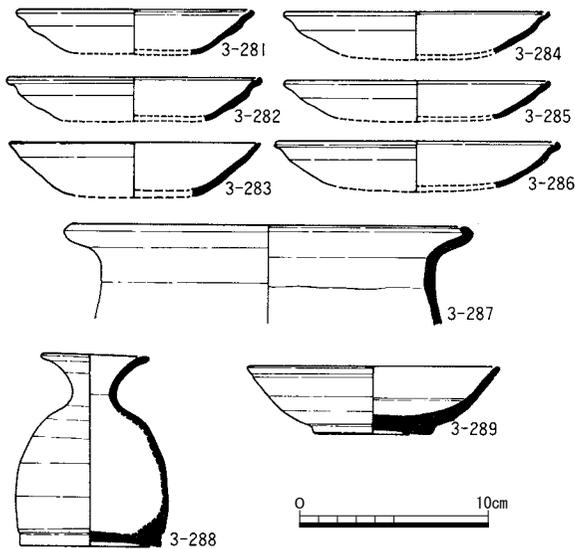
挿図 55 SX07 出土輸入陶磁器 (1:4)

SB01 出土土器 (挿図 56・写真図版 64・観察表 23)

土師器碗 A(3-281、282)、杯 A(3-284、285)、須恵器壺(3-288)、緑釉陶器碗(3-289)がある。出土量が少なく、小片が多いため法量のまとまりはつかめない。形態などの特徴は SX07 のものに共通する点が多い。

SB04 出土土器 (挿図 56・写真図版 64・観察表 23)

SB01 出土土器同様、量も少なく、小片が多い。土師器碗 A(3-283)、杯 A(3-286)、甕(3-287)

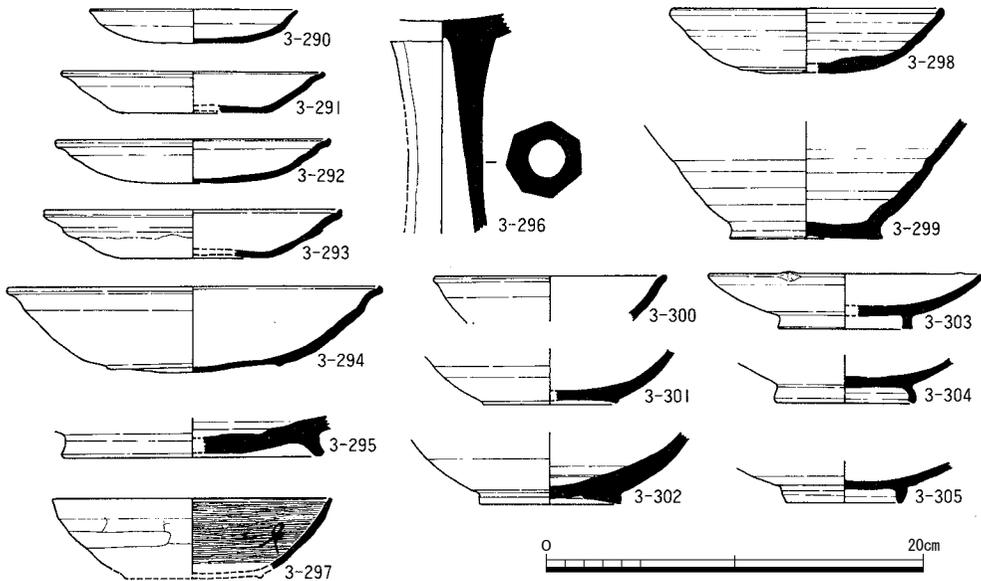


挿図 56 SB01・SB04 出土土器 (1:4)

を図示したが、このほかに須恵器や
黒色土器の小片がある。

SE6 出土土器 (挿図 57・写真図版
64・観察表 24)

土師器皿 (3-290)、椀 A (3-291、
292)、杯 A (3-293)、杯 B (3-294)、盤
(3-295)、高杯 (3-296)、黒色土器椀
(3-297)、須恵器杯 A (3-298)、鉢 (3-
299)、緑釉陶器椀 (3-300 ~ 302)、皿
(3-303、304)、灰釉陶器皿 (3-305)
などがある。形態や製作技法の特徴
は SX07 のものと似るが、層位的には
新しく位置づけられる土器群である。

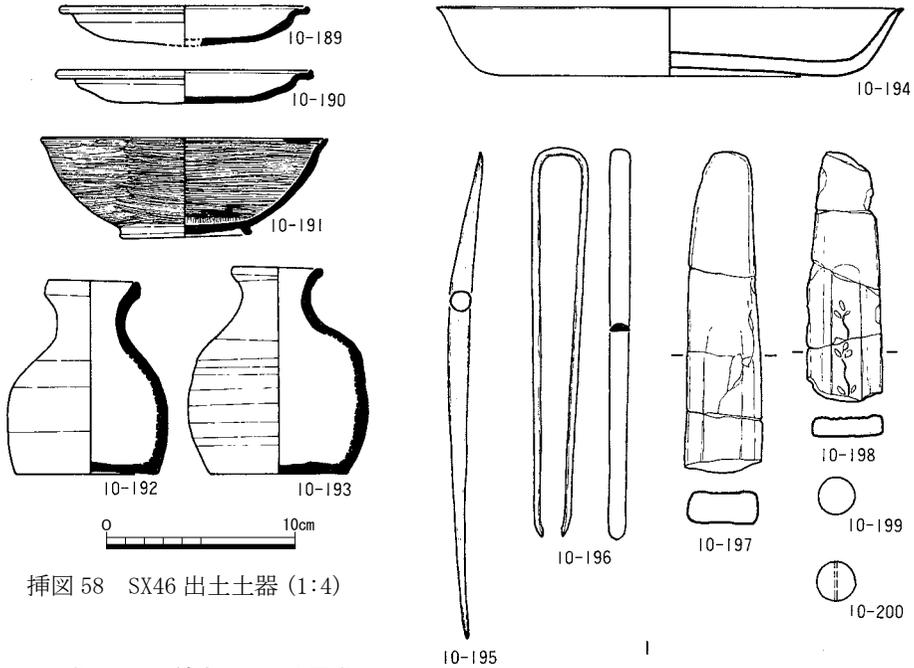


挿図 57 SE06 出土土器 (1:4)

C SX46 出土遺物 (挿図 58、59・写真図版 65・観察表 25)

土師器皿、黒色土器椀、須恵器壺、漆皮の折敷、漆器、木製品、銅製品、玉、墨がある。
棺蓋上に置かれていた土師器皿 (10-189、190) を除いて、ほかの遺物はすべて棺内に納め

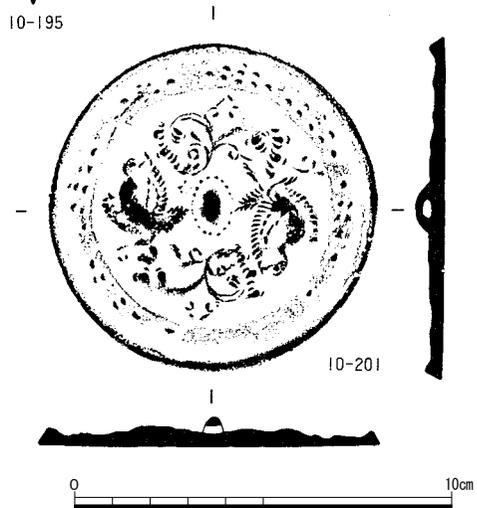
られていた。須恵器壺(10-192、193)は棺の北東および南西隅から、黒色土器碗(10-191)は南寄りから出土した。漆皮折敷は棺の北端部から出土したが、その上に漆器皿(10-194)、合子、串状木製品(10-195)、ピンセット状銅製品(毛抜き?)(10-196)、玉(10-199、200)、墨(10-197、198)が置かれていた。銅鏡(10-201)は棺中央部南寄りから出土した。



挿図 58 SX46 出土土器 (1:4)

D 墨書土器・線刻土器(図版 25・写真図版 66、67・表 19、20)

出土した土器類の中には文字や記号を墨書したものや、線刻したものがある。これらはSX07、SD11B、SD12B、SD13B、SK14、SD19、SK43から出土したが、なかでもSD19からは多くの線刻土器が出土した。



挿図 59 SX46 出土遺物 (1:2)

表 19 墨書土器一覽

番 号	内 容	土 器 の 種 類	記 載 位 置	出 土 遺 構
3-211	「×」	緑釉陶器 椀	底部外面	SX07
3-256	登	灰釉陶器 椀	〃	〃
3-33	不明	土師器 杯 A	底・体部外面	〃
4-50	「食官」「東」	須恵器 杯 A	底部外面	SK14
4-51	□	〃 〃	〃	〃
4-52	□	〃 〃	〃	〃
4-123	□	〃 〃	〃	SD11
4-124	「内」	〃 〃	体部外面	〃
4-125	「□盛」	〃 〃	底部外面	〃
4-126	「善亦尼公」「原□」「□	〃 〃	〃	〃
4-127	「上□□	〃 杯 B	〃	〃
4-128	「西」	〃 不明	〃	〃
4-129	□	〃 〃	〃	〃
4-150	□	土師器 皿	〃	SD13
5-56	□	土師器 椀 A	〃	SD19
5-57	□□	〃 〃	底・体部外面	〃
5-58	□	〃 不明	底部外面	〃
5-59	□利	〃 〃	底部内面	〃
5-60	□	〃 〃	底部外面	〃
5-166	「×」	須恵器 椀	〃	〃
5-167	□□」	〃 杯 B	〃	〃
5-168	「□	〃 杯 A	〃	〃
5-169	「西	〃 〃	〃	〃
5-170	「西	〃 皿	底部内面	〃
5-171	□	〃 杯 B	底部外面	〃
5-287	「上」	灰釉陶器 椀	〃	〃
5-289	「×」	〃 〃	〃	〃
5-290	□□	〃 皿	〃	〃

5-291	「一」	〃 耳皿	〃	〃
5-292	「院客」	〃 皿	〃	〃
5-293	□	〃 〃	〃	〃
10-50	「海厨」	〃 耳皿	〃	SK43

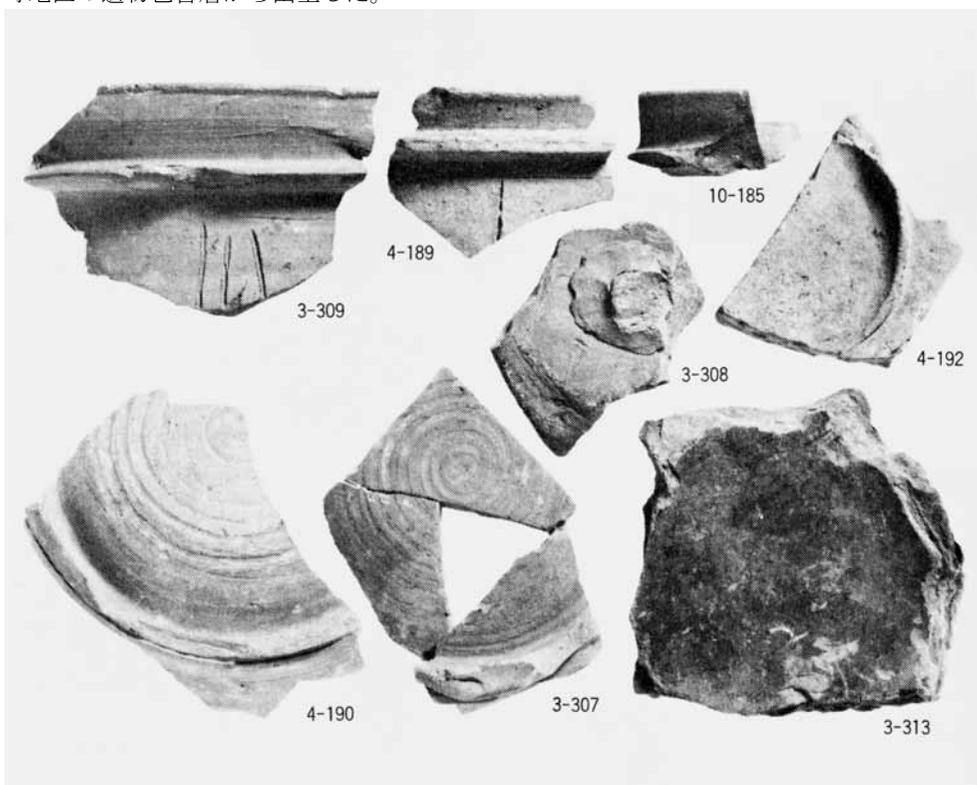
表 20 線刻土器一覽

番 号	内 容	器 種	器 形	線刻位置	出土遺構	備 考
3-71	「＊」	黒色土器	椀	底部外面	SX07	
3-83	「一」	〃	〃	〃	〃	
3-179	「一」	緑釉陶器	〃	〃	〃	焼成前の線刻
3-258	「一」	白色無釉陶器	〃	〃	〃	
4-20	「×」	土師器	椀 A	〃	SK14	
4-144	「大」	緑釉陶器	皿	〃	SD12	
5-56	「＊」	土師器	椀 A	〃	SD19	
5-86	「栗」	〃	高杯	杯部外面	〃	
5-198	「一」	緑釉陶器	椀	底部外面	〃	
5-199	「大十」	〃	〃	〃	〃	
5-201	「大 ×	〃	〃	〃	〃	
5-203	「大」	〃	〃	〃	〃	
5-204	「大」	〃	〃	〃	〃	
5-208	不 明	〃	〃	〃	〃	
5-215	「一」	〃	〃	〃	〃	
5-222	「大」	〃	皿	〃	〃	
5-223	「大口」	〃	〃	〃	〃	
5-224	不 明	〃	〃	〃	〃	
5-225	「大」	〃	〃	〃	〃	
5-226	「大」	〃	〃	〃	〃	
5-262	「万」	灰釉陶器	段皿	〃	〃	焼成前の線刻
10-47	不 明	〃	椀	〃	SK43	〃
10-146	「十」	須恵器	〃	〃	十町地区 包含層	〃
10-147	不 明	〃	杯 B	〃	〃	〃
10-151	「三」	緑釉陶器	不 明	〃	〃	〃
10-156	不 明	〃	椀	〃	〃	〃

E 硯（挿図 60、61・写真図版 68、69・観察表 26）

SK14、SD12、SX07、SD38、SD19、十町地区包含層から須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などの硯が出土した。このほかこれらの遺構からは、硯として使用された須恵器の杯蓋などが出土したが、これについては各土器群の観察表に示し、ここでは主に硯として製作されたものについて取り上げる。

須恵器の硯には円面硯（3-306、307、309、4-189～191、10-185）や風字硯（3-308、310、312、313、4-192）、硯部の形態は不明であるが底部に三脚の付くもの（3-311）のほか、壺の高台を外堤とし、体部の一部を残して打ち欠き、脚として利用したもの（5-333）がある。黒色土器の硯はSX07から2点出土した。風字硯の海部（3-314）およびやや大型の陸部の破片（3-315）がある。緑釉陶器の風字硯（3-316、317、5-331、332）はSX07とSD19から出土したが、いずれも陰刻花文が施されている。灰釉陶器の硯は脚部（10-186）が十町地区の遺物包含層から出土した。



挿図 60 硯

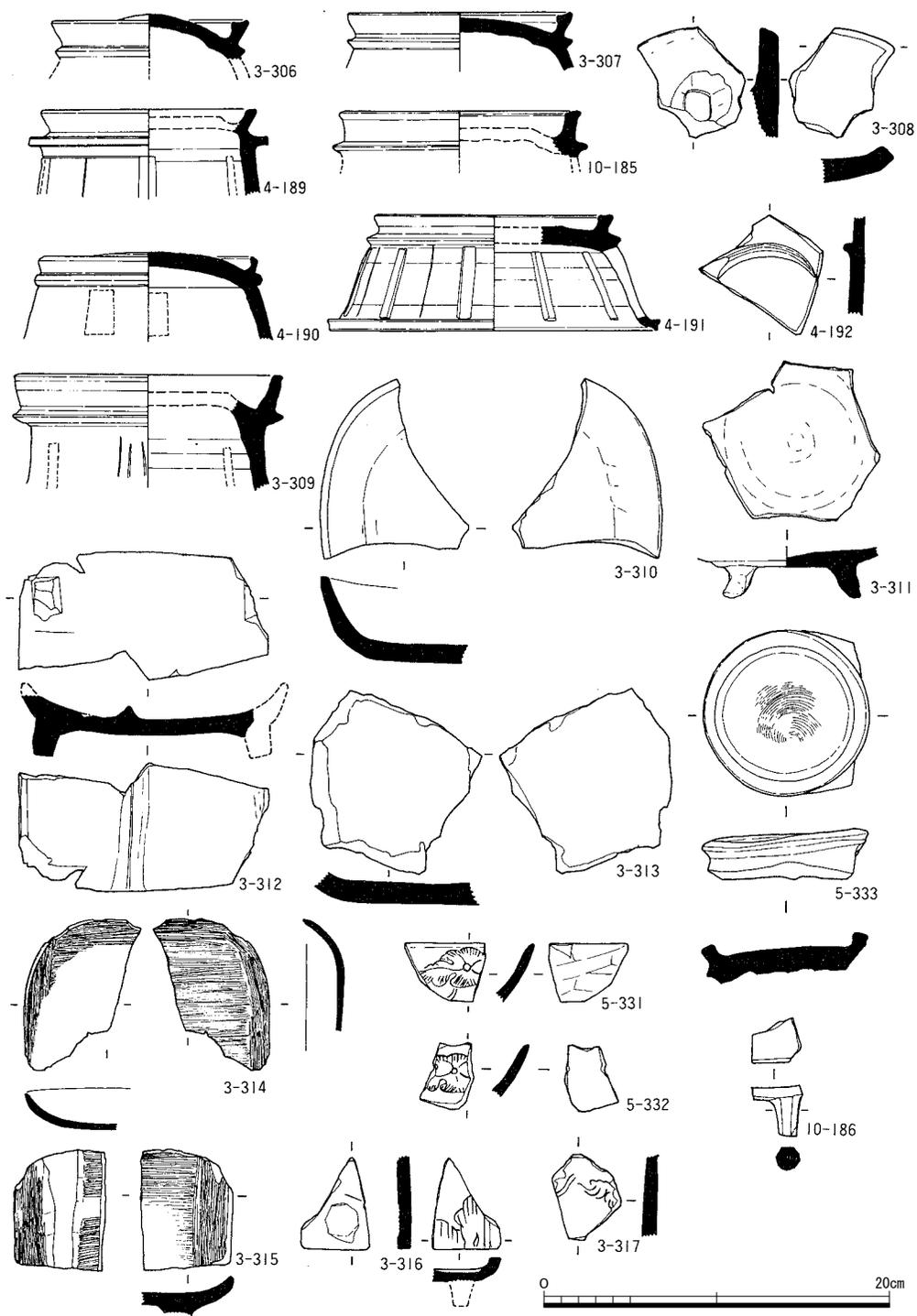
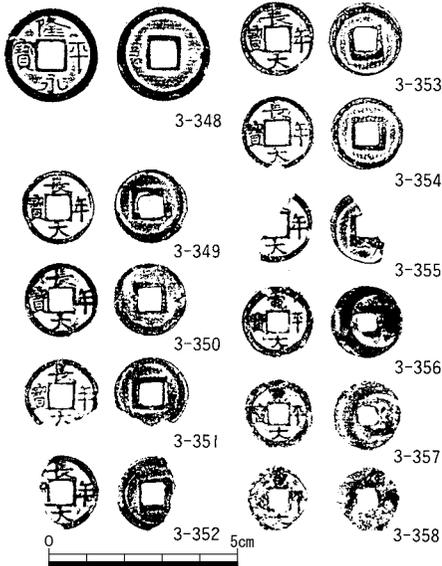


插图 61 碗 (1:4)

F その他の遺物（図版 26・挿図 62・写真図版 69、70・観察表 27、28、29）

その他の遺物には漆製品、金属製品、石製品、土製品などがあるが、いずれも出土量は少ない。漆製品には SX46 の漆器のほか、SE06 から皿、SD19 から漆膜の断片などが出土している。SE06 の皿の内面に朱漆が塗られているほかはすべて黒漆である。金属製品



挿図 62 SX07 出土銅銭 (1:2)

表 21 SX07 出土銅銭計数値

No.	種類	重量	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚
3-348	隆平永寶	2.78	24.81	20.61	8.84	6.92	1.76	0.86
3-349	長年永寶	1.24	19.42	16.63	7.85	6.13	1.22	0.50
3-350	〃	0.99	19.52	16.26	7.58	5.83	0.99	0.48
3-351	〃	(1.01)	(19.88)	(16.29)	7.73	5.95	1.31	0.48
3-352	〃	(0.89)	(20.04)	(16.13)	7.64	5.78	1.22	0.65
3-353	〃	1.43	19.62	16.60	7.50	5.76	1.26	0.61
3-354	〃	1.21	19.31	(16.51)	7.67	5.87	1.37	0.62
3-355	〃	(0.58)	-	-	(7.54)	(5.60)	1.29	0.51
3-356	寛平大寶	1.69	19.25	14.91	6.40	4.95	1.17	0.69
3-357	〃	1.61	18.56	14.52	6.53	4.68	1.44	1.17
3-358	〃	(0.87)	-	14.86	-	(4.85)	-	(1.08)

(重量はgその他はmm ()内は残存値)

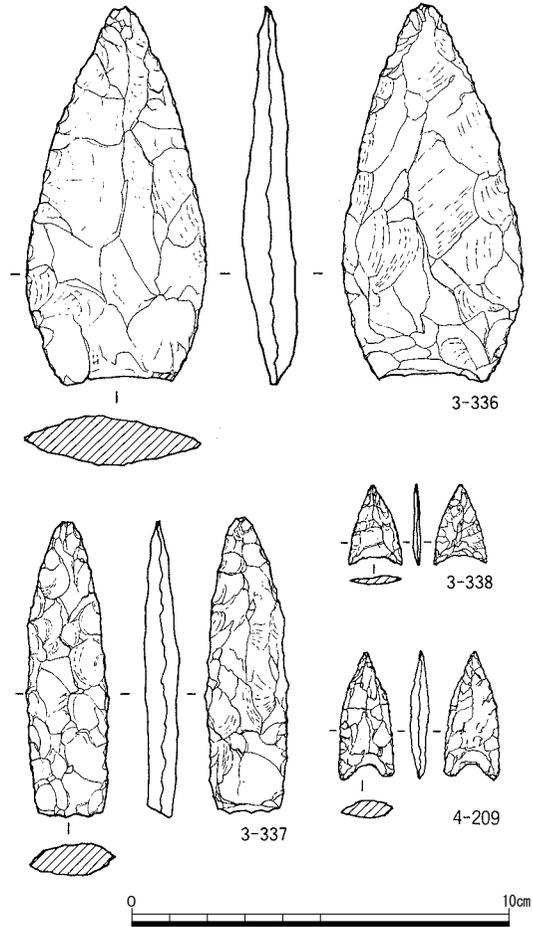
319) から出土した。土錘は四町地区整地層 1 の 1 点 (4-196) のほか、すべて SX07 からのもの (3-320 ~ 327) である。ミニチュアの鍋 (5-334) は SD19 から出土した。

2 平安時代以前の遺物

平安時代以前の遺物には、石器や土師器、須恵器など土器類のほか石製品がある。これらの遺物は十町地区の SD49 から出土したものを除き、すべて二次堆積土中から出土したもので量も少ない。

A 石器 (挿図 63・写真図版 79)

三町地区 SX07 の下層から尖頭器が 2 点 (3-336, 337)、石鎌が 1 点 (3-338)、四町地区の整地層 1 から石鎌が 1 点 (4-209) 出土している。3-336 は長さ 10.3cm、幅 4.6cm、厚さ 1.3cm、重量 55.0g、サヌカイト製。この尖頭器が出土した下層から火山灰 (A. T.) を検出したが、いずれも二次的な堆積で両者の関係は不明である。3-337 は基部が欠損している。残存長 7.9cm、幅 2.2cm、厚さ 0.9cm、重量 17.8g、暗灰色のチャート製。加工はあまり丁寧ではない。3-338 は長さ 2.2cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm、重量 0.5g、淡青灰色の透明感の強いチャート製。非常に丁寧に加工されている。4-209 は長さ 3.3cm、幅 1.45cm、厚さ 0.53cm、重量 2.4g、茶色のチャート製。加工はやや粗い。



挿図 63 石器 (1:2)

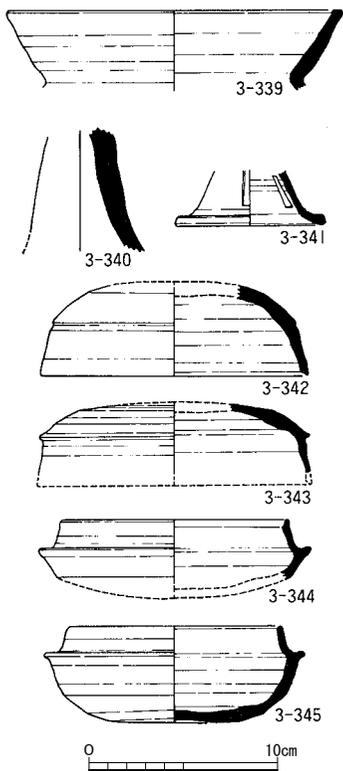
B 土器類

三町地区 SX07、SD09 の下層および十町地区 SD49、十二町地区 SX51 から古墳時代の土師器、須恵器が出土している。このうち SX51 出土のものは小片で形態も不明なためここでは三

町、十町地区のものについて述べる。

三町地区出土土器（挿図 64、観察表 30）

土師器甕（3-339）、高杯（3-340）、須恵器杯蓋（3-342、343）、杯身（3-344、345）、高杯（3-341）がある。いずれも二次堆積土中から出土したもので、3-345 以外は小片である。須恵器の



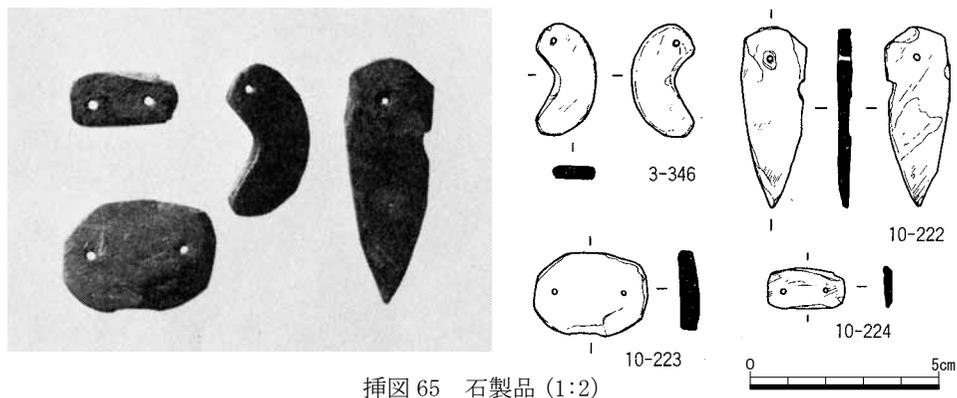
挿図 64 三町地区出土古墳時代の土器（1:4）

型式は陶邑^{註14} 0N46 に位置づけられる。

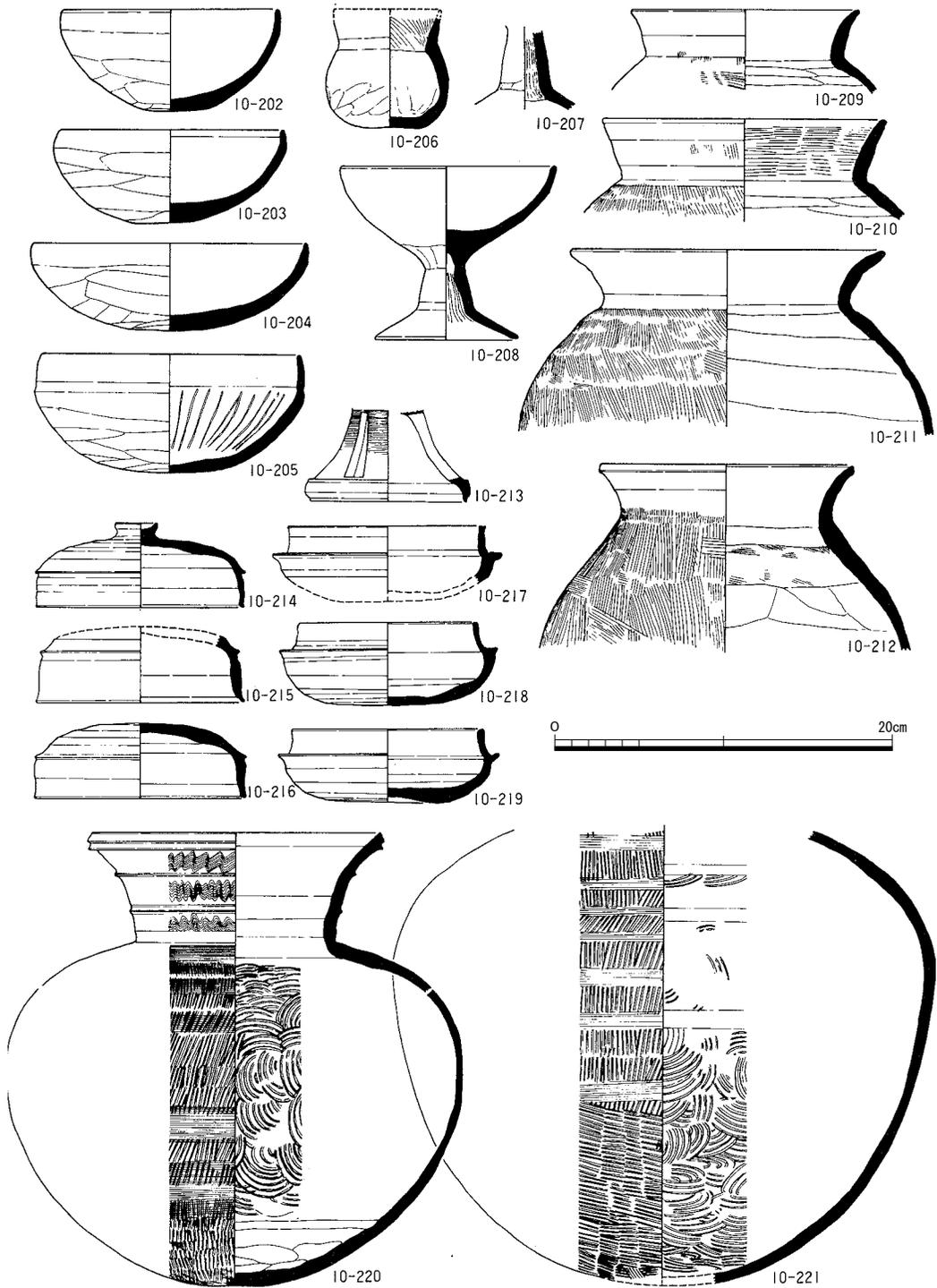
SD48 出土土器（挿図 66、写真図版 80、81・観察表 31）溝の上層部から石製模造品と共伴して出土したものである。土師器椀（10-202～205）、壺（10-206）、高杯（10-207、208）、甕（10-209～212）、須恵器杯蓋（10-215、216）、杯身（10-217～219）、高杯（10-213）、高杯蓋（10-214）、甕（10-220、221）などがあるが、土師器の鉢が最も多く、図示したもののほかに数個体分の破片がある。鉢には内面を丁寧にヘラミガキし、丹塗りを施したものもある。須恵器の型式は三町地区のものと同様、陶邑 0N46 に位置づけられる。

C 石製品（挿図 65）

三町地区 SX07 から 1 点（3-346）、十町地区 SD49 から 3 点（10-222～224）の石製模造品が出土している。いずれも滑石を粗く加工したものである。



挿図 65 石製品（1:2）



挿図 66 SD49 出土土器 (1:4)

3 平安時代後期以降の遺物

平安時代後期以降の遺物は主に土器類で、鎌倉から江戸時代にかけてのものがある。これらはいずれも明確な遺構に属するものではなく、各調査区とも主として旧耕土層やそれに伴う小溝群あるいは流路から出土した。このうち最も多いのは土師器の皿類で、そのほか瓦器椀、鍋、須恵器鉢、陶器、磁器類などがあるが、ほとんどが小片であり、磨滅したものが多いためここでは詳細にふれない。

註

- 1 『平安京古瓦図録』平安博物館 1977
- 2 藤沢一夫 堀江門也『岸部瓦窯跡発掘調査概報』1968
- 3 近藤喬一『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告第四輯 平安博物館 1978
- 4 『平城宮出土軒瓦形式一覧』奈良国立文化財研究所 1978
- 5 前掲書註1および、近藤喬一『瓦の範と瓦当』『考古学論考 - 小林行雄博士古希記念論文集』1982
- 6 平尾政幸 辻 純一「平安京左京二条二坊(2)高陽院跡」『平安京跡発掘調査概報』京都市文化観光局 1981 このほか左京九条二坊(1983年度調査)からも出土している。
- 7 中尾秀正「第3章乙訓寺の瓦」『長岡京の古瓦聚成』向日市教育委員会 1987
- 8 田辺昭三 吉川義彦編『平安京跡発掘調査報告 - 左京四条一坊』平安京調査会 1975
- 9 永田信一「朱雀院跡発掘調査概要」『平安京研究』平安京調査会 1974
- 10 『奈良国立文化財研究所基準資料V』奈良国立文化財研究所 1977
- 11 註10に同じ。
- 12 冷然院跡から出土した緑釉陶器の蓋に同じヘラ記号をもつものがある。上村和直 吉崎 伸「左京二条二坊(2)」『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和57年度』京都市埋蔵文化財研究所 1984
- 13 伝世の漆皮製品には折敷の例はほとんどなく、箱とした方が妥当と思われるが、蓋が伴わなかったため、ここでは一応折敷と呼称しておく。なおこの遺物は胎の皮革がほとんど残存しておらず、漆膜も細片になっているため復元に手間取り、今回は掲載できなかった。
- 14 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981

第IV章 自然遺物

1 右京三条三坊出土自然遺物

三町地区 SE06、SD09、四町地区 SD11B の3箇所から採取した土壌を、1mmメッシュのふるいで水洗選別した結果、多量の植物、昆虫遺体などを採取した。採取資料の内容の概略は以下のとおりである。このうち特に資料が豊富で分析の進んだ植物遺体をもとに調査地付近の景観や土地利用について検討する。

SE06 採取した土壌は約20ℓである。木本19科24属28種、種実数344.5個、草本30科44属59種、種実数10,996個、その他に魚の骨、昆虫遺体を採取した。

SD09 採取した土壌は約4ℓである。木本18科21属27種、種実数86個、草本17科21属23種、種実数173個、その他に魚の歯、ウロコ、昆虫遺体を採取した。

SD11B 採取した土壌は約4ℓである。木本12科14属18種、種実数98個、草本26科32属43種、種実数2,633個を採取した。また発掘調査中にモモの核その他が採集されている。これは水洗選別によるものではないがあわせて掲載する。その他に魚の歯、昆虫遺体を採取した。

A 植物遺体（写真図版73～77）

分析の結果、49科75属98種（科ないし属までの同定のものも1種類として数えた）の植物を同定した。^{註1}以下、木本、草本の順に記述する。

木 本 22科29属37種の種実、総苞、葉を同定した。科、属、種のそれぞれのレベルまで同定できたものについて、表22に示す。検出した種実類の大部分はすべて完熟したものである。ナラガシワやアカガシ亜属の総苞には脆弱で水洗の際に壊れたものがある。カヤ、オニグルミは最初から破片で焼け焦げがある。ハシバミ、シイ属の果皮は最初から破片である。木本種実の分析結果には栽培植物とナッツ類を中心とする食品として利用価値が高いもの（7科8属11種－表26）と、食品としての利用価値のまったくないかあるいは少ないもの（18科22属25種－表24からバラ科の一部を除いたもの）が含まれている。

草 本 31科46属61種を同定した。^{註2}科、属、種のそれぞれのレベルまで同定できたものについて、表23に示す。検出した種実は木本と同様に大部分完熟しているが、ソバのように大型で脆弱な果実には水洗の際に壊れたものがある。草本種実では木本と違

い、科ないし属レベルでの同定で終わっているものも多い。たとえばイヌビユとアカザのように種子の大きさや形態の似通ったものはどちらとも判断せず、タデ属、ナス属、カヤツリグサ属などは種名までの同定ができず細分していないものもある。ナデシコ科のハコベの仲間は形態から分類したが、計数の中には同定が不十分なものが含まれている。種実

表 22 右京三条三坊出土木本種実計数表

No.	和名	科名	部位	SE06	SD09	SD11B
1	カヤ	イチイ	種子	破片	破片	破片
2	モミ	マツ	葉	破片	-	-
3	ヒノキ	ヒノキ	毬果	38	4	-
4	ヤマモモ	ヤマモモ	核	1	1	3
5	ヒメグルミ	クルミ	核	2	-	-
6	オニグルミ	クルミ	核	-	-	7
7	ハシバミ	カバノキ	果実	1	-	破片
8	ハンノキ	カバノキ	果実・毬果	-	1/ 破片	-
9	ナラガシワ	ブナ	総苞	10	破片	-
10	アカガシ亜属	ブナ	総苞	-	6	-
11	シイ属	ブナ	果皮	破片	破片	破片
12	ムクノキ	ニレ	核	10	3	-
13	エノキ	ニレ	核	破片	-	-
14	クワ属	クワ	種子	15	2	-
15	カジノキ	クワ	種子	46	1	-
16	クスノキ	クスノキ	種子	5	3	-
17	ウメ	バラ	核	5	3	11/ 破片
18	スモモ	バラ	核	39	10	破片
19	モモ	バラ	核	23	7	57
20	サクラ亜属	バラ	核	21	破片	1
21	ナシ属	バラ	種子	-	-	1
22	キイチゴ属	バラ	種子	4	-	-
23	サンショウ	ミカン	種子	15	1	5
24	イヌザンショウ	ミカン	種子	8	2	2
25	カラスザンショウ	ミカン	種子	15	2	1
26	センダン	センダン	核	23	4	1
27	アカメガシワ	トウダイグサ	種子	38	2	2.5
28	カエデ属	カエデ	果実	1	2	-
29	ムクロジ	ムクロジ	種子	-	破片	-
30	ナツメ	クロウメモドキ	核	1.5	-	4.5
31	ブドウ属	ブドウ	種子	4	10	1
32	マタタビ	マタタビ	種子	1	-	-
33	サルナシ	マタタビ	種子	-	-	1
34	エゴノキ	エゴノキ	種子	-	17	-
35	クサギ	クマツヅラ	核	18	3	-
36	ガマズミ属	スイカズラ	核	-	1	-
37	ゴマギ	スイカズラ	核	-	1	-

表 23 右京三条三坊出土草本種実計数表

No.	和名	科名	部位	SE06	SD09	SD11B
1	アサ	クワ	種子	20	3	1
2	カナムグラ	クワ	種子	5	13	-
3	サナエタデ	タデ	果実	360	6	35
4	ミゾソバ	タデ	果実	417	1	9
5	イシミカワ	タデ	果実	3	-	277
6	ダデ属	タデ	果実	309	-	-
7	ギシギシ属	タデ	果実	181	-	-
8	ソバ	タデ	種果	12m \emptyset	-	-
9	アカザ属	アカザ	種子	424	4	233
10	ヒユ属	ヒユ	種子			
11	スベリヒユ	スベリヒユ	種子	61	-	48
12	ミドリハコベ	ナデシコ	種子	475	-	-
13	ノミノフスマ	ナデシコ	種子	82	-	-
14	ウシハコベ	ナデシコ	種子	106	-	71
15	ザクロソウ	ザクロソウ	種子	1	-	-
16	ヤエムグラ属	アカネ	種子	1	-	-
17	タガラシ	キンボウゲ	果実	48	11	214
18	キンボウゲ属	キンボウゲ	果実	325	-	23
19	アオツツラフジ	ツツラフジ	種子	2	-	-
20	アブラナ科	アブラナ	種子	257	2	35
21	ヘビイチゴ属	バラ	種子	116	1	8
22	マメ科	マメ	種子	2	-	2
23	クサネム	マメ	果実	5m \emptyset	-	破片
24	カタバミ	カタバミ	種子	451	5	333
25	ノブドウ	ノブドウ	種子	22	26	-
26	エノキグサ	トウダイグサ	果実	115	1	42
27	オトギリソウ属	オトギリソウ	種子	27	-	10
28	アリノトウグサ	アリノトウグサ	果実	204	-	2
29	セリ	セリ	果実	18	-	36
30	チドメグサ属	セリ	果実	2,363	7	-
31	セリ科	セリ	果実	2	-	-
32	エゴマ	シソ	果実	4	-	4
33	シソ	シソ	果実	445	4	110
34	ゴマ	ゴマ	種子	-	-	5
35	ナス	ナス	種子	433	20	391
36	ナス属	ナス	種子	31	-	24
37	オオバコ	オオバコ	種子	181	-	-
38	スズメウリ	ウリ	種子	115	10	2
39	ウリ	ウリ	種子	207	29	18/ 破片
40	ヒョウタン	ウリ	種子・果皮	252	11/ 果皮	破片

表 23 (続き)

No.	和名	科名	部位	SE06	SD09	SD11B
41	ウリ科	ウリ	種子	3	-	2/ 破片
42	メナモミ	キク	果実	3	-	5
43	タカサブロウ	キク	果実	353	6	-
44	キク科	キク	果実	90	-	76
45	オモダカ	オモダカ	果実	7	-	1
46	ヘラオモダカ	オモダカ	果実	-	-	3
47	ヒルムシロ属	ヒルムシロ	果実	23	1	1
48	イネ	イネ	穎・果実(炭化)	2	-	1
49	オオムギ	イネ	果実(炭化)	8	1	-
50	コムギ	イネ	果実(炭化)	14	1	2
51	アワ	イネ	穎	231	-	3
52	キビ	イネ	穎	13	-	1
53	ヒエ属?	イネ	穎	360	10	42
54	イネ科	イネ	穎	327	-	-
55	カヤツリグサ属	カヤツリグサ	果実	839	-	-
56	ホタルイ属	カヤツリグサ	果実	37	-	460
57	テンツキ属	カヤツリグサ	果実	3	-	-
58	ツユクサ	ツユクサ	種子	82	-	7
59	イボクサ	ツユクサ	種子	175	-	31
60	ミズアオイ	ミズアオイ	種子	307	-	43
61	コナギ	ミズアオイ	種子	54	-	22

の大部分は生であるが、マメ科、イネ、コムギ、オオムギは炭化している。

B 昆虫遺体とその他の自然遺物(写真図版 78)

SE06、SD11 の埋土から水洗選別により検出した昆虫遺体の大部分は甲虫類で、水洗によるためか甲虫の各部はすべて分離しており、完全な形態を保持した個体は認められなかった。甲虫と明らかに判別できるもの以外に、甲虫の幼虫、サナギ、マユがある。甲虫には前胸背板や上翅の種類からみてかなりの種類があり、個体数も相当量あるようである。甲虫の内容については現在同定中である^{註3}。これまでに判明した昆虫の種類と部位はクシコメツキムシ (*Melanotus legatus* Candeze) の前胸背板(写真図版 78-4)、アラメエンマムシ (*Hister punctulatus* Wiedemann) の上翅(写真図版 78-8)、ハサミムシ♀、(Dermaptera) の尾鋏(写真図版 78-18・19)、エンマコガネ (*Ontonophagus* sp.) の前肢(写真図版 78-15)、コブマルエンマコガネ (*Ontonophagus atripennis* Waterhouse) の前胸背板(写真図版 78-6)などで、写真図版には未同定のものも掲載する^{註4}。その他の動物遺体としてはごく少量のマダイ (*Pagrus major*[Temminck et Schlegel]) の臼歯状骨(写真図版 78-

27)、カエルの椎骨（写真図版 78-28）を検出した。

2 植物遺体の検討

以下では右京三条三坊出土の大型の植物遺体のいくつかの属性を通してみた植物相の特徴から、調査地周辺の環境や土地の利用状況、搬入された食用植物などについて検討を加えて行く。

A 植物遺体の成因と属性

出土した植物遺体の部位は、種実、葉、総苞と多様である。これらの中には出土地周辺の植生に由来する（原地性を示す）要素と、食用などに供するために他所から運ばれた（異地性・搬入品）要素が考えられる。前者は出土地周辺の環境を知る上で、後者は平安時代の食品を考える上で、有効な資料となるだろう。ここではその成因を次の5種に分け、さらに食品としての属性を考慮した上で、それぞれがこの二つの問題に対してどのような意味をもつかを検討したい。なおこの分類は種実に対して行い、葉や総苞はそのまま原地性を示す要素と考え、ここでは扱わない。

成 因

- 1 自然落下（種実の種類は定まらない）
- 2 風散布（翼果のカエデ属）
- 3 人間の食利用による搬入（穀類、果実類等の栽培植物やナッツ類）
- 4 鳥獣の食利用による搬入（エノキ、サルナシなどの漿果類）
- 5 水流散布（1～4のすべての要素を含む）

食品としての属性

- A. 食品としての利用価値が高いもの
- B. 食品として利用可能であるが価値は低いもの
- C. 食品として利用価値がないもの

ただし、ここで属性Aとして分類したものの中には成因1と3が含まれているがその区別は困難である。同様に属性Bについても成因1と4の区別はしがたい。したがって属性Aに含まれる果実やナッツ類のうち完全な形で出土したものは成因1によるものとして、破片で出土したものは成因3によるものとして扱い、属性Bの4は成因1に含めて考える。属性Cは成因1と2が該当するものとして考察を進める。ただし草本中にみられる野菜類

については後に栽培植物を中心とする食用植物で考察する。

B 調査地周辺の木本（庭園樹）

三町地区、四町地区で出土した植物遺体の分析ではあわせて22科29属37種の木本の種実や葉、絵巻を同定したが、母樹から種実類が自然落下したと考えられ、原地性を示す要素と評価できる木本を表24に示した。その中には食品として有用なものや、無価値の

表24 右京三条三坊に生育していた木本^{註6}（庭園樹）

	和名	樹高(m)	花期(月)	SE06	SD09	SD11B
針葉樹	モミ	45	5	○	-	-
	ヒノキ	30	4	○	○	-
常緑広葉樹	アカガシ亜属	20	4-5	-	○	-
	クスノキ	20	5-6	○	○	-
落葉広葉樹 (花木)	ウメ	10	2-3	○	○	○
	スモモ	8	4	○	○	○
	モモ	5	4	○	○	○
	サクラ亜属	25	4	○	○	○
	ナシ属	25	4	-	-	○
	キイチゴ属	0.2-0.6	4-5	○	-	○
	センダン	30	5-6	○	○	○
	エゴノキ	7-8	5-6	-	○	○
	クサギ	8	8-9	○	○	-
	ガマズミ属	2-4	5-6	-	○	-
	ゴマギ	2-7	4-5	-	○	-
落葉広葉樹 (その他)	ハンノキ	15	11-3	-	○	-
	ナラガシワ	25	4	○	○	-
	ムクノキ	20	5	○	○	-
	エノキ	20	4	○	-	-
	クワ属	12	4-6	○	○	-
	カジノキ	16	5	○	○	-
	サンショウ	3	4-5	○	○	○
	イヌザンショウ	2	7-8	○	○	○
	カラスザンショウ	7	7-8	○	○	○
	アカメガシワ	10	7	○	○	○
	カエデ属	12	5	○	○	-
	ブドウ属	ツル	6-8	○	○	○
	ムクロジ	18	6	-	○	-
	マタタビ	ツル	6-7	○	-	-
サルナシ	ツル	5-7	-	-	○	

(○は検出、-は未検出 以下の表も同様に扱う)

ものも含まれる。特に食品として有用なものは、それが他所から搬入されたものかどうかの判別は困難であるが、可食部位との関係から出土状態がすべて破片であるもの（カヤ、オニグルミ、ハシバミ、シイ属）は、食品として他所から搬入された可能性が高いものとして除外する。次に、花が鑑賞の対象となり、しかもその果実が食用となるもの（モモ、スモモ、ウメ、キイチゴ、ナシ）は、花木としての可能性を考慮してここに含める。これらの木本の内容には、平安時代の文献や、現代の庭園でもごく普通にみられる木本が多いとの印象を受けるので、ここでは庭園樹という表現を用いる。表中には個々の木本の平均的な樹高と花期を示したが、樹高は木本が構成する景観を考える上の目安となり、花期は調査地の季節の彩りをより具体的に復元するものとなるだろう。分析の結果同定した庭園樹は、針葉樹 2 科 2 属 2 種、常緑広葉樹 2 科 2 属 2 種、落葉広葉樹は花木 5 科 7 属 11 種、その他 10 科 13 属 15 種の 30 種である。以下にそれらの性質について解説し、庭園樹が構成した各調査地の景観を考える材料にする。

針葉樹

モミ 山地に普通に自生する常緑高木である。出土した 2 鋭裂の葉先からみると、母樹は壮齢で、樹高はかなり高かったようである。

ヒノキ 山地に普通に自生する常緑樹で、現在も京都市内の寺院の庭園でよくみかける庭木として重要な木本である。出土した毬果は木質を欠く。

常緑広葉樹

アカガシ亜属 大木になるものが多く、木本が構成する景観を決定付ける要素の一つといえる。カシノキには種類が多く、樹種は不明である。出土部位は総苞や幼果であり、近くに母樹があったと思われる。

クスノキ 関東以西に野生する木本で、京都市内では現在も寺院や神社で大木をみることが出来る。平安京内での検出例は少ない。

落葉広葉樹（花木 - 主として鑑賞の対象となる花の美しい木本）

ウメ 中国原産の小高木。現在も早春に咲く花を鑑賞し、果実は食品として利用する。平安京ではモモに比べ出土量は総じて少ない。

スモモ 中国原産の小高木。果実を食用とするために栽培する。花は 4 月頃に咲き、白色である。

モモ 中国北部原産の小高木。花は 4 月に咲き、白色や淡紅色、紅色のものがある。核の大きさにはバラツキがあり、最大のもので核長は 35 mm。平安京から出土するモモの核

には果肉が乾燥した状態で残っているものが時々みられる。

サクラ亜属 出土した核からはサクラの種類は不明である。

ナシ属 高木。花は4月頃に咲き、白色で美しく果実は食用となる。平安京では出土例を散見する。

キイチゴ属 キイチゴ属は多くの種類があり出土した種実の種類は不明であるが、花が鑑賞の対象となるものが多い。

センダン 本来海辺の山地に生育する高木であるが、現在もしばしば人家の近くに植栽されているのをみかける。花は紫色で5～6月頃に咲き、晩秋には落葉後に乳黄色の核果を多数付ける。平安京では最もよく出土する木本の一つである。

エゴノキ 山地や原野の小川の縁に普通に生育し、5～6月頃に白い下垂した花を多く付ける。平安京での出土例はこれまで少ない。

クサギ 落葉性の小高木。葉は大きく広卵形、茎にも葉にも悪臭がある。夏から初秋に散房状の花序に白い多くの花を付ける。秋には濃青色で光沢を帯びた果実が熟し、周囲に宿存する紅色のがく片と対照をなして美しい。若芽は食用になり、果実は染料として利用される。平安京での出土例は少ない。

ガマズミ属 ガマズミの仲間は種類が多く種は不明である。花は白く、秋に赤い実を付けるものが多い。平安京では出土例を散見する。

ゴマギ ガマズミ属の中で核の形態が特徴をもつので特にゴマギを分類した。花や実とはガマズミ属と同様である。

落葉広葉樹（花木以外）

ハンノキ 水湿のある低地に普通にはえる高木である。平安京ではほかに出土例を確認していないが鳥羽離宮の庭園で検出例がある^{註7}。

ナラガシワ 近畿以西に自生する高木である。葉はコナラとカシワの中間の大きさで、時には30cmに達する。出土部位には総苞と幼果があり、原地性であることがわかる。

ムクノキ 胸高直径1.0mにもなる落葉高木で、現在も京都市内の社寺の境内のみかけ。果実は甘く、小鳥が好んで採餌する。平安京ではよく出土する。

エノキ ムクノキ同様胸高直径1.0mにもなる高木。現在でも道路の端や社寺の境内で大木をよくみかける。果実は甘く、小鳥が好んで採餌する。平安京ではよく出土する。

クワ属 小高木ないし高木で、栽培されるが山野にも自生する。紫色に熟したクワの実（集合果）は食品としての価値が高い。平安京では検出例の多い木本の一つである。

カジノキ 高木で庭に植栽される。樹皮は灰色または淡灰褐色で縦に多くの割れ目ができる。葉は大きく多形である。平安時代には七夕にこの葉に和歌を書いて水に流したものである^{註8}。平安京や鳥羽離宮で、多数検出例がある^{註9}。

サンショウ 雌雄異株の低木である。葉や実は香辛料として利用する。平安京や鳥羽離宮からの検出例が多い^{註10}。

イヌザンショウ 山野に多く自生する低木。サンショウに似るが、香りが異なり、種子はへその形態の違いから判別できる。平安時代にはこの種子から油を採取したという。平安京や鳥羽離宮からの検出例が多い^{註11}。

カラスザンショウ 山中に生える雌雄異株の高木。若枝から太い枝まで著しい刺がある。サンショウ類の中で葉が一番大きく、種子の表面の格子模様は粗い。

アカメガシワ 山野に多い雌雄異株の高木。新芽は赤く、葉は大きい。現在も植栽される。平安京では検出例が多く、ほかの木本がほとんど検出されない場合にもアカメガシワは出土する例がみられる。

カエデ カエデの仲間は種類が多く、種の同定はできていない。

ブドウ属 ツル性低木。ブドウ属は野性に何種類もあり種は不明である。果実は食べられるものが多い。

ムクロジ 落葉高木。日本中部以南の山林に自生し、庭園にも植栽する。

マタタビ ツル性の低木。初夏、円形の葉が白変し、白色の花を付ける。種子はサルナシと良く似るが、やや小さく楕円形のをマタタビとした。

サルナシ 雌雄異株のツル性低木。山林に自生する。種子はマタタビよりも大きく縦長のをサルナシとした。

C 調査地周辺の草本

出土した草本種実のうち科、属、ないし種まで同定できたものは31科46属61種である。木本同様に、周辺の植生に由来し、環境を知る手がかりとなるものについて検討する。まず、出土した草本の生態的特徴から、主として庭や畑に生育する草本、路傍や山野に生育する草本、水田や湿地に生育する草本の3群に分類する^{註12}。さらに草本は、生活型（休眠型）から1年草と越年草、多年草に分類できる^{註13}。このように分類した草本の割合の多少は、調査地周辺の利用、管理状態を知る目安となるだろう。草本は田や畑地のように除草が行き届いて良く管理されていても、一旦放棄されて数年間にわたって除草が行われなくなると

表 25 右京三条三坊の草本（植生による分類）

	和 名	生育型	生 育 地	草丈 (cm)	SE06	SD09	SD11B
主とする草として本庭・畑に生育	アカザ属	1年草	畑地、荒地	60-150	○	○	○
	ヒユ属	1年草	いたる所	30	○	○	○
	スベリヒユ	1年草	道端、畑の縁	5-10	○	-	○
	ミドリハコベ	越年草	いたる所	15-25	○	-	-
	ノミノフスマ	越年草	いたる所	10-30	○	-	-
	ウシハコベ	越年草	いたる所	50	○	-	○
	ザクロソウ	1年草	道端・畑の縁	8-25	○	-	-
	ヤエムグラ属	1年草	畑・家の近く	匍匐性	○	-	-
	カタバミ	多年草	庭、道端	匍匐性	○	○	○
	エノキグサ	1年草	畑、道端	30-50	○	○	○
	チドメグサ属	多年草	日陰の庭	匍匐性	○	○	-
	ツククサ	1年草	庭、道端	5-8	○	-	○
主として生育する路傍本・山野に	カナムグラ	1年草	野原・道端	ツル	○	○	-
	サナエタデ	1年草	道端など	30-60	○	○	○
	ギンギシ属	多年草	道端	60-100	○	-	-
	アオツツラフジ	多年草	山野の道端	ツル性	○	-	-
	ヘビイチゴ属?	多年草	道端	匍匐性	○	○	○
	ノブドウ	1年草	山野	ツル性	○	○	-
	オトギリソウ属	多年草	山野のやや湿地	20-60	○	-	○
	アリノトウグサ	多年草	山野のやや湿地	10-30	○	-	○
	ナス属	1年草	山野	40-90	○	-	○
	オオバコ	多年草	道端	4-20	○	-	-
	メナモミ	1年草	山野	60-120	○	-	○
キク科	1年草	山野	?	○	-	○	
主とする草として本水田・湿地に生育	ミヅソバ	1年草	溝、水辺	30-70	○	○	○
	イシミカワ	1年草	溝、水辺	100-200	○	-	○
	タゲ属	1年草	道端、水辺など	?	○	-	-
	タガラシ	越年草	田、溝	30-60	○	○	○
	キンボウゲ属	多年草	溝、湿地	30-70	○	-	○
	クサネム	1年草	田、湿地	50-120	○	-	○
	セリ	多年草	湿地	20-50	○	-	○
	セリ科	多年草	湿地?	?	○	-	-
	スズメウリ	1年草	水辺	ツル	○	○	○
	タカサブロウ	1年草	湿地、田	10-60	○	○	-
	オモダカ	多年草	池の端、田	7-14	○	-	○
	ヘラオモダカ	多年草	池の端、田	20-35	-	-	○
	ヒルムシロ	多年草	池	-	○	○	○
	イネ科	1年草	湿地?	100-150	○	-	-
	カヤツリグサ属	1年草	田、道端	20-50	○	-	-
	ホタルイ属	1年草	溝、湿地	13-40	○	-	○
	テンツキ属	1年草	道端、田のあぜ	15-60	○	-	-
イボクサ	1年草	湿地、池畔	20-40	○	-	○	
ミズアオイ	1年草	田、沼地	20-40	○	-	○	
コナギ	1年草	田	10-20	○	-	○	

路傍あるいは山野に近い状態へと遷移し、多年草が多くなる^{註14}。その例は今も休耕田などで普通に観察することができるが、このような生態的特徴を総合して考察することにより、検出した種実から調査地周辺の環境についての定性的な情報を得ることができるものと考える。内容を具体的に検討するにあたり表-25には上記の分類項目に加えて、草本の生育時の姿を想定できるように草丈を示した^{註15}。

D 食用植物

食用植物は、SE06から木本7科7属9種、草本8科11属15種、SD09では木本4科4属6種、草本6科8属9種、SD11Bでは木本7科8属10種、草本8科10属14種を検出した。ここでいう食用植物とは主に栽培植物を中心とする食品としての価値が高く、他所から搬入された可能性の高い植物をさす。この中で特に重要なことは、イネ科植物のイネ、オオムギ、コムギ、キビ、アワ、ヒエといった日本人の主食となる種実をまとめて検出したこ

表 26 栽培植物を中心とする食用植物

木本					草本				
和名	出土部位	SE06	SD09	SD11B	和名	出土部位	SE06	SD09	SD11B
カヤ	種子	○	○	○	アサ	種子	○	○	○
ヤマモモ	核	○	○	○	ソバ	果実	○	-	-
ヒメグルミ	核	○	-	-	マメ科	種子	○	-	○
オニグルミ	核	-	-	○	アブラナ科	種子	○	○	○
ハシバミ	種皮	○	-	○	シソ	果実	○	○	○
シイノキ	果皮	○	○	○	エゴマ	果実	○	-	○
ウメ	核	○	○	○	ゴマ	種子	-	-	○
スモモ	核	○	○	○	ナス	種子	○	○	○
モモ	核	○	○	○	ヒョウタン	果皮、種子	○	○	○
ナシ	種子	-	-	○	ウリ	種子	○	○	○
ナツメ	核	○	-	○	イネ	果実(炭化)	○	-	○
					コムギ	果実(炭化)	○	○	○
					オオムギ	果実(炭化)	○	○	-
					キビ	穎	○	-	○
					アワ	穎	○	-	○
					ヒエ?	穎	○	○	○

とである。また、それ以外でもアサ、ソバ、シソ、アブラナ科、エゴマ、ゴマ、ナス、ヒョウタン、ウリ^{註17}など、重要な食用植物は多い。アブラナ科の種実にはカブやダイコンの類が含まれるものと考えられるが、種のレベルまでの同定はできていない。モモ、ウメ、スモモ、ナシは花木として庭園樹の項でも取り上げたが、果実として本項でも扱う。種実はず

べて完熟しており、オオムギ、コムギ、マメ科のように炭化したものもある。

3 植物遺体からみた環境

A 庭園樹による景観

調査地周辺の景観を考察する上で、庭園樹をその性質により針葉樹、常緑広葉樹、落葉広葉樹に分類し、その出現率を表 27 に、樹高の違いを表 28 に示した。なお樹木の高さを表す場合、一般に高木、亜高木、低木という分類をするが、ここでは樹木が構成する景観復元の参考のため樹高を 10m 単位で表現した。

以上の分類結果をもとに、次に各調査地周辺の庭園樹が構成する景観について考察す

表 27 右京三条三坊の庭園樹の出現率の比較^{註18}

木本の性質	SE06 (%)	SD09 (%)	SD11B (%)
常緑針葉樹	2 科 2 属 2 種 (9.1)	1 科 1 属 1 種 (4.2)	—
常緑広葉樹	1 科 1 属 1 種 (4.5)	2 科 2 属 2 種 (8.3)	—
落葉広葉樹 (花木)	3 科 4 属 7 種 (31.8)	5 科 5 属 9 種 (37.5)	2 科 3 属 6 種 (50.0)
(その他)	8 科 11 属 12 種 (54.5)	9 科 11 属 12 種 (50.0)	4 科 5 属 6 種 (50.0)
合計	14 科 18 属 22 種 (99.9)	16 科 18 属 24 種 (100.0)	6 科 8 属 12 種 (100.0)

表 28 右京三条三坊の庭園樹の樹高の分布^{註19} (ツル植物を除く)

樹高	SE06 (%)	SD09 (%)	SD11B (%)
20m 以上	7 科 8 属 8 種 (40.0)	6 科 6 属 7 種 (30.4)	2 科 3 属 3 種 (30.0)
10 ~ 20m	4 科 5 属 5 種 (25.0)	6 科 7 属 7 種 (30.4)	2 科 2 属 2 種 (20.0)
10m 以下	3 科 5 属 7 種 (35.0)	5 科 6 属 9 種 (39.1)	2 科 4 属 5 種 (50.0)
合計	12 科 16 属 20 種 (100.0)	15 科 17 属 23 種 (99.9)	4 科 7 属 10 種 (100.0)

る。表 22 には種実の出土量を示したが、出土する種実の量と母樹との関係はこれまで研究されておらず、出土種実を定量的に扱って環境を復元して行く研究方法は今のところ確立していないようである。したがってここでは出土種実の量はあくまで参考とするにとどめ、木本の構成を定性的に考えることにする。

三町地区の景観

SE06 周辺 SE06 からは常緑の針葉樹と広葉樹あわせて 3 科 3 属 3 種 (モミ、ヒノキ、クスノキ) が出土している。このことは、冬期でもまったく緑が無くなることはなかった

ことを示している。また、落葉広葉樹が出土した庭園樹の8割以上を占め、その中にバラ科を中心とする花木(3科4属7種)が含まれていることも特徴的で、花期の異なる木本(バラ科の多くは4月に開花するが、センダンは5～6月にかけて、クサギは8月に開花する)からは季節の彩りの変化を推測することができる。このような庭園樹についてその樹高をみると、10mをこす樹種の割合が高くなっている。これは、井戸周辺が単に樹種が豊富であるばかりでなく、十分に繁茂していたことをうかがわせるものといえる。またこのように豊富な庭園樹の中にブドウ属やマタタビ等のツル性の木本がみられることは樹木の構成上矛盾しない内容といえる。

SD09 周辺 SD09からは針葉樹と常緑広葉樹が、計3科3属3種(ヒノキ、クスノキ、アカガシ亜属)出土しており、SE06周辺同様、冬期でもまったく緑が無くなることはなかったようである。落葉広葉樹が庭園樹の8割以上を占め、その中にバラ科を中心とする花木(5科5属9種)が含まれている点もよく似ているが、SE06よりさらにその種類が多い(エゴノキ、ガマズミ属)ことは注目に値する。樹高についても10mをこえる庭園樹の割合が高い。以上の結果から、SD09周辺はSE06周辺以上に庭園樹の樹種が豊富で、しかも繁茂した状態にあったことを示すものといえる。ブドウ属、サルナシについてもSE06同様のことがいえる。分析内容からみる限り、両者には共通項が多く、類似した景観を想定できる。

四町地区の景観

SD11B 周辺 SD11Bからは常緑樹の出土はない。落葉広葉樹はバラ科を主とする花木2科3属6種とその他4科5属6種の計6科8属12種が出土している。花木の中には三町地区では出土していないナシ属がある。庭園樹の樹高をみると10m以上と10m以下の比率は同じになっている。SD11Bから出土した植物遺体は遺構の性格上、成因を特定することが困難であるが、それを考慮した上で付近の木本が構成した景観を考えると、周辺には落葉広葉樹を主体とする庭園樹はあるものの、樹種はかなり少なく、三町地区ほど豊富ではないという印象を受ける。

B 草本からみた周辺の環境

出土した草本種実の中にはチドメグサのように2,000粒をこえるものからメナモミのように3粒しかないものまでである。しかしながら木本同様に、現在のところ出土種実の計数結果がどれだけ本来の植生を反映したものであるのかについては不明な点が多く、ここで

はあくまで一つの参考事実としてとらえ、表 29 で分類した群ごとの種類数の割合により環境を評価し、定性的な環境の復元を試みる。

三町地区の環境

SE06 周辺 周辺 SE06 から出土した草本のうち主として庭や畑に生育する草本は 1 年草が 7 科 7 属 7 種、越年草は 1 科 2 属 3 種、多年草は 2 科 2 属 2 種である。多年草のカタバミ、チドメグサは匍匐性で、特にチドメグサは木本の多い日陰に生育し地上をはい、節から根や茎を出し、除草はなかなか厄介である。その他の草本も草丈の低いものが多い。

路傍や山野に生育する草本は 1 年草が 5 科 5 属 6 種、多年草が 6 科 6 属 6 種で、前者と比較すると多年草の占める割合が多い。路傍に生育する草本は、庭・畑に生育する草本ほどに除草が行き届かない結果生じるものとみるべきであり、そうした中に草丈の高いものが目立つことは自然なことといえよう。さらに、ほかの植物にからみつくツル性のアオツ

表 29 草本の性質と調査地別の出現率

草本の性質	生活型	SE06	SD09	SD11B
主として庭・畑に生育する草本	1 年草	7 科 7 属 7 種	3 科 3 属 3 種	5 科 5 属 5 種
	越年草	1 科 2 属 3 種	0 種	1 科 1 属 1 種
	多年草	2 科 2 属 2 種	2 科 2 属 2 種	1 科 1 属 1 種
	小計	10 科 11 属 12 種 (27.9%)	5 科 5 属 5 種 (35.7%)	7 科 7 属 7 種 (25.0%)
主として路傍・山野に生育する草本	1 年草	5 科 5 属 6 種	3 科 3 属 3 種	3 科 3 属 4 種
	越年草	0 種	0 種	0 種
	多年草	6 科 6 属 6 種	1 科 1 属 1 種	3 科 3 属 3 種
	小計	10 科 11 属 12 種 (27.9%)	4 科 4 属 4 種 (28.6%)	6 科 6 属 7 種 (25.0%)
主として水田・湿地に生育する草本	1 年草	8 科 9 属 13 種	3 科 3 属 3 種	6 科 6 属 8 種
	越年草	1 科 1 属 1 種	1 科 1 属 1 種	1 科 1 属 1 種
	多年草	4 科 4 属 5 種	1 科 1 属 1 種	4 科 5 属 5 種
	小計	12 科 13 属 19 種 (44.2%)	5 科 5 属 5 種 (35.7%)	10 科 11 属 14 種 (50.0%)
	合計	28 科 34 属 43 種 (100.0%) 註 20	13 科 13 属 14 種 (100.0%) 註 21	21 科 23 属 28 種 (100.0%) 註 22

ヅラフジ、ノブドウが混じっていることも周辺の荒れ方を示すものといえよう。平安時代に車前草と呼ばれたオオバコが出土していることも環境を評価する上で注意したい。オオバコは草丈が低く、人に踏まれるなどほかの植物が生育しにくい条件のところの主として

生育し、生育環境がよくなるとほかの草丈の高い草本にとってかわられるという生態的特徴をもち、周辺の環境を考える上で具体像をつかみやすい植物の一つといえる。

主として水田や湿地に生育する草本は1年草が8科9属13種、越年草1科1属1種、多年草4科4属5種と草本全体の半数近く(44.2%)を占めている。また1年草ばかりでなく越年草、多年草の割合も多く、さらにヒルムシロのような水中で生育するものや、水面下に根株があるミズアオイ、コナギ、オモダカなどがある点は注目に値する。井戸の堆積土の中にこのように多数の湿地性の草本が含まれている事実は、井戸廃絶後この周辺が池ないしはそれに近い性格の場所であったことを示唆するものであろう。

SD09 出土した草本は13科13属14種と、SE06と比較すると種類、量ともサンプル量の違いをこえて非常に少ない。両者は庭園樹からみる限り類似した環境にあったと推定したことを考え合わせると、草本が少ない点については疑問が生じる場所である。この理由について、溝の周辺は木本が多く、草本が生育できるほど開放された空間は少なかったためとみることもできるのではないだろうか。

四町地区の環境

SD11B 主として水田や湿地に育成する草本が多いが、これは採取地点が大きな溝であることによるものであろう。その他の生態的特徴をもつ草本はSE06と共通するものがあるが、成因5でふれたように溝から出土する植物遺体は遺構の性質上その成因を限定することが困難なため、ここでは多くを述べない。

C 食用植物について

平安時代の食用植物については『延喜式』や『倭名抄』^{註23}に数多く記載されている。本書では検出した種実のうちそれらに該当するものを食用植物としたが、これらの文献には現在では食品としてほとんど顧みられることのない雑草も、数多く野菜として取り上げられている。タデ属、ヒユ属、アカザ属、などの中にそれに該当するものがあると考えられるが、ここでは種レベルまで同定できなかったため食用植物として扱わなかった。またセリには、現在栽培種と野生種があるが、当時栽培されていたかどうか不明なため今回は栽培種からははずした。アブラナ科、ウリ、ナスをとりあえず搬入品として扱ったが、出土内容からはそれらが搬入品であるのか、調査地周辺に栽培されていたのかは断定できない面もある。特に、アブラナ科の種実はダイコン、カブの類であると考えられ、そうした根菜類が搬入されたものであれば種実が出土することはないであろうし、またナスの種子は完

熟しており、すでに食用になる状態を通りこしている。これらのことから野菜類の中には搬入品と、付近で栽培されていたものの両者が含まれている可能性も充分考えられる。

4 小結

植物遺体の分析の結果、調査地周辺は平安京の中でも特に木本（庭園樹）や草本が豊富な地域であることを明らかにした。同時に、草本の分析からは井戸の廃棄が周辺の土地利用の停止にむすびつく可能性のあることも指摘した。また、栽培植物を中心とする食用植物の中には主食である穀類や野菜類が含まれることが明らかとなった。

一方、この分析を通して新たに問題になるのは、野菜類の中に搬入品ばかりでなく、付近で栽培されていた可能性のあるものが含まれていることである。これは、土地利用とも関連する問題として重要であるが、種実の分析からは可能性を指摘するにとどまった。また、庭園樹のモモやウメなどの花木の種実についても、それらが周辺に植生していたのか、食品として他所から搬入された結果であるのか草本と同様の問題がある。それらが本来どちらに帰属するものかは、今後の資料の増加や花粉分析などほかの分析の結果を合わせて検討することでより鮮明になるだろう。

註

1 植物遺体の学名は以下のとおりである。

木本

番号	和名	科名	学名
1	カヤ	イチイ科	<i>Torreya nucifera</i> Sieb. et Zucc.
2	モミ	マツ科	<i>Abies firma</i> Sieb. et Zucc.
3	ヒノキ	ヒノキ科	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
4	ヤマモモ	ヤマモモ科	<i>Myrica rubra</i> Sieb. et Zucc.
5	ヒメグミ	クワ科	<i>Juglans mandshurica</i> subsp. <i>Sieboldiana</i> . var. <i>cordiformis</i> K.
6	オニグミ	クワ科	<i>Juglans mandshurica</i> Maxim.
7	ハシバミ	カバノキ科	<i>Corylus heterophylla</i> Fischer C. <i>heterophylla</i> var. <i>Thunb.</i> B 1 .
8	ハンノキ	カバノキ科	<i>Alnus japonica</i> (Thunb.) Steud.
9	ナラガシ	ブナ科	<i>Quercus aliena</i> Blume
10	アカガシ	ブナ科	<i>Quercus</i> sp. (Subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>)
11	シイ	ブナ科	<i>Castanopsis</i> sp.
12	ムクノキ	ニレ科	<i>Aphananthe aspera</i> Planchon
13	エノキ	ニレ科	<i>Celtis sinensis</i> Persoon
14	クワ	クワ科	<i>Morus</i> sp.

15	カ	ジ	ノ	キ	ク		ワ	Broussonetia papyrifera l'Herit. ex Vent.					
16	ク	ス	ノ	キ	ク	ス	ノ	Cinnamomum Camphora Presl					
17	ウ			メ	バ			Prunus Mume Sieb. et Zucc.					
18	ス	モ		モ	バ			Prunus salicina Lindl.					
19	モ			モ	バ			Prunus Persica Batsch					
20	サ	ク	ラ	亜	属	バ		Prunus sp. (Subgen. Cerasus Pers.)					
21	ナ	シ			属	バ		Pyrus sp.					
22	キ	イ	チ	ゴ	属	バ		Rubus spp.					
23	サ	ン	シ	ョ	ウ	ミ	カ	ン	Zanthoxylum piperitum DC.				
24	イ	ヌ	ザ	ン	シ	ョ	ウ	ミ	カ	ン	Fagara mantchurica Honda		
25	カ	ラ	ス	ザ	ン	シ	ョ	ウ	ミ	カ	ン	Fagara ailanthoides Engl.	
26	セ	ン	ダ	ン	セ	ン	ダ	ン				Melia Azedarach L. var. subtripinnata M.	
27	ア	カ	メ	ガ	シ	ワ	ト	ウ	ダ	イ	グ	サ	Mallotus japonicus Muell. - Arg.
28	カ	エ	デ		属	カ	エ	デ					Acer sp.
29	ム	ク	ロ	ジ	ム	ク	ロ	ジ					Sapindus Mukorossi Gaertn.
30	ナ	ツ		メ	ク	ロ	ウ	メ	モ	ド	キ		Zizyphus Jujuba Mill.
31	ブ	ド	ウ		属	ブ	ド	ウ					Vitis sp.
32	マ	タ	タ	ビ	マ	タ	タ	ビ					Actinidia polygama Planch. ex Maxim.
33	サ	ル	ナ	シ	マ	タ	タ	ビ					Actinidia arguta Planchon ex Miquel
34	エ	ゴ	ノ	キ	エ	ゴ	ノ	キ					Stylax japonica Sieb. et Zucc.
35	ク	サ		ギ	ク	マ	ツ	ヅ	ラ				Clerodendron trichotomum Thunb.
36	ガ	マ	ズ	ミ	属	ス	イ	カ	ズ	ラ			Viburnum sp.
37	ゴ	マ	ギ	ス	イ	カ	ズ	ラ					Viburnum Sieboldii Miquel

草本

番号	和	名	科	名	学	名								
1	ア	サ	ク	ワ	Cannabis sativa L.									
2	カ	ナ	ム	グ	ラ	ク	ワ	Humulus japonicus Sieb. et Zucc.						
3	サ	ナ	エ	タ	デ	タ	デ	Polygonum lapathifolium L.						
4	ミ	ゾ	ソ	バ	タ	デ	デ	Polygonum Thunbergii Sieb. et Zucc.						
5	イ	シ	ミ	カ	ワ	タ	デ	Polygonum perfoliatum L.						
6	タ	デ		属	タ	デ	デ	Polygonum spp.						
7	ギ	シ	ギ	シ	属	タ	デ	Rumex sp.						
8	ソ		バ	タ	デ	タ	デ	Fagopyrum esculentum Moench						
9	ア	カ	ザ	属	ア	カ	ザ	Chenopodium sp.						
10	ヒ	ユ		属	ヒ	ユ		Amaranthus sp.						
11	ス	ベ	リ	ヒ	ユ	ス	ベ	リ	ヒ	ユ	Portulaca oleracea L.			
12	ミ	ド	リ	ハ	コ	ベ	ナ	デ	シ	コ	Stellaria neglecta Weihe			
13	ノ	ミ	ノ	フ	ス	マ	ナ	デ	シ	コ	Stellaria Alsine Grimm var. undulata Ohwi			
14	ウ	シ	ハ	コ	ベ	ナ	デ	シ	コ	Malachium aquaticum Fries?				
15	ザ	ク	ロ	ソ	ウ	ザ	ク	ロ	ソ	ウ	Mollugo pentaphylla L.			
16	ヤ	エ	ム	グ	ラ	属	ア	カ	ネ	Galium sp.				
17	タ	ガ	ラ	シ	キン	ボ	ウ	ゲ	キン	ボ	ウ	ゲ	Ranunculus sceleratus L.	
18	キン	ボ	ウ	ゲ	属	キン	ボ	ウ	ゲ	キン	ボ	ウ	ゲ	Ranunculus sp.
19	ア	オ	ツ	ヅ	ラ	フ	ジ	ツ	ヅ	ラ	フ	ジ	Cocculus orbiculatus DC.	
20	ア	ブ	ラ	ナ	科	ア	ブ	ラ	ナ	科	ア	ブ	ラ	Cruciferae

21	ヘビイチゴ?	バ	ラ	Duchesnea sp.?
22	マ	メ	メ	Leguminosae
23	ク	サ	メ	Aeschynomene indica L.
24	カ	タ	ミ	Oxalis corniculata L.
25	ノ	ブ	ウ	Ampelopsis brevipedunculata Trautv.
26	エ	ノ	サ	Acalypha australis L.
27	オトギリソウ属?	オトギリソウ	ウ	Hypericum sp.?
28	アリノトウグサ	アリノトウグサ	ウ	Haloragis micrantha R.Br.
29	セ	リ	セ	Oenanthe javanica DC.
30	チ	メ	セ	Hydrocotyle sp.
31	セ	リ	セ	Umbelliferae
32	エ	ゴ	マ	Perilla frutescens Britton var. japonica H.
33	シ	マ	シ	Perilla frutescens Britton var. acuta K.
34	ゴ	マ	ゴ	Sesamum indicum L.
35	ナ	ス	ナ	Solanum melongena L.
36	ナ	ス	ナ	Solanum spp.
37	オ	オ	オ	Plantago asiatica L.
38	ス	ズ	ウ	Melothria japonica Maxim
39	ウ	リ	ウ	Cucumis melo L.
40	ヒ	ョ	ウ	Lagenaria sp.
41	ウ	リ	ウ	Cucurbitaceae
42	メ	ナ	モ	Siegesbeckia pubescens Makino
43	タ	カ	サ	Eclipta prostrata L.
44	キ	ク	科	Compositae
45	オ	モ	ダ	Sagittaria trifolia L.
46	ヘ	ラ	オ	Alisma canaliculatum A.
47	ヒ	ル	シ	Potamogeton sp.
48	イ	ネ	イ	Oryza sativa L.
49	オ	オ	ム	Hordeum vulgare L. var. hexastichon Aschers.
50	コ	ム	ギ	Triticum aestivum L.
51	ア	ワ	イ	Setaria italica Beauv.
52	キ	ビ	イ	Panicum miliaceum L.
53	ヒ	エ	属?	Panicum Crus - galli L.?
54	イ	ネ	科	Gramineae
55	カ	ヤ	リ	Cyperus spp.
56	ホ	タ	ル	Scirpus spp.
57	テ	ン	ツ	Fimbristylis spp.
58	ツ	ユ	ク	Commelina communis L.
59	イ	ボ	ク	Murdannia Keisak Hand. - Mzt.
60	ミ	ズ	ア	Monochoria Korsakowii Regel et Maack
61	コ	ナ	ギ	Monochoria vaginalis Presl

作表にあたり、和名の順位は牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』北隆館 1961、学名は主に北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑木本編 I、II』保育社 1979、北村四

郎・村田 源・小山鐵夫『原色日本植物図鑑草本編上、中、下』保育社 1964により、科名、属名、出土部位については以下の文献を参考にした。

笠原安夫『日本雑草図説』養賢堂 1978

笠原安夫『走査電子顕微鏡でみた雑草種実の造形』養賢堂 1976

大井次三郎『改訂増補新版日本植物誌顕花編』至文堂 1978

また、種実の同定にも現生の標本のほかこれらの文献を利用した。

- 2 草本の同定結果には科ないし属レベルのものが多く、本文や表中では計数の方法を、科レベルのものは1科0属1種、属、種レベルのものは1科1属1種とした。
- 3 昆虫の同定は平安学園 塚本珪一教諭 同 岸井 尚博士にお願いした。同定作業は現在も継続中であり、判名したものについては改めて報告する予定である。
- 4 昆虫遺体の学名は伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦 勇『原色日本昆虫図鑑上、下』保育社 1977、森本 桂・林 長閑ほか『原色日本甲虫図鑑Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』保育社 1986によった。
- 5 マダイの学名は蒲原稔治・岡村 収『原色日本海水魚類図鑑Ⅰ』保育社 1985によった。
- 6 樹高・花期は北村四郎・村田 源『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ、Ⅱ』保育社 1979をもとに作成した。特に同定が属レベルにとどまるものについては、アカガシ亜属はアカガシ、サクラ亜属はヤマザクラ、ナシ属はナシ、キイチゴ属はクサイチゴ、ガマズミ属はガマズミ、クワ属はヤマグワ、カエデ属はタカオカエデ、ブドウ属はエビヅルを参考にした。
- 7 「112次調査（東殿庭園跡）」『鳥羽離宮跡発掘調査概報昭和60年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1986
- 8 『朝日百科 世界の植物』80 朝日新聞社 1977
- 9 「86次、112次調査（鳥羽離宮東殿跡）」、「79次調査（金剛心院庭園跡）」、「91次調査（白河天皇陵堀跡）」など、『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1983
『同 昭和58年度』同1984、『同 昭和60年度』同1986、『同 昭和61年度』同1987
- 10 註9と同じ。
- 11 註9と同じ。
- 12 矢野悟道・波田善夫・竹中則男・大川 徹『日本の植生図鑑2人里・草原』

- 13 ここで扱う生活型はラウンケアの休眠型をさす。沼田 真・吉沢長人編『新版日本原色雑草図鑑』全国農村教育協会 1985
- 14 「飛騨地域の山間休耕田における植物遷移」日本生態学会誌第 38 巻 2 号 1988
- 15 北村四郎・村田 源・小山鐵夫『原色日本植物図鑑草本編上、中、下』保育社 1978
- 16 エゴマとシソの判別は笠原安夫「エゴマの同定」『古代文化財に関する保存科学と人文・自然科学 昭和 55 年度年次報告書』1981、文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班『シンポジウム縄文農耕の実証性』1982 を参考にした。
- 17 表 23-2 中のウリ科は現在種の同定ができておらず、栽培種か野生種か不明のため表 25 の植生および表 26 の食用植物の草本の項から除外した。
- 18 SD09 で科、属の合計がそれぞれの木本の性質によって分類した単純合計になっていないのはブナ科のアカガシ亜属とナラガシワの重複があるためである。
- 19 SE06、SD09、SD11B の樹高による分類の科および属の合計が単純合計にならず、2 科 2 属ずつ少ないのはバラ科が 20m 以上、10 ~ 20m、10m 以下にそれぞれ重複していることによる。
- 20 SE06 の路傍・山野の植生要素の科の小計が 10 科になるのはタデ科の、また水田・湿地の植生要素で小計が 12 科になるのはタデ、セリ、ツユクサ科の重複、属が 34 属になるのはタデ属に重複があることによりそれぞれ単純合計になっていない。
- 21 SD09 の科、属の合計が小計の単純合計になっていないのはタデ科、タデ属の重複による。
- 22 SD11B の主として水田・湿地に生育する草本の科、属の合計が小計の単純合計になっていないのはキンポウゲ科のタガラシ（越年草）とキンポウゲ属（多年草）が重複することによる。また合計でもタデ、セリ科、およびタデ属の重複により単純合計になっていない。
- 23 『倭名抄』所収の食用植物をみると野菜類と草類があるが、右京三条三坊出土の植物遺体はそれらと大変よく一致しているのがわかる。出土した個々の食用植物は大変重要なものが多く、それぞれについての詳細は機会を改めて取り上げることにする。

第V章 考 察

1 平安時代前期の土器

平安京跡から出土する土器の内容やその編年については、これまでにいくつかの研究成果が発表されており、すでに概括的な型式区分や年代観に対するほぼ共通した認識が得られている。しかし、ここ数年の資料の蓄積や実年代を推定し得る土器の増加によって、さらに詳細な型式設定と年代推定が可能になり、その結果、従来の認識に一部修正を加える必要も生じてきた。^{註1} また時期による土器内容の推移もかなり明らかになってきている。そこで本項では最初に、現在までに得られた京域およびその近郊の資料をもとに、これらの問題について再考し、その後右京三条三坊の土器を中心に平安時代前期の土器類について考察したい。

A 土師器主要小型器形の変化（供膳形態を中心とする型式編年）

まず土師器碗、杯、皿などの小型供膳形態を軸に編年を試みることにする。ここで土師器の食器類を中心に取り上げるのは、これらがほかの器形に比べ、各時期を通じ多量に出土し、型式の変遷をとらえる対象として最も妥当であると考えたためである。なお型式的な連続性を考慮して、ここでは右京三条三坊で出土した土器群の属する時期と、その前後を含めて検討する。

平安京およびその近郊から出土した平安時代の土師器碗、杯、皿類を、その形態や製作技法の相違をもとに大きくⅠ～Ⅴ期に区分する。さらに各期を法量の変化や細部の形態の特徴から古・中・新の3型式に分けることとする。^{註3} 今回はそのうち平安時代の前半にあたるⅠからⅢ期までの特徴を述べ、それ以降の段階については別の機会に譲ることとする。^{註4}

Ⅰ期は小型食器類の外表面調整にヘラケズリ（c手法）が盛行する、奈良時代末およびその影響が色濃く残っている時期である。

Ⅰ古 c手法は平城Ⅲから出現するが、各技法の比率の上で多数を占め始めるのは平城Ⅴ以降である。^{註5} したがって平城Ⅴに属する土器をこの段階に当てはめたい。主な土師器の小型器形の法量平均は、碗AⅠ口径13.0cm、高さ4.5cm、杯A口径18.4cm、高さ4.6cm、皿AⅠ口径21.7cm、高さ3.0cm、皿AⅡ口径17.2cm、高さ3.1cm。^{註6}

I 中 c手法が最も盛行する段階、9割以上をc手法が占めており、I古からI中にかけてc手法の採用が一層進行したことがうかがえる。椀A I口径13.2cm、高さ3.6cm、杯A口径17.9cm、高さ4.0cm、皿A I口径16.3cm、高さ2.6cm、皿A II口径16.3cm、高さ2.5cm。器形別に口縁端部の形態が厳密に作り分けられている。この型式に属するものには内裏^{註7}SX4、SX9、左兵衛府SD4、北野廃寺6次調査SD8出土土器があり、これらは平安京で最も古く位置づけられる土器群である。

I 新 e手法の増加が認められるが、量的には依然としてc手法が主流を占めている。椀A I口径13.6cm、高さ3.2cm、杯A口径17.0cm、高さ3.5cm、皿A I口径18.5cm、高さ2.1cm、皿A II口径15.7cm、高さ2.1cm。器形の違いによる口縁端部形態の差が少なくなり、c手法のものに口縁部外面のナデや底部外面のオサエを部分的に削り残す個体が増える。中務省SK201、主水司SK8、SK10、左京二条二坊(冷然院)SD1、SD2、西寺井戸跡出土土器などがある。

II期は外面調整技法にe手法が盛行する時期である。I新で指摘した口縁部外面のナデによる屈曲が顕著になり、椀、杯、皿の端部の形態による区別が明瞭でなくなる。

II 古 c手法によるものもわずかに残るが、e手法により調整されるものが多数を占める。椀A I口径13.6cm、高さ3.0cm、杯A口径16.1cm、高さ3.3cm、皿A I口径17.6cm、高さ2.4cm、皿A II口径14.7cm、高さ1.9cm。西市SX25、SE20、内裏承明門遺構80、左京七条二坊SE64、左京二条三坊(烏丸線No60)溝1出土土器などの資料がある。

II 中 ほぼすべての小型土器がe手法により調整されている。口縁端部の形態の均一化がさらに進む。椀A I口径13.7cm、高さ2.8cm、杯A口径15.0cm、高さ2.7cm、皿A I口径17.2cm、高さ2.2cm、皿A II口径14.2cm、高さ1.9cm、西市SE03、東雅院SK2、左京七条一坊SE4、北野廃寺1次調査SK20、一乗寺向畑町遺跡SK3出土土器などがある。

II 新 口縁部の屈曲が強い個体が増加する。II中までの皿A Iに対応する器形を含む資料がほとんどなくなる反面、やや大型化した皿Lや杯Lが目立つようになる。椀A I口径13.5cm、高さ2.2cm、杯A口径15.0cm、高さ2.4cm、皿A II口径13.4cm、高さ1.6cm、杯L口径20.0cm、高さ3.6cm、皿L口径19.6cm、高さ2.9cm。左兵衛府SD1、平安宮西限陸23、右京二条三坊SX25、右京五条二坊SK4、陽成院SE19出土土器などがある。

III期は土器製作技術としてのe手法が最も完成する時期。器壁は非常に薄く作られ、口縁端部の形態は強く屈曲し、各器形ともまったく同様に処理されている。

III 古 II新まで口径によって分類できた杯Aと椀Aの区別が困難になる。杯Lよりや

や小型の杯 M が一定量出土するようになる。杯・椀口径 13.9cm、高さ 1.9cm、皿 A 口径 12.0cm、高さ 1.6cm、杯 L 口径 19.8cm、高さ 3.6cm、杯 M 口径 16.1cm、高さ 2.6cm、皿 L 口径 18.0cm、高さ 2.4cm。右京二条三坊 SD13、SD14、SD15、SD23^{註29}、右京二条二坊 SX1^{註30}、左馬寮井戸^{註31}、内裏 SK25^{註32} 出土土器などがある。

Ⅲ中 各器形の法量は減少し、特に器高にそれが著しく、ほとんど皿状になる。杯・椀口径 13.1cm、高さ 2.1cm、皿 A 口径 11.1cm、高さ 1.4cm、杯 L 口径 18.4cm、高さ 3.2cm、杯 M 口径 15.6cm、高さ 2.6cm。左京一条三坊（烏丸線^{註33}①17）井戸 1、右京二条三坊 SE10 中層^{註34}出土土器などがある。

Ⅲ新 法量の減少がさらに進み、椀・杯と皿 A（Ⅱ）の区別も不明瞭になるが、新たに外反する口縁部をもつ杯 N・皿 N I・皿 N II^{註35}が登場する。皿 A 口径 10.7cm、高さ 1.2cm、杯 L 口径 16.6cm、高さ 1.8cm、杯 M 口径 13.6cm、高さ 1.6cm、杯 N 口径 18.0cm、高さ 4.0cm、皿 N I 口径 15.6cm、高さ 2.9cm、皿 N II 口径 13.6cm、高さ 2.6cm。左京四条三坊 SE21、内膳町遺跡 SK18^{註36} 出土土器などがある。

各型式の年代については、Ⅰ中が平安遷都（794）や、長岡京出土土器との比較により 800 年頃と推定でき、Ⅲ新は次の型式（Ⅳ古）に属する高陽院 SG01A 出土土器が 1021 ～ 1039 年頃に比定^{註38}されることからその直前と推定できる。この年代幅からみてそれぞれの型式を 25 ～ 30 年程の時間幅で設定することができるだろう。一方、いくつかの型式中には実年代を推定し得る資料があり、これから得られた年代観は、各型式を上記の時間幅でとらえたものとよく一致している。実年代を推定する資料としては以下のようなものがある。

Ⅰ古 平城宮 SK2113 の木簡「左衛土府」（758 ～）、SK870 の墨書土器「主馬」（781 ～ 784）^{註39}。

Ⅰ中 長岡京土器との比較、左兵衛府 SD4 の墨書土器「主馬」（794 ～ 808）^{註40}。

Ⅰ新 実年代のわかる資料はないが、西寺井戸跡から富寿神寶^{註41}（818 ～）が出土している。

Ⅱ古 内裏承明門地鎮遺構（遺構 80）^{註42}ほか遺構との関連から承和九年（818）～元慶八年（884）に位置づけられる。その他、西市 SX25 から承和昌寶（835 ～）、SE20 から長年大寶^{註44}（848 ～）が出土している。

Ⅱ中 北野廃寺 SK20、元慶九年（885）の火災に関連するものとみられている。^{註45}

Ⅱ新 実年代のわかる資料はないが、右京七条一坊 SD465 から延喜通寶^{註46}（907 ～）が出土している。

Ⅲ古 右京二条二坊 SX1 の墨書土器「天曆七」（953）、内裏 SK25 の墨書土器「應和」^{註48}（961 ～ 963）。

Ⅲ中 実年代のわかる資料はないが、右京三条二坊 SE4 掘形底部^{註49}、左京一条三坊（烏丸線
 ⑮17）井戸 I から乾元大寶（958～）が出土している。

Ⅲ新 先きに述べたとおりで、Ⅳ古とⅢ中の中に位置づけられる。

このような資料から、今のところ各段階の年代はⅠ古 750 年～ 780 年頃、Ⅰ中 780 年～
 810 年頃、Ⅰ新 810 年～ 840 年頃、Ⅱ古 840 年～ 870 年頃、Ⅱ中 870 年～ 900 年頃、Ⅱ新
 900 年～ 930 年頃、Ⅲ古 930 年～ 960 年頃、Ⅲ中 960 年～ 990 年頃、Ⅲ新 990 年～ 1020 年
 頃と考えている。

B 破片数データからみた土器の様相

次に土器群の破片数データ^{註51}をもとに各時期の土器内容の変化について概観してみよう。
 いうまでもなく破片数データは、その土器群が出土した遺構ないしは遺跡で使用された土
 器の構成比をそのまま表すものではない。その意味では一つの土器群から得た単独の破
 片数データそのものは決して定量的な資料ではな
 く、むしろ土器の種類の有無を知るための定性的
 な資料といえる。また土器の内容には時期だけで
 はなく、遺跡、遺構の性格によっても相違がある
 ことは充分予測できることである。ただし、いま
 のところ出土土器の器種構成を復元するための前
 提となる正確な個体数を求める方法はなく、また
 器種構成と遺跡の性格との関連を知りうる基礎的
 なデータも揃っていないのが現状である。しかし
 遺跡から出土する土器類にはそこで使用されてい
 た土器の様相がなんらかの形で反映していること
 は明らかで、同一の方法を用いて得られた多くの
 破片数データを比較することによって導き出され
 た相対的な比率は、平安京全体の土器様相の変化
 をとらえる資料として有効なものである。現在、
 右京三条三坊のものを含め、50 をこえるⅠ中～
 Ⅲ中に属する土器群の破片数データがあるが、そ
 のすべてをここに掲載することは不可能なため、

表 30 平安京出土土器破片の比率
 （Ⅰ中～Ⅲ中の総計）

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	130,299	81.9
	高杯・盤・鉢	4,956	3.1
	甕・釜・鍋	19,977	12.6
	その他	530	0.3
	不明	3,272	2.1
	小計	159,034	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	6,206	77.4
	甕	1,660	20.7
	その他	107	1.3
	不明	43	0.5
	小計	8,016	99.9
須恵器	杯・碗・皿	7,231	17.2
	壺・瓶	9,525	22.7
	鉢	3,441	8.2
	甕・大型壺	20,158	48.1
	その他	448	1.1
	不明	1,132	2.7
	小計	41,935	100.0
緑釉陶器	杯・碗・皿	8,309	96.8
	壺・瓶	120	1.4
	その他	119	1.4
	不明	35	0.4
	小計	8,583	100.0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	1834	92.7
	高杯	32	1.6
	盤	45	2.3
	その他	13	0.7
	不明	54	2.7
	小計	1,978	100.0
灰釉陶器	杯・碗・皿	4,475	70.7
	壺・瓶	1,828	28.9
	その他	18	0.3
	不明	11	0.2
	小計	6,332	100.1
輸入陶磁器	杯・碗・皿	305	88.7
	壺・瓶	33	9.6
	その他	6	1.7
	不明	0	0.0
	小計	344	100.0
その他	製塩土器	108	95.6
	不明	5	4.4
	小計	113	100.0
総数		226,335	100.0

各期の様相がよく表われていると思われるものをいくつか紹介し、その特徴について述べることにしたい。まず各時期の資料を通していえることは、出土土器全体の中に占める土師器の比率が、かなり高いということである。たとえば表 30 は上記のⅠ中～Ⅲ中にかけての全資料を合計したもののだが、これをみれば、時期や遺跡の差による土器内容の変化を考慮に入れても、平安時代前半に平安京で消費された土師器の量の多さがうかがえる。一方、これらの土器群を小型供膳形態、煮沸形態、貯蔵形態など機能別に分類してみると、各器種による割合は異なるが、須恵器を除いたすべての器種で椀、杯、皿などの小型供膳形態に属するものが最も多く、全体の約 7 割を占めている。このように食器類が多数を占

表 31 小型供膳形態の比（Ⅰ中～Ⅲ中）

器種	破片数	比率(%)
土師器	130,299	82.1
黒色土器	6,206	3.9
須恵器	7,231	4.6
緑釉陶器	8,309	5.2
白色無釉陶器	1,834	1.2
灰釉陶器	4,475	2.8
輸入陶磁器	305	0.2
総計	158,659	100.0

めることが平安京から出土する土器群の大きな特徴の一つであるといえるだろう。また表 31 のようにこうした多量の食器類について土器の種類別に比較しても、やはり土師器が圧倒的多数を占めていることが指摘できる。この傾向は各時期のほとんどの資料にみることができ、土師器の食器類が各期を通じて多量に消費されていたことを示して

いる。このような点からみて、平安京における土器様相の変化は、土師器を除いた小型器形の比率をみることによってより明瞭にとらえることができよう。この視点から各期の特徴をみて行くと、Ⅰ中ではほとんどの資料でわずかに黒色土器が含まれているが、須恵器が 9 割以上を占める。特殊な例として緑釉陶器をかなり含む北野廃寺 SD08 の土器群があるが、後節で述べるようにこの緑釉陶器はⅠ新に現れるものとは異なる一群である。Ⅰ新では新たに緑釉陶器、灰釉陶器が登場し、須恵器の比率が減少する。資料によっては緑釉陶器、灰釉陶器の比率がかなり高いものもある。黒色土器の比率にはさほど大きな変化はない。白色無釉陶器もこの時期に出現するがその量はわずかである。Ⅱ古に至っては須恵器の比率がさらに減少し、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器が増加する。また白色無釉陶器、輸入陶磁器を含む資料が増える。特殊な例として白色無釉陶器を多量に含む内裏 SK25 の土器群がある。Ⅱ中以降、各器種ともにⅠ新からⅡ古にかけてみられたような大きな変動はなく、Ⅲ中にかけてほぼ安定した比率を示す。供膳形態の中に占める緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器の比率が大きく、特に緑釉陶器が土師器に次ぐ位置を占める点は注目に値する。

表 32 平安京各所の出土土器破片の比率

1 左兵衛府 SD04(I 中)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	453	89.9
	高杯・盤・鉢	34	6.7
	甕・釜・鍋	15	3.0
	その他	2	0.4
	不明	0	0
小計		504	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	2	100.0
	甕	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		2
須恵器	杯・碗・皿	98	86.7
	壺・瓶	9	8.0
	鉢	6	5.3
	甕・大型壺	0	0
	その他	0	0
不明	0	0	
小計		113	100.0
緑釉陶器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	0	0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
小計		0	0
灰釉陶器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	2	100.0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		2
輸入陶磁器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		0
その他		0	0
総数		621	100.0

3 中務省 SK201(I 新)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	396	89.8
	高杯・盤・鉢	17	3.9
	甕・釜・鍋	28	6.3
	その他	0	0
	不明	0	0
小計		441	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	5	41.7
	甕	7	58.3
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		12
須恵器	杯・碗・皿	46	63.9
	壺・瓶	14	19.4
	鉢	11	15.3
	甕・大型壺	1	1.4
	その他	0	0
不明	0	0	
小計		72	100.0
緑釉陶器	杯・碗・皿	3	75.0
	壺・瓶	1	25.0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		4
白色無釉陶器	杯・碗・皿	0	0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
小計		0	0
灰釉陶器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	1	100.0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		1
輸入陶磁器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		0
その他		0	0
総数		530	100.1

2 北野庵寺 SD8(I 中)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	3,970	85.8
	高杯・盤・鉢	120	2.6
	甕・釜・鍋	508	11.0
	その他	31	0.6
	不明	0	0
小計		4,629	100
黒色土器	杯・碗・皿	91	86.7
	甕	14	13.3
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		105
須恵器	杯・碗・皿	642	55.9
	壺・瓶	277	24.1
	鉢	37	3.2
	甕・大型壺	120	10.5
	その他	8	0.7
不明	64	5.6	
小計		1,148	100.0
緑釉陶器	杯・碗・皿	145	96.7
	壺・瓶	3	2.0
	その他	2	1.3
	不明	0	0
	小計		150
白色無釉陶器	杯・碗・皿	0	0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
小計		0	0
灰釉陶器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	2	100.0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		2
輸入陶磁器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		0
その他		0	0
総数		6,034	99.9

4 左京一条三坊(鳥丸線 No.60) 溝 I(II 古)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	335	76.5
	高杯・盤・鉢	25	5.7
	甕・釜・鍋	57	13.0
	その他	21	4.8
	不明	0	0
小計		438	100.0
黒色土器	杯・碗・皿	6	50.0
	甕	3	25.0
	その他	0	0
	不明	3	25.0
	小計		12
須恵器	杯・碗・皿	19	15.1
	壺・瓶	32	25.4
	鉢	14	11.1
	甕・大型壺	47	37.3
	その他	14	11.1
不明	0	0	
小計		126	100.0
緑釉陶器	杯・碗・皿	112	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		112
白色無釉陶器	杯・碗・皿	5	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
小計		5	100.0
灰釉陶器	杯・碗・皿	28	90.3
	壺・瓶	3	9.7
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		31
輸入陶磁器	杯・碗・皿	1	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計		1
その他		0	0
総数		725	100.0

5 右京四条二坊(両洋高校)SD01(Ⅱ古)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	571	67.1
	高杯・盤・鉢	53	6.2
	甕・釜・鍋	112	13.2
	その他	1	0.1
	不明小計	114	13.3
黒色土器	杯・碗・皿	54	68.4
甕	12	15.2	
その他	0	0	
不明	13	16.5	
小計	79	100.1	
須恵器	杯・碗・皿	58	9.7
	壺・瓶	80	13.4
	鉢	12	2.0
	甕・大型壺	322	53.8
	その他	1	0.2
不明	125	21.0	
小計	599	100.1	
緑釉陶器	杯・碗・皿	103	92.0
	壺・瓶	0	0
	その他	9	8.0
	不明	0	0
	小計	112	100.0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	3	75.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明小計	1	25.0
4	100.0		
灰釉陶器	杯・碗・皿	33	82.5
	壺・瓶	6	15.0
	その他	0	0
	不明	1	2.5
	小計	40	100.0
輸入陶磁器	杯・碗・皿	0	0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	0	0
その他		0	0
総数		1,685	99.9

7 右京二条三坊SX25(Ⅱ新)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	4,610	90.6
	高杯・盤・鉢	178	3.5
	甕・釜・鍋	217	4.3
	その他	1	0
	不明小計	83	1.5
5,089	100.0		
黒色土器	杯・碗・皿	218	95.6
	甕	6	2.6
	その他	4	1.8
	不明	0	0
	小計	228	100.0
須恵器	杯・碗・皿	85	14.5
	壺・瓶	74	12.6
	鉢	65	11.1
	甕・大型壺	313	53.2
	その他	0	0
不明	51	8.7	
小計	588	100.1	
緑釉陶器	杯・碗・皿	150	98.7
	壺・瓶	2	1.3
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	152	100.0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	47	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明小計	47	100.0
灰釉陶器	杯・碗・皿	68	73.1
	壺・瓶	25	26.9
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	93	100.0
輸入陶磁器	杯・碗・皿	28	93.3
	壺・瓶	2	6.7
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	30	100.0
その他	製塩土器	1	100.0
	小計	1	100.0
総数		6,228	100.0

6 右京二条三坊SE10掘形(Ⅱ中)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	384	83.5
	高杯・盤・鉢	33	7.2
	甕・釜・鍋	42	9.1
	その他	0	0
	不明小計	1	0.2
460	100.0		
黒色土器	杯・碗・皿	25	75.8
	甕	7	21.2
	その他	1	3.0
	不明	0	0
	小計	33	100.0
須恵器	杯・碗・皿	7	2.8
	壺・瓶	35	13.9
	鉢	24	9.6
	甕・大型壺	175	69.7
	その他	0	0
不明	10	4.0	
小計	251	100.0	
緑釉陶器	杯・碗・皿	88	98.9
	壺・瓶	1	1.1
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	89	100.0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	15	93.8
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明小計	1	6.3
16	100.1		
灰釉陶器	杯・碗・皿	39	81.3
	壺・瓶	9	18.8
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	48	100.1
輸入陶磁器	杯・碗・皿	9	75
	壺・瓶	1	8.3
	その他	2	16.7
	不明	0	0
	小計	12	100.0
その他		0	0
総数		909	100.0

8 左京二条二坊(陽成院)SE19(Ⅱ新)

器種	器形	破片数	比率(%)
土師器	杯・碗・皿	6,211	88.6
	高杯・盤・鉢	129	1.8
	甕・釜・鍋	281	4.0
	その他	26	0.4
	不明小計	366	5.2
7,013	100.0		
黒色土器	杯・碗・皿	104	69.3
	甕	30	20
	その他	8	5.3
	不明	8	5.3
	小計	150	99.9
須恵器	杯・碗・皿	19	4.5
	壺・瓶	51	12.1
	鉢	105	24.8
	甕・大型壺	181	42.8
	その他	7	1.7
不明	60	14.2	
小計	423	100.1	
緑釉陶器	杯・碗・皿	256	97.0
	壺・瓶	5	1.9
	その他	3	1.1
	不明	0	0
	小計	264	100.0
白色無釉陶器	杯・碗・皿	130	72.2
	高杯	0	0
	盤	13	7.2
	その他	0	0
	不明小計	37	20.6
180	100.0		
灰釉陶器	杯・碗・皿	46	62.2
	壺・瓶	27	36.5
	その他	0	0
	不明	1	1.4
	小計	74	100.1
輸入陶磁器	杯・碗・皿	5	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	5	100.0
その他		0	0
総数		8,109	100.0

表 32 (続き)

9 右京二条三坊 SD23 (Ⅲ古)			
器 種	器 形	破 片 数	比 率 (%)
土 師 器	杯・碗・皿	3,796	91.3
	高杯・盤・鉢	138	3.3
	甕・釜・鍋	220	5.3
	その他	0	0
	不明	3	0.1
小計	4,157	100.0	81.3
黒色土 器	杯・碗・皿	179	79.6
	甕	41	18.2
	その他	5	2.2
	不明	0	0
	小計	225	100.0
須 恵 器	杯・碗・皿	53	10.1
	壺・瓶	89	17.0
	鉢	49	9.3
	甕・大型壺	303	57.7
	その他	0	0
不明	31	5.9	10.3
小計	525	100.0	
緑 釉 陶 器	杯・碗・皿	85	93.4
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	6	6.6
	小計	91	100.0
白色無 釉 陶 器	杯・碗・皿	25	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
小計	25	100.0	0.5
灰 釉 陶 器	杯・碗・皿	65	82.3
	壺・瓶	14	17.7
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	79	100.0
輸 入 陶 磁 器	杯・碗・皿	13	92.9
	壺・瓶	1	7.1
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	14	100.0
そ の 他		0	0
総 数		5,116	100.1

11 右京三条二坊 SE04 (Ⅲ中)			
器 種	器 形	破 片 数	比 率 (%)
土 師 器	杯・碗・皿	1,032	77
	高杯・盤・鉢	150	11.2
	甕・釜・鍋	159	11.9
	その他	0	0
	不明	0	0
小計	1341	100.1	48.9
黒色土 器	杯・碗・皿	132	93.0
	甕	7	4.9
	その他	3	2.1
	不明	0	0
	小計	142	100.0
須 恵 器	杯・碗・皿	120	15.0
	壺・瓶	0	0
	鉢	0	0
	甕・大型壺	618	77.1
	その他	64	8.0
不明	0	0	29.3
小計	802	100.1	
緑 釉 陶 器	杯・碗・皿	274	97.9
	壺・瓶	0	0
	その他	6	2.1
	不明	0	0
	小計	280	100.0
白色無 釉 陶 器	杯・碗・皿	4	100.0
	高杯	0	0
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
小計	4	100.0	0.1
灰 釉 陶 器	杯・碗・皿	121	87.1
	壺・瓶	17	12.2
	その他	1	0.7
	不明	0	0
	小計	139	100.0
輸 入 陶 磁 器	杯・碗・皿	32	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	32	100.0
そ の 他		0	0
総 数		2,740	100.0

10 内裏 SK25 (Ⅲ古)			
器 種	器 形	破 片 数	比 率 (%)
土 師 器	杯・碗・皿	4,569	92.4
	高杯・盤・鉢	235	4.8
	甕・釜・鍋	108	2.2
	その他	3	0.1
	不明	28	0.6
小計	4,943	100.1	89.6
黒色土 器	杯・碗・皿	27	69.2
	甕	9	23.0
	その他	2	5.1
	不明	1	2.6
	小計	39	99.9
須 恵 器	杯・碗・皿	8	12.5
	壺・瓶	22	34.4
	鉢	22	34.4
	甕・大型壺	11	17.1
	その他	0	0
不明	1	1.6	1.2
小計	64	100.0	
緑 釉 陶 器	杯・碗・皿	96	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	96	100.0
白色無 釉 陶 器	杯・碗・皿	339	98.0
	高杯	4	1.2
	盤	2	0.6
	その他	1	0.3
	不明	0	0
小計	346	100.1	6.3
灰 釉 陶 器	杯・碗・皿	21	95.5
	壺・瓶	1	4.5
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	22	100.0
輸 入 陶 磁 器	杯・碗・皿	5	83.3
	壺・瓶	1	1.7
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	6	100.0
そ の 他		0	0
総 数		5,516	100.0

12 左京一条三坊 (烏丸線 [㊤]) 17) 井戸 1 (Ⅲ中)			
器 種	器 形	破 片 数	比 率 (%)
土 師 器	杯・碗・皿	913	94.6
	高杯・盤・鉢	12	1.2
	甕・釜・鍋	8	0.8
	その他	32	3.3
	不明	0	0
小計	965	99.9	64.8
黒色土 器	杯・碗・皿	157	95.2
	甕	1	0.6
	その他	7	4.2
	不明	0	0
	小計	165	100.0
須 恵 器	杯・碗・皿	24	10.0
	壺・瓶	24	10.0
	鉢	9	3.8
	甕・大型壺	145	60.7
	その他	37	15.5
不明	0	0	16.0
小計	239	100.0	
緑 釉 陶 器	杯・碗・皿	54	93.1
	壺・瓶	2	3.4
	その他	2	3.4
	不明	0	0
	小計	58	99.9
白色無 釉 陶 器	杯・碗・皿	17	77.3
	高杯	5	22.7
	盤	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
小計	22	100.0	1.5
灰 釉 陶 器	杯・碗・皿	18	45.0
	壺・瓶	21	52.5
	その他	1	2.5
	不明	0	0
	小計	40	100.0
輸 入 陶 磁 器	杯・碗・皿	1	100.0
	壺・瓶	0	0
	その他	0	0
	不明	0	0
	小計	1	100.0
そ の 他		0	0
総 数		1,490	100.1

表 33 各時期の土師器を除く小型供膳形態の比

1 左兵衛府 SD04 (I 中)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	2	2.0
須恵器	98	98.0
緑釉陶器	0	0
白色無釉陶器	0	0
灰釉陶器	0	0
輸入陶磁器	0	0
総計	100	100.0

2 北野庵寺 (I 中)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	91	10.4
須恵器	642	73.1
緑釉陶器	145	16.5
白色無釉陶器	0	0
灰釉陶器	0	0
輸入陶磁器	0	0
総計	878	100.0

3 中務省 SK201 (I 新)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	5	9.3
須恵器	46	85.2
緑釉陶器	3	5.6
白色無釉陶器	0	0
灰釉陶器	0	0
輸入陶磁器	0	0
総計	54	100.1

4 左京一条三坊 (鳥丸線 No.60) 溝 1 (II 古)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	6	3.5
須恵器	19	11.1
緑釉陶器	112	65.5
白色無釉陶器	5	2.9
灰釉陶器	28	16.4
輸入陶磁器	1	0.6
総計	171	100.0

5 右京四条二坊 (両洋高校)SD1 (II 古)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	54	21.5
須恵器	58	23.1
緑釉陶器	103	41.0
白色無釉陶器	3	1.2
灰釉陶器	33	13.1
輸入陶磁器	0	0
総計	251	99.9

6 右京二条三坊 SE10 掘形 (II 中)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	25	13.7
須恵器	7	3.8
緑釉陶器	88	48.1
白色無釉陶器	15	8.2
灰釉陶器	39	21.3
輸入陶磁器	9	4.9
総計	183	100.0

7 左京二条三坊 SX25 (II 新)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	218	36.6
須恵器	85	14.3
緑釉陶器	150	25.2
白色無釉陶器	47	7.9
灰釉陶器	68	11.4
輸入陶磁器	28	4.7
総計	596	100.1

8 左京二条二坊 (陽成院)SE19 (II 新)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	104	18.6
須恵器	19	3.4
緑釉陶器	256	45.7
白色無釉陶器	130	23.2
灰釉陶器	46	8.2
輸入陶磁器	5	0.9
総計	560	100.0

9 右京二条三坊 SD23 (III 古)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	179	42.6
須恵器	53	12.6
緑釉陶器	85	20.2
白色無釉陶器	25	6.0
灰釉陶器	65	15.5
輸入陶磁器	13	3.1
総計	420	100.0

10 内裏 SK25 (III 古)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	27	5.4
須恵器	8	1.6
緑釉陶器	96	19.4
白色無釉陶器	339	68.3
灰釉陶器	21	4.2
輸入陶磁器	5	1.0
総計	496	99.9

11 右京三条二坊 SE04 (III 中)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	132	19.3
須恵器	120	17.6
緑釉陶器	274	40.1
白色無釉陶器	4	0.6
灰釉陶器	121	17.7
輸入陶磁器	32	4.7
総計	683	100.0

12 左京一条三坊 (鳥丸線立-17) 井戸 1 (III 中)

器種	破片数	比率 (%)
黒色土器	157	57.9
須恵器	24	8.9
緑釉陶器	54	19.9
白色無釉陶器	17	6.3
灰釉陶器	18	6.6
輸入陶磁器	1	0.4
総計	271	100.0

2 右京三条三坊の平安時代遺物の検討

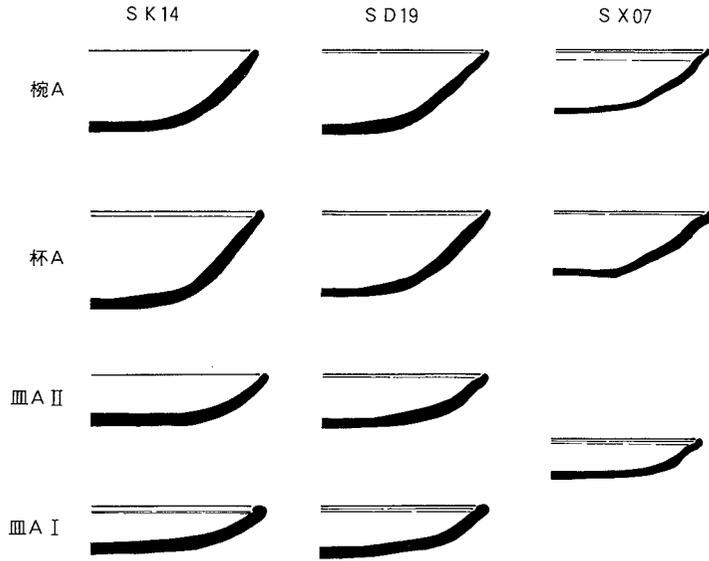
右京三条三坊出土の土器群について、前節に述べた型式区分および破片数データからみた各期の土器様相の特徴から検討した結果、I中に属するものとしてSD11A、SK14、SB29、SB31、SB32、四町地区整地層2出土土器などをあげることができる。I新に属するものはSD11B、SD12B、SD13B、SD19、SB20、SD22、SD23、SE26、SK43、SK44、五町地区南部包含層出土土器など多数があり、出土量も豊富なものが多い。II古以降で単一の型式に属する土器群はなく、十町地区包含層がI新～II古、SX07やSX47、SD54がII古～II中の時期幅をもつ。これより新しい特徴をもつものとしてはSX46出土土器が唯一の資料である。またこれら各土器群の様相的な特徴も京内各所の破片数データと大きな差異はなく、平安京での一般的な出土傾向といえよう。ただ右京三条三坊では出土する土器のほとんどが9世紀に属するもので、なかでも建物、溝、土壌などの明瞭な遺構に伴うものはSX46を除いて9世紀の前半に限られる点に留意する必要があるだろう。

A 9世紀代の土器類

前項では、土師器小型器形を軸に行った型式編年と破片データからみた各期の土器様相の2点から、平安京から出土する土器様相の概略と、その中で右京三条三坊出土土器の占める位置をみてきたが、この項では右京三条三坊出土土器群のうち主として資料の豊富なSK14(I中)、SD19(I新)、十町地区包含層(I新～II古)、SX07(II古～中)などの内容を通して9世紀代を中心とした土器様相を器種別にやや詳細に検討したい。

土師器 椀・杯・皿の製作技法、形態や法量変化については前項で簡単にふれたが、ここでは具体的に上記の土器群のものを比較してみよう。製作技法のうち外面の調整技法をみると、SK14、SD19ではc手法の占める比率が9割以上を占め、その他がe手法である。十町地区包含層では、ほぼ4:1の割合でe手法が多く、SX07では逆にe手法が9割以上を占める。c手法からe手法への移行が漸進的なものではなく、I新からIIにかけてかなり急激に移行したことがうかがえる。次に椀A、皿A、杯Aの口縁端部の形態については第二章で椀Aの口縁端部をa類、b類に分類したが、その比率はSK14で、ほぼ2:1でa類、SD19では1:2でb類が多く、さらに十町地区包含層では大半が、SX07ではすべてb類と、a類からb類への推移が認められる。皿AIIの端部にもこうした傾向がみられ、おおむね椀A同様の変化をたどる。ただSD19に皿A Iのように内側に肥厚する口縁端部をもつ一

群があり、形態的には皿A Iに類似する一群があることは注目される。皿A I、杯AはSK14では内方へ肥厚する口縁端部をもつが、SD19ではともに椀Aのb類に類似した小さくつまみ上げるものがかなり含まれている。十町地区では良好な資料はないが、SX07ではb



挿図 68 土師器小型器形の口縁端部の変化

類の口縁部をもち、やはりこれらの器形でもb類への遷移が指摘できる。また各器形とも口縁部外面のナデが一部削り残されるものはSK14ではわずかであったが、SD19ではそれがかなり増加し、ナデが口縁部を全周する個体もみられるようになる。十町地区ではナデの部分が外反するものも増加し、SX07ではすべて強いナデが施される。こうした端部の処理の統一によってSK14ではそれぞれ独自のものをもっていた各器形の口縁形態がSX07ではほとんど均一になっている。さらに法量面では椀Aの口径を除いて、すべての器形での減少が認められる。口径の減少は大型の器形ほど顕著で、椀AではむしろSK14のものよりSD19やSX07のものの方がやや大きくなっている。杯AはSK4ではすべて16.0cm以上の口径をもつが、SD19には16.0cmを割るものもわずかにある。SX07ではさらに口径が減少しており、椀Aに近づくが、法量分布をみればこの二つの器形は明瞭に区別できる。器高についてはすべての器形とも減少しており、口縁部の傾きも増加する。次に椀・杯・皿類以外の主な器形について概観してみると、器形の種類の減少をあげることができる。SK14やSD19には杯B、杯B蓋、皿B、高杯、鉢、盤、壺、甕など多くの器形があるが、SX07ではこのうち杯B蓋、皿B、壺などがなく、杯Bの量も非常に少ない。また、杯B蓋の外面調整技法をみると、SK14の杯B、蓋にはすべてヘラミガキが施されているが、SD19ではミガキがなく、ヘラケズリのままのものがほとんどを占める。さらにSX07ではオサ

エだけのものも多い。高杯の杯部、裾部の調整も同様の変化をたどり、SD19ではヘラミガキを省略し、ヘラケズリだけのものや、口縁部のナデを削り残すものが増え、SX07ではケズリの非常に粗いものやヘラケズリしないものもある。脚部のケズリも下方までおよばないものや、粗いものが増加する。杯Bや高杯にはこのほか法量の減少も顕著に認められる。甕類については全形のわかる資料が少なく、形態や、法量の変化を具体的に指摘することは困難だが、外面のハケメ調整を省略し、タタキメを残すものが増加する傾向がみられる。以上の事項を整理してI中～II新にかけての土師器の変化の要点を述べると、ヘラミガキ、ヘラケズリの消滅、オサエとナデへの製作技法の移行、さらにオサエ技法の発展による器厚の減少、小型器形の口縁部形態の種類の単純化、法量の減少などをあげることができる。

黒色土器 黒色土器はSK14、SB32などI中の遺構では非常にわずかで、器形もほとんど杯Aに限られている。SD11B、SD12B、SD19などI新の遺構では杯B、椀A、椀B、皿A、皿B、鉢、壺、甕など種類も豊富になり、出土量も増える。II古～II中のSX07ではさらに増加するが、鉢や甕などのほかは椀Bが主体で、むしろ器形の種類は減少している。黒色土器には内面だけに炭素を吸着させるA類と、両面に吸着させるB類とがあるが、SD11Aの椀B(4-79)、壺(4-80)、SD19の皿(5-97)、SX46の椀B(10-191)など少数の例外を除きすべてA類である。各期を通じて主製品である杯椀類の変化に付いてみると、高台の一般化、法量の減少、口縁部内面に沈線を施すものの増加、あるいはヘラミガキや暗文など調整、装飾技法の簡略化などがみられる。

須恵器 まず杯・椀・皿など小型食器類の器形の種類について検討してみよう。I中に属する土器群では杯A、杯B、杯B蓋、皿Aなど前代から引き続いて生産されていた器形だけに限られるのに対し、I新の土器群には緑釉陶器に近似した形態をもつ椀皿類が加わり、II古以降には前記の伝統的な器形の割合がさらに少なくなる。以下、これらをI類(杯A、杯Bなど伝統的な形態のもの)、II類(緑釉陶器の椀皿に近似した形態をもつもの)、III類(調整や成形が鉢類と共通する椀類)に分類し、主な遺構別にみて行こう。I中に属するSK14にはI類しか含まれないことは先にも述べた。SD19、SD11BなどI新に登場するII類には、体部にロクロメと底部外面に糸切りを残し、特に調整しない一群と、ヘラケズリやヘラミガキなど緑釉陶器同様の調整を施す一群がある。II古～II中のSX07にはI類II類に加えIII類には体部に強いロクロメを残し、底部外面に糸切りをもつものが多く、端部の形態も鉢と同様のものが多い。遺構別にその比率をみると時期が下がるとともにII

表 34 須恵器小型器形の形態別の比 (%)

	SK14	SD19	SX07
I 類	100.0	59.7	37.8
II 類	-	40.3	34.9
III 類	-	-	27.3

類およびIII類が新たに加わることがわかる。またII類のうち、SD19では非常にわずかであった緑釉陶器と同様の調整を施すものが、SX07ではII類の7割近くに増加していることは注目すべきである。

壺類には全形のわかる資料は少ないが、底部に高台の付くものが減少し、糸切り痕を残すものが増加する傾向が指摘できる。特に小型の瓶類についてはそのほとんどが糸切り、未調整の底部をもつ。鉢には体部が直線的に外方へ広がるものと、口縁付近で屈曲する二種があるが、時期が下るとともに後者の割合が増え、端部も玉縁状になるものが加わる。底部も壺と同様に高台の付くものがなくなり、平底で、糸切り痕を残すものだけになる。甕には口縁部形態や、体部のタタキメなどからみて多くの種類があるが、小片が多く全形のわかる資料は皆無で、変化の傾向をつかむことはできなかった。

緑釉陶器 緑釉陶器は右京三条三坊ではSD19、SX07などI新からII中にかけての遺構や遺物包含層から多量に出土しているが、SK14などI中に属す遺構から出土した土器群にはまったく含まれていない。出土した緑釉陶器の大半は碗・皿類で、その他の器形はきわめて少ない。これらの碗・皿類は、形態、胎土、釉など材質の相違、あるいは成形技法、焼成方法など、さまざまな要素によって分類することができるが、特に底部の形態とその成形技法には、時期や生産地の特徴がよく現れているため、その分類を中心に検討を進めたい。なお緑釉陶器の底部の特徴は白色無釉陶器や灰釉陶器とも共通する点が多く、以下にそれらと合わせた底部の分類を示す(挿図 69、写真図版 72 参照)。

まず成形技法により次の三種に分類する。

0 類(糸切り) 底部外面に糸切り痕を残し、特に調整しないもの。

I 類(削り出し) 底部をヘラケズリによって成形したもの。

II 類(貼り付け) 一次成形後の器体底部に別土を貼り付け、高台を作るもの。

次に大まかな形態を三種に分類する。

A 類(円盤状高台)

B 類(輪高台)

C 類(無高台)

B 類を形態により a b c d e f・・・に分け、細部の違いによってさらに 1 2 3 4・・・と細分する。このように分類したものが挿図 69 である。以下に各形態の特徴について説明

を加える。

- 0 A 底部外面に糸切り痕を残し、円盤状高台になるもの。
 - 0 C 底部外面に糸切り痕を残し、無高台のもの。
 - I A 円盤状の高台。底部外面がほぼ平坦なもの、底面中央が上方へ凹むもの、底面外周がわずかに下方へ張り出すものなどがあるが、いまのところ一括しておく。
 - I Ba 円盤状の高台中央部に円形あるいは環状の凹みを作る。いわゆる蛇の目高台。高台端面の幅は個体によりかなり差があるが、ここでは一応高さの倍以上のものをこれにする。
 - I Bb 技法的には I Ba と本質的な差はないが、細い輪状に高台を削り出すもの。I Ba と共にケズリの深さや精粗によりさらに分けることができるが、ここでは細分しない。
 - I C 底部をケズリにより調整し、小さな平底、あるいは丸底に仕上げたもの。
 - II Ba いわゆる蛇の目高台。I 類のものに比べ相対的に高台幅を狭く、ナデのため端面が上方へわずかに凹む。通常この端面は内傾するが、ほぼ水平なものもある。
 - II Bb 細い輪高台をもつもの。高台幅と高さがほぼ同じもので断面が隅丸方形になるものを II Bb1 に、丸味の強いものを II Bb2、高台高が比較的高く断面が隅丸方形になるものを II Bb3、高台高が比較的高く丸味の強いものを II Bb4 と分類する。
 - II Bc 内傾し、わずかに凹む端面をもつもの。II Ba の幅の狭いものに類似するが、それより幅は狭いものが多い。底部外面の糸切りを未調整のまま貼付けているものが多い。高台高が低いものを II Bc1、高台高が高いものを II Bc2 に分類する。
 - II Bd 外下方へ張り出し、端部外面を丸く内方へおさめるもの、いわゆる三日月高台。このうち低いものを II Bd1、比較的高いものを II Bd2、高く屈曲の強いものを II Bd3、屈曲が弱く端部がすぼまるものを II Bd4 に分類する。
 - II Be 断面が三角形を呈し、ほぼ垂直につくもの。低いものを II Be1、高いものを II Be2 とする。
 - II Bf 直線的に外下方に張り出す断面三角形の高台。
- 上記の区分にしたがって各期の緑釉陶器を分類し、各形態の比率の変化をみて行こう。検討資料としては多量の緑釉陶器を含む SD19(I 新)、十町地区遺物包含層(I 新～II 古)、SX07(II 中～古) のものを取り上げた。

技法別の比率では各資料とも I 類が 7 割以上を、ついで II 類が 1～2 割程を占める。0

	A	B						C
O								
I		a	b					
II		a	b	c	d	e	f	
		1	1	1	1	1	1	
			2	2	2	2		
			3	3	3	3		
			4	4	4	4		

挿図 69 施釉陶器の底部の形態分類

類は時期が下がるにつれやや増加する傾向があるものの、全体の中に占める割合は各時期とも1割に満たない。各技法ごとにその内容(表35)をみると、I類ではSD19で半数近くを占めていたI Aが減少し、十町地区包含層ではI Ba、I Bbが合わせて半数近くを占める。SX07ではI Bbが最も多くI Aはさらに少なくなる。底部の形態の主流が円盤状の高台から蛇の目高台を経て細い輪状の高台へ移行する過程が認められる。II類ではII Ba

表 35 緑釉陶器の底部の形態

	SD19			十町地区包含層			SX07		
	個体数	比率 (%)		個体数	比率 (%)		個体数	比率 (%)	
OA	3	100.0	3.7	5	100.0	5.1	22	100.0	5.8
小計	3	100.0		5	100.0		22	100.0	
I A	40	65.6	75.3	34	41.5	83.7	47	17.3	71.9
I Ba	13	21.3		28	34.1		57	21.0	
I Bb	6	9.8		20	24.4		167	61.6	
I C	2	3.3		—	—		—	—	
小計	61	100.0		82	100.0		271	99.9	
II Ba	4	23.5	21	3	27.3	11.2	6	7.1	22.3
II Bb1	10	58.8		2	18.2		20	23.8	
II Bb2	2	11.8		2	18.2		3	3.6	
II Bb3	1	5.9		2	18.2		43	51.2	
II Bb4	—	—		—	—		8	9.5	
II Bc	—	—		2	18.2		4	4.8	
小計	17	100.0		11	100.0		84	100.1	
総計	81	100.0		98	100.0		377	100.0	

類が時期を追って減少するほか、II Bb類ではSD19で主流を占めたII Bb1が減少し、SX07ではSD19にないII Bb3やII Bb4のような高い高台が主流になる。またわずかではあるが十町地区包含層やSX07にみられるII Bc類もSD19には存在せず、II古以降に出現する形態である。

表 36 緑釉陶器のミガキの部位

SD19				
ミガキの部位	0類 (%)	I類 (%)	II類 (%)	合計 (%)
全面	—	10(23.3)	16(94.1)	26(41.9)
底部外面以外	—	1(2.3)	—	1(1.6)
内面のみ	—	32(74.4)	1(5.9)	33(53.2)
なし	2(100.0)	—	—	2(3.2)
合計	2(100.0)	43(100.0)	17(100.0)	62(99.9)
十町地区包含層				
ミガキの部位	0類 (%)	I類 (%)	II類 (%)	合計 (%)
全面	—	5(15.2)	4(80.0)	9(20.9)
底部外面以外	—	1(3.0)	—	1(2.3)
内面のみ	—	27(81.8)	1(20.0)	28(65.1)
なし	5(100.0)	—	—	5(11.6)
合計	5(100.0)	33(100.0)	5(100.0)	43(99.9)
SX07				
ミガキの部位	0類 (%)	I類 (%)	II類 (%)	合計 (%)
全面	—	23(12.9)	32(45.1)	55(20.3)
底部外面以外	—	15(8.4)	20(29.2)	35(12.9)
内面のみ	2(9.1)	140(74.4)	15(21.1)	157(57.9)
なし	20(90.9)	—	4(5.6)	24(8.9)
合計	22(100.0)	178(100.0)	71(100.0)	271(100.0)

次にその他の製作技法について検討する。表36はヘラミガキを施す部位を高台の成形技法別に計数したものである。時期が下がるとともに、全面に施すものが減少し、部分的にミガキを省略するものが増加しているが、各時期を通じI類に比べII類の方に丁寧に調整されている個体が多い。特にSD19ではII類の大部分が全面にヘラミガキを施されているのに対し、I類では約2割に過ぎない。ミガキの程度も、

総じてⅡ類の方に丁寧で密に施すものが多い。施釉後の焼成時における重ねの方法については、Ⅱ類が各時期を通じてトチンを使用しているのに、Ⅰ類ではSD19で100%、十町地区包含層で37%、SX07で23%と、トチンを使用するものが減少し、それにかわり直接重ねるものが増加する。施釉部位もⅡ類は各時期とも全面に施釉するのが、Ⅰ類では底部外面に施釉しないものがSX19にはなく、十町地区包含層で12.5%、SX07では51.6%と増加している。このように製作技法の面からⅠ類とⅡ類を比較すると、Ⅱ類がある程度の品質を保って緩やかに変化して行くのに対し、Ⅰ類には技法の省略や粗雑化が目立ち、品質の低下が顕著に認められる。

緑釉陶器の椀、皿、蓋、香炉蓋、浄瓶、硯などの中に陰刻花文を施したものがある。これらの中で最も多いのは椀、皿類であるが、このうちⅠ新に属する資料はⅡ類の高台をもつものに限られ、Ⅰ類の底部のものはⅡ古以降に出現する。文様の種類は主に花文で、その他に葉文、飛雲文などがある。これらの文様は一つの器に単位文様が複数で組み合わせられて施文されることが多いが、花文の種類や構成にも時期による差違が認められる。全般的には時期が古いほど、単位となる文様が複雑でその種類も多く、したがって組合せも変化に富む。

白色無釉陶器 この土器が土器類全体の中に占める比率は非常に少ない。また緑釉陶器、灰釉陶器と同じく、Ⅰ中にはなく、Ⅰ新以降の土器群中に含まれている。ほかの出土例からみてもこの時期に生産され始めたものと思われるが、数量的にある程度目立つようになるのはⅡ古以降である。形態的特徴や製作技法はⅠ類の底部をもつ緑釉陶器と共通する点が多い。

灰釉陶器 灰釉陶器はSK14などⅠ中の土器群に壺類が含まれているが、その量は非常に少ない。椀、皿類を中心として多量に出土するのは、緑釉陶器同様SD19、SX07などⅠ新以降の遺構や包含層からである。主な遺構から出土した椀、皿類の底部の種類を表37に示したが、灰釉陶器にはⅠ類の底部をもつものはなく、0類が例外的にあるほかすべてⅡ類の高台が付く。時期別にみると、SD19ではⅡBb1を主とするⅡB類ばかりであるのに対し、十町地区包含層ではⅡBb類を主体としながらも、ⅡBd類やⅡBe類が加わり、種類が増える。さらにSX07ではⅡBb類は減少し、かわってⅡBd類（特にⅡBd2）が著しく増加し、全体としてⅡBb類からⅡBd類への移行がうかがえる。またⅡBa類はSD19には存在しないが、ほかにこれを含むⅠ新の資料があり、わずかであるがこの段階から生産されていたのは明らかである。この形態は十町地区包含層ではかなり高い比率を示すが、

表 37 灰釉陶器の底部の形態

	SD19		十町地区包含層		SX07	
	個体数	比率 (%)	個体数	比率 (%)	個体数	比率 (%)
0C	-	-	-	-	1	100.0
小計	-	-	-	-	1	100.0
II Ba	-	-	14	10.2	8	2.3
II Bb1	51	92.7	72	52.6	17	4.9
II Bb2	4	7.3	10	7.3	8	2.3
II Bb3	-	-	2	1.5	19	5.5
II Bb4	-	-	0	0.0	2	0.6
II Bd1	-	-	3	2.2	9	2.6
II Bd2	-	-	30	21.9	263	75.8
II Bd3	-	-	1	0.7	2	0.5
II Bd4	-	-	1	0.7	4	1.2
II Be1	-	-	2	1.5	4	1.2
II Be2	-	-	1	0.7	-	-
II Bf	-	-	1	0.7	11	3.2
II 計	55	100.0	137	100.0	347	100.0
合 計	55	100.0	137	100.0	348	100.0

SX07 では逆に減少しており、緑釉陶器の I Ba 類、II Ba 類の比率の変化と対応している。灰釉の施釉部位についてみると(表 38)、SD19 では内面だけに施釉するものが圧倒的に多く、十町地区包含層でもこの傾向にかわりはない。しかし SX07 では体部の内外面だけに施釉するものが主流になり、前 2 遺構ではハケ塗りばかりであった施釉方法にも、漬けかけのものが加わるなどの変化がみられる。

表 38 灰釉陶器の施釉部位の比較

	SD19	十町地区包含層	SX07
全面	1 (3.0%)	-	-
底部外面以外	2 (6.1%)	1 (8.3%)	1 (2.9%)
内面	30 (99.9%)	11 (91.7%)	4 (11.8%)
体部外面	-	-	3 (8.8%)
低部内外面以外	-	-	26 (76.5%)
合計	33 (100.0%)	12 (100.0%)	34 (100.0%)

壺、瓶類は長頸壺、短頸壺、平瓶、把手付き壺など多くの種類があり、特に SX07 では出土量も多い。その他の器形としては、蓋、唾壺、香炉、硯などがある。また陰刻花文を施したのもわずかにある。I 新～II 中を通じて灰釉陶器には、器形や主製品が椀、皿類であるなど緑釉陶器と共通する面が多いが、緑釉陶器に対して壺、瓶類の比率がかなり高いことが指摘できる。

輸入陶磁器 右京三条三坊で出土した輸入陶磁器は総数 43 片で、土器類全体の中では非常にわずかである。このうち確実に I 新に属するものは SD19 の黒釉陶壺片だけで、ほかは十町地区包含層、SX07、SX47 など主に II 古以降の遺構に集中している。種類は先の黒釉陶のほか、青磁椀、合子、白磁椀、稜椀、壺蓋、黄釉椀などがあるが、越州窯系の椀類が多い。黒釉陶は、平安時代前期のものとしては平安京では初見であるが、ほかの内容は、平安京内のこれまでの例と比較して、9 世紀後半の一般的な出土傾向としてとらえられるものである。

B 瓦 類

今回の調査で出土した軒瓦は、軒丸瓦 68 点、軒平瓦 39 点で、そのほとんどが小片であった。出土量に比べ種類は多様であるが、各種の出土点数は少ない。また、丸瓦や平瓦も散発的な出土状況であった。出土瓦の中で最も古い時期のものは、奈良時代平城京で使用されていた瓦類である。このほかに、長岡京の乙訓寺や宝菩提院から出土しているものもある。これらの一群の搬入瓦は、量的にきわめて少ない。

軒瓦の中で出土量の多かったのは、平安時代前期に西賀茂窯で生産されたもので、総出土量の半数以上を占めている。このほかに、ベンガラ註53の付着した軒平瓦や丸瓦も出土している。また、瓦当面に「大伴」銘を飾る軒瓦が、軒丸瓦 6 点、軒平瓦 2 点が出土している。「大伴」銘を飾る軒瓦が組み合って出土した例は平安京内ではきわめてまれである。平安時代中期および、それ以降の瓦は少なく、平安時代後期以降のものは一切出土していない。

以上述べた点を要約すると、

1、平安時代前期の軒平瓦の凸面にベンガラ註53の付着するものや緑釉瓦が含まれており、宮域内の色彩が濃いものが含まれている。このほかにも軋註54や凝灰岩なども併出している。

2、出土した瓦の絶対量が少なく、その出土状況も分散的で、遺構に伴うものではない。又、そのほとんどが小片であることや、検出した建物が小規模であることなどから、これらの瓦は、屋根に葺かれたものではなく、二次的な利用をするために運び込まれたものと考えられる。たとえば、礫の代用品として通路や建物の周囲に敷きつめたものではないかと考える。なお「大伴」銘の瓦や、乙訓寺と同範の軒丸瓦などについては、宮域内からはほとんど出土しておらず、宮とは別の地域から運び込まれた可能性が高く、今後の検討を要する。

C 漆製品の技法について

平安前期の漆膜の観察（写真図版 71）

右京三条三坊から出土した平安時代前期の 6 点の漆製品のうち、完形に近いものは黒漆の皿 1 点のみでほかはいずれも断片である。これらの資料から 3～5 mm 角の漆膜を採取し、合成樹脂に包埋して薄片註54を作成し顕微鏡下で素地、下地の有無と厚さ、下地の混合物、漆層の塗りの回数、混合物について観察を行い、これまで伝世品が少ないことから『延喜式』などに記録された漆製品の記載をもとに考察されることが多かった平安時代前期の漆工の一端註54の解明を試みた。以下に観察の結果を述べる。

資料 1 SX46 の木棺内に納められた化粧道具一式が納められた黒塗りの折敷註55の漆膜断面

である。漆膜は漆下地と3層の漆層からなり、全体の厚さは約380 μm である。下地の厚さは320 μm で2層ないし3層からなるようにみえるが、境界面は明かでない。下地を3層とすると下から1層目は透明感があり混合物は少なく漆分が多い。2層目はやや厚く混合物により不透明、3層目は混合物に広葉樹の木炭片（長径130 μm ）を多数観察できる。漆層はいずれも平滑で厚さが均一であり丁寧な研磨が施されている。下塗りの1層目（8 μm ）は研磨によるため非常に薄く、中塗りの2層目（16 μm ）は透明であり、上塗り（29 μm ）は厚く褐色で表面に細かい亀裂が多数入る。

資料2 SX46の折敷（資料1）の上に置かれていた両面黒塗りの漆器皿で、口縁部外面の漆膜断面である。素地はケヤキで横木取りである。漆膜は漆下地と3層の漆層からなり、全体の厚さはおよそ340 μm である。下地の厚さは194 μm 、下地には混合物として細かい鉱物粒（最大径20 μm ）を認めることから土漆である。本資料の下地粉はきわめて細かく均一で、沢口の粒計^{註56}による分類に従えば、270メッシュ（50 μm ）よりさらに細かく、粘土を水簸して精選した地粉と思われる。3層の漆層（50 μm ・54 μm ・33 μm ）は各層とも均一な厚さで中塗りの2層目の漆が褐色が最も濃く、上塗りは透明に近く透漆であろう。

資料3 SE06から出土した内面が朱、外面が黒漆の漆器皿内面の漆膜である。素地はケヤキで横木取り。漆膜は漆下地と2層の漆層からなり全体の厚さはおよそ370 μm である。下地の厚さは286 μm 、繊維層とその上に混合物として細かい鉱物粒（最大径80 μm ）がみられ、布着せと土漆が施される。漆層は2層（28 μm ・56 μm ）からなり、いずれもごく細かい混合物がみられる。2層目が朱漆層で、水銀朱とみられる細かな角張った赤色の粒子（長径10 μm ）を認める。

資料4 資料3と同一個体の外面の黒漆膜である。漆膜は内面同様に漆下地と2層（22 μm ・18 μm ）の漆層からなるが、全体の厚さは200 μm をこえる程度で内面よりかなり薄い。下地（182 μm ）は布着せ、土漆とも内面と同様である。漆層の厚さは内面より薄く、1層目は内面同様の混合物がみられる。表面に細かい亀裂が入る。

資料5 SD19から出土した黒塗りの漆器碗の漆膜。素地はなく漆膜だけが遺存している。漆膜素地側には素地（環孔材、ケヤキ？の横木取り）の痕跡がはっきり残っている。漆膜の厚さはおよそ220 μm 。下地には特に土漆は施していないが、部分的に100 μm ほどの木質が残っていることから、木固めに漆が塗られていたようである。漆層は1層目（26 μm ）は不透明で混合物が多く、2層目（34 μm ）は透明で、上塗り（18 μm ）はやや不透明な

層であり、塗り方は資料1と同様のパターンがみられるが、資料1ほど平滑ではない。

資料6 SD19から出土した黒塗りの漆器碗の漆膜。素地はなく漆膜のみが遺存している。漆膜の内側には素地の痕跡が残っており、環孔材（ケヤキ?）である。漆膜の厚さはおよそ650 μ mと厚い。下地は布着せ（二重?）と、その上に混合物として鉍物粒（最大径90 μ m）を含む土漆を施す。布着せした表面は凸凹で特に研磨した様子はみられない。下地の厚さは600 μ m近く、下地の上に薄い漆を1層（45 μ m）塗って仕上げているが表面はあまり平滑ではない。

資料7 SD19から出土した黒塗りの漆器碗の漆膜。素地はなく漆膜だけが遺存している。漆膜内面には資料5、6同様、環孔材（ケヤキ?の横木取り）の痕跡が残る。漆膜は厚い下地（780 μ m）と1層の漆層（50 μ m）からなる。下地は複雑で、まず素地に漆を直接塗り、その上に混合物として粗い鉍物粒（200 μ m）が入る土漆層とその上の繊維層が観察できる。繊維の表面は凸凹で、それを埋める土漆（粒径70 μ m）を再度塗る。その上に漆を一層塗り、仕上げとする。

平安時代前期の漆工の技法

漆皮箱 漆皮箱は奈良時代における漆工の中で最も特徴的な技術であり、平安時代後期にはほとんど行われなくなった技法である。平安時代の漆皮箱は伝世品も数が少なく、資料1は平安時代前期の資料として貴重なものといえる。資料1で特徴的なことは、奈良時代の正倉院の漆皮箱39例中その大部分に布着せが施されているのに対して、それがみられないことである。『延喜式』の「内匠寮式」には漆皮箱の製作材料について、

年料革篋廿合。就中衾篋四合。二合各長二尺。廣一尺八寸五分。深五寸。衣篋六合。鷹鼻。各長一尺五寸五分。廣一尺三寸。釧緒篋一合。廣一尺一寸二分。深二寸。巾篋二合。各長一尺二寸。深八分。唾巾篋二合。各長一尺一寸五分。廣一尺三寸。深一寸五分。刀子篋一合。鷹鼻。長一尺二寸。廣一尺。深一寸二分。牛皮十張。各長八尺。鹿皮十張。各長五尺。漆六斗六升四合。熟麻廿斤七兩。張繩一丈五尺。石見庸錦廿二斤十兩。掃墨二斗四合。黏料信濃調布四端二丈五尺。小麦二斗四合。伊豫砥五顆。青砥四枚。椽繩一疋三丈。革篋工三。芋四斤九兩。緣料。絹六尺四寸。油三升三合。鉄二廷。皮燒并皮刀料。調布八尺八寸。炭九斛二斗五升。和炭二斛二斗三升。歩板六枚。篋形單巧七百六十一人。工七百一十人。夫五十人。

とある。

このうち「黏料信濃調布四端二丈五尺。小麦二斗四合。」の「調布」は布着せの布、「小麦」

は布を貼る黏(のり)、「熟麻」は漆皮の製作過程で皮を押さえる縄の材料である。これと比較すると、資料1の漆皮箱には『延喜式』記載の製作工程である布着せが観察できず、その点でやや省略がみられる。

朱漆器 朱漆器については同じく『延喜式』の「内匠寮式」に、

酒海一合。受^{一斗}五升。漆一升六合。朱砂六兩。贗布五尺。繩。布各二尺。綿八兩。掃墨二合。油一合。

長功卅四人。中功繩人。短功繩六人。

花盤一口。徑^{九寸}料。漆一合五勺二撮。朱砂一分四銖。贗布九寸。繩。布各二寸。綿三分。掃墨二勺。

油一勺。長功一人大半。中功二人。短功二人小半。

飯椀一口。徑^{八寸}料。漆一合二勺。朱砂一分。贗布五寸。繩。布各一寸。綿三分。掃墨二勺。油一勺。

炭一升。長功一人大半。中功二人。短功二人小半。

羹椀一口。徑^{七寸}料。漆一合二勺。朱砂一分。贗布五寸。繩。布各一寸。綿三分。掃墨二勺。油一勺。

炭一升。長功一人小半。中功一人大半。短功二人。

の例や、

朱漆臺盤三面。各^{三尺}加臺。料。漆九升。朱砂卅兩。掃墨三升。油五合。燒土五升。綿三屯。絹七尺。

細布一丈二尺。信濃布一丈二尺。調布一丈五尺。伊豫砥一顆。青砥二枚。阿膠十兩。炭一斛。

単功廿五人。

などの記載から、1個の容器に「朱砂」、「掃墨」をそれぞれ漆と混合して朱漆、黒漆で塗り分けたこと、下地には「贗布」を布着せに使用した例のあることがうかがえる。ところで、朱漆器の下地には、「燒土」の記載があるものとないものがあり、「内匠寮式」では後者が圧倒的に多い。なかには、

酒海三合。各^受二斗。二合料。漆四升。朱砂十六兩。贗布一丈。絹。布各四尺。綿一斤。油四合。

炭一斛。一合料。漆二升。掃墨七合。燒土八合。贗布五尺。絹。布各一尺五寸。油一合。炭

二斗五升。単功十三人。朱漆八人。黒漆五人。

下食盤十枚。各^{方一尺七寸}料。漆五升。朱砂十二兩。掃墨二升。燒土二升。油三合。贗布一丈。絹六尺。

綿三屯。炭一斛。単功卅人。

のように書き分けて、三合のうち二合には朱漆のみが、ほかの一合には黒漆のみが用いられ、朱漆の下地には「燒土」の使用はみられず、黒漆の場合にのみ下地に「燒土」が用いられる例もみられる。こうした、「内匠寮式」記載の朱漆器をみるとSE06出土の朱漆器は内外を朱と黒漆で塗り分けた例で、下地に土漆を施した丁寧な作りといえる。

一方、朱漆器でない通常の黒漆の漆器について「内匠寮式」の燒土をみると、

手湯戸一合。腹周五尺。臺一脚料。漆二升五合。絹一尺五寸。綿一屯。細布一尺五寸。賃布八尺。
掃墨五合。焼土一升。油二合。炭五斗。単功八人。
手洗一口。徑一尺七寸。深六寸。料。漆一升。絹一尺。綿八兩。細布三尺。調布四尺。掃墨五合。焼土六合。
炭五斗。単功七人。

と「焼土」が使用される例と、

手湯戸一口。周五尺八寸五分。蓋一枚。周三尺五分。料。漆三升。掃墨五合。賃布九尺。
綿一斤四兩。繩。布各一尺二寸。油二合。功五人大半。
水槽一口。周三尺五寸。高一尺二寸五分。料。漆一升一合。賃布四尺。掃墨三合。綿十兩。繩。布各一尺二寸。
油二合。炭一斗。功二人。
手洗槽一口。周七尺一寸。高九寸。料。漆二升五合。賃布八尺五寸。掃墨五合。綿一斤。繩。
布各一尺二寸。油二合。炭二斗。功四人。
大椀一口。徑八寸六分。深三寸。料。漆一合七勺。賃布一尺。掃墨四勺。綿二兩。功半人
中椀一口。徑七寸八分。深二寸。料。漆一合四勺。賃布九寸。掃墨四勺。綿二兩。功半人。
盤一口。徑八寸。料。漆一合一勺。賃布五寸。掃墨三勺。功半人。

と、「焼土」が使用されない例とがあり「焼土」が下地に混合されたりされなかったりした
場合があったことがわかる。これは、出土資料にも両者がみられることで『延喜式』の
「内匠寮式」の記載と一致する点である。

下地 『延喜式』の「内匠寮式」にみられる下地には「賃布」、「焼土」が記載される。
出土資料にみられる布の素材には断面の形態から麻がある。下地の混合物で識別できたの
は、粒子に細粗のある粘土鉱物と木炭片である。粘土鉱物は「内匠寮式」の「焼土」に対
応するものである。「青砥」、「伊豫砥」は漆塗りの表面を平滑にするため整形・研磨に用
いられるが、出土資料には漆層が丁寧に研磨されたものとそうでないものがみられる。

平安時代前期の出土漆器の漆膜断面の薄片を作成し、漆技法の検討を行った結果、特に
下地の技法について以下の情報が得られた。

その点は、

- (1) 下地に使用される混合物の多くは粘土鉱物で、粒径は製品により異なるが、朱漆、黒漆に共通して用いられる、
- (2) 下地の混合物には粘土鉱物以外に木炭粉も用いられる、
- (3) 下地に布着せしたものとそうでない製品がある、
などである。

3 平安時代の遺構

A 遺構の時期と配置

第Ⅱ章の表2に示したように三町、四町、五町、十町地区では掘立柱建物など邸宅に関連するとみられる遺構群を検出した。これらが平安時代前期に属するものであることはすでに述べたが、以下では主にこれらの時期と配置、および条坊区画に対する占地などについて検討したい。

三町地区 この地区では掘立柱建物、柵、井戸、溝、湿地状の落込を検出したが、建物はSB01を除いていずれも全体を確認できなかった。調査区の北東部では3棟の建物(SB01、SB04、SB05)が互いに重複しており、三時期に分けることができるが直接の切り合いはなく、各遺構から出土した土器からもこの建物群の前後関係が指摘できるほどの型式差は認められない。井戸SE06は湿地状の落込SX07の埋没後に成立しているが、この両者の出土遺物の間にも形式的な開きはない。一方、建物SB01、SB02など東方の建物群とSX07は前後あるいは並存の両方の可能性が考えられる。いずれにしてもこの地区で出土した平安時代の遺構は9世紀後半のものが主体で、時期幅があまりなく、これらの遺構群は近接した時期に属するものとみることができるだろう。

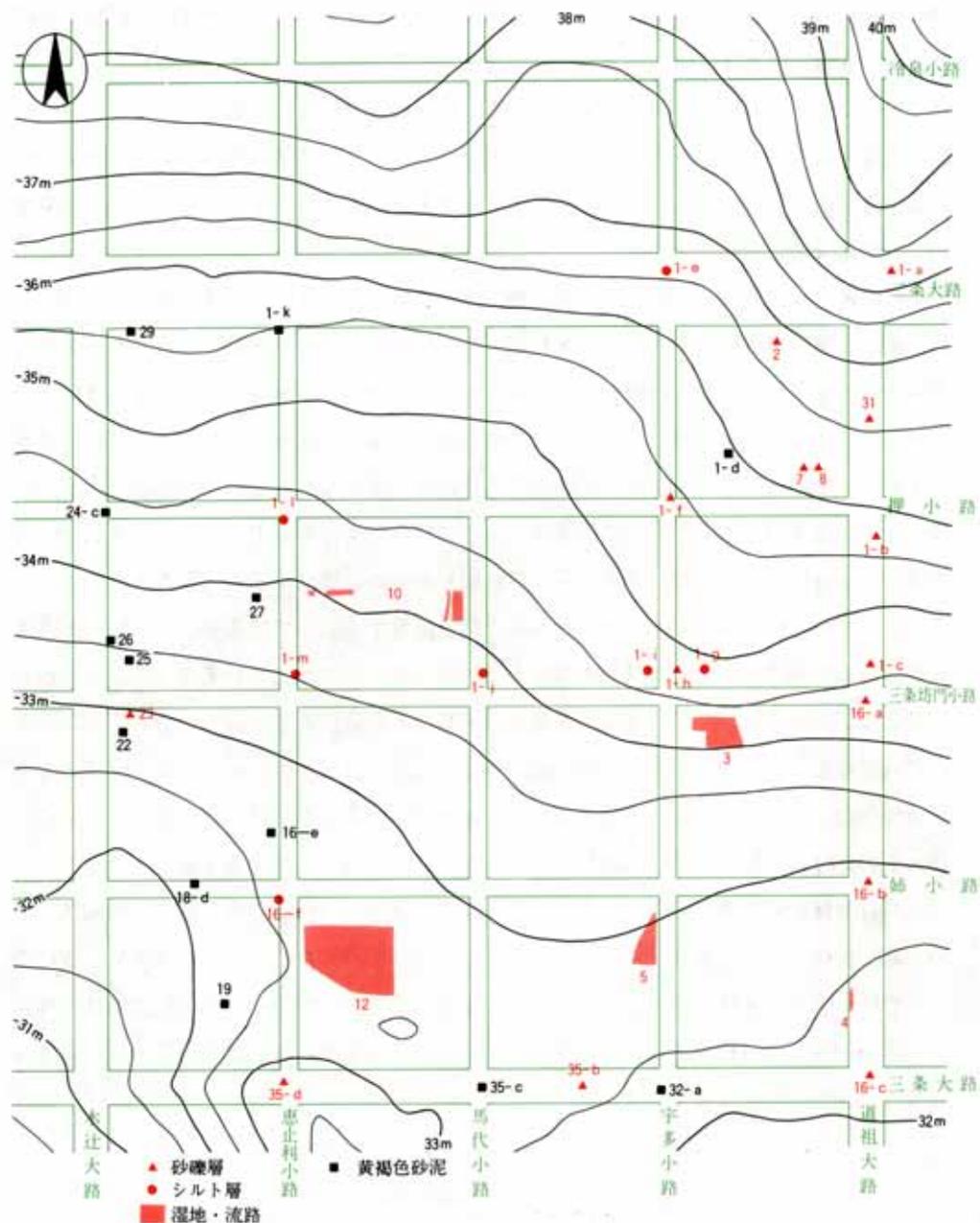
四町地区 この地区の平安時代の遺構はⅠ期SD11A、SD12A、SD13A、SK14、Ⅱ期SD11B、SD12B、SD13B、SX17、Ⅲ期SB15、SK18に分けることができる。SB16はⅠ期、Ⅱ期のいずれか、あるいはその両期にわたって存在していた可能性がある。また橋SX17はⅠ期にもその前身があった可能性があることは第Ⅱ章で指摘したとおりである。SD11はかつては道祖大路の西側溝としてとらえていたものであるが、最新の条坊モデルとの比較からすると西に寄りすぎており、築地内側の溝としたが妥当であろう。しかし道祖大路地区で検出した川SD54によって条坊区画が影響を受けている可能性もあり、にわかに判定できない。SD12、SD13には含まれた部分はSD16やSX17の位置関係から通路として利用されていたようで、この通路の位置や諸施設の規模からみて、これらは四町のかかなりの部分を占地していた邸宅の一部とみることができるのではないだろうか。Ⅰ期からⅡ期にかけてこの部分に整地が行われ、溝や橋が改修されていることからこの期間には土地利用に大きな変化はなかったようである。一方、Ⅲ期の遺構としてはかつての通路部分にSB15、SK18などが検出されていることからこの地域の性格に変化があったことがわかる。

五町地区 この地区で検出した遺構には掘立柱建物、柵、溝、井戸があるが、SD22、SE26 が切り合っているほか遺構相互の重複はない。また各遺構とも出土遺物に型式差は認められず、一時期のものにとらえられる。調査区は五町の北東隅に近い部分にあたるが、条坊区画との関連については、SD27 が姉小路南側溝、SD19 の北辺が五町北側築地内側溝の推定地に、SB21 東側柱筋が東一、二行界に、SD22 が北二、三門界に SE26 が五町北東の四分の一町のほぼ中央に、SA25 が北三門の南北中央に位置する点などがあげられる。SD22、SD23、SD24、SA25 は一応、町内を区画するための施設であろうが、SD19 の規模がそれに対してかなり大きいことや、SD22 以外の区画施設が条坊区画から外れている点などから、これらの北側を独立した一つの宅地とみなすより、大きな邸宅地の中の区画ととらえた方がよいと思われる。

十町地区 この地区では掘立柱建物、柵、溝、土壇、墓、湿地状落込などを検出した。溝 SD38 の東西方向部分と柵 SA41 は十町の南北ほぼ中央に位置しているが、調査区東端から約 66m で、それぞれ南へ方向を変えている。検出した 9 棟のうち主要な建物とみられる SB29、30、31 を含む 6 棟が、この溝と柵で囲まれた区域にあり、それぞれの柱筋を揃えて配置されている。また区域の北側に位置する SB34 も SB31 と柱筋が通っていることや、SA41 が西方で開いている点、あるいは SD38 の南北方向部分や SA42 の位置が条坊区画と関連なく、むしろその西側の湿地 SX47 の影響によるものとみられることなどから、これら柵、溝、建物などの施設は十町を区分するものではなく、五町地区と同様に一つの邸内の区画および建物配置とみることができるのではないだろうか。各遺構の時期については、SD38、SA42 と SB35、SB33 と SB37 あるいは SD39 と SB30 がそれぞれ重複しているが、いずれも同一面で検出しており、層位的に前後関係を確認することはできなかった。しかし、主要な建物の柱掘形から出土した土器類がほとんど I 中に、これらの建物群が廃絶した後の遺構である SX44 の土器類が I 新に属することから、大半の遺構は 9 世紀前半のものともみることができよう。湿地状落込 SX47(9 世紀後半) や、墓 SX46(10 世紀前半) の出土遺物やその出土状況からみて、9 世紀前半いっばいでこの地域の利用が途絶えたとはいえないにしても、少なくとも今回の調査区内ではこれ以外に 9 世紀後半以降の平安時代の遺構はまったく検出しておらず、9 世紀前半代のような活発な土地利用状況は考えにくい。

B 遺跡周辺の旧地形

右京三条三坊内の調査では多くの湿地や川跡等を検出しているが、特に試掘や広域の立会調査ではこれらの分布状況や周辺の旧地形に関する興味深い点が明らかになった。それは恵止利小路付近を境にして、平安時代の遺構面に少なくとも 1.0m 前後の高低差が認め



挿図 70 湿地・川の分布

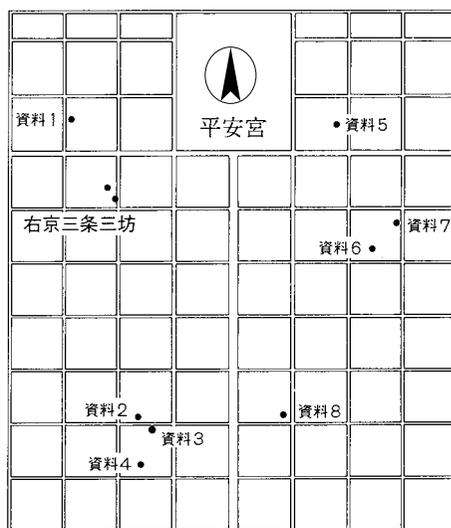
られることである。恵止利小路以西の十三、十四、十五町では平安時代の遺構あるいはその基盤層とみられる黄褐色砂泥面が現表土下 0.5～0.6m で検出できるのに対して、三条三坊の大部分を占める恵止利小路以東では現表土下 1.5～2.0m とかなり低い。この関係は旧耕土層にも認められ、周辺の現在の地形がほぼ平坦をなしているのは、近、現代の整地と盛土の結果であり、それ以前には恵止利小路以東が一段低い地勢を示していたものと考えられる。多くの湿地や流路などがこの低い部分で検出されており、その属する時代も平安時代以前から中世にわたるさまざまなものがある。このことはこの地域が各時代を通じて比較的低湿な土地条件をもっていたことを示すものであろう。

4 植物遺体からみた平安京の環境

第IV章では右京三条三坊の井戸や溝の埋土から出土した植物遺体を分析し、当時の遺跡周辺の環境や土地利用状況などについて検討したが、本節では、それを平安京のほかの分析例と比較し、平安京の景観の中で当遺跡がどのように位置付けられるか考察してみた。比較資料として、右京城 4 例、左京城 4 例の井戸の分析例を用いる。

A 平安京内の井戸埋土の分析例

資料 1 右京二条三坊十五町^{註57} SE10 作り替えの底部をはさむ中層、下層の埋土から木本種実 7 科 11 種（うち栽培種 3 科 6 種）、草本種実 19 科 32 種（うち栽培種 5 科 8 種）を検出した。木本はすべて落葉広葉樹で、右京三条三坊と比較すると大分少ない。下層ではカタバミやハコベ属などの草丈の低い草本が多く、それに対して中層ではツル性のノブドウ、スズメウリ、カラスウリなどが目立つ。その他にもオナモミやメナモミのように草丈の高いもの、ヤブジラミやマエムグラのように畑の縁に生育する草本が多く、層の違いによって分析結果に明らかな相違がみられる。これは井戸が利用されていた時と廃棄された後の周辺の環境変化によるものとみることができ、廃棄後の荒廃の様子がうかがえる。



挿図 71 資料採集地点位置図

資料 2 右京七条二坊十二町 SE03B^{註58} 木本 17 科 31 種（うち栽培種 5 科 9 種）、草本 26 科 63 種（うち栽培種 9 科 15 種）を検出した。木本にはウメ、スモモ、モモ、キイチゴ、サクラ、センダンなどの花木もあり、季節の彩りを想像できる内容である。草本の内容も多彩で、栽培植物にはアサ、ソバ、アブラナ科、マメ、トウゴマ、シソ、エゴマ、ナス、ヒョウタン、ウリ、イネ、オオムギ、コムギ、キビ、アワがある。それ以外の草本の特徴的なことは、水辺に生育する植物や周辺の荒れ具合の指標となる植物も多く、オナモミ、ソクズなど草丈の高い草本があることも注目する必要がある。周辺の環境は井戸放棄の時点でかなり荒れていたと推定でき、右京三条三坊同様、池ないし湿地の要素が明らかに認められる。

資料 3 右京八条二坊八町 SE03 木本 8 科 12 種（うち栽培種 4 科 5 種）、草本 20 科 40 種（うち栽培種 6 科 9 種）である。庭園樹とした木本はすべて落葉広葉樹で、花木のナシ、センダンを除くと樹高はすべて低い。この遺跡は資料 2 と同じく西市外町にあたるが木本の内容はかなり異なり、それは景観の違いになっていたことであろう。草本では栽培種以外のものが全体に少ないことにまず気付く。内容的にみてもアカザ属ないしヒユ属、ハコベ、カタバミの種子がそれぞれ 3,000 粒以上も出土しており、これら草丈の低い草本が多かったものと思われる。草本の構成をみる限り、資料 2 の地点ほど井戸放棄時に周辺が荒れることはなかったようである。

資料 4 右京八条二坊十二町 SE1^{註60} 木本 8 科 11 種、草本 14 科 18 種を検出した。栽培種を除く木本は 7 科 8 種で、常緑針葉樹はマツ 1 種、ほかはすべて落葉広葉樹である。木本の種類は比較的多いが、栽培種を除く草本の種類は少なく、周辺の管理が行き届いていた結果という印象を受ける。

資料 5 左京二条二坊十四町井戸^{註61} 19 木本 3 科 4 種（うち栽培種 1 種）、草本 18 科 21 種（うち栽培種 5 種）を確認した。庭園樹とした木本はすべて落葉広葉樹で、出土量は少ない。栽培種を除く草本は 13 科 16 種で、草丈の低いものが多い。右京でみたような荒れかたとは基本的に違い、井戸の廃棄後も周辺は管理された状態との印象を受ける。

資料 6 左京四条三坊五町 SE21^{註62} 木本 4 科 5 種（うち栽培種 2 種）、草本 15 科 19 種（うち栽培種 8 種）を検出した。庭園樹は 2 科 3 種で出土量もわずかである。栽培種を除く草本種実の出土量も全体に少なく、内容的にも草丈の低いものからなる。環境の荒廃を示す草本がまったくないことからすると周辺は井戸廃棄後もよく管理されていたとみることができるだろう。

資料 7 左京四条三坊十四町 SE03^{註63} 木本 2 科 2 種、草本 19 科 22 種（うち栽培種 4 種）

表 39 右京三条三坊の庭園樹と他地域の比較

和名	樹高 (m)	花期 (月)	三条 三坊	資料 1	資料 2	資料 3	資料 4	資料 5	資料 6	資料 7	資料 8
針葉樹											
モミ	45	5	○	-	○	-	-	-	-	-	-
マツ	30	4-5	-	-	○	-	○	-	-	-	-
ツガ	30	4-5	-	-	○	-	-	-	-	-	-
スギ	40	3-4	-	-	○	-	-	-	-	-	-
ヒノキ	30	4	○	-	-	-	-	-	-	-	-
常緑広葉樹											
アカガシ亜属	20	4-5	○	-	-	-	-	-	-	-	-
クスノキ	20	5-6	○	-	○	-	-	-	-	-	-
落葉広葉樹 (花木)											
ウメ	10	2-3	○	○	○	-	-	-	-	-	○
スモモ	8	4	○	○	○	○	-	-	-	-	○
モモ	5	4	○	○	○	-	-	○	○	-	○
サクラ亜属	25	4	○	-	○	-	○	-	-	-	-
ナシ属	25	5	○	○	○	○	-	-	-	-	-
キイチゴ属	2	5-6	○	-	○	○	-	○	○	-	-
センダン	30	5-6	○	-	○	○	○	○	-	-	-
エゴノキ	7-8	5-6	○	-	-	-	-	-	-	-	-
クサギ	8	8-9	○	○	-	-	-	-	-	-	-
カマズミ属	4	5-6	○	-	○	-	-	-	-	-	-
ゴマギ	2-4	5-6	○	-	-	-	-	-	-	-	-
(その他)											
ハンノキ	15	11-3	○	-	-	-	-	-	-	-	-
ナラガシワ	25	4	○	-	-	-	-	-	-	-	-
ムクノキ	20	5	○	-	○	-	○	-	-	-	-
エノキ	20	4	○	○	○	-	-	-	-	-	-
クワ属	10	4-6	○	○	○	○	○	-	○	○	-
カジノキ	15	5	○	○	○	○	○	○	-	-	-
サンショウ	3	4-5	○	-	○	○	○	-	-	○	-
イヌザンショウ	2	7-8	○	-	○	-	-	-	-	-	-
カラスザンショウ	7	7-8	○	-	○	-	-	-	-	-	○
アカメガシワ	10	7	○	○	-	○	-	-	-	-	-
カエデ属	10	4-5	○	-	○	-	○	-	-	-	-
ブドウ属	ツル		○	-	○	-	-	-	-	-	-
ミズキ	15	5-6	-	-	○	-	-	-	-	-	-
ニワトコ	5	4-5	-	-	○	-	-	-	-	-	-
ムクロジ	18	6	○	-	○	-	-	-	-	-	-
サルナシ	ツル	5-7	○	-	-	-	-	-	-	-	-
マタタビ	ツル	6-7	○	-	-	-	-	-	-	-	-

表 40 右京三条三坊の草本と他地域の比較

	和 名	SE06	資料 1	資料 2	資料 3	資料 4	資料 5	資料 6	資料 7	資料 8
主として庭・畑に生育する草本	アカザ属	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ヒユ属	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	スベリヒユ	○	○	○	○	-	○	○	○	○
	ハコベ属	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ザクロソウ	○	-	○	○	-	-	-	-	-
	ヤエムグラ属	○	○	○	-	-	-	-	-	○
	カタバミ	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	エノキグサ	○	-	-	-	-	-	-	-	○
	チドメグサ	○	○	○	○	-	○	-	○	○
	ツユクサ	○	○	○	○	-	-	○	-	○
主として路傍・山野に生育する草本	カナムグラ	○	-	○	-	-	-	-	-	-
	サナエタデ	○	-	○	○	-	○	-	-	-
	ギシギシ属	○	○	-	○	-	○	-	-	-
	アオツツラフジ	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	ヘビイチゴ属	○	○	-	-	-	-	-	-	○
	ノブドウ	○	○	○	-	-	-	-	-	-
	アリノトウグサ	○	-	-	-	-	-	-	○	○
	ナス属	○	○	○	○	-	-	-	-	○
	オオバコ	○	○	-	○	-	○	-	○	○
	メナモミ属	○	○	○	○	-	-	-	-	-
キク科	○	○	○	-	-	-	-	-	-	
主として水田・湿地に生育する草本	ミゾソバ	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	イシミカワ	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	ダデ属	○	○	○	○	○	-	○	-	○
	タガラシ	○	○	○	○	-	○	-	-	○
	キンポウゲ属	○	-	○	-	-	○	-	-	-
	クサネム	○	-	○	-	-	-	-	-	-
	セリ	○	-	○	○	-	-	-	-	-
	セリ科	○	○	-	-	-	-	-	-	-
	スズメウリ	○	○	○	-	-	-	-	-	-
	タカサブロウ	○	-	○	○	○	○	○	○	○
	オモダカ	○	-	○	-	-	-	-	-	-
	ヘラオモダカ	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	ヒルムシロ	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	イネ科	○	○	○	○	-	-	-	○	○
	カヤツリグサ属	○	○	○	○	-	○	○	○	○
	ホタルイ属	○	○	○	○	○	-	○	○	○
	テンツキ属	○	-	-	-	-	-	-	-	-
	イボクサ	○	-	-	○	○	○	-	-	○
	ミズアオイ	○	○	○	○	-	-	-	-	-
コナギ	○	-	○	○	-	-	-	-	-	

(SE06を基準とする為、資料番号の種数は検出種類数と一致しないものがある)

が出土している。木本はいずれも落葉広葉樹で樹高は低い。栽培種を除く草本種実の中で4,000粒をこえるスベリヒユが出土している。スベリヒユは匍匐性で夏期に庭や畑に広がる光景をよくみかける。その他の草本も草丈の低いものからなる。周辺は木本も草本も少ない空間が井戸廃棄後も広がっていたようである。

資料8 左京七条一坊十三町 SE03 木本が6科7種^{註64}（うち栽培種3科4種）、草本が18科21種（うち栽培種7科7種）出土した。庭園樹はモモ1種で、それ以外はすべて食品として他所から搬入された品と考えた。栽培種を除く草本は草丈の低いものが多く、種実の出土量も少ない。周辺は木本も草本もあまり繁茂していない環境で、それは井戸廃棄後もあまり変わらなかったようである。この調査ではほかにも9世紀から12世紀までの井戸を5基検出したが、その分析結果をみてもほとんど木本は出土しておらず、草本も草丈の低いものが主である。また先に示した資料2、3とはまったく異なり、湿地の要素はほとんどみられない。こうした種実の出土状況からは、現在普通に目にする裸地に近い状態の庭先などのような景観を連想でき、しかもそうした状態が長期にわたって続いていたとみることができるだろう。

B 平安京における植物種実の出土傾向

以上、井戸の資料を通じて平安京内8箇所の植物種実の出土例をみてきたが、これらの資料はこれまでに行ってきた平安京の植物遺体の分析例の中でもまとまったデータが得られたものであり、平安京の環境を考える上で有効である。

まず木本の出土傾向では明らかに右京が左京に比べ優位を占め、その中でも特に木本の豊富な右京三条三坊三町や西市（資料2）では、針葉樹や常緑広葉樹も含まれており、また花の美しい木々も多いようである（表39）。一方、左京の資料では総じて木本の種類が少なく、いまのところ針葉樹、常緑広葉樹を含む例はない（表41）。ちなみにこれまでの調査で最も多くの木本を検出した右京三条三坊三町と、京都市内の縄文晩期の遺跡である北白川追分町遺跡出土の木本とを比較すると、非常に多くの共通種（17科20属21種）^{註65}がみられる（表42）。追分町遺跡で出土した植物遺体の大部分は人手のあまり加わらない原植生に近い状態を示すものと考えられることから、右京三条三坊三町の景観には京都市域の原植生に非常に近い森林構成要素があったとみることができる。

次に草本では、木本が多い地点ほど草本の種類も豊富に出土する傾向がみられる（表40）。生育型別に左京と右京の出土傾向を比較すると、庭や畑に生育する草本は大差ない

表 41 平安京内の木本（庭園樹）出土状況

調査地点	針 葉 樹	常 緑 広 葉 樹	落 葉 広 葉 樹	
			花 木	そ の 他
右京				
三條三坊	2科 2属 2種	2科 2属 2種	5科 7属 11種	10科 13属 15種
資料 1			2科 3属 5種	3科 4属 4種
資料 2	2科 3属 3種	1科 1属 1種	3科 5属 8種	8科 11属 12種
資料 3			2科 4属 4種	3科 4属 4種
資料 4	1科 1属 1種		2科 2属 2種	4科 5属 5種
左京				
資料 5			2科 2属 3種	1科 1属 1種
資料 6			1科 2属 2種	1科 1属 1種
資料 7				2科 2属 2種
資料 8			1科 1属 3種	1科 1属 1種

表 42 北白川追分町遺跡出土木本内容

(※印は右京三條三坊との共通種)

針 葉 樹	※カヤ イヌガヤ ※モミ ※ヒノキ
常緑広葉樹	イチイガシ ※アカガシ
落葉広葉樹	ヤナギ ※オニグルミ ヨグソミネバリ ※カバノキ アカシデ アサダ イヌブナ コナラ クリ ケヤキ ※エノキ ※ムクノキ ※ヤマグワ ※カジノキ ヒメコウゾ コブシ ※キイチゴ ※サクラ フジ ※カラスザンショウ キハダ ※アカメガシワ ウルシ ※カエデ類 トチノキ ※ブドウ属 ツタ ※サルナシ サカキ ヒサカキ タラノキ ミズキ クマノミズキ ※エゴノキ ハクウンボク アサガラ ムラサキシキブ ※クサギ ニワトコ ※ゴマギ ヤブデマリ ※ガマズミ

が、路傍や野原に生育する草本の割合は右京が左京に比べ非常に多い。さらに右京三條三坊や西市周辺（資料 2、3）では左京ではほとんどみることのできない湿地性のものが多く、中には冠水性のヒルムシロ属などもみられる。こうした点から右京三條三坊をはじめ、右京二條三坊、西市周辺は、井戸の廃棄前後に周辺の土地がかなり荒廃した状態であったことが推定できる。それに対して左京の場合、井戸の廃棄が周辺の土地の荒廃にはつながらなかったことを示すものといえるだろう。

5 まとめ

最後にこれまで述べてきた要点と、若干の問題点を指摘し、本報告書のまとめとしたい。まず土器類については、土師器の小型器形を軸にした編年と破片数データをもとに平安京の平安時代前半期に於ける各土器類の変遷をかなり明らかにすることができた。土師器に関してみると、Ⅰ新からⅡ古にかけての段階を平城京以降続いてきたヘラミガキ、ヘラケズリなど製作技法の省略や、器形の種類の減少など多量生産に呼応した方向性の一つの帰結点としてとらえることができるだろう。これ以降、土師器の小型器形は基本的にオサエとナデという、従来に比べて非常に簡便な技法だけを用いて製作されるようになる。器厚と器面調整をかねたヘラケズリ技法を放棄した上で、Ⅱ古以降にみられる薄く、精巧な土器を多量に製作する条件として技術的な発展が不可欠であるが、その発展を促した大きな要因の一つとして平安京における継続的な多量消費があることはいうまでもない。こうした多量の需用に応えるべく、ここで確立した基本技法が江戸時代にまで受け継がれていることをみれば、京都の土師器生産の組織的伝統がこの時期に確立したといえるのではないだろうか。

またⅠ新の段階は緑釉陶器、灰釉陶器、白色無釉陶器の成立、黒色土器の定型化などほかの土器類に於いても大きな画期であり、平安時代前半期の土器様相が成立した時期として重要な位置を占めている。Ⅰ新以降に生産された緑釉陶器は、Ⅰ中以前の土器群と共伴する奈良三彩系の緑釉単彩陶器とは、製作技法や器種構成、出土傾向など、明らかに異なる点を多くもっている。椀・皿類を中心に生産された「平安時代の緑釉陶器」とでもいうべきこの新しい緑釉陶器は短期間の内に飛躍的に生産量が増加し、その後Ⅲ中までの間、小型供膳形態土器類の中に高い比率を占め続ける。このような多量の供給が確保、維持できた背景として平安京近郊の緑釉陶器と須恵器生産との関連をあげることができる。平安京北郊の幡枝で開始された京都産緑釉陶器の生産は、やがて洛西の小塩、石作、あるいは篠へと展開して行くが、これらの地域はすべてそれ以前からの須恵器生産地である。従来閉鎖的な官営工房で契機的に生産されていた鉛釉陶器に対し、継続的な多量生産を前提とした新しい緑釉陶器生産は、このような須恵器生産地において須恵器の生産組織を取り込むことにより可能になったものと思われる。幡枝窯跡群の栗栖野13号窯ではⅠ中に属する奈良三彩系の羽釜や甑などと共に、少量ではあるがⅠAの底部をもつ軟質の緑釉陶器の素地が出土している。そしてその後の京都産緑釉陶器^{註67}の素地の須恵器化や膨大な生産量、一方で須恵器の小型器形に於ける緑釉陶器型の椀・皿類の増加などの事実からは、平安京近郊の緑釉陶器生産に須恵器工人が

深く関わっていたことがうかがえる。緑釉陶器と並ぶ国産施釉陶器の灰釉陶器が出現する時期は、壺、瓶類がわずかに含まれている I 中の段階とみることもできるが、釉薬の性質上厳密に特定しがたい側面もあり、椀・皿類を主体とする明らかに施釉が確認できる灰釉陶器が出現するのは、今のところ緑釉陶器と同じく I 新の段階に求めておくのが妥当であろう。したがって、灰釉陶器の年代について言及するならば、猿投山古窯址群に於ける灰釉陶器の成立期である K-14 型式は平安京の資料をみる限り 9 世紀の前半に、後続の K-90 形式を 9 世紀後半に位置づけることができる。

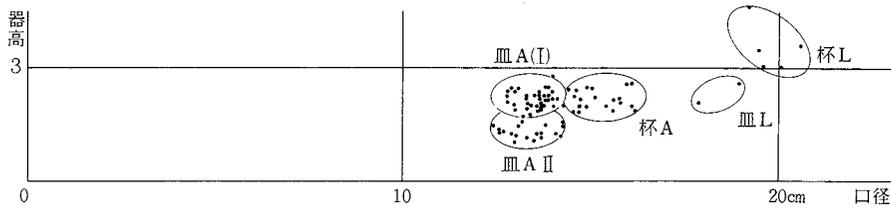
その他平安時代の遺物についていえば、従来出土例が限られていた漆製品の資料が得られ、切片の顕微鏡観察により、その製作技法に関する多くの知見を得ることができた。また、植物種実の分析を通して遺跡周辺の環境復元や、他地域との比較検討が行えたことは大きな収穫であるといえよう。

次に遺構に関する成果としては、多数の建物などを検出し、右京三条三坊が、比較的大きな規模の邸宅が集中した地域であり、周辺が平安京造営当初から宅地として利用されていたことを確認することができた点、道祖大路地区で、文献記録に残っていない平安時代の川を確認したことなどをあげることができる。一方、それらの遺構の大半が平安時代前期のうちに廃絶し、この地域がその後急速に荒廃したのは、出土遺物の年代、植物種実の分析結果、旧地形からみた土地条件などからみて明らかである。隣接する右京二条三坊や三条二坊などの調査では 9 世紀以降も存続する遺跡が多く検出されていることからみれば、この地域は右京の中でも比較的早い時期に廃絶していることがわかる。このような現象の成因としては、まず第一に低湿な土地条件などが思いあたるが、そうした土地条件は当然、造営当初に確認されていたであろう。にもかかわらず、遷都直後に邸宅が造営され、一定期間存続したことからみれば、単純に土地条件にだけその原因を求めることには無理であろう。その他の要因、たとえば政治的な動向などを含め、この意味をみいだすことは都市としての平安京の変遷を考察する上で、今後の重要な課題の一つといえる。

註

- 1 「烏丸線内遺跡出土土器編年試案について」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981
「白河北殿の調査」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981

- 2 たとえば、平安宮左兵衛府 SD1 出土土器は報告時には 10 世紀中頃の年代を与えたが、今回の形式編年に照らし見直すと II 新に位置づけられる。したがって概報で与えた年代より少なくとも 1 型式は遡る土器群である。引用例も多いため計測個体を追加して作成した法量分布を示して、ここで訂正しておく。



- 3 型式編年の作業にあたっては小森俊寛氏から多くの助言と協力を得た。
- 4 各型式に属する個別の資料には、前後の型式と共通する要素の多少から様相的な新古関係が指摘できるものもある。しかし、それが実際の年代差によるものかの確証はなく今のところ一括してとらえておくことが妥当であろう。
- 5 『平城宮発掘調査報告Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報第 26 冊』奈良国立文化財研究所 1976
- 6 型式別の法量平均は今回の編年に用いた全資料の計測結果の平均値である。
- 7 「内裏外郭跡」『平安京跡発掘調査概報 昭和 57 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 8 「平安宮 左兵衛府跡」『平安京跡発掘調査概報 京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-Ⅱ』京都市埋蔵文化財研究所 1978
- 9 『北野廃寺跡文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1980
- 10 「中務省跡」『平安京跡発掘調査概報 昭和 57 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 11 「平安宮 主水司跡」『平安京跡発掘調査概報 京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-Ⅱ』京都市埋蔵文化財研究所 1978
- 12 「左京二条二坊 (2)」『昭和 57 年度京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 13 「西寺井戸跡 (西寺跡第 12 次調査)」『平安京跡発掘調査概報 京都市埋蔵文化財研究所概報集 1978-Ⅱ』京都市埋蔵文化財研究所 1978
- 14 未報告。昭和 52 年京都市埋蔵文化財研究所が調査。出土土器については調査担当者

百瀬正恒の教示を得た。

- 15 「平安宮 内裏」『平安京跡発掘調査概報 昭和 60 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1986
- 16 「左京七条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和 58 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1984
- 17 「No. 60」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 1976 年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980
- 18 註 14 と同じ。
- 19 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1887
- 20 『左京七条一坊十三町 平安京東市外町の調査』平安中・高等学校 1985
- 21 『北野廃寺発掘調査報告書 京都市埋蔵文化研究所調査報告第 7 冊』京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 22 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1987
- 23 杯 L、杯 M は形態的には杯 A と同じであるが、法量がかなり大きい。前後の型式に含まれる杯 A の法量変化の流れからみると、大型の器形として新たに現れるようにみえるが、各型式には中心的な土器群のほか少量ではあるが必ず大型のものが含まれている。さらに前代から系統的にとらえうる可能性もあるが、現在のところ位置付けが困難なためここでは仮称しておく。
- 24 註 8 と同じ。
- 25 「平安宮 西限」『平安京跡発掘調査概報 昭和 60 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1986
- 26 「平安京右京二条三坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和 61 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1987
- 27 「右京五条二坊 (HR56)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和 59 年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1985
- 28 「左京二条二坊 (4)」『昭和 57 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 29 註 26 と同じ。

- 30 「右京二条二坊(2)」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1982
- 31 「左馬寮 右京二条二坊」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1984
- 32 「平安宮内裏(1)」『平安京跡発掘調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1987
- 33 「㊸-17」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ 1976年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980
- 34 註26と同じ。
- 35 口縁部が外反する、いわゆる二段ナデ口縁をもつものである。
- 36 「左京四条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 37 「平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会 1980
- 38 「左京二条二坊(2) 高陽院跡」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1981
- 39 5と同じ。
- 40 註8と同じ。
- 41 註13と同じ。
- 42 註15と同じ。
- 43・44 註14と同じ
- 45 註21と同じ。
- 46 「平安京右京七条一坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1985
- 47 註30と同じ。
- 48 註32と同じ。
- 49 「右京三条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1981
- 50 註33と同じ。
- 51 ここでいう破片数データとは、遺構から出土した土器を洗浄後に分類した後、すべて

の破片を種類別に計数したものである。したがって個体数による器種構成を表すものではない。

- 52 『学校法人両洋学園内平安京跡発掘調査報告書』学校法人両洋学園内平安京跡発掘調査会 1987 破片数データの詳細については長谷川行孝氏の御教示を得た。
- 53 エポキシ樹脂(チバ・ガイギー社GY1252JP、HY837)を充填し、減圧脱泡した後、研磨したもの。
- 54 小林行雄「髹漆」『古代の技術』塙書房 1962
- 55 第三章 註13を参照。
- 56 沢口悟一『日本漆工の研究』美術出版社 1966 の漆の製作法の分類では、まず下地と上塗りに分け、上塗りをさらに下塗り、中塗り、上塗りに分類する。漆膜の観察ではこの分類を基準にした。
- 57 『平安京跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市埋蔵文化財研究所 1987
- 58 1978年調査 未報告 植物遺体の内容については『左京七条一坊十三町 平安京東市外町の調査』平安中・高等学校 1985に掲載。
- 59 1979年調査 未報告 植物遺体の内容については註55と同じ。
- 60 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所 1987
- 61 『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1984
- 62 註58と同じ。
- 63 昭和53年調査 未報告 調査地は中京区六角通り東洞院入る堂之前町236、井戸は平安時代後期。
- 64 『左京七条一坊十三町 平安京東市外町の調査』平安中・高等学校 1985
- 65 南木睦彦・山尾正之・粉川昭平「北白川追分町遺跡出土の種実類」『京都大学埋蔵文化財調査報告3』京都大学埋蔵文化財研究センター 1985
- 66 平安京近郊の生産地で出土するⅠ新以降の緑釉陶器は、すべてⅠ類あるいはⅠ類の高台をもち、一方京都以外の生産地の資料は、すべてⅡ類の高台をもち、したがって今回報告した緑釉陶器のうちⅠ類、Ⅰ類の高台のものを京都産としてあつかった。
- 67 灰釉陶器に関しては、榑崎彰一、斎藤孝正、若尾正成、前川 要、中島 隆、安田幸一の各氏から多くの御教示をいただき、また各生産地の遺物の実見に際しても便宜をはかっていただいた。

出土遺物観察表

観察表凡例

- 1 土器類の器形名は、土師器、須恵器の小型器形については原則的に『平城宮発掘調査報告Ⅶ』に準じた。その他の器形については慣例にしたがった。
- 2 土器番号の最初の数字は出土した地区（町）を表し、以下は通し番号である。
- 3 法量の単位はcmである。
- 4 土器類の色調の分類はマンセルの色体系 (Munsell Book of Colour) に基づいたが、表記は慣例にしたがったものと、その後ろの () 内にマンセル記号を併記した。なお同一の土器で色調に幅がある場合、最も支配的な色を表記したが、断面や部分が明らかに異なるものは併記している場合がある。黒色土器の器表面についてはマンセル体系になじまないため記号を省略した。
- 5 国産施釉陶器の高台形態に関する記号は第Ⅴ章の底部形態分類表により示した。また白色無釉陶器および緑釉陶器に準じる形態の須恵器についてもこの表記法を用いた。
- 6 土師器の供膳形態に於ける成形手法の表現は『平城Ⅶ』にしたがった。
- 7 黒色土器の2タイプに関しては、黒色化する部位による従来分類により、A類（内面）、B類（両面）に分け備考の欄に示した。

出土遺物観察表

観察表 1 四町地区 SD11A 出土土器 (挿図 36・写真図版 29、30)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 碗 A II	4-1	口径 8.9 高さ 2.2	淡肌色 (7.5YR9/2) やや密 やや軟質	底部は平らで比較的小さく、体部は外上方へ広がる。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面より口縁端部までヘラケズリ。内面はナデ調整。4-7 は口縁部外面にナデが残る。	
	4-2	口径 9.7 高さ 2.2	肌色 (5YR8.5/4) やや密 やや軟質			
	4-3	口径 9.7 高さ 2.6	明茶灰色 (7.5YR8/2 ~ 10YR8/2) やや密	底部は平らで、体部はやや丸味を持って立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。		
土師器 皿 A II	4-5	口径 15.2 高さ 2.0	明茶褐色 (7.5YR8/4 ~ 9/2) やや密 やや軟質	口縁部は丸味を持って立ち上がり、端部は小さくつまみ上げられる。		
土師器 皿 AI	4-6	口径 17.8 高さ 1.6	淡黄白色 (2.5Y9/2) 密	大きな平底と、外上方へまっすぐに立ち上がる短い口縁部からなる。口縁端部は肥厚し内側に突出する。		
土師器 杯 A	4-7	口径 17.2	明灰褐色 (10YR8/3) 密	体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。底部を欠く。		
土師器 高杯	4-4	残高 8.0	橙灰褐色 (5YR7/4) やや密 やや軟質	脚部上段から杯底部にかけての破片。脚部は断面七角形を呈し中空部は下方に向かって広がる。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方向に向けてケズる。杯部内面はナデ調整。外面は器表が摩滅しており調整不明。	
土師器 甕	4-8	口径 26.7 胴部最大径 25.0	明茶灰色 (5YR8/2) やや密	わずかにふくらみを持つ体部に「く」の字状に屈曲した口縁部が付く。端部は上方に肥厚する。	口縁部上段より体部中段まで縦方向のハケメ調整。頸部はナデ調整。体部中段以下は交叉する斜方向のハケメ調整。口縁端部はナデ調整。口縁部内面より体部内面にかけてハケメをナデ消す。	体部外面に煤が付着。

観察表 2 十町地区 SB29・31・32 出土土器 (挿図 37・写真図版 26)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A I	10-6	口径 20.3 高さ 2.9	明灰色 (5Y8/3) 密 チャート粒含む	口縁部は丸味を持って立ち上がり、端部は内側に巻き込まれ肥厚する。10-5 は口縁部外面に横方向のナデが残る。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。	SB29 出土。
	10-5	口径 20.1 高さ 2.2	明灰色 (2.5Y8/2) 密			SB29 出土。
土師器 碗 A I	10-2	口径 13.5 高さ 3.3	明褐色 (10YR7/4) 赤褐色粒含む	底部と体部との境は不明瞭。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	外面はケズリ。内面はナデ調整。	SB31 出土。
土師器 杯 A	10-4	口径 16.5 高さ 3.2	明灰褐色 (10YR8/2 ~ 8/3) 雲母含む	底部と体部との境は不明瞭。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部はつまみ上げられ、内側にわずかに肥厚する。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。口縁部外面にナデが残る。	SB31 出土。
土師器 甕	10-8	口径 15.8	表面 灰褐色 (10YR6/3) 断面 明茶褐色 (7.5YR8/4) 密	体部は内傾し頸部は「く」の字状に折れ曲がる。口縁端部は小さく上方へ突き出す。	内面の口縁部と体部の接合部に横方向のハケメ調整。体部内面、口縁部はナデ調整。体部外面に斜方向の弱いハケメが残る。	SB31 出土。

須恵器 杯蓋	10-11	口径 17.0	灰色 (5PB7/1) 密	天井部は欠く。肩部はやや丸味を持ち、口縁部は屈曲する。端部は下方に突出する。	ナデ調整。	SB31 出土。
	10-12	口径 16.7 高さ 1.7	明灰色 (5B8/1) 密	天井部は平坦でツマミは付かない。口縁部は屈曲し端部は下方に突出する。	天井部はヘラオコシのち軽いナデ調整。口縁部はナデ調整。	SB31 出土。
須恵器 杯 B	10-15	底径 9.4	明灰色 (10PB7/1) 密	平らな底部に断面方形の高台が付く。体部は直線的に立ち上がる。	ナデ調整。	SB31 出土。
土師器皿	10-1	口径 9.0 高さ 1.7	明灰褐色 (10YR8/2) 密	底部と口縁部との境は不明瞭。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。	底部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。	SB32 出土。
土師器 杯 A	10-3	口径 15.6 高さ 3.5	明茶灰色 (7.5YR8/3) やや軟質	体部は丸味を持って立ち上がり、外上方に広がる。口縁端部はつまみ上げられわずかに肥厚する。	外面はケズリ。内面はナデ調整。	SB32 出土。
土師器 甕	10-9	口径 20.0	口縁部 明灰色 (10YR7/1) 体部外面 橙褐色 (10R6/6) 体部内面 明褐色 (10YR7/4) 白色砂粒含む	頸部に向けて内傾する体部に外傾する口縁部が付く。口縁部と体部との境は明瞭である。端部は外傾する面をなし、上・下端共わずかに突出する。	口縁部内外面はナデ調整。頸部外面から縦方向のハケメ調整を施すが、体部上段以下はハケメをナデ消す。体部内面は板状のものでカキ取り。	SB32 出土。
黒色土器 杯 A	10-7	口径 17.8 高さ 5.0	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 灰褐色 (10YR6/3) 赤褐色粒含む	底部は平らで体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	全面にミガキを施し、のち体部と底部内面に暗文を施す。底部外面のミガキは粗い。	A 類 SB32 出土。
須恵器 杯蓋	10-10	口径 13.4 高さ 2.0	灰色 (5PB6/1) 密 均一	平坦な天井部の中心に、偏平なツマミが付く。口縁部は屈曲し端部はわずかに下方へふくらむ。	天井部外面はヘラオコシのち軽くナデ調整。他の部位はナデ調整。	SB32 出土。
須恵器 杯 B	10-13	口径 10.7 高さ 3.6	明灰色 (5PB8/1) やや粗	平坦な底部に断面方形の高台が付く。体部は外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。10-14は口縁部を欠く。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	SB32 出土。
	10-14	底径 9.2	表面 灰色 (2.5GY6/1) 断面 橙灰褐色 (5YR7/4)			SB32 出土。
	10-16	底径 16.6	明灰色 (5P8/1) 密	広く平坦な底部に断面方形の高台が付く。高台は下端中央がわずかに凹む。体部は内湾気味に立ち上がる。底部中央と体部中段以上を欠く。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	体部外面に自然釉がかかる。 SB32 出土。

観察表 3 四町地区 SK14 出土土器 (図版 8・写真図版 27、28)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A II	4-9	口径 15.2 高さ 1.9	明茶褐色 (7.5YR8/4) 赤褐色粒含む 密	口縁部は丸味を持って立ち上がる。端部はつまみ上げられ僅かに肥厚するもの (4-9・4-10) と、丸くおさめるもの (4-11・4-12) とがある。底部は欠く。	内面ナデ調整。外面ヘラケズリ。	
	4-10	口径 15.8 高さ 1.7	明灰褐色 (10YR8/2) 密			
	4-11	口径 15.6 高さ 2.1	明灰褐色 (10YR8/2) 密			
	4-12	口径 16.2 高さ 1.7	明灰褐色 (10YR8.5/2) 密 やや軟質			
土師器 皿 A I	4-13	口径 18.5 高さ 2.3	明灰褐色 (10YR8/3) 密	口縁部はゆるやかに立ち上がり、端部はつまみ上げられ、肥厚する。4-13の口縁部にはナデが強く残り、やや外反する。	内面及び口縁部外面ナデ調整。底部外面、体部ヘラケズリ。	
	4-14	口径 18.9 高さ 2.5	明褐色 (10YR8.5/4) 密		内面ナデ調整。外面ヘラケズリ。口縁部外面にナデがわずかに残る。	

	4-15	口径 19.1 高さ 1.9	明灰褐色 (10YR8/2) やや砂質		内面ナデ調整。外面ヘラケズリ。	
	4-16	口径 19.2 高さ 2.1	表面 明灰褐色 (10YR 8.5/2) 断面 橙灰色 (2.5YR 7/6) 密	平底で底部と口縁部の境は明瞭である。口縁部はナデによりわずかに屈曲する。	底部外面オサエ。他の部位はナデ調整。口縁部外面には横方向に二段のナデを施す。	
土師器 椀 A I	4-20	口径 13.4 高さ 3.4	明灰褐色 (10YR8/4) 密	平底で体部はわずかに丸味を持って開き、口縁端部を丸くおさめるもの (4-20・4-21) と、小さくつまみ上げるもの (4-17・4-18・4-19・4-22) とがある。	内面ナデ調整。外面ヘラケズリ。	底部外面に線刻「X」。
	4-17	口径 13.4 高さ 2.9	明灰褐色 (10YR8/3)			
	4-18	口径 13.5 高さ 3.0	明灰褐色 (10YR7.5/2)			
	4-19	口径 13.5 高さ 3.2	明灰褐色 (10YR8/3)			
	4-21	口径 13.6 高さ 3.2	明灰褐色 (10YR8.5/2)			
	4-22	口径 13.9 高さ 3.4	明灰褐色 (10YR8.5/2)			
土師器 杯 A	4-23	口径 16.0 高さ 3.9	明灰褐色 (10YR8.5/2) 密	平底で体部はやや丸味を持って外上方へ開き、口縁端部はつまみ上げられる。	内面ナデ調整。外面ヘラケズリ。口縁部外面にナデが残る。	
	4-24	口径 16.6 高さ 3.4	明灰褐色 (10YR8.5/2) 密			
	4-25	口径 16.9 高さ (4.3)	明灰褐色 (10YR8/2) 密			
	4-26	口径 17.4 高さ 3.8	明灰褐色 (10YR8/2) 密			
	4-27	口径 17.4 高さ 3.7	明灰褐色 (10YR8/2 ~ 9/2) 密			平底で体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。
土師器 蓋	4-28	口径 27.4 高さ 4.8	明灰褐色 (10YR8/3) 部分的に明灰色 (10YR 7/1)	丸くふくらみを持った天井部の中央に頂部がやや突出した円柱状のツマミが付く。口縁端部は内側に巻き込むように肥厚する。	外面はヘラケズリのち、天井部はツマミを中心に四方向、縁部は八方向にヘラミガキ。内面とツマミはナデ調整。	
土師器 杯 B	4-29	口径 19.9 高さ 5.0 底径 9.7	明灰褐色 (10YR8/3)	体部は外上方に広がり、口縁端部はつまみ上げられ、内側に肥厚する。高台は断面台形を呈する。	底部内面から口縁端部までナデ調整。底部外面はケズリのち弱いナデ調整。口縁部外面はケズリのちやや粗くミガク。高台は貼り付け。	
土師器 盤	4-30	底径 22.4	淡肌色 (5YR9/3) やや砂質 雲母・赤褐色粒含む	脚部の破片。下方に向かってゆるやかに広がり、端部は内側に肥厚する。脚部中段の八方に長方形の透かしを持つ。	内面は横方向、外面は縦方向にハケメ調整。端部はナデ調整。	
土師器 高杯	4-33		明灰褐色 (10YR8/2) やや密	小型高杯の脚部。断面七角形を呈する。脚部内の中空部は狭く、内壁面は平滑である。	棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方向に向けケズる。	
	4-34	口径 36.0	杯部 明灰褐色 (10YR 8.5/2) 密 脚部 灰色 (10B6/1 ~ 5Y 6/1) 密	杯部はゆるやかに広がり、口縁端部はやや外反する。脚部断面は八角形を呈する。	杯部は口縁部外面より内面をナデ調整。外面はミガキを施す。脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を縦方向にヘラケズリ。わずかに残る裾部にはミガキが認められる。	
土師器 甕	4-32	口径 27.0	明灰褐色 (10YR8/3) 密	体部は内傾して立ち上がり、頸部で「く」の字状に外方へ折れ曲がる。口縁	体部外面は縦または斜め方向の粗いハケメ。頸部外面より口縁端部はナデ	

					端部は内側へ折り返され肥厚する。	調整。口縁部内面は横方向の粗いハケメ。体部内面はナデ調整。	
	4-31	口径 19.6	明茶褐色 (7.5YR8/4) やや密 雲母含む			体部外面はタタキのち横方向のハケメ。頸部外面より口縁端部はナデ調整。口縁部内面は横方向の細かいハケメ。体部内面は粗いナデ調整。	
須恵器 杯蓋	4-41	口径 13.0 高さ 1.8	明灰色 (5PB7/2) 密	平坦な天井部と屈曲する口縁部からなり、天井部にツマミは付かない。	天井部外面はヘラオコシのち丁寧なナデ調整。内面および口縁端部はナデ調整。		
	4-42	口径 15.8 高さ 2.1	明灰色 (10B7/1)	平坦な天井部と屈曲する口縁部からなり、天井部に宝珠形のツマミが付く。			
	4-43	口径 16.8 高さ 1.8	明灰色 (10PB7/1) 密 均質				
	4-44	口径 19.8 高さ 2.4	灰色 (5PB7/2) 密				
須恵器 杯 A	4-45	口径 13.0 高さ 3.6	灰色 (10Y5.5/1) 密 やや軟質	底部は平らで体部はまっすぐ外上方へ広がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。他の部分はナデ調整。		
	4-46	口径 (13.5) 高さ (3.6)	明灰色 (5Y8/110B6/1) 密 やや軟質				
	4-47	口径 13.9 高さ 3.6	灰白色 (2.5Y9.5/1) 密 軟質		底部外面はヘラオコシのちナデ調整。他の部位はナデ調整。		
	4-50	口径 12.8 高さ 3.2 底径 8.3	明灰色 (5Y8/1) やや軟質		外面底部はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	底部外面に墨書。図版 25・写真図版 66	
	4-51	口径 12.6 高さ 3.4 底径 8.4	明灰色 (5Y8/15PB8/1) やや軟質				
	4-52	口径 13.1 高さ 3.2 底径 7.5	明灰色 (5Y8/1) やや軟質				
須恵器 杯 B	4-49	口径 19.3 高さ (7.0) 底径 13.5	明灰色 (10B7/1) 密	平らな底部に下端面のわずかに凹んだ断面方形の高台が付く。体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。		
	4-48	底径 7.5	明灰色 (10B8/2) 密	底部と体部下半のみ残存。底部には断面方形の高台が付く。			
須恵器 壺蓋	4-36	口径 10.4	灰色 (5PB6/2 ~ 7/2) 密	天井部は平坦で、口縁部はほぼ垂直に折れ曲がり、端部は丸くおさめる。中心部を欠くが宝珠形のツマミが付くものと思われる。	ナデ調整。	天井部外面に斑状に自然釉がかかる。	
須恵器 壺	4-35	口径 6.0 高さ 16.7 最大径 7.2	灰色 (5PB6/2) やや密	平底で筒形の体部に長細い口頸部が付く。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。体部にはロクロメが強く残る。	ナデ調整。底部の糸切り痕をナデ消す。		
	4-40	最大径 8.4	明灰色 (5B8/1) 密	体部の破片。卵形を呈する。	体部下半をケズリ。他の部位はナデ調整。		
須恵器 鉢	4-37	口径 12.0 高さ 8.1 最大径 12.6 底径 6.9	明灰色 (10Y8/1) 密 やや軟質	肩の張った体部にやや外反する短い口縁が付く、平らな底部には外へ張り出す高台が付く。4-38 は			

	4-38	口径 20.0 最大径 20.7	灰色 (10B6.5/1) 密 均一	底部を欠き、肩の張りはゆるやか。		
	4-39	口径 27.6	内面 明灰色 (5Y8/1) 外面 灰色 (10Y7/1 ~ 10B7/1) 断面 明茶灰色 (5YR8/3) 密	口縁部は大きく開き、端部は外傾する面をなし外方へ突出する。底部を欠く。		

観察表 4 四町地区 整地層 2 出土土器 (挿図 38)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 椀 A I	4-159	口径 12.9 高さ 2.7	明茶褐色 (7.5YR8/4) やや密	体部は外上方に大きく開き、口縁端部は丸くおさめる。	内面ナデ調整、外面はヘラケズリ。	
土師器 杯 A	4-160	口径 14.8 高さ 3.4	淡肌色 (7.5YR9/3) やや密 やや軟質	体部は外上方に大きく開き、口縁端部は肥厚する。		
土師器 皿 A I	4-161	口径 17.7 高さ 1.4	肌色 (7.5YR9/4) 密	平底で、口縁部は短く立ち上がり、端部は内側に肥厚する。		
土師器 甕	4-162	口径 24.6	明褐色 (10YR8.5/4) やや密	外反する口縁部とわずかに内傾する体部からなる。口縁端部は外傾する面をなし上端部は丸く突出する。体部中段以下は欠く。	外面は口縁部から体部上段にかけて縦方向のハケメ調整を施し、頸部はハケメをナデ消す。体部上段以下は交叉する斜方向のハケメ調整。内面は口縁端部より体部上段まで横方向のハケメ調整を施し以下はナデ調整。	
黒色土器 杯	4-163	口径 17.0	内面より口縁部外面まで金属光沢を帯びた黒色 以下茶褐色 (7.5YR6/4) 密 やや軟質	体部はゆるやかに内湾しながら外上方へ広がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。底部は欠く。	内面はミガキ。外面は磨減し観察不能。	A 類
黒色土器 甕	4-164	口径 22.8	黒色 やや粗	ゆるく外傾する口縁部と、内傾する体部上段の破片。体部のほとんどを欠く。くびれ部分は不明瞭。口縁端部は平坦な面をなす。	内面及び頸部外面はナデ調整の上から粗いミガキを施す。外面体部はオサエのちわずかにミガキを施す。	
須惠器 杯 B	4-165	口径 14.0 高さ 5.3 底径 8.8	外面 暗灰色 (5PB5/1 ~ 6/1) 内面 灰色 (5PB7/3) 断面 灰色 (5PB6/2) やや密	平らな底部に断面方形の高台が内傾気味に付く。体部は外上方にまっすぐ開き、口縁部でわずかに外反する。端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。高台は貼り付け。他の部位はナデ調整。	
	4-166	口径 14.9 高さ 5.4	灰色 (5B6/1) やや密	平らな底部に断面方形の高台が付く。体部は外上方にまっすぐ開き、口縁端部は丸くおさめる。		
須惠器 壺	4-167	口径 11.8	灰色 (5PB6/2 ~ 6/3) 芯部 灰紫色 (2.5RP6/2) やや密	大きく外反する口縁部は端部の上・下端が突出し垂直で幅広の面をなす。	ナデ調整。	
須惠器 短頸壺	4-168	口径 9.2	明灰色 (5PB8.5/1) やや密	内傾する体部上段に直立する短い口縁が付く。口縁端部は丸くおさめる。		

観察表 5 四町地区 SD11B 出土土器 (図版 9、10・写真図版 29、30、31、32)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿	4-53	口径 13.0 高さ 1.7	明灰褐色 (10YR8/3) やや砂質	口縁部はやや丸味を持って立ち上がる。口縁上部	底部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。	

					はナデによりやや外反し、端部はつまみ上げられる。	
土師器 皿 A II	4-54	口径 高さ	15.1 2.0	明灰褐色 (10YR8.5/2) 密	口縁部は丸味を持ってゆるやかに立ち上がり、端部はつまみ上げられるもの(4-54)と、丸くおさめられるもの(4-55・4-56)とがある。	底部外面へラケズリ。他の部位はナデ調整。口縁部外面にナデが残る。
	4-55	口径 高さ	16.2 2.5	明灰褐色 (10YR8/3) やや砂質		底部外面より口縁端部まで丁寧なへラケズリ。底部内面より口縁端部までナデ調整。
	4-56	口径 高さ	16.3 2.3	明灰褐色 (10YR8/3)		
土師器 皿 A I	4-57	口径 高さ	19.0 2.1	明灰褐色 (10YR7/2) 密	口縁部の外傾角大きく底部との境が不明瞭。口縁上部にナデが強く残り、端部はつまみ上げられ肥厚する。	外面はへラケズリ。調整は粗く、指オサエ痕が残る。内面はナデ調整。
	4-58	口径 高さ	19.2 2.4	淡黄白色 (10YR9/2) 赤褐色粒含む	口縁部と底部の境不明瞭。口縁部は丸味を持って立ち上がり、端部はつまみ上げられる。	外面はへラケズリ。内面はナデ調整。
	4-59	口径 高さ	19.4 2.5	明灰褐色 (10YR8.5/2) 密	口縁部は丸味を持って立ち上がり、端部は小さく内側に巻き込む。	底部外面オサエ。口縁部外面より底部内面までナデ調整。全体に調整は丁寧である。
土師器 椀 A I	4-60	口径 高さ	11.9 3.0	明橙灰色 (2.5YR8/5) やや砂質	小さな平底で、体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるもの(4-60・4-61・4-62・4-64)と小さくつまみ上げるもの(4-63)とがある。	外面はへラケズリ。内面はナデ調整。4-61のケズリは粗い。
	4-61	口径 高さ	13.5 3.1	明灰褐色 (10YR8/2) 密 やや軟質		
	4-62	口径 高さ	13.5 3.3	明灰褐色 (10YR8/3) 密		
	4-63	口径 高さ	13.5 3.5	明茶灰色 (2.5YR8.5/3) やや粗 φ1~2mmの 砂粒多く含む		
	4-64	口径 高さ	13.7 3.5	淡肌色 (7.5YR9/3) やや粗 赤褐色粒含む		
土師器 杯 A	4-65	口径 高さ	16.6 2.9	肌色 (5YR8/6) やや粗 やや軟質	平底で体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部はつまみ上げられわずかに肥厚する。	底部外面から体部上段をへラケズリ。口縁部外面から底部内面までをナデ調整。 外面はへラケズリ。内面はナデ調整。口縁部外面にナデをわずかに残す。
	4-66	口径 高さ	16.9 3.1	肌色 (5YR8/4) やや粗		
	4-67	口径 高さ	17.1 3.1	明灰褐色 (10YR8/2) やや密		
	4-68	口径 高さ	17.6 (3.5)	明灰褐色 (10YR8/3) 密		
	4-69	口径 高さ	18.3 3.3	明灰褐色 (10YR8/2) 密		
土師器 蓋	4-70			明灰褐色 (10YR8/2) 密	円柱形ツマミの付く天井部の破片。	表面磨滅のため調整不明。
	4-71	口径	27.2	明灰褐色 (10YR8/2) 密	天井部は平坦面を持ち、ゆるやかに口縁部に至る。口縁部の下端は、わずかに下方に突出する。天井部中央を欠く。	外面は四方向に粗いミガキを施す。内面はナデ調整。
土師器 杯 B	4-72	口径 高さ 底径	17.5 4.7 9.8	明灰褐色 (10YR8/2)	底部外面には丸味を持った断面三角形の高台が付く。口縁部は大きく開き、端部は外傾する面をなし、わずかに内側に突き出す。	底部外面はケズリのちナデ調整。高台は貼り付け。体部と口縁部外面はケズリのちやや粗いミガキを施す。内面はナデ調整。
	4-73	口径	18.6	明灰褐色 (10YR8/2)	口縁部は大きく開き、端	体部外面から口縁端部ま

出土遺物観察表

		高さ (4.6)		部は4-72と似る。底部を欠く。	でケズリのち粗いミガキを施す。内面はナデ調整。	
	4-74	口径 18.1 高さ 4.6	明灰褐色 (10YR8.5/2) 密	底部外面に断面台形の高台が付く。口縁端部はつまみ上げられる。	表面が磨滅し調整不明。	
土師器 甕	4-75	口径 17.6	橙灰色 (2.5YR7/7) やや密	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや内湾する。口縁端部はわずかにつまみ上げられる。	体部外面はタタキ。口縁部外面より体部内面はケズリのちナデ調整。	
	4-76	口径 18.6	明灰褐色 (10YR7.5/2) やや密 雲母含む	頸部は「く」の字状に折れ、口縁部はつまみ上げられる。	体部外面上段は縦方向、以下は横方向のハケメ。頸部外面より口縁端部まではナデ調整。内面はハケメをナデ消す。	
土師器 高杯	4-77	残高 19.0	淡黄白色 (7.5YR9/3) 密 赤褐色粒含む やや軟質	脚部断面は七角形を呈する。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方に向けて削る。裾部外面は縦方向のハケメ、内面は横方向のナデ調整。	
黒色土器 皿	4-78	口径 14.2 高さ 1.5	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明灰褐色 (10YR8/2) やや密	平らな底部に短い口縁部が付く。口縁端部はわずかに外反し丸くおさめる。	内面のミガキは非常に密。底部外面は格子状、口縁部は横方向のミガキ。	A 類
黒色土器 椀	4-79	底径 8.4	全面金属光沢を帯びた黒色 やや密	底部のみの破片。断面三角形の高台が付く。内面に暗文を施す。	全面にミガキを密に施す。高台は貼り付け。	B 類
	4-80		内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 茶褐色 (7.5YR 6/4) やや密 雲母細粒含む	底部から体部の立ち上がり付近の破片。外面底部には高台の剥離痕が認められる。内面に暗文を施す。	全面にミガキを密に施す。	A 類
黒色土器 杯	4-81		内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明茶灰色 (7.5YR 8/3) やや砂質 雲母細粒含む	底部から体部の立ち上がり付近の破片。内面に暗文を施す。	内面はミガキ、外面は表面が磨滅し調整不明。	A 類
黒色土器 鉢	4-82		口縁部外面より内面 金属光沢を帯びた黒色 体部外面 明茶灰色 (7.5YR8/3) やや密	口縁部はやや内湾し、端部はつまみ上げられ内側に突出する。	体部外面はケズリ。口縁部は内外面共ナデ調整。体部内面にはミガキを施す。	A 類
黒色土器 短頸壺	4-83	口径 12.6	黒色 やや密	肩部は丸味を持ち、口縁部は短く直立する。	外面から口縁部内面まで細かいミガキを密に施す。内面はヘラケズリ。	B 類
黒色土器 鉢	4-84	口径 19.7 最大径 21.0	内面から外面体部上段 金属光沢を帯びた黒色以下明茶褐色 (7.5YR8/4) やや密	体部は丸味を持ち、口縁端部は外上方につまみ上げられ内傾する面をなす。	体部外面はケズリ調整。口縁部外面は粗いミガキ。口縁部内面以下は単位の大きいミガキを密に施す。	A 類
緑釉陶器 椀	4-85	底径 6.2	灰白色 (10YR9/1) やや軟質 釉 明灰緑色 (2.5GY 7.5/2)	底部は円盤状高台 (I A)。	外面はケズリ。内面にはミガキを施す。全釉。	
	4-86	口径 13.9	灰色 (5Y7/1) やや粗 釉 黄緑灰色 (2.5GY6/4)	体部は丸味を持って立ち上がったのち直線的に外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。底部を欠く。	体部外面上段以下はケズリ。他の部位はナデのち内外面共丁寧なミガキを施す。残存部全釉。	
	4-87	口径 19.8	灰白色 (2.5Y9/1) 釉 黄緑灰色 (2.5GY 7.5/5)	体部は丸味を持って外上方へ開き、口縁部は外反する。底部を欠く。	体部外面中段以下をケズリ。以上をナデのち粗いミガキ。内面には密なミ	

					ガギを施し、全面に施釉する。	
緑釉陶器 壺	4-88	頸部外径 3.8	明灰色 (10YR8.5/1) やや密 硬質 釉 灰緑色 (5GY6/2)	なだらかな肩部とくびれた頸部の破片。	ナデのち外面をミガギ。内面はナデ調整。頸部内面から、外面に厚く施釉し、体部内面は施釉しない。	
	4-89	底径 5.4	明灰色 (10YR8.5/1) やや密 硬質 釉 淡黄緑灰色 (5GY8/4)	蛇の目高台が付く壺の底部の破片。	外面は密なミガギを施す。内面はナデ調整。高台は貼り付け。内外面共厚く施釉される。	唾壺か？
緑釉陶器 椀	4-90		灰白色 (5Y9/1) 釉明灰緑 (2.5GY8.5/2)	体部は丸味を持ち、口縁部は小さく外反し、端部を丸くおさめる。口縁内面に花文を施す。	全面ミガギ。全面施釉。調整は丁寧である。	
灰釉陶器 段皿	4-91	口径 15.3	明灰色 (5Y8.5/1) やや密 釉 灰色 (7.5Y7/2 ~ 7/3) ムラがある	広縁の段皿で、口縁部中ほどに段が付く。外面に段はない。底部を欠く。	外面中段以下をケズリ。他の部位はナデ調整。内面のみ厚く施釉する。	
灰釉陶器 椀	4-92	口径 13.0 高さ 4.2	明灰色 (5Y8.5/1) 釉 灰色 (10Y6/3)	丸味を持った体部に断面台形の輪高台 (II Bb1) と小さく外反する口縁が付く。	底部はケズリのちナデ調整。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉する。	
	4-93	口径 16.4	明灰色 (5Y8.5/1) 釉 灰色 (10Y6/2 ~ 6/3)	底部には断面方形の輪高台 (II Bb1) が付く。体部は丸味を持って外上方へ開き、口縁部で大きく外反する。端部は丸くおさめる。4-94 は口縁部を欠き、4-93 は体部中段以下を欠く。	体部外面上段以下をケズリ。他の部位はナデ調整。高台はいずれも貼り付け。4-94 は両面施釉。4-92・4-93・4-95 は内面のみ施釉。	
	4-94	底径 8.4	明灰色 (5Y8.5/1) 釉 灰緑色 (5GY6/3)			
	4-95	口径 17.0 高さ 5.2 底径 7.5	明灰色 (5Y8.5/1) 釉 灰色 (10Y6/3)			
	4-96	底径 9.4	明灰色 (10Y8/1) 釉 暗黄緑灰色 10Y6/4)	底部には比較的幅の狭い蛇の目高台 (II Ba) が付く。体部は丸味を持ってゆったりと開く。	体部外面中段以下をケズリ。高台は貼り付け。内面のみ施釉する。	
灰釉陶器 壺	4-98	最大径 8.0 底径 6.2	明灰色 (5Y8.5/1 ~ 10Y8.5/1) 釉 灰色 (10Y6.5/3)	平底で下ぶくれの体部を持つ。口頸部は欠く。	底部外面には糸切り痕を残す。体部外面はケズリのち軽くナデ調整、内面はナデ調整。外面肩部から体部中段にかけ施釉する。	
灰釉陶器 水瓶	4-97		明灰色 (10Y8.5/1) 密 釉 灰色 (7.5Y6/1)	口頸部の破片。わずかに内傾しながら立ち上がり、頸部中段より口縁部は外反する。中段には2本の凹線がめぐる。頸部内面中段以下にシボリメが認められる。	内外面共ナデ調整。口縁部内面より外面にかけて刷毛塗り施釉。	
須恵器 杯蓋	4-99	口径 10.0	明灰色 (10B7/1 ~ 7/2) 密	平坦な天井部と屈曲する口縁部からなる。中心部を欠く。4-100 は口縁部の屈曲が強い。	天井部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
	4-100	口径 13.5	灰色 (2.5PB7/2) 密			天井部内面は磨滅し墨が付着。
	4-101	口径 17.0	明灰色 (10B8/1) 密			
	4-102	口径 18.9	明灰色 (5PB8/1) 密 やや軟質			
須恵器 杯 B	4-103	底径 8.8	灰色 (5PB7/1) 密	平らな底部に断面方形の輪高台が付く。体部は直線的に外上方に開く。4-104 の高台はやや内傾する。	底部外面はヘラオコシ、他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。	底部外面に墨書があるが判読不能。
	4-104	底径 9.8	明灰色 (10B8.5/1)			
	4-127	底径 9.0	外面 灰色 (5B5/1 ~ 6/			底部外面に墨

出土遺物観察表

			1) 内面・断面明灰色 (5Y8/1) やや粗			書。図版 25・写真図版 66
須恵器 杯 A	4-105	底径 8.2	灰白色 (5Y9/1) 密	平坦な底部を持ち、体部は外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
	4-106	口径 14.0 高さ 3.7 底径 9.6	下半 明灰色 (10B7/1) 上半 灰白色 (10YR9/1) 密 軟質			
	4-107	口径 14.5 高さ 3.5 底径 10.2	口縁部 黒色 他の部位 灰白色 (10YR9/1 ~ 9/0.5) 密 軟質			
	4-108	口径 14.4	灰白色 (5Y9/1 ~ 9/0.5) 密 やや軟質			底部を欠く。
	4-109	口径 17.9	灰白色 (5Y9/1) 密 やや軟質			底部を欠く。
	4-123	底径 8.1	明灰白色 (10Y8.5/1)			底部外面に墨書。図版 25・写真図版 66
	4-125	口径 13.8 高さ 3.6 底径 9.2	明灰色 (2.5Y8.5/2) 口縁外部外面 灰色 (10Y7.5/1) やや軟質			底部外面に墨書。図版 25・写真図版 66
	4-124	口径 12.4	明灰色 (5Y8/1) やや軟質			底部外面に墨書「善亦尼公」。図版 25・写真図版 66
	4-126	底径 8.4	表面 明灰色 (2.5Y8/2) 断面 明灰色 (10B7/1)			
須恵器 椀	4-110	底径 5.6	明灰色 (10B7/1) 密	底部は円盤状の高台 (0A)。体部は内湾気味に立ち上がる。緑釉の椀に類似する器形。	底部外面は糸切り、他の部位はナデ調整。	
	4-111	底径 12.6	明灰色 (10B7/1) 密	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部を欠く。	内外面共ナデ調整。ロクロ目が強く残る。	割れ口に漆が付着。
須恵器 皿 A	4-112	口径 18.6 高さ 2.5	明灰色 (10B8/1 ~ 5Y7/1) 密	広く平坦な底部とまっすぐ外上方に開く短い口縁部からなる。口縁端部は外傾する面をなし、中央部がわずかに凹むもの (4-112) と、上端が内側に突出するもの (4-113・4-114) とがある。	底部外面ヘラオコシ、他の部位はナデ調整。	
	4-113	口径 18.2 高さ 2.1	灰色 (10B6/1) 密			
	4-114	口径 18.6 高さ 2.5	明灰色 (10Y8/1 ~ 8.5/1) 密			
須恵器 壺	4-118	口径 (5.3) 高さ (16.5) 最大径 11.2	灰色 (10B6/2 ~ 5/2) 密	底部には断面方形の高台が付く。体部は卵形で、口頸部は外反する。端部はつまみ上げられるが上端は欠く。	体部下半はヘラケズリのナデ調整。他の部位はナデ調整。	肩部に自然釉が薄くかかる。
	4-119	口径 7.2 高さ (16.9) 底径 5.0	外面黒色他の部位明灰色 (N8.5/) やや密 軟質	平底で筒形の体部に長細い口頸部が付く。底部には糸切り痕が残り、体部のロクロメは強い。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	底部は糸切り痕を残す。他の部位はナデ調整。	
須恵器 高杯	4-120	残高 11.9	灰色 (2.5PB7/2) やや粗 φ 1 ~ 2mm の砂粒含む	裾広がり脚部と、平坦な杯底部の破片。	脚部は内外面共にナデ調整。杯部上面は板状のものでナデ調整を施す。	
須恵器 壺蓋	4-121	口径 12.0	灰色 (5PB7/1.5) 密	天井部は平坦で、口縁部は下方に折れ曲がる。中心部は欠く。	ナデ調整。	天井部に自然釉がかかる。
須恵器 壺	4-122	口径 6.9	明灰色 (5B7.5/1) 白色粒含む 密	口頸部のみ残存する。頸部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁部は大き		

				く外反する。端部は垂直で幅広の面をなす。	
須恵器鉢	4-116	口径 22.0	表面 灰色 (N5.5/) 断面 灰白色 (10Y9/1) 密 軟質	体部は肩が張り、口縁部は短く外反する。端部は外傾する平坦面をなす。底部は欠く。	
	4-117	口径 32.4	灰白色 (5Y9/1) 密 やや軟質	体部より口縁部に向かって大きく開く。口縁端部はわずかに肥厚し、外傾する端面の中央がやや凹む。	
須恵器甕	4-115	口径 17.4	表面 暗灰色 (10B4/1 ~ 5/1) 断面 茶灰色 (7.5R5/2) 密	頸部は「く」の字状に外方に折れ、外反する口縁部に至る。口縁部は短く、端部は外方に突出する。	

観察表 6 四町地区 SD12 出土土器 (図版 10・写真図版 31、32)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 碗 A I	4-131	口径 13.4 高さ 3.4	灰色 (2.5Y7/2) 密 雲母含む	底は比較的小さく、口縁部に向かって大きく開く。口縁端部は上方につまみ上げられる。	内面はナデ調整。外面はヘラケズリ。	
土師器 皿 A I	4-134	口径 18.5 高さ 1.8	明灰褐色 (10Y R8/2) 密	平底で、口縁部は丸味を持って立ち上がり、端部は内側に巻き込まれ大きく肥厚する。	外面はヘラケズリを施すが、口縁部にナデが残る。内面はナデ調整。	
黒色土器 杯	4-136	口径 17.0 高さ 4.8	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 灰褐色 (10YR5/7) 密 雲母含む	底部は比較的小さく、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部はやや薄く丸くおさめる。	外面はヘラケズリのち粗いミガキ。内面には密なミガキ。内面体部と底部には暗文を施す。	
須恵器 皿	4-142	口径 14.9 高さ 2.4 底径 6.8	明灰色 (10B7/1 ~ 8/1) 密	円盤状の高台 (0A) から体部は大きく開く。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。緑釉皿に近似する器形。	底部は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
須恵器 鉢	4-198	口径 28.2	灰色 (10Y7/1)	体部は外上方へ直線的に開き、口縁部に至る。口縁端部は外傾する面をなし下端は外方に突出する。底部を欠く。	ナデ調整。	内面に墨が付着。
緑釉陶器 皿	4-143	口径 13.6 高さ 2.7 底径 5.3	灰色 (10Y7/1) やや軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7/4)	底部は円盤状の高台 (I A)。体部は内湾気味に低く開き、口縁端部は丸くおさめる。	体部外面上段以下をケズリのちミガキ。他の部位はナデのちミガキを施す。全面施釉。	底部外面にメアトが認められる。
	4-144	底径 5.6	灰色 (10B6/1) 釉 灰色 (10Y6/3)	4-143 とほぼ同型・同寸の底部の破片。	外面はケズリのちミガキ。内面はナデのち密なミガキを施す。全面施釉。	底部外面に線刻「大」。写真図版 67
緑釉陶器 蓋	4-145	口径 22.2	灰白色 (10PB9/1 ~ 8/1) 密 硬質 釉 灰色 (10Y7/2 ~ 8/2)	天井部中央を欠くが、環状のツマミの付く蓋と思われる。天井部は丸味を持ち、ゆるやかに口縁部に至る。口縁部は水平気味に広がり、端部は下方に屈曲する。	全面に密なミガキを施したのち、全面に施釉する。調整は非常に丁寧である。	
緑釉陶器 三足盤	4-147	口径 13.7	明茶褐色 (7.5YR8/4) 密 硬質 釉 黄褐色 (10YR6/7)	底部は丸味を持ち、幅広の口縁部は稜をなし水平に広がる。端部は丸くおさめる。脚部は欠く。四輪花。	全面にミガキを施したのち、厚く施釉する。輪花は口縁端部をヘラで切り欠き、対応する口縁部上面に粘土を盛り上げて稜	

					を付ける。	
灰釉陶器 壺蓋	4-146	口径 13.0	明灰色 (10Y8/1) 密 硬質 釉 灰緑色 (5GY6/3)	天井部は平坦で肩部はやや丸味を持ち、垂直に折れ曲がる。口縁部は下段で外方へ広がる。端部は丸くおさめる。天井部中央を欠く。	天井部内面から口縁部外面までナデ調整。天井部外面に厚く施釉する。	

観察表 7 四町地区 SD13 出土土器 (図版 10・写真図版 31、32)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 碗 A I	4-130	口径 13.1 高さ 3.3	明灰褐色 (10YR8/3) 密	底部は比較的小さく、口縁部に向かって大きく開く。口縁端部はわずかにつまみ上げられる。	底部内面より口縁部外面までナデ調整。体部外面上段より底部までヘラケズリを施す。	
土師器 杯 A	4-132	口径 17.6 高さ 3.6	明灰褐色 (10YR8/3) 密	体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部はやや外反し端部はつまみ上げられる。	底部外面より口縁部までヘラケズリを施すが、口縁部にはナデが残る。内面はナデ調整。	口縁端部に煤が付着。
土師器 皿 A I	4-133	口径 17.6 高さ 1.8	明灰褐色 (10YR8/2) やや密 雲母多く含む	平底で、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は内側に肥厚する。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。	
土師器 皿 A II	4-150	口径 16.1 高さ 2.4	明灰褐色 (10YR8/2) 密	口縁部は丸味を持って立ち上がり、端部はつまみ上げられる。	口縁部外面より底部内面までナデ調整。外面は口縁部以下をヘラケズリ。	底部外面に墨書。図版 25
土師器 高杯	4-135	底径 15.2 残高 8.2	明灰褐色 (10YR8/3) 密	脚部は断面七角形を呈する。裾部はなだらかに広がり、端部は下方に肥厚する。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付けて外面を上方に向けてケズる。裾部は内外面共ナデ調整。	
須恵器 杯蓋	4-137	口径 18.8	灰色 (5PB6/3) やや密	平坦な天井部と屈曲する口縁部からなる。端部の屈曲は弱い。中心部は欠く。	天井部外面はヘラオコシのち軽くナデ調整。他の部位はナデ調整。	内面は磨滅し平滑で、墨が付着する。
	4-138	口径 19.2	外面 明灰色 (5B7/1) 内面・断面 灰色 (2.5PB7/3) 密	天井部は平坦面を持たず、ゆるい傾斜を持ち口縁部に至る。端部は垂直に折り曲げられ下方に突き出す。中心部は欠く。	天井部はケズリ。他の部位はナデ調整。ロクロ目が強い。	
須恵器 杯 A	4-139	口径 13.0 高さ 2.8	灰白色 (10Y9/1) 密 やや軟質	平底で、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	底部外面に墨書が認められるが判読不能。
	4-140	口径 13.9 高さ 3.0	明灰色 (N8/) 密 やや軟質			
須恵器 杯 B	4-141	口径 11.9 高さ 4.0 底径 7.8	外面 灰色 (5PB6/2) 内面 明灰色 (5PB8/1) 断面 茶灰色 (10R6/2) やや密	平坦な底部に、断面がやや丸味を持つ方形の高台が付く。体部はわずかに丸味を持って立ち上がる。口縁部はやや外反し端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。高台は貼り付け。他の部位はナデ調整。	
緑釉陶器 皿	4-149	底径 8.7	明灰色 (5P7/1) 硬質 釉 明灰色 (7.5Y8/3)	平坦な底部に、断面方形でやや外に張り出す輪高台 (II Bb1) が付く。内面に陰刻花文を施す輪花皿。口縁部を欠く。	高台は貼り付け。高台内にはケズリ痕を残し、他の部位は丁寧なミガキを施す。輪花は、内面の四方に粘土を細く盛り上げ、対応する外面にヘラで練刻する。	内外面にメアトが認められる。
緑釉陶器 浄瓶	4-148		灰白色 (N9.5/ ~ 5Y9/1) 密 やや軟質 釉 黄灰色 (10Y8/4)	中段に 2 本の沈線をめぐらせ、肩部付近に陰刻花文を施す。口頸部のみ残存。内面に絞りが認められる。	外面ミガキのち釉を厚く施す。	

観察表 8 五町地区 SD19 出土土器 (図版 11 ~ 17、25・挿図 39、40・写真図版 33 ~ 45、66 ~ 67)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A	5-1	口径 11.0 高さ 1.8	明茶褐色 (7.5YR9/3 ~ 8/4) 軟質	口縁部は丸味を持って立ち上がり、外上方へ開く。端部は丸くおさめる。	口縁部外面から底部内面までナデ調整。底部外面はオサエ。	
	5-2	口径 13.5 高さ 2.2	内面・断面 明灰褐色 (10YR8.5/3) 外面 橙灰色 (2.5YR7/6)			口縁端部に煤が付着。
土師器 皿 A II	5-3	口径 15.2 高さ 2.1	明茶褐色 (7.5YR8/4)	口縁部は丸味を持って立ち上がり、外上方へ開く。端部は丸くおさめる。5-6・5-21の口縁端部は僅かにつまみ上げられる。5-21は底部の24ヵ所に穿孔する。5-22は底部中心に穿孔する。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。口縁部外面にナデが残るものもある。	
	5-4	口径 15.5 高さ 2.3	明灰褐色 (10YR8.5/2)			
	5-5	口径 15.6 高さ 2.1	肌色 (5YR8/4) 雲母細粒含む			
	5-6	口径 15.9 高さ 2.3	明茶灰色 (7.5YR8/3)			口縁端部に煤が付着。
	5-21	口径 15.8 高さ 2.4	明茶褐色 (7.5YR8/5) 赤褐色粒多く含む			
	5-22	口径 16.0 高さ 2.1	明灰褐色 (10YR8/3) 雲母細粒・赤褐色粒含む			
	5-8	口径 15.4 高さ 2.1	明灰褐色 (10YR8.5/2)	口縁部は丸味を持って立ち上がり、外上方へ開く。端部は内方へ巻き込む様に肥厚する。		口縁端部に煤が付着。
	5-9	口径 15.7 高さ 2.4	明灰褐色 (10YR8/2 ~ 8/4)			
	5-10	口径 16.0 高さ 2.0	明茶褐色 (7.5YR8/4) 雲母細粒多く含む			
	5-11	口径 16.8 高さ 1.8	明灰褐色 (10YR8/3) 雲母細粒多く含む			
	土師器 皿 A I	5-7	口径 16.6 高さ 2.1	明茶褐色 (7.5YR8/4) 赤褐色粒含む	口縁部は丸味を持って立ち上がり、外上方へ開く。端部は丸くおさめる。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。口縁部外面にナデが残るものもある。
5-12		口径 17.4 高さ 2.3	明茶褐色 (7.5YR8/5) 雲母細粒多く含む	口縁部は丸味を持って立ち上がり、外上方へ開く。端部は内方へ巻き込む様に肥厚する。		
5-13		口径 17.4 高さ 2.0	明灰褐色 (10YR8/3) 雲母細粒・赤褐色粒含む			
5-14		口径 17.6 高さ 2.3	明茶褐色 (7.5YR8/4)			
5-15		口径 18.0 高さ 1.5	明灰褐色 (10YR8/2) 砂粒多く含む			
5-16		口径 18.2 高さ 2.0	明灰褐色 (10YR8/3)			
5-17		口径 18.7 高さ 2.2	明茶褐色 (7.5YR8/4)			
5-18		口径 17.9 高さ 2.6	淡肌色 (7.5YR9/2) 赤褐色粒含む			
5-19		口径 18.2 高さ 2.8	明灰色 (2.5Y8.5/2)	口縁部は丸味を持って立ち上がり、やや外反し開く。端部はつまみ上げられ肥厚する。	底部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。	
土師器 皿	5-20	口径 22.3 高さ 3.2	明灰褐色 (10YR8/2) 雲母含む	口縁部は丸味を持って立ち上がり、外上方へ開く。端部は内方へ巻き込む様に肥厚する。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。	
土師器 椀 A II	5-23	口径 10.6 高さ 2.5	明茶褐色 (7.5YR8/5) 赤褐色粒含む	小さな平底で、体部は丸味を持って立ちあがる。口縁端部は丸くおさめる。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。口縁部外面にナデが残る。5-24のケズリは粗い。	
	5-24	口径 10.6 高さ 2.8	明灰褐色 (10YR7/2) 赤褐色粒含む	底部は比較的小さく、体部は丸味を持って立ち上		

出土遺物観察表

					がる。口縁部は外反し端部は上方へつまみ上げられる。					
土師器 椀 A I	5-25	口径 高さ	13.8 3.1	明灰褐色 (10YR8.5/2) やや密	底部は比較的小さく、体部は丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。	外面へラケズリ。内面ナデ調整。5-28は底部は内面にハケメが残る。	口縁部に煤が付着。			
	5-26	口径 高さ	13.8 3.1	淡黄白色 (10YR9/3)						
	5-27	口径 高さ	13.9 3.0	明茶褐色 (7.5YR8/5)						
	5-28	口径 高さ	14.2 3.7	明灰褐色 (10YR8/2) 赤褐色粒含む						
	5-29	口径 高さ	13.5 3.2	明茶褐色 (7.5YR8/5)	底部は比較的小さく、体部は丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。口縁端部は小さくつまみ上げられる。	外面へラケズリ。内面ナデ調整。				
	5-30	口径 高さ	13.8 3.6	淡肌色 (7.5YR9/3)						
	5-31	口径 高さ	13.8 3.3	明褐灰色 (10YR7.5/4)						
	5-32	口径 高さ	14.0 3.3	明灰褐色 (10YR8/2) 雲母細粒含む						
	5-33	口径 高さ	14.2 2.9	明茶灰色 (7.5YR8/3)						
	5-34	口径 高さ	14.2 3.4	明灰褐色 (10YR8/3)						
	5-35	口径 高さ	14.4 3.1	肌色 (5YR8/5) やや密						
	5-56	口径 高さ	14.2 3.0	明灰褐色 (10YR8.5/2)						
	5-57	口径 高さ	14.2 3.0	明灰褐色 (10YR8/3) 雲母細粒含む						
	5-36	口径 高さ	14.2 3.1	明褐灰色 (10YR8.5/4) 赤褐色粒含む				体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部はわずかに屈曲し、端部は小さくつまみ上げられる。	口縁部外面より底部内面まではナデ調整。体部外面から底部外面はオサエのち粗いヘラケズリを施す。	底部内面にハケメが残る。
	5-37	口径 高さ	14.3 3.4	明茶褐色 (7.5YR8/4) 密						
5-38	口径 高さ	14.4 3.4	明茶褐色 (7.5YR8/4) 赤褐色粒含む							
土師器 杯 A	5-39	口径 高さ	15.9 3.2	橙灰褐色 (5YR7/5)	底部は平らで、体部は丸味を持って立ち上がり、のち外上方へまっすぐ広がる。口縁端部はわずかに肥厚する。	内面はナデ調整。外面は丁寧なヘラケズリ。				
	5-40	口径 高さ	16.2 3.3	内面・断面 明茶褐色 (7.5YR8.5/4) 外面 橙灰褐色 (5YR7/6) 雲母細粒含む						
	5-41	口径 高さ	16.4 2.9	明灰褐色 (10YR8.5/3) 雲母細粒含む						
	5-42	口径 高さ	16.4 3.4	明茶褐色 (7.5YR8.5/4) 雲母・赤褐色粒含む						
	5-43	口径 高さ	16.6 3.6	明灰褐色 (10YR7/2)						
	5-44	口径 高さ	16.8 3.8	淡黄白色 (10YR9/2) 赤褐色粒含む						
	5-45	口径 高さ	16.8 3.6	明灰褐色 (10YR8/3)						
	5-46	口径 高さ	15.0 3.4	明褐灰色 (10YR8/4) 赤褐色粒含む				内面はナデ調整。外面はヘラケズリ。口縁部外面にナデを残す。5-48・5-50はケズリ粗く、オサエ痕が残る。		
	5-47	口径 高さ	15.8 3.2	明茶褐色 (7.5YR8/4) 雲母・赤褐色粒含む						
	5-48	口径	16.2	明茶褐色 (7.5YR8/6)						

		高さ 3.2	赤褐色粒含む			
	5-49	口径 17.2 高さ 2.9	橙灰褐色 (5YR7/6) 雲母細粒含む			
	5-50	口径 17.2 高さ 3.0	明茶褐色 (7.5YR7.5/4) 赤褐色粒含む			
	5-51	口径 16.3 高さ 3.5	明茶褐色 (7.5YR7/4) 赤褐色粒含む			
	5-52	口径 16.8 高さ 3.5	明茶褐色 (7.5YR7.5/4) 赤褐色粒含む			
	5-53	口径 18.0 高さ 3.5	明褐灰色 (10YR8/4)			
	5-54	口径 15.2 高さ 3.3	明茶褐色 (7.5YR8.5/4) 密	底部は平らで、体部は丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。外傾角は比較的小さい。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面をオサエ。他の部位はナデ調整。	
	5-55	口径 17.8 高さ 4.1	黄橙色 (7.5YR8/8) 密	底部は平らで、体部は丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。口縁端部はつまみ上げられ肥厚する。	口縁部外面より底部内面までナデ調整。体部・底部外面はオサエ。	
土師器 蓋	5-61		明茶褐色 (7.5YR8/4)	上面中央がやや高まる円柱形のツمامミ。	ツمامミは貼り付け。	
	5-62		明茶褐色 (7.5YR8/4)			
	5-63	口径 18.7	明灰褐色 (10YR7/3) 雲母細粒多く含む	天井部は丸味を持ち外下方へ広がる。天井部と口縁部との境は不明瞭。口縁端部は下方へわずかに肥厚する。天井部中心を欠く。	内面はナデ調整。外面はヘラケズリ。	
	5-64	口径 18.8	明灰褐色 (10YR7.5/2)			
	5-65	口径 23.6	明茶褐色 (7.5YR8/4) 雲母細粒含む			
	5-66	口径 26.4	外面 橙灰褐色 (5YR7/5) 内面・断面 明茶褐色 (7.5YR8/4)	天井部は丸味を持ち外下方へ広がる。端部は丸くおさめる。天井部中心を欠く。		
土師器 杯B	5-67	口径 18.8 高さ 4.4	明灰褐色 (10YR7/2 ~ 7/3) 赤褐色粒含む	平らな底部に断面台形の高台が付く。体部は外上方へ大きく広がり、口縁部に至る。口縁端部は上方へわずかに肥厚する。	体部・口縁部外面はヘラケズリ。他の部位はナデ調整。5-69・5-71は口縁部外面に横方向のナデが残る。	
	5-68	口径 16.7 高さ 4.6	明褐灰色 (10YR8.5/4) 赤褐色粒含む			
	5-69	口径 22.4 高さ 6.8	明灰褐色 (10YR8.5/2)	平らな底部に断面台形の高台が付く。体部は深く、外上方へ開く。口縁端部は内側にわずかに肥厚する。		
	5-71	口径 24.0 高さ 5.9	明茶灰色 (7.5YR8.5/2) 雲母細粒含む			
	5-70	口径 23.4 高さ 5.8	明灰褐色 (10YR7/2) 雲母細粒含む	平らな底部に、断面がやや丸味を持った台形の高台が付く。体部は大きく外上方へ開き、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	体部・口縁部外面は粗いヘラミガキ。他の部位はナデ調整。	
	5-72	口径 24.0 高さ 6.5	明茶褐色 (7.5YR7.5/4) 雲母細粒・赤褐色粒含む	平らな底部に断面台形の高台が付く。体部はやや丸味をもって立ち上がり外上方へ広がる。口縁端部は外傾する面をなし、上端がわずかに肥厚する。	体部・口縁部外面はヘラケズリ。他の部位はナデ調整。	
	5-73	口径 26.4 高さ 8.6	明褐灰色 (10YR8/4 ~ 8/5)	平らな底部に断面がやや丸味を持った高台が付く。体部は深くまっすぐ外上方へ開き口縁部に至る。口縁端部は外傾する	体部・口縁部外面はヘラケズリ。他の部位はナデ調整。内面にハケメが残る。	

				面をなし、両端を丸くおさめる。	
土師器鉢	5-74	口径 24.2 高さ 8.0	明灰褐色 (10YR7/4) 赤褐色粒含む	平坦な底部に断面が丸味を帯びた方形の高台が付く。体部は厚く、丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。口縁部はわずかに外反し、端部は上方に小さく突出する。	内面及び底部外面はナデ調整。体部外面にはヘラケズリを施すが調整は粗く粘土の接合痕が残る。
土師器皿B	5-76	口径 19.2 高さ 1.8	明灰褐色 (10YR8.5/2)	平らな底部に断面が丸味を帯びた三角形の高台が付く。体部は僅かに内湾気味に低く開く。口縁端部はわずかにつまみ上げられる。	体部・口縁部外面をヘラケズリ。他の部位はナデ調整。
	5-77	口径 15.6 高さ 2.1	明灰褐色 (10YR8/3)	平らな底部に断面台形の高台が付く。体部は外上方へまっすぐ開き、口縁部はやや外反する。端部は丸くおさめる。	体部・口縁部外面はヘラケズリのちヘラミガキを施す。他の部位はナデ調整。
土師器壺	5-87	口径 5.9 最大径 7.0	明橙色 (10R8/4) 赤褐色粒含む	体部はやや外傾して立ち、内側に突出する小さい口縁が付く。端部は丸くおさめる。体部中段以下を欠く。	体部外面はヘラミガキ。他の部位はナデ調整。
	5-88	口径 5.8 最大径 7.1	明茶灰色 (7.5YR8.5/2) 外面 橙灰褐色 (5YR7.5/5)		体部外面はヘラケズリ。他の部位はナデ調整。
	5-75	口径 14.6	淡黄白色 (10YR9/2)	体部はやや外傾して立ち、短く内側に屈曲する小さな口縁が付く。端部は丸くおさめる。体部外面に一对の把手が付く。底部は欠く。	体部外面はヘラケズリのちヘラミガキ。体部内面はハケメのちナデ調整。口縁部はナデ調整。内面にハケメが残る。
土師器高杯	5-78	口径 24.4	明灰褐色 (10YR8.5/2) 砂粒含む	体部はゆるやかに外反しながら大きく広がる。口縁端部は垂直な面をなし上端がわずかに突出する。	外面は端部下端までヘラケズリのちヘラミガキを施す。内面はナデ調整。
	5-79	口径 36.0	明灰褐色 (10YR7.5/2) 雲母細粒含む		
	5-80	口径 32.3	明灰褐色 (10YR8.5/2) 赤褐色粒含む	扁平な杯部は口縁部で外反し水平に広がる。口縁端部はわずかに凹む面をなし、上端が丸く突出する。杯部と脚部との境は明瞭である。脚部は断面七角形を呈し中空部は裾部に向かってやや広がる。脚部と裾部との境は不明瞭で裾部は大きくひろがる。裾端部はわずかに内傾する面をなし下端は下方にわずかにふくらむ。	杯部は口縁部外面から底部内面までをナデ調整。外面は上方へのヘラケズリのちヘラミガキを施すが、ケズリは口縁部まで及ばない。脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け外面を上方に向けてケズる。裾部はナデで仕上げる。
	5-81	口径 33.3 高さ 25.2 底径 16.4	明茶褐色 (7.5YR8/4)		
	5-82	口径 34.2	明灰褐色 (10YR8/3) 赤褐色粒含む	扁平な杯部は口縁部でゆるやかに外反する。口縁端部は内傾する面をなし、上端は丸く肥厚する。杯部と脚部との境は明瞭で、脚部は断面七角形を呈する。5-82は脚部を欠く。	口縁部外面より底部内面までをナデ調整。外面は上方に向けてケズるが口縁部まで及ばない。
	5-83	口径 30.2	淡肌色 (7.5YR9/2)		
	5-84	底径 15.9	明茶褐色 (7.5YR8/4)	脚部は断面七角形を呈する。中空部は裾部に向かって広がり、裾部は外反	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方に向けてケズる。裾部はナデ

				し比較的低く広がる。端部は丸味を持って下方に肥厚する。杯部を欠く。	調整のち外面にヘラミガキを施す。	
	5-85	底径 18.4	明茶灰色 (7.5YR8.5/3)	脚部は他のものに比べ太く短い。断面は七角形を呈し、中空部は裾部に向かって広がる。裾部は脚部との境で「く」の字状に屈曲し外下方へ広がる。端部は僅かに凹む面をなし下端はやや肥厚する。杯部を欠く。	脚部は棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方向に向けて削る。裾部内外面及び脚部下段内面はナデ調整。	外面に「栗」の線刻。図版 25・写真図版 67
	5-86		明灰褐色 (10YR8.5/3) 雲母含む	杯部の破片。	外面ケズリ。内面ナデ調整。	
土師器 甕	5-89	口径 17.3	明茶褐色 (7.5YR8/4)	体部は内傾して立ち上がり、頸部で「く」の字状に外方へ折れ曲がる。口縁端部は内側に肥厚する。	体部外面は横方向の平行タタキ。口縁部外面から端部にかけてはナデ調整。口縁部内面は横方向のハケメ調整を行う。口縁部と体部との境をナデ調整。体部内面はオサエ。	外面に煤が付着。
	5-90	口径 18.1	明灰褐色 (10YR8/2) やや砂質			
	5-91	口径 20.0 最大径 21.2	明茶褐色 (7.5YR8/4) 雲母細粒含む	体部は頸部で「く」の字状に外方へ折れ曲がる。口縁端部は内側に巻き込まれ肥厚する。	体部外面は横方向の粗い平行タタキ。体部内面は同心円状のオサエの痕をナデ消す。頸部外面は縦方向のハケメ。口縁端部から口縁部内面はナデ調整。体部上段内面は横方向の細かいハケメ調整。	外面に煤が付着。
	5-92	口径 22.8 最大径 25.4	明灰褐色 (10YR8.5/2) やや軟質	球形の体部は頸部で「く」の字に折れ曲がる。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は内側に肥厚する。	体部外面は横方向の平行タタキ。体部内面はオサエ。口縁部内外面共にナデ調整。	外面に煤が付着。
	5-93	口径 23.0	明灰褐色 (10YR8/3)	頸部はやや丸味を持って外上方へ折れ曲がる。口縁端部は内側に突出する。	頸部から体部外面にかけて縦方向の粗いハケメ。口縁部から体部内面はナデ調整。	外面に煤が付着。
	5-94	口径 25.0	明灰褐色 (10YR8/3)	体部上段はやや内傾し、頸部で丸味を持ち外方へ大きく折れ曲がる。口縁端部は外傾する面をなし、上方へ肥厚する。	体部外面は縦方向のハケメ。口縁部内面は横方向のハケメ。他の部位はナデ調整。	外面に煤が付着。
	5-95	口径 26.0	明茶褐色 (7.5YR8/4 ~ 10YR8.5/3)	体部はやや内傾し、頸部で「く」の字状に外方へ折れ曲がる。口縁端部は内側に肥厚する。	外面口縁部から体部上段まで縦方向のハケメ。以下を横方向の平行タタキ。口縁端部はナデ調整。口縁部内面は横方向のハケメ。体部内面上段は横方向の細かいハケメ。以下はオサエ。	
	5-96	口径 24.0 最大径 27.0	明灰褐色 (10YR8/2) 軟質	体部は丸く、頸部で「く」の字状に外方へ折れ曲がる。口縁端部は内側にわずかに肥厚する。	外面口縁部から体部上段まで縦方向のハケメ。以下はタタキ目をナデ消す。口縁端部はナデ調整。口縁部内面は横方向のハケメ。体部内面はナデ調整を施すが僅かにハケメが残る。	

出土遺物観察表

黒色土器 皿 A	5-97	口径 高さ	15.0 1.8	金属光沢を帯びた黒色	口縁部は丸味を持って立ち上がり、上段で外反する。端部は丸くおさめる。底部を欠く。	内面は細かいヘラミガキを丁寧に施し口縁部外面はナデ調整。以下はケズリのち粗いヘラミガキを施す。	B 類
黒色土器 皿 B	5-98	口径	18.4	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明褐色 (10YR7.5/4)	口縁部は大きく外上方に開く。底部と口縁端部を欠く。		A 類
黒色土器 椀 B	5-99	口径 高さ 底径	10.0 2.9 4.7	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 体部上段以下 明灰色 (2.5YR8.5/2)	底部には断面が丸味を持つ三角形の高台が付く。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口縁端部は丸くおさめる。	内面は細かいヘラミガキを丁寧に施す。底部外面はナデ調整。体部外面にミガキが認められるが器表面が摩滅し詳細は不明。	A 類
	5-100	口径	7.0	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明茶褐色 (7.5YR8/5)	断面三角形の高台の付く底部の破片。	内面は細かいヘラミガキを施し外面はナデ調整。	A 類
	5-101	口径	7.2	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明褐色 (2.5YR8/4 ~ 5YR8/4) やや砂質	外方へ大きく張り出す高台の付く底部の破片。高台下端部は丸くおさめる。		A 類
黒色土器 椀 A	5-102	口径	18.3	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明茶灰色 (7.5YR7/3)	口縁部はわずかに外反し、端部は尖り気味におさめる。	内面は細かいヘラミガキ。外面は粗いヘラミガキ。	A 類
	5-103	口径 高さ	16.8 4.1	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明茶褐色 (7.5YR7.5/4) やや砂質	底部は平坦で比較的小さい。体部は大きく外上方へ開き、口縁部はわずかに外反するもの (5-103・5-105) と、しないもの (5-104) とがある口縁端部は丸くおさめる。	内面は細かいヘラミガキのち暗文を施す。口縁部外面はナデ調整。体部外面は粗いヘラミガキ。底部外面はオサエ。	A 類
	5-104	口径	17.7	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 褐色 (10YR4/5)			A 類
	5-105	口径 高さ	18.6 4.4	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 橙灰褐色 (5YR7/7) やや砂質			A 類
黒色土器 杯	5-106	口径	20.6	口縁部外面及び内面 金属光沢を帯びた黒色 体部外面 明茶褐色 (7.5YR8/4)	体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部は欠く。	内外面共にヘラミガキを施すが外面はやや粗い。	A 類
黒色土器 甕	5-107	口径	9.9	体部外面中段以上と内面 金属光沢を帯びた黒色 外面中段以下 明褐色 (10YR7.5/3)	球形の体部に頸部で「く」の字状に折れ曲がる短い口縁が付く。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部外面はナデ調整。他の部位にはヘラミガキを施す。ミガキは内面に密に、外面は粗く施す。	
	5-108	口径	11.5	体部外面中段以上と内面 金属光沢を帯びた黒色 外面中段以下 茶灰色 (7.5YR6/2)			
	5-109	口径 最大径	12.1 12.4	体部外面中段以上と内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 中段以下 灰褐色 (10YR6/2 ~ 6/3)			
	5-110	口径	11.4	体部外面中段以上と内面 金属光沢を帯びた黒色 外面中段以下 灰褐色 (10YR6/2 ~ 6/3)			
	5-111	口径	12.7	体部外面中段以上と内面 金属光沢を帯びた黒色 外面中段以下 明灰色 (5YR8.5/1)			
	5-112	口径	14.8	体部外面中段以上と内面 金属光沢を帯びた黒色 外面中段以下			

				灰褐色 (10YR6/2 ~ 6/3)			
須惠器 杯蓋	5-113	口径	11.8	灰色 (10B6/2 ~ 6.5/2)	天井部は平坦で中心部に宝珠形のツマミが付く。口縁部は屈曲し、端部は下方もしくは外下方へ突出する。口径により大きく三群に分かれる。	天井部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	天井部内面が磨滅し墨が付着するもの (5-116・5-118・5-119・5-120・5-131)、磨滅せず墨が付着するもの (5-113・5-122)。磨滅するが墨が認められないもの (5-115・5-129・5-130)。
	5-115	口径 高さ	13.4 1.4	明灰色 (5B6/1 ~ 7.5/1)			
	5-116	口径 高さ	13.5 2.1	明灰色 (5GY8/1)			
	5-117	口径 高さ	13.7 2.2	明灰色 (10B8/2) 白色砂粒含む			
	5-118	口径 高さ	13.9 2.4	灰色 (5B6/1 ~ 7.5/1)			
	5-119	口径	14.0	灰色 (2.5PB7.5/2) やや粗			
	5-120	口径 高さ	14.1 2.1	明灰色 (10B8/1.5)			
	5-121	口径	15.2	灰色 (10B6/2 ~ 6.5/2)			
	5-122	口径 高さ	15.5 2.8	灰色 (10B6/2 ~ 6.5/2)			
	5-123	口径 高さ	16.2 3.3	灰色 (2.5PB7.5/2)			
	5-124	口径	19.4	灰色 (2.5PB6/2)			
	5-125	口径	19.6	灰色 (2.5PB6/2)			
	5-126	口径 高さ	20.4 3.5	灰色 (2.5PB7.5/2)			
	5-114	口径 高さ	12.0 2.5	明灰色 (10B7/3) やや粗 白色細粒多く含む			
5-127	口径 高さ	15.6 1.5	明灰色 (10B6/2)	天井部は平坦でツマミは付かない。口縁部は屈曲し、端部は下方へ突出する。5-132 の口縁部は屈曲しない。	天井部外面はヘラオコシのち軽くナデ調整。他の部位はナデ調整。		
5-128	口径 高さ	16.1 2.1	明灰色 (N7.5/)				
5-129	口径 高さ	16.0 2.4	灰色 (10B6.5/2)				
5-130	口径 高さ	15.8 2.5	明灰色 (N7.5/)				
5-132	口径 高さ	17.0 2.5	明灰色 (10Y8.5/1) やや軟質				
5-131	口径 高さ	18.8 1.8	灰色 (2.5PB7/2)				
須惠器 杯 B	5-133	口径 高さ 底径	11.4 4.0 6.3	表面 灰色 (10B6.5/2) 断面 灰桃色 (10RP6/2)	平坦な底部に断面方形の高台が付く。体部はまっすぐ外上方に立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口径により大きく三群に分かれる。5-136 の口縁部は外反する。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
	5-134	口径 高さ 底径	14.4 4.7 8.4	表面 灰色 (5B5.5/1) 断面 暗赤褐色 (10R4.5/2)			
	5-135	口径 高さ 底径	15.0 5.3 10.0	明灰色 (10B8/1)			
	5-136	口径 高さ 底径	15.1 5.7 8.8	明灰色 (10Y8/1)			底部外面に墨書。
	5-137	口径	15.0	外面 暗灰色 (10Y3/1) 内面・断面 明灰色 (5B8/1)			
	5-138	口径 高さ 底径	15.6 5.5 9.4	灰白色 (5Y9/1) やや軟質			

出土遺物観察表

	5-139	口径 16.1 高さ 5.3 底径 9.6	灰白色 (5Y9/1)			
	5-140	口径 16.4	明灰色 (10B7/1)			
	5-141	口径 18.2 高さ 7.2 底径 9.7	表面 明灰色 (10B7/1) 断面 茶灰色 (2.5YR5.5/2)			
	5-142	口径 18.0	灰色 (10GY7/1) やや軟質			
	5-143	口径 18.7 高さ 7.8 底径 10.4	外面 灰色 (5B6.5/1) 内面・断面 明茶灰色 (7.5YR7/3) やや軟質			
	5-167	底径 8.3	明灰色 (2.5Y8.5/2) やや軟質			底部外面に墨書。図版 25・写真図版 66
	5-171		明灰色 (10B7.5/1)	断面方形の輪高台が付く 底部の破片。	両面共ナデ調整。	底部外面に墨書。図版 25
須恵器 杯 A	5-144	口径 13.5 高さ 3.5 底 7.6	淡黄白色 (2.5Y9/2) 軟質	平底で体部は外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。5-146は口縁部を欠く。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
	5-145	口径 13.8 高さ 3.8 底径 7.6	明白色 (2.5GY8.5/1) 軟質			
	5-146	底径 9.6	明白色 (5B8.5/1)			
須恵器 皿 A	5-147	口径 15.0 高さ 2.1	明白色 (10Y8.5/1) 軟質	平底で口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面は表面が磨滅し調整不明。他の部位はナデ調整。	
	5-148	口径 18.0 高さ 1.4 底径 15.0	明白色 (5Y8.5/1)	平底で口縁部は短く外上方へ開く。口縁端部は外傾する面をなす。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
	5-149	口径 20.9 高さ 2.0	表面 灰色 (10B6/2) 断面 灰色 (10R5/1)			
	5-170	口径 18.4 高さ 1.6 底径 15.4	明灰色 (5Y8/1)			底部内面に墨書。図版 25・写真図版 66
須恵器皿 B	5-150	口径 16.2 高さ 3.5 底径 10.8	明灰色 (N8/) 密	平坦な底部に端面の内傾する断面方形の輪高台が付く。体部はやや丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。口縁端部は尖り気味におさめる。	底部はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。	
須恵器 皿	5-151	口径 13.0 高さ 2.1 底径 6.4	明灰色 (5GY8.5/1) やや軟質	底部は円盤状の高台 (0A)。体部は低く広がり、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。器形は緑釉皿に近似する。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	5-152	口径 13.7 高さ 2.1 底径 7.3	灰色 (5BG5.5/1) 底部内外面 茶色 (5YR5/7)			
	5-153	口径 13.9 高さ 2.2 底径 7.0	明灰色 (5GY8.5/1) 底部内面 明茶灰色 (7.5YR8/3) やや軟質			
	5-154	口径 14.3 高さ 2.7 底径 6.7	灰色 (10YR6.5/1.5)			
	5-155	口径 14.4 高さ 2.7 底径 7.0	灰色 (2.5Y7/3) やや軟質			
	5-156	口径 14.6 高さ 2.5 底径 6.8	明灰色 (2.5Y8.5/1) 軟質			

	5-157	口径 15.0 高さ 2.1 底径 7.9	灰色 (10B5.5/1)			
	5-158	口径 15.8 高さ 2.0 底径 10.0	灰白色 (10Y9/1) 軟質			
	5-166	底径 7.1	明灰色 (10Y8.5/1) やや軟質			底部外面に墨書。
	5-162	口径 14.5 高さ 1.9 底径 7.5	明灰色 (5B7/1)		底部外面は糸切り痕をナデ消す。	
	5-163	口径 14.8 高さ 2.1 底径 8.0	灰色 (10BG7.5/1)			
須恵器 椀	5-159	口径 13.4 高さ 3.0 底径 6.3	灰色 (10Y7.5/1)	底部は円盤状の高台 (0A)。体部はまっすぐ外上方へ開き、口縁部は外反する。縁軸椀に近似する器形。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	5-160	口径 16.0 高さ 3.8 底径 7.9	明灰褐色 (10YR8/3) 軟質	口縁端部は丸くおさめる。縁軸椀に近似する器形。		
	5-161	底径 6.4	灰色 (10B6/1) 白色砂粒含む	底部は円盤状の高台 (0A)。体部は丸味を持ってゆつたりと立ち上がる。縁軸椀に近似する器形。		
	5-164	口径 15.4	明灰色 (10B8.5/1)		外面は体部上段より底部までをケズリのち全面にミガキを施す。	
	5-165	底径 7.4	明灰色 (10B8.5/1)			
須恵器 壺蓋	5-172	口径 12.0 高さ 2.3	明灰色 (N7.5/)	平坦な天井部の中心に宝珠形のツマミが付く。口縁部は天井部との境で丸味を持って下方に折れ曲がりわずかに内傾する。端部は丸くおさめる。	ツマミ周辺はナデ調整。天井部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。	内面が磨滅。
	5-173	口径 13.4 高さ 2.7	明灰色 (10Y8/1) やや粗 白色粒含む	平坦な天井部の中心に中央部のわずかに凹む偏平なツマミが付く。口縁部は下方に折れ曲がり、端部は丸くおさめる。		
	5-174	口径 19.2	明灰色 (10Y8/1)	天井部は平坦で、口縁部は外傾する。口縁端部は丸くおさめる。天井部は欠くが、5-175にはツマミの痕跡が認められる。	天井部内面、口縁部内外面はナデ調整。天井部外面はヘラオコシのち軽くナデ調整。	天井部内面が磨滅し墨が付着する。
	5-175	口径 19.0	明灰色 (5GY8/1)			
須恵器 短頸壺	5-187	口径 10.2	明灰色 (5PB8.5/1) 密	内傾する肩部に、わずかに外傾する短い口縁が付く。口縁端部は外傾する面をなす。	ナデ調整。	
	5-188	底径 7.3	明灰色 (5B7/1) 密	底部は平坦で体部は外上方へ立ち上がる。内面にはロクロ目を強く残す。体部中段以上を欠く。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
須恵器 壺	5-176	口径 4.3	明灰色 (10B7.5/1)	小型壺の口頸部の破片。	ナデ調整。	
	5-177	口径 5.0	明灰色 (10BG8/1)	口縁部は外反する。端部は面をなし上端がわずかにつまみ上げられる。		
	5-178	口径 8.9	明灰色 (10B8/1)	水平な肩部に外反する口頸部が付く。口縁端部は上下に引き出され、幅広の面をなす。		
	5-179	最大径 6.7 底径 4.1	表面 明灰色 (10B7/1) 断面 淡茶灰色 (10R6/)	平坦な底部と卵形の体部からなる小型の壺。いず	ナデ調整。底部外面は糸切り未調整。	

出土遺物観察表

			4)	れも口縁部は欠く。5-180はやや肩が張る。内面にロクロメを強く残す。		焼きムラあり。
	5-180	最大径 6.8 底径 3.7	明灰褐色 (10YR8/3 ~ 2.5Y8/2)			
	5-181	最大径 7.0 底径 4.0	明灰色 (N8/)			
	5-182	最大径 10.7 底径 6.0	明灰色 (N7.5/)	底部は平坦で断面方形の高台が付く。体部は卵形でロクロメを残す。	体部外面下段はケズリ。他の部位はナデ調整。	
	5-183	口径 6.2 高さ 16.3 最大径 6.5 底径 5.0	明灰色 (5GY9/1 ~ 10Y8.5/1) 粗 軟質	平底で筒形の体部に細長い口頸部が付く。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。器面全体にロクロメが強く残る。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はロクロナデ調整。	
	5-184		明灰色 (N8.5/) やや粗 黒色粒多く含む	細長い頸部と大きく張り出す肩部の破片。頸部は中段よりゆるやかに外反し、中段に二条の沈線をめぐらす。頸部と肩部との境は内面では稜をなすが、外面は不明瞭である。肩部外面には列点文を施す。	ナデ調整。	外面及び頸部内面中段以上に自然釉がかかる。
	5-185	口径 8.3	灰色 (N7/)	まっすぐ立ち上がる注口部の破片。端部は丸くおさめる。	ナデ調整。	平瓶か?
	5-186	底径 11.1	明灰色 (5PB8.5/1 ~ N8/)	平坦な底部に断面台形の高台が付く。体部は外上方に高く立ち上がる。	体部外面はケズリ。底部外面はナデ調整。内面はロクロナデ調整。	
須恵器鉢	5-189	口径 15.6 高さ 6.2 底径 6.0	明灰色 (10B7/1)	平底で体部と口縁部は大きく開く。口縁部と体部の境でわずかに屈曲し、口縁端部は断面三角形の玉縁状を呈する。	底部外面糸切り未調整。他はナデ調整。	
	5-190	口径 23.9 高さ 16.0 底径 11.7	明灰色 (5B8/1)	平底で、体部は外上方に立ち上がり上位で屈曲し、外反する短い口縁部に至る。口縁端部は外傾する面をなす。5-191は底部を欠く。		
	5-191	口径 26.0	外面灰色 (N5.5/) 内面・断面明灰色 (10Y8.5/1) 軟質			
	5-192	口径 27.4 底径 11.3	淡黄白色 (2.5Y9/2) 軟質	平坦な底部と大きく広がる体部、口縁からなる。口縁端部は外傾する面をなし、上・下端共わずかに突出する。	体部外面下段はケズリ。底部は不明。他の部位はナデ調整。	
須恵器甕	5-193	口径 19.8	表面灰色 (5B5.5/1) 断面茶褐色 (7.5YR5/4) やや粗 白色砂粒多く含む	体部は内傾し、頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は外傾し、端部は外側にわずかに広がる。	体部外面はタタキメをナデ消す。体部内面はタタキメの上を軽くナデ調整。口縁部はナデ調整。頸部内面はオサエ。	
	5-194	口径 20.8	明灰色 (N7.5/)		体部外面は平行タタキ。体部内面は同心円状の当て具を使う。口縁部はナデ調整。5-193に比べ調整は丁寧である。	
	5-195	底径 12.7	明灰色 (10PB8.5/1) やや粗 白色粒含む	底部には断面方形の高台が付く、体部はまっすぐ外上方へ広がる。	高台は貼り付け。体部外面下段はケズリ、以上をナデ調整。内面は同心円状のタタキメをナデ消す。	
緑釉陶器碗	5-196	口径 12.8	灰色 (5PB6/2) 硬質	底部は円盤状の高台 (I	全面をミガキ。高台はケズ	

	高さ 底径	3.1 4.7	釉 明灰緑色 (2.5GY8/3)	A)。体部は比較的ゆるやかに外上方へ広がり、口縁部はごくわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。口径により大きく三群に分かれ、小型のものは高台径によりさらに二群に分かれる。中型の5-210は他のものに比べ体部がやや丸味を持ち口縁部の外反が強い。	り出し。刷毛塗りで全面に施釉する。いずれも底部内外面あるいは外面に小さなメアトが三方に認められる。5-211は器表が摩滅しているため調整不明。	
5-197	口径 高さ 底径	12.8 3.2 5.2	明灰色 (10Y8/1 ~ N7.5/) 硬質 釉 黄緑灰色 (5GY7/4)			底部外面に線刻「-」。写真図版 67
5-198	口径 高さ 底径	12.9 3.1 4.9	灰色 (5PB7.5/2) 硬質 釉黄緑灰色 (5GY7/4)			底部外面に線刻「大」「+」。写真図版 67
5-199	口径 高さ 底径	13.0 3.5 5.3	明灰色 (10B6.5/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (5GY7.5/4)			
5-200	口径 高さ 底径	13.2 3.3 5.0	明灰色 (10Y8/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (2.5GY6/4)			
5-201	口径 高さ 底径	12.8 3.0 5.5	明灰色 (5PB8.5/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (10Y7.5/4)			底部外面に線刻「交」。写真図版 67
5-202	口径 高さ 底径	13.0 3.3 5.7	灰色 (10B6.5/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (5GY7.5/4)			
5-203	口径 高さ 底径	13.2 3.0 5.6	明灰色 (5PB8.5/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (2.5GY8/4 ~ 10Y8/4)			底部外面に「大」の線刻。写真図版 67
5-204	口径 高さ 底径	13.4 3.1 5.8	灰色 (5PB7/1) 硬質 釉 灰緑色 (5GY7/3)			
5-208	底径	6.7	明灰色 (10G8/1 ~ 10B8.5/1) 硬質 釉 淡黄灰色 (7.5Y8/4)			
5-209	口径 高さ 底径	17.8 4.6 7.0	明灰色 (10Y8/1) 硬質 釉 黄灰色 (10Y7/3)			
5-210	口径 高さ 底径	17.0 5.0 7.6	明灰色 (10B8/1) 硬質 釉 明灰緑色 (2.5GY8/2)			
5-211	口径 高さ 底径	21.4 7.4 9.0	淡黄白色 (2.5Y9/3) 軟質 釉 淡黄灰色 (5Y8/4 ~ 8.5/4)			
5-205	口径 高さ 底径	13.2 3.4 5.3	灰白色 (2.5Y9/1) 軟質 釉 黄灰色 (7.5Y6/3)	底部は蛇の目高台 (I Ba)。体部はゆつたりと広がり、口縁端部はやや尖り気味に丸くおさめる。口径により大きく二群に分かれる。	内面は丁寧なミガキ。口縁部外面はナデ調整。体部外面中段以下はケズリのち粗いミガキを施す。高台は削り出し。刷毛塗りで全面施釉。いずれも底部内外面に小さなメアトが三方に認められる。5-213は調整不明。	
5-206	口径 高さ 底径	13.3 3.5 5.7	黄白色 (2.5Y8.5/3) やや軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7/5)			
5-207	底径	5.4	灰色 (10Y6/1) やや軟質 釉 明灰緑色 (2.5GY7.5/2)			
5-212	口径 高さ 底径	16.1 3.8 6.5	明灰色 (10B7/1) 硬質 釉 黄灰色 (7.5Y7/4)			
5-213	口径 高さ 底径	17.4 4.5 7.2	淡黄白色 (2.5Y9/2) やや軟質 釉 暗黄緑 灰色 (10Y6/4 ~ 7/4)			
5-214	口径 高さ 底径	17.0 4.5 6.6	灰色 (10Y6/1) やや軟質 釉 黄灰色 (10Y7/4)			
5-215	口径 高さ 底径	17.1 4.6 6.6	灰色 (10B7/1) 硬質 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/4)			底部外面に線刻「-」。写真図版 67

出土遺物観察表

	5-216	口径 17.1 高さ 4.4 底径 7.0	淡黄白色 (2.5Y9/2) やや軟質 釉 灰色 (7.5Y7/3 ~ 8/3)			底部外面に線刻「+」。写真図版67
	5-232	口径 10.4 高さ 3.4 底径 5.0	明灰色 (N8.5/) 硬質 釉 淡黄灰色 (7.5Y8/4)	底部には断面方形の輪高台 (5-232・5-233はII Bb1、5-234はII Bb3) が付く。体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	ナデ調整。高台は貼り付け。全釉。	底部内面にメアトが認められる。
	5-233	底径 7.4	明灰色 (N8/) 硬質 釉 黄灰色 (7.5Y7/4)		底部外面から体部外面下半はケズリ、全面に丁寧なミガキを施す。高台は貼り付け。全釉。	底部内面にメアトが認められる。
	5-234	口径 17.4 高さ 5.4 底径 8.8	灰白色 (5Y9/1) やや軟質 釉 淡黄灰色 (5Y8.5/4)			底部内面にメアトが認められる。
	5-235	口径 15.0	明灰色 (2.5Y8.5/2) やや軟質 釉 灰色 (5Y7.5/2)	体部は僅かに丸味を持って外上方へ開く。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。底部を欠く。	残存部全面に丁寧なミガキを施す。全釉。	
	5-236	口径 15.6 高さ 4.3 底径 6.4	灰色 (5PB7.5/1) 硬質 釉 灰色 (10Y6/1 ~ 6/2)	底部は蛇の目高台 (II Ba)。体部はほぼまっすぐ外上方へ開き、口縁部に至る。端部は丸くおさめる。	全面に丁寧なミガキを施す。高台は貼り付け。全釉。	底部内面にメアトが認められる。
	5-237	底径 8.6	灰白色 (10Y9/1) やや軟質 釉 灰緑色 (2.5GY6/3)	蛇の目高台 (II Ba) の付く底部の破片。5-237の高台端面は内傾し、5-238は幅でほぼ水平である。		底部内面にメアトが認められる。
	5-238	底径 6.7	灰白色 (2.5Y9/1) やや軟質 釉 淡黄灰色 (5Y8/4)			底部内面にメアトが認められる。
緑釉陶器皿	5-217	口径 12.8 高さ 2.0 底径 5.4	灰白色 (2.5Y9/1) 軟質 釉 淡黄灰色 (2.5GY8/4)	底部は円盤状の高台 (I A)。体部は浅く、口縁部は外反し端部を丸くおさめる。	いずれも底部外面から体部外面下半をケズリ。他の部位をナデ調整。5-218は底部外面をケズリのちナデ調整。ミガキは5-217が全面、5-218・5-219・5-221・5-222は内面だけに施す。5-220はミガキを施さない。全釉。	
	5-218	高さ 2.1 底径 6.1	淡黄白色 (10Y9/3) 軟質 釉 灰緑色 (5GY7/3)			
	5-219	口径 13.4 高さ 2.4 底径 6.1	明灰色 (10Y8.5/1) やや軟質 釉 黄緑灰色 (2.5GY7.5/4)			
	5-220	口径 14.3 高さ 1.9 底径 6.5	暗灰色 (N4/)・明褐灰色 (10YR8.5/4) 斑状 軟質 釉 淡黄緑灰色 (5GY8.5/4)			
	5-221	口径 15.0 高さ 1.9 底径 7.0	淡黄白色 (2.5Y9/2) 軟質 釉 淡黄灰色 (7.5Y8/6)			
	5-222	口径 14.0 高さ 2.6 底径 5.7	明灰色 (5Y8/1 ~ 2.5Y8.5/2) やや硬質 釉 明灰緑色 (2.5GY7.5/3)			底部外面に線刻「大」。内外面にメアトが認められる。写真図版67
	5-223	口径 14.0 高さ 2.3 底径 6.7	灰色 (5PB7/1) 硬質 釉 灰色 (10Y7/3)	底部は断面方形の高台 (I Bb)。体部は浅く、口縁端部は外反し丸くおさめる。	体部外面上段以下をケズリ。内面はミガキ。全面に刷毛塗り施釉。	底部外面に線刻「大口」。
	5-224	口径 14.4 高さ 2.3 底径 6.9	灰白色 (2.5Y9/1) やや軟質 釉 灰色 (5Y7/3)			底部外面に線刻判読不能。
	5-225	口径 14.5 高さ 2.1	灰色 (N7/) やや軟質 釉 黄灰色 (5Y7/5)			底部外面に線刻「大」。底部内外

		底径	6.7				面にメアトが認められる。写真図版 67
	5-226	口径 高さ 底径	14.7 2.6 6.8	灰白色 (2.5Y9/1) やや軟質 釉 黄緑色 (10Y6/7)			
	5-227	口径 高さ 底径	14.0 1.8 7.4	明灰色 (10B8/1 ~ 2.5Y8.5/3) 硬質 釉 黄灰色 (7.5Y7/4 ~ 10Y7/4)			
	5-239	口径 高さ 底径	14.0 1.8 6.8	灰白色 (10Y9/1) 硬質 釉 明灰色 (7.5Y8/3)	平らな底部に断面方形の 小さな輪高台が付く。口 縁部は内側に折れ小さく 外反する。端部は丸くお さめる。 5-249・5-250・ 5-251の内面には陰刻花 文が施される。 5-244・ 5-251は輪花皿。	高台は貼り付け。5-244・ 5-251の輪花は外面の四方 向を小さくV字形に切り 欠き、対応する内面に粘 土を盛り上げ稜を付ける。 全面にミガキを密に施し たのち全面施釉。	
	5-240	口径	14.4	灰白色 (10Y9/1) 硬質 釉 明灰色 (7.5Y8/3)			底部を欠く。
	5-241	口径 高さ 底径	15.1 2.4 7.0	明灰色 (2.5Y8.5/2) やや軟質 釉 淡黄灰色 (7.5Y8.5 /4) 灰緑色 (5GY6/2) に 変色			底部内外面にメ アトが認められ る。
	5-242	口径 高さ 底径	15.1 2.3 7.6	明灰色 (5Y8/1 ~ 2.5Y8.5 /1) やや硬質 釉 黄灰色 (10Y8/4)			
	5-243	口径 高さ 底径	16.7 2.5 7.3	明灰色 (5Y8/1) 硬質 釉 黄灰色 (7.5Y7/4)			底部外面にメア トが認められ る。
	5-244	底径	7.8	灰白色 (10Y9/1) 硬質 釉 淡黄灰色 (7.5Y8/4)			口縁端部を欠 く。
	5-245	底径	7.6	灰白色 (10Y9/1) 硬質 釉 灰緑色 (5GY6/1 ~ 6/2)			口縁端部を欠 く。底部内面に メアトが認めら れる。
	5-249	口径	17.2	明視灰色 (10YR8/4) 硬質 釉 淡黄灰色 (2.5Y8/4)			口縁部の破片。
	5-250	底径	7.5	明灰色 (5PB8.5/1) やや硬質 釉 淡黄灰色 (5Y8/4)			底部の破片。
	5-251	口径 高さ 底径	14.0 1.6 6.9	明灰色 (5PB8/1) 硬質 釉 明灰色 (7.5Y8/3)			底部内外面にメ アトが認められ る。
緑釉陶器 段皿	5-246	口径 高さ 底径	14.7 2.5 7.3	灰色 (5PB7/1 ~ 2.5Y8.5 /2) 硬質 釉 灰色 (5Y7/3 ~ 10Y 6.5/3)	広縁の段皿。口縁部はわ ずかに外反し、外上方へ 広がる。内面のみ明瞭な 段を作る。高台は断面方 形でやや外へ張り出す (II Bb1)。	全面に密なミガキ。全面 施釉。高台は貼り付け。	底部内外面の三 方に小さなメア トが認められ る。
緑釉陶器 皿	5-247			明灰色 (5Y8/1) 硬質 釉 灰色 (10Y7/2)	平らな底部からゆるやか に外反する口縁を持つ方 形の皿の破片。	全面に密なミガキ。	
緑釉陶器 椀	5-230	口径	8.0	淡黄白色 (10YR9/2) 軟質 釉 明灰緑色 (7.5GY8.5 /3)	外反する口縁を持つ小型 の椀。底部を欠く。	ナデ調整。残存部全釉。	
緑釉陶器 皿	5-231	口径 高さ	13.6 1.1	明灰褐色 (10YR8.5/2) 軟質 釉 黄灰白色 (10Y8.5/2)	広く平らな底部に外反す る小さな口縁が付く。口 縁端部は丸くおさめる。	内面はミガキ。底部外面 はケズリ。口縁部外面は ナデ調整。	
緑釉陶器 壺	5-228			暗灰色 (10YR4/1) 軟質 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/ 4)	底部の破片。外下方へ張 り出す脚部がわずかに残 る。	底部外面は調整不明。他 の部位はナデ調整。外面 のみ施釉する。	

	5-229	底径 9.0	淡黄白色 (2.5Y9/2) 軟質 釉 灰緑色 (5G5.5/2)	外下方へ張り出す脚部の破片。端部は丸くおさめる。	ナデ調整。全釉。		
緑釉陶器 椀	5-248		灰色 (5Y7.5/1) 硬質 釉 灰色 (5Y7/2)	輪花椀の口縁部の破片。	残存部全面にミガキを密に施し全面施釉する。輪花は体部から口縁部にかけて縦方向にヘラで内側におさえる。		
灰釉陶器 皿	5-252	口径 13.3 高さ 2.0 底径 6.0	明灰色 (10PB8.5/1) 密 釉 灰色 (7.5Y6.5/2)	浅い体部に断面方形の高台 (Ⅱ Bb1) が付く。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	底部外面はケズリのちナデ調整。内面のみ厚く施釉する。		
	5-253	口径 13.7 高さ 2.6 底径 6.6	明灰色 (10PB8.5/0.5) 密 釉 灰色 (7.5Y7.5/2)	平らな底部に断面方形の高台 (Ⅱ Bb1) が付く。体部は低く開き、口縁部は内湾気味に立ち上がる。端部は丸くおさめる。	体部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。内面のみ施釉する。		
	5-254	口径 14.0 高さ 2.3 底径 6.9	灰白色 (5Y9/0.5) 密 釉 灰色 (5Y5.5/3)	底部には断面方形の高台 (Ⅱ Bb1) が付く。体部は低く開き、口縁部は内方へ折れ曲がり小さく外反する。端部は丸くおさめる。	体部外面上段以下はケズリのちナデ調整。他の部位はナデ調整。内面のみ施釉する。	底部外面に墨書「院客」。底部外面にメアト。図版 26・写真図版 66	
	5-291	口径 14.2 高さ 1.9 底径 7.4	明灰色 (N8/ ~ 10Y8/1) 釉 暗黄灰色 (7.5Y5/5)				
	5-289	底径 7.8	明灰色 (10Y8.5/1) 釉 灰色 (5Y7/3)				底部外面に墨書。口縁端部を欠く。図版 25・写真図版 67
	5-292	底径 7.0	明灰色 (N8.75/) 釉 灰色 (10Y7/2)				底部外面に墨書。底部のみ残存。図版 25・写真図版 67
	5-255	口径 15.0	明灰色 (10Y8.5/0.5) やや密 白色細粒含む 釉 明灰緑色 (2.5GY7.5/2)				底部を欠く。
	5-256	口径 15.0 高さ 2.7 底径 8.2	明灰色 (5Y8.5/1) 密 釉 灰色 (7.5Y7/2)				底部外面に墨が附着。
	5-257	口径 15.2 高さ 2.6 底径 7.6	灰白色 (5PB9/1) やや粗 黒色細粒含む 釉 灰緑色 (5GY7.5/2)				底部内面発色せず。
	5-258	口径 15.8 高さ 2.4 底径 7.8	灰白色 (10Y9/1) 釉 灰色 (7.5Y6.5/2)				底部外面にメアトが認められる。
5-259	口径 16.0 高さ 2.4 底径 8.0	明灰色 (10Y8.5/0.5 ~ N8.25/) 釉 灰緑色 (5GY7/2)	底部外面に墨書が有るが判読不能。				
灰釉陶器 段皿	5-260	口径 14.8 高さ 2.7 底径 6.4	明灰色 (10Y8.5/0.5) 釉 黄灰色 (5Y7.5/4)				広縁の段皿。外面には段を付けない。高台の断面は丸味を持つ方形 (Ⅱ Bb3) を呈する。5-261・5-262 の段は明瞭で稜をなすが、5-260 はゆるく屈曲する。
	5-261	口径 17.2 高さ 2.6 底径 7.6	灰白色 (10PB8.5/0.5) 密 釉 灰色 (7.5Y7.5/2)				
	5-262	口径 18.2 高さ 2.9 底径 8.8	明灰色 (10Y8.5/1) 釉 黄灰色 (7.5Y7/4)				
灰釉陶器 椀	5-263	口径 11.8 高さ 3.2	明灰色 (10PB8.5/0.5) 黒色細粒含む	底部には断面方形の輪高台 (Ⅱ Bb1) が付く。体	体部外面中段以下をケズリ、のちナデ調整を行う		

	底径 6.2	釉 暗灰色 (10Y5.5/3)	部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	ものと、ケズリにとどめるものがある。内面はナデ調整。高台は貼り付け。大半が内面のみ施釉するが、5-267・5-271・5-272 は内外面共に施釉する。	
5-264	口径 14.0 高さ 4.1 底径 6.9	明灰色 (10Y8.5/1) 釉 灰色 (10Y7/2)	口径により三群に分かれ、大型のものは口縁部を強く外へ引き出す。		
5-265	底径 16.8	明灰色 (10Y8.5/1) 黒色細粒含む 釉 黄灰色 (7.5Y7.5/4)			底部を欠く。
5-287	口径 16.8 ~ 17.4 高さ 4.5 ~ 4.7 底径 8.5	淡黄白色 (2.5Y9/2) 釉 黄灰色 (5Y7/4)			底部外面に墨書「上」。焼きひずみ大。図版25・写真図版66
5-266	口径 17.2 高さ 4.4 底径 7.5	灰白色 (N8.25/~ 5PB9/1) 釉 暗黄緑灰色 (10Y7/4 ~ 6/4)			底部外面に墨書が有るが判読不能。
5-267	口径 17.8	灰白色 (10Y9/1) 黒色細粒多く含む 釉 灰色 (10Y7/3) 外面は白濁する			底部を欠く。
5-288	口径 17.9 高さ 4.8 底径 7.4	明灰色 (N8/~ 5PB8.5/1) 釉 灰緑色 (2.5GY6/3)			底部外面に墨書「×」。底部外面にメアトが認められる。図版25・写真図版67
5-268	口径 18.3 高さ 5.3 底径 8.0	明灰色 (N7.75/) 白色砂粒含む 釉 黄灰色 (5Y6/6 ~ 7/4)			底部外面にメアトが認められる。
5-269	口径 18.6 高さ 5.3 底径 8.3	明灰色 (10Y8.5/1) 黒色細粒僅かに含む 釉 灰色 (10Y7/2)			
5-270	口径 18.9 高さ 5.3 底径 9.1	明灰色 (5PB8.5/1) 黒色細粒含む 釉 黄灰色 (10Y7/4)			底部内面にメアトが認められる。
5-271	口径 19.0 高さ 5.9 底径 9.2	明灰色 (10PB8.5/1) 黒色細粒含む 釉 灰色 (7.5Y7.5/2)			
5-272	底径 8.9	明灰色 (10Y8.5/0.5) 黒色細粒僅かに含む 釉 黄灰色 (7.5Y7/5)			口縁端部を欠く。
5-273	口径 13.2 高さ 4.8 底径 6.5	明灰色 (N8/~ 10Y8.5/1) 釉 黄灰色 (5Y6/6)	平らな底部に断面方形の輪高台 (II Bb1) が付く。体部は内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口径により二群に分かれる。	外面体部中段もしくは上段以下をケズリ、のちナデ調整を行うもの (5-273・5-275) と、ケズリのままのものがある。内面と口縁部外面はナデ調整。高台は貼り付け。いずれも内面のみ刷毛塗り施釉する。	底部外面にメアトが認められる。
5-274	口径 14.2 高さ 4.6 底径 7.4	明灰色 (10Y8.5/1) 釉 灰色 (7.5Y7/3)			
5-275	口径 14.6	明灰色 (10Y8.5/1) 黒色細粒含む 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/4)			高台を欠く。
5-276	口径 19.5 高さ 8.0 底径 9.5	灰白色 (10Y9/1) やや粗 釉 灰色 (7.5Y6.5/2)			
5-277	底径 9.2	明灰色 (10PB8.5/1 ~ N8.25/) 釉 明灰緑色 (2.5GY7.5/2) 失透部分が多い			体部中段以上を欠く。底部外面にメアトが認められる。
5-278	口径 17.0 高さ 5.9	明灰色 (10PB8.5/0.5) 器表面に小黑斑有り	底部には断面方形の輪高台 (II Bb2) が付く。体	体部外面中段以下をケズリのちナデ調整。他の部	

		底径 7.8	釉 灰色 (10Y6.5/2) 外面は白濁する	部は丸味を持って立ち上がり開きは小さい。口縁部は小さく外反し端部は丸くおさめる。	位はナデ調整。底部外面中央部以外を施釉。底部外面には環状の重ね具を使用した痕跡が残る。高台は貼り付け。	
灰釉陶器 耳皿	5-279	底径 7.2 復元高 6.5	明灰色 (N8.5/) 黒色細粒わずかに含む 釉 灰色 (10Y6.5/2)	口縁の相対する二方を内方へ折り曲げ、端部を波打たせる。底部は断面方形の輪高台 (II Bb1)。5-279・5-280 は一般的な耳皿の大きさに比べ非常に大型品である。	5-279・5-280 は体部外面中段以下をケズリ。内面はナデのち上面のみ施釉する。5-281・5-290 は外面のケズリをナデ消す。高台は貼り付け。	
	5-280	底径 7.8 復元高 6.0	明灰色 (N8.25/ ~ 10Y8.5/1) 釉 明灰緑色 (2.5GY7/3)			
	5-281	底径 5.2 残存最大高 3.1	灰白色 (N8/ ~ 5PB9/1) 釉 黄灰色 (5Y7/5)1			
	5-290	底径 4.7 残存最大高 3.0	明灰色 (N8.25/) 釉 灰色 (7.5Y7/3) 失透する			底部外面に墨書「-」。図版 25
灰釉陶器 壺	5-282		明灰色 (10Y8.5/0.5) 密 釉 灰色 (7.5Y7/2)	浄瓶口頸部の破片。	ナデ調整。外面のみ施釉。	
灰釉陶器 壺蓋	5-283	口径 8.0 高さ 2.1	明灰色 (10PB8.5/0.5) 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/3 ~ 6/4)	ゆるく傾斜する天井部の中央に宝珠形のツمامミが付く。口縁部は下方に短く折れ曲がり、端部は丸くおさめる。	ナデ調整。上面のみ施釉。	
	5-284		明灰色 (5Y8/1) やや密 釉 暗黄緑灰色 (10Y6.5/4)	平坦な天井部から口縁部は丸味を持って下方へ折れ曲がる。天井部中心と口縁端部を欠く。	ナデ調整。外面のみ施釉。	
灰釉陶器 平瓶	5-285	口径 6.6	灰白色 (10Y9/1) 釉 暗黄緑灰色 (10Y5.5/5)	注口部の破片。やや開き気味に立ち上がり、端部を小さく外方へ折り曲げ、丸くおさめる。	ナデ調整。口縁部外面に釉が付着する。	
灰釉陶器 壺	5-286	底径 9.0	明灰色 (10Y8/0.5) 釉 灰色 (7.5Y7/3)	底部の破片。平らな底部に断面長方形の高台が付く。	ナデ調整。施釉部位不明。	
白色無釉 陶器 皿	5-293	口径 12.6 高さ 2.3 底径 5.7	灰白色 (10YR9/1) 軟質	底部は円盤状の高台 (I A)。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。形態は緑釉皿と共通する。	内面は密なミガキ。高台はケズリのちミガキ。口縁部外面はナデのち粗いミガキを施す。	

観察表 9 五町地区 SB20 出土土器 (挿図 41)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 鉢	5-321		明灰色 (2.5Y8.5/1 ~ 5Y8.5/1) やや軟質	口縁部は短く外上方へ屈曲し、端部は外傾する面をなす。	ナデ調整。	
灰釉陶器 皿	5-322	口径 15.0	明灰色 (N8.5/) 釉 灰色 (5GY7.5/1)	上段で小さく外反する口縁部の破片。端部は丸くおさめる。	体部外面中段以下をケズリ。他の部位はナデ調整。内面のみ刷毛塗り施釉。	

観察表 10 五町地区 SD22 出土土器 (挿図 42・写真図版 45)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A II	5-309	口径 14.2 高さ 1.5	明茶褐色 (7.5YR8/4) 密 雲母微細粒含む	平底で口縁部は丸味を持って立ち上がり、上段でわずかに外反する。端部はつまみ上げられる。	底部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。	
土師器 皿 A I	5-310	口径 18.0 高さ 1.6	明茶褐色 (7.5YR8.5/4) 密	平底で口縁部は外上方へまっすぐ立ち上がる。端	外面はケズリ。内面はナデ調整。	

				部は巻き込まれ内側に肥厚する。		
土師器 椀 A	5-311	口径 14.1	明茶褐色 (7.5YR8/4) 密 雲母微細粒含む	底部と体部との境は不明瞭。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	外面はケズリ。内面はナデ調整。口縁部外面にナデが残る。	
土師器 杯 A	5-312	口径 17.0	明茶褐色 (7.5YR8/4 ~ 8.5/4) やや密	平底で体部は外上方へ開き、僅かに外反する口縁部に至る。口縁端部はつまみ上げられる。		
土師器 杯 B	5-313	口径 18.4 高さ 3.7 底径 9.4	明茶褐色 (7.5YR8.5/5) やや密	平坦な底部に断面台形の高台が付く。体部は外上方へ大きく開き、口縁部に至る。口縁端部は内側に肥厚する。	外面はケズリ。内面はナデ調整。高台は貼り付け。口縁部外面にナデが残る。	
黒色土器 椀 A	5-314	口径 17.8 高さ 5.0	口縁部外面から内面 黒色 体部上段から底 部外面 明褐色 (10 YR7.5/4) やや砂質 雲母細粒多く含む	底部は比較的小さく、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめる。	全面に密なミガキを施す。	A 類
黒色土器 皿 A	5-315	口径 18.8 高さ 1.5	金属光沢を帯びた黒色	平坦な底部に外反する口縁部が付く。口縁端部は丸くおさめる。		B 類
須恵器皿 B	5-316	口径 17.8 高さ 3.2 底径 13.3	灰白色 (5Y ~ 2.5Y9/1) 密 やや軟質	平坦な底部に断面長方形の高台が付く。口縁部は外上方へ立ち上がり、端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコン。他の部位はナデ調整。	
須恵器 平瓶	5-317	口径 8.0	表面 暗灰色 (5PB5.5/2) 断面 赤灰色 (7.5R6/4) 密	注口部の破片。まっすぐ立ち上がり、口縁部は外方へ小さく折れ曲がり、端部は丸くおさめる。	ナデ調整。	
須恵器 壺	5-318	最大径 19.2 底径 12.6	明灰色 (5PB8/1.5) 密	平坦な底部に外方へ張り出す断面台形の高台が付く。体部は卵形で、口頸部は欠く。高台下端部は僅かに内側へ肥厚する。	外面は底部から体部中段までをケズリ。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。	
緑釉陶器 椀	5-319	口径 13.0 高さ 4.2 底径 6.7	灰色 (5PB7/1) 硬質 釉 淡黄灰色 (7.5Y8/4)	平らな底部に断面方形の小さな輪高台 (II Bb1) が付く。体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部は小さく外反し端部は丸くおさめる。	全面ミガキ。全面施釉。高台は貼り付け。	底部内外面にメアトが認められる。

観察表 11 五町地区 SD23 出土土器 (挿図 41)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
灰釉陶器 段皿	5-320	口径 16.4 高さ 2.1 底径 7.8	明灰色 (10Y8.5/0.5) やや密 釉 灰色 (5Y7/2)	広縁の段皿。内面のみ段を付ける。底部は平らで端部がやや丸味を持つ断面方形の輪高台 (II Bb1) が付く。	ナデ調整。内面のみ厚く施釉する。高台は貼り付け。	底部外面に墨書があるが判読不能。底部外面にメアトが認められる。

観察表 12 五町地区 SE26 出土土器 (挿図 43・写真図版 4)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A II	5-294	口径 15.5 高さ 1.4	明灰褐色 (10YR8/2) 密 雲母細粒含む	平坦な底部と外上方へ開く口縁部からなる。口縁端部は上方へわずかに突出する。5-295 は口縁部がやや外反する。	外面はヘラケズリ。内面はナデ調整。5-295 は口縁部にナデが残る。	
	5-295	口径 16.0 高さ 1.5	明灰褐色 (10YR8/3) 密 雲母細粒含む			
土師器 皿 A I	5-296	口径 17.0	明茶灰色 (7.5YR8/3)	底部は平坦で、口縁部は	外面はヘラケズリ。内面	

		高さ	2.0	密 雲母細粒含む	丸味を持って立ち上がり 端部は内側に肥厚する。	はナデ調整。	
	5-297	口径 高さ	18.4 1.9	明灰褐色 (10YR8.5/3) 密	口縁部は丸味を持って立ち 上がり外反する。端部 は上方に突出する。	内面及び口縁部中段外面 はナデ調整。底部のケズ リは粗くオサエ痕が残る。	
土師器 杯 A	5-298	口径 高さ	16.6 3.3	明茶褐色 (7.5YR8.5/4) 赤褐色粒・雲母含む	底部は平坦で、体部は外 上方へ開き口縁部に至る。 口縁端部は小さく肥厚す る。	内面はナデ調整。外面は ヘラケズリを施すが口縁 部外面にナデが残る。	
	5-299	口径 高さ	16.8 3.5	明灰褐色 (10YR8.5/3) 密			
	5-300	口径 高さ	17.0 3.0	橙灰色～明灰褐色 (2.5YR7/6～10YR8.5/3) やや粗			
	5-301	口径 高さ	18.0 3.5	肌色 (7.5YR9/3～ 5YR8/4) 密			
土師器 碗 A I	5-302	口径 高さ	13.2 3.2	明茶褐色 (7.5YR8/4) 密 雲母微細粒含む	底部は小さく、体部は丸 味を持って立ち上がり外 上方へ開く。口縁端部は 小さく肥厚する。	内面はナデ調整。外面は ヘラケズリを施す。5-305 は口縁部外面に横方向の ナデが残る。	
	5-304	口径 高さ	14.1 3.0	明褐色 (10YR8/4) 密 雲母微細粒・赤褐 色粒含む			
	5-303	口径 高さ	13.8 3.5	明茶灰色 (7.5YR8.5/3) 密 赤褐色粒含む			
	5-305	口径 高さ	13.8 3.1	淡黄白色 (10YR9/2) 密 均質			口縁部外面より内面はナ デ調整。他の部位はオサ エ。
土師器 杯 B	5-306	口径 高さ 底径	22.6 5.8 10.1	明灰褐色 (10YR8/3) 密 雲母細粒含む	平らな底部に断面台形の 小さな高台が付く。体部 は外上方へ大きく広がり、 口縁端部は内側へ肥厚す る。	内面はナデ調整。外面は ヘラケズリを施すが、口 縁部外面にナデが残る。 高台は貼り付け。	
須恵器 杯 B	5-307	口径 高さ 底径	11.5 4.3 7.2	灰色 (10B6.5/2) 密	底部は平坦で断面台形の 高台が付く。体部は丸味 を持って立ち上がり、口 縁部がわずかに外反する。 端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシの ちナデ調整。他の部位は ナデ調整。	
緑釉陶器 皿	5-308	底径	9.4	明灰色 (5PB8/1) 硬質 釉 明灰色 (10Y8/3)	内面に陰刻花文の有る皿 底部の破片。高台は断面 方形 (I Bb1) を呈する。	全面ミガキのち全面施釉。 高台は貼り付け。	内外面にメアト が認められる。

観察表 13 五町地区 南部包含層出土土器 (挿図 44)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考	
土師器 竈	5-323		器表面 茶灰色 (7.5YR 6.5/3) 断面 灰色 (5YR5/1) 粗 φ 1～2mm の石英・長 石粒を多く含む 雲母微細粒僅かに含む	底の付く竈の破片。上端 部から焚き口にかけての 一部が残る。	上端部はケズリのちナデ 調整。内面上段は横方向 のケズリ。以下はオサエ。 外面はナデ調整で仕上げ る。底は貼り付け。		
須恵器 壺	5-324	底径	4.0	明灰色 (10B7/1.5) 断面 芯部 灰色 (10R5.5/ 1.5) 密 硬質	底部は平らで体部内面 にはロクロ目を残す。口頭 部は欠く。	底部外面糸切り未調整。 他の部位はナデ調整。	
須恵器 碗	5-325	口径	12.4	明灰色 (10Y8/1) やや密 硬質	体部は内湾気味に立ち上 がり、口縁端部は外方へ 短く突出し丸くおさめる。 底部は欠く。	ナデ調整。	
緑釉陶器 皿	5-326	口径 高さ 底径	13.8 1.8 6.5	灰白色 (10Y9/0.5) 硬質 釉 明灰緑色 (2.5GY8/ 2)	平らな底部に小さな輪高 台が付く (II Bb1)。口縁 部は内側に折れ、わずか に外反する。5-326 は輪花 皿。	高台内以外をミガキ。全 釉。輪花は体部外面を線 刻し対応する内面に粘土 を盛り上げ稜を付ける。5- 326 の調整は非常に	
	5-327	口径	14.0	明茶灰色 (7.5YR8.5/3)			

		高さ 1.8 底径 6.2	釉明灰緑色 (2.5GY8/3)		丁寧である。	
緑釉陶器 杯	5-328	底径 6.4	明灰色 (10Y8/1) やや硬質 釉 明灰色 (10Y8/3)	無高台 (0C) の杯底部の破片。体部は丸味を持ちゆるやかに外上方へ立ち上がる。	全面ミガキ。全釉。	
灰釉陶器 皿	5-329	口径 13.8 高さ 2.0 底径 6.8	明灰色 (10Y8.5/0.5) やや密 釉 明灰色 (5Y8/2)	高台は断面方形を呈する (II Bb1)。口縁部は上段で内方へ折れ小さく外反する。端部は丸くおさめる。	ナデ調整。内面のみ施釉する。	
灰釉陶器 平瓶	5-330		灰白色 (10PB9/0.5) 密 釉 明灰色 (7.5Y7/3)	天井部の破片。注口の接合部と把手の接合部分が残る。天井部内面中央は円盤状の粘土板で塞ぐ。	把手はケズリ。天井部は内外面共にナデ調整。天井部外面に厚く施釉する。	

観察表 14 十町地区 SX44 出土土器 (図版 18・写真図版 48)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考	
土師器 皿	10-17	口径 13.3 高さ 1.4	橙灰褐色 (5YR7/4) 密	平らな底部とまっすぐ外上方へ広がる口縁部からなり、口縁端部はわずかにつまみ上げられる。	内面から口縁部外面までナデ調整。底部外面はオサエ。		
	10-18	口径 13.6 高さ 1.8	明茶灰色 (7.5YR8/3) 密	平らな底部とわずかに外反する口縁部からなり、口縁端部は丸くおさめる。			
土師器 皿 A II	10-19	口径 15.4 高さ 2.0	橙灰褐色 (5YR7/4) 密	平らな底部と外反する口縁部からなり、口縁端部はつまみ上げられる。			
土師器 椀 A I	10-20	口径 13.5 高さ 2.9	橙灰褐色 (5YR7/4) 密	体部は丸みを持って立ち上がり、底部との境は不明瞭である。口縁端部は丸くおさめるもの (10-20・10-21・10-22) と、つまみ上げるもの (10-23) がある。	口縁部外面より底部内面までナデ調整。体部・底部外面はオサエ。		
	10-21	口径 13.5 高さ 3.1	明灰褐色 (10YR8/3) 密				
	10-22	口径 13.6 高さ 3.2	明茶灰色 (7.5YR7/3) 密				
	10-23	口径 14.4 高さ 3.2	明灰褐色 (10YR8/3) 密				
	10-24	口径 13.4 高さ 3.1	明灰褐色 (10YR8/3) 密	底部と体部の境は不明瞭。体部は内湾気味に立ち上がり、端部はつまみ上げるもの (10-24・10-26) と、丸くおさめるもの (10-25・10-27) がある。		外面はケズリ調整。内面はナデ調整。	
	10-25	口径 13.5 高さ 2.8	明灰褐色 (10YR8/3) 密 雲母含む				
	10-26	口径 13.8 高さ 3.1	橙灰色 (2.5YR7/6) 密			内面はナデ調整。外面はヘラケズリを施す。ケズリは粗く、オサエ痕が残る。10-26 は内面にハケメが残る。	
土師器 椀 A	10-29	口径 17.4 高さ 3.1	外面 橙褐色 (2.5YR6/6) 断面 明灰褐色 (10YR8/2) やや密	平底で体部は丸みを持って立ち上がり、外上方へ大きく開く。口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ上げられる。10-30・10-31・10-32 は底部を欠く。	口縁部外面より底部内面までナデ調整。底部内面にはハケメが残る。体部・底部外面はオサエ。		
	10-30	口径 16.4 高さ 3.5	明灰色 (2.5Y8/2~8/3) 密				内面はナデ調整。外面はヘラケズリを施すが、口縁部にはナデが残る。
	10-31	口径 17.0	明茶褐色 (7.5YR8/6) 密				
	10-32	口径 18.0 高さ 3.2	明灰褐色 (10YR8/3) 密				
	10-33	口径 18.0 高さ 3.3	表面 灰褐色 (10YR6/2) 断面 明灰褐色 (10YR8/3) 密 雲母含む				
土師器 杯 B	10-28	口径 16.4	外面 橙灰褐色 (5YR7/6) ~ 7.5YR7/6)	体部はわずかに内湾しながら外上方へ開く。口縁端	内面はナデ調整。外面はヘラケズリを施すが、口部は		

			断面 明茶灰色 (7.5YR8/3) 密	内側に小さく巻き込む。底部を欠く。	縁部にナデが残る。	
土師器 高杯	10-34	口径 15.2	明灰褐色 (10YR8/3) 密	裾部の破片。縁部は垂直な端面を持ち、下端がわずかに突出する。	内面と縁部外面はナデ調整。脚部と裾部との境近くをおさえる。	
黒色土器 椀	10-35	口径 22.2	内面 黒色 外面 明灰色 (2.5Y8/3) 密	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る。端部は丸くおさめる。底部を欠く。	内面は密なミガキ。外面はケズリの上からミガキを施す。	A 類
須恵器 杯	10-36	口径 14.4	明灰色 (10Y8/1) やや密	体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は薄く仕上げる。底部を欠く。	ナデ調整。	
須恵器 鉢	10-37	口径 35.0	明灰色 (10Y8/1) 密	体部中段以下は欠く。体部は口縁部に向けて大きく開き、口縁端部は外傾する面をなし、上・下端共わずかに突出する。		

観察表 15 十町地区 SK43 出土土器 (図版 18・写真図版 47)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 杯 A	10-38	口径 16.4 高さ 3.2	明茶褐色 (7.5YR7/4) 密 雲母細粒含む	体部はやや丸味を持って立ち上がり、外上方に開く。口縁端部はつまみ上げられ内側に突出する。	内面はナデ調整。外面はヘラケズリを施すが、口縁部外面にはナデが残る。	
土師器 椀 X	10-39	口径 11.7 高さ 2.8	表面 明茶褐色 (7.5YR8/4) 断面 橙灰褐色 (5YR7/4) 密 やや軟質	平底で体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。	底部外面はオサエ。他の部位は丁寧なナデ調整。	
須恵器 杯 B	10-40	底径 8.8	灰色 (5PB6/2) やや密 白色細粒含む	平坦な底部に断面台形の輪高台が付く。体部は外上方に向け立ち上がる。口縁部は欠く。	底部外面はヘラオコシ。高台は貼り付け。他の部位はナデ調整。	
須恵器 壺	10-41		表面 灰色 (5B6/1) 断面 灰色 (5PR6/1) やや密 白色細粒含む	丸味を持った肩部に、わずかに外反する口頸部が付く。口頸部と肩部との境は明瞭。口縁部と体部中段以下は欠く。	ナデ調整	
	10-42	底径 4.0	灰色 (N6.5/) 密	底部は小さく平坦で、体部にはロクロ目が残る。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	10-43	底径 9.7	明灰色 (N7/) 芯部 明灰色 (5RP7/1) 密	底部は平らで、断面方形の輪高台が付く。	底部外面はヘラオコシ。高台は貼り付け。体部外面下段はケズリ。他の部位はナデ調整。	底部外面に墨が付着し磨滅する。
須恵器 甕	10-44	口径 17.6	明灰色 (N7/) やや粗 φ 1 ~ 2mm の白色砂粒含む	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方に開く。口縁の上端面がわずかに凹み内側に突出する。	体部外面は平行タタキ。体部内面は同心円状の叩き目をナデ消す。他の部位はナデ調整。	外面に自然釉がかかる。
灰釉陶器 皿	10-45	底径 7.6	明灰色 (10Y8/1) やや粗 釉 灰色 (10Y7/2)	平らな底部に10-45は断面方形の、10-46は端部が丸味を持ちやや外へ張り出す小さな輪高台が付く (II Bb1)。口縁部は欠く。	10-45は外面ケズリ。10-46はケズリのちナデ調整。いずれも内面のみ施釉する。高台は貼り付け。	
	10-46	底径 7.4	明灰色 (10Y8/1) 釉 失透する			
灰釉陶器 椀	10-47	底径 6.6	明灰色 (N8/~7/) 釉 黄緑灰色 (2.5GY 6.5/4)	平らな底部に丸味を持つ小さな輪高台 (II Bb2) が付き、体部は内湾気味に立ち上がる。体部中段以上を欠く。	ナデ調整。外面はケズリのちナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉。	底部外面にヘラ記号があるが、判読不能。
	10-48	口径 16.0	明灰色 (10Y8/1) 釉 灰緑色 (5GY7.5/3)	体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は外反す	ナデ調整のち、内面のみ施釉。	

	10-49	口径 15.6	明灰色 (10Y8/1) 釉 灰緑色 (5GY7/2)	る。底部を欠く。		
灰釉陶器 耳皿	10-50	底径 5.6	灰白色 (10Y9/1) 釉 灰色 (10Y6/3)	口縁の相対する二方向を 内方へ折り曲げて耳皿と する。端部は欠く。底部 には丸味を持つ低い輪高 台 (Ⅱ Bb2) が付く。	体部外面下段以下をケズ リ。他の部位はナデ調整。 高台は貼り付け。上面の み施釉する。	高台内に「海厨」 の墨書。写真図 版 66
緑釉陶器 椀	10-52	口径 13.8 高さ 4.1 底径 6.5	灰色 (5Y6/1) 白色細粒含む 釉 黄緑灰色 (5GY7/4)	底部は円盤状の高台 (Ⅰ A)。体部は内湾気味に外上 方へ開く。口縁部は外反 し、端部は丸くおさめる。	高台は削り出し。体部外 面上段以下をケズリ。他 の部位をナデ調整。内面 のみミガキを施し、全面 に施釉する。	内外面にメアト が認められる。
	10-53	口径 21.5 高さ 7.0 底径 10.3	明灰色 (2.5Y8/2 ~ 8/3) 釉 黄灰色 (10Y8/5)	内面の体部四方と底部に 陰刻花文を持つ輪花椀。 底部には断面方形の輪高 台 (Ⅱ Bb1) が付く。体部 は内湾気味に外上方へ開 き。口縁部は外反する。 口縁部は薄い。	高台は貼り付け。体部外 面をケズリ、その他をナ デのち全面にミガキを施 し全面に施釉する。輪花 は口縁部の四方をV字形 に小さく切りかき、それ に対応して体部外面を線 刻し、内面は粘土を盛り 上げ稜を付ける。	底部外面にメア トが認められ る。
緑釉陶器 香炉蓋	10-51	口径 13.0	明灰色 (10YR7/1) 密 硬質 釉 明灰緑色 (2.5GY 7.5/2)	天井部は丸味を持ち、口 縁部はやや開き気味に立 つ。口縁端部は小さく外 反し、丸くおさめる。天 井部と口縁部との境に二 条の凸帯をめぐらす。天 井部は中心を欠くが透か し穴と花文が認められる。	全面にミガキを施したの ち、全面に施釉する。	内外面にメアト が認められる。
白色無釉 陶器皿	10-54	口径 14.5 高さ 2.3	灰白色 (2.5Y9/1) 密 やや軟質	底部は円盤状の高台 (Ⅰ A)。体部は低く広がり、 口縁部はゆるく外反する。 端部は丸くおさめる。緑 釉皿と共通する器形。	高台は削り出し。体部外 面中段より底部外面まで ケズリ。内面はミガキ。 他の部位はナデ調整。	

観察表 16 十町地区 SD38 出土土器 (挿図 45・写真図版 47)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 椀 A	10-55	口径 12.8	明茶灰色 (7.5YR8/3) 外面下半 灰色 (5Y5/1) 密 雲母含む	体部はやや丸味を持って 立ち上がり、口縁部はわ ずかに屈曲する。端部は つまみ上げられ上方に突 出する。底部は欠く。	外面はヘラケズリを施す が、口縁部外面にナデが 残る。内面はナデ調整。	
	10-56	口径 13.4	明灰褐色 (10YR8/2) やや粗 雲母含む	体部はまっすぐ立ち上 がり、口縁端部は丸くお さめる。	体部内面より口縁部外面 はナデ調整。体部外面は オサエ。	
土師器 杯 B	10-57	口径 18.0	内面・断面 黄褐色 (10 YR5/6) 外面 明褐色 (10YR7 /4) やや密	底部と体部下段は欠く。 体部は僅かに内湾しなが ら立ち上がり、口縁端部 は内側に巻き込む様に肥 厚する。	外面は粗いヘラケズリ の上を粗くミガキ。内面 はナデ調整。	
土師器 高杯脚部	10-58	残高 7.1	明茶灰色 (5YR8/3) やや密	断面七角形を呈する。	棒状の芯に粘土を巻き付 け外面を上方に向けて削 る。	
土師器 甕	10-59	口径 26.0	明灰褐色 (10YR8/3) 粗 φ 1 ~ 2mm の砂粒含む	内傾する体部に外傾する 口縁部が付く。口縁部と 体部との境は明瞭で、内 面には稜が付く。口縁端 部は外傾する面をなし、	体部外面は縦方向のハケ メ調整。内面はケズリ のちナデ調整。口縁部外 面・口縁端部はナデ調整。 口縁部内面は横方向のハ	

				上・下端は突出する。	ケメ調整。	
	10-60	口径 27.2	明褐灰色 (10YR8/3) 密赤褐色粒含む	わずかに内傾する体部に大きく外傾する口縁部が付く。口縁端部は大きく折れ曲がり上方に突出する。	頸部外面から口縁端部まで及び頸部内面はナデ調整。頸部外面のナデは強い。体部外面・口縁部内面は粗いハケメ、体部内面には弱いハケメ調整を施す。	
須恵器 椀	10-61	底径 8.4	表面 灰色 (5B6/1) 断面 明灰色 (5RP7/1) 密	底部は厚く平坦で、高台は断面長方形を呈する。体部は内湾しながら立ち上がる。緑釉椀に近似する器形。	高台は削り出し。底部外面中央部にはナデ調整を施す。底部内面、体部内外面共密なミガキを施す。	
須恵器 杯 A	10-62	口径 15.2 高さ 5.0	灰色 (7.5Y7/1) 密	底部は平坦で、体部は外上方に立ち上がり、まっすぐ口縁部へ至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
須恵器 壺蓋	10-63	口径 12.0 高さ 3.3	灰色 (N7/) 密	ゆるやかな傾斜を持つ天井部の中央に扁平な宝珠形ツマミが付く。口縁部は丸味を持って下方に折れ曲がり、端部は丸くおさめる。	天井部はヘラケズリ。他の部位はナデ調整。	天井部外面に自然釉がかかる。
須恵器 壺	10-64	底径 8.5	表面 灰色 (5PB7/1) 断面 灰色 (2.5Y7/2) 密	平坦な底部に断面台形で幅広い高台が付く。内面にはロクロ目が強く残る。	底部はヘラケズリのち高台を貼り付ける。内面はナデ調整。体部外面はケズリ。	底部内面に径 4 cm の円形に自然釉がかかる。
須恵器 甕	10-65	口径 16.4	外面・断面 灰色 (N5/) 内面 暗灰色 (N3/) 密	頸部は「く」の字状に屈曲し口縁部は外上方に開く。口縁端部は垂直な面をなす。	ナデ調整。	
須恵器 壺	10-66	口径 8.4	灰色 (N7/) 外面 暗灰色 (10YR3/1) やや粗 φ 1 ~ 2mm の砂粒含む	外傾し広がる口縁部の破片。口縁端部は面をなし、内側に突出する。	ナデ調整。	
	10-67	底径 6.0	外面 灰色 (N7/) 内面 灰色 (7.5Y7/1) 断面 明茶灰色 (7.5YR7/2) 密	平坦な底部に断面方形の高台が付く。体部は直立し、筒形を呈する。底部内面にはロクロ目が強く残る。	底部外面はヘラオコシのちナデ調整。高台は貼り付け。体部外面はケズリ。内面はロクロナデ調整。	
	10-68	底径 5.0	表面 灰色 (10GB6/1) 断面 淡黄灰色 (2.5Y8/6) やや粗	底部は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。内面にはロクロ目が強く残る。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	10-69	底径 5.2	灰紫色 (10P5.5/2) 密	底部は平坦で、ふくらみを持って立ち上がる。内面にはロクロ目が残る。		
緑釉陶器 椀	10-70	底径 6.0	明褐灰色 (10YR7/4 ~ 8/4) 硬質 釉明緑黄色 (7.5GY8/4)	底部は蛇の目高台 (I Ba)。	高台は削り出し。底部外面下段以下をケズリ。他の部位をナデ調整。内面をミガク。10-71は全面施釉、10-70は底部外面以下を施釉する。	
	10-71	底径 5.8	灰色 (5PB6.5/1.5) 硬質 黒色細粒含む 釉 灰緑色 (5GY5/2)			
	10-72	底径 6.2	灰色 (N6.5/) 硬質 釉 暗黄緑灰色 (2.5GY5/4)	底部は円盤状高台 (I A)。	体部外面中段以下をケズリ、以上をナデ調整。内面はミガキを施す。10-73は全面施釉。10-72は全面施釉するが底部外面は粗い。	直接重ね焼き痕が残る。
	10-73	底径 7.2	淡黄灰色 (2.5Y8/4) 軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7.5/7)			

緑釉陶器 皿	10-74	底径	6.2	淡黄灰色 (2.5Y8/4) 軟質 釉 淡黄緑灰色 (2.5GY 8/6)	底部は円盤状の高台 (I A) で、体部は大きく開く。 口縁部上段を欠く。	外面はケズリ。内面は器 表面が摩滅し調整は不明。 全釉。	
	10-75	口径	6.2	明灰褐色 (10YR8/3.5) 釉 淡黄灰色 (5Y8/4)	浅い体部に断面方形の輪 高台 (II Bb1)。口縁部は 欠く。	全面にミガキを施しのち 全面に施釉する。高台は 貼り付け。	底部内面にメア トが認められる。
緑釉陶器 羽釜	10-76	最大径	22.0	明茶灰色 (7.5YR8/3) 密 軟質 釉 濃緑灰色 (2.5G4.5 /6) 釉薬の播りが甘く斑 点状を呈する。	鏝部の破片。端部は面を なし上端がわずかに突出 する。	ナデ調整。鏝部上面を薄 くハケ塗り施釉する。他 の部位は施釉しない。	
灰釉陶器 椀	10-77	口径	11.6	明灰色 (10Y8/1 ~ N8/ 釉 黄緑灰色 (2.5GY7/ 4)	底部には断面方形の小さ な輪高台 (II Bb1) が付く。 体部は内湾気味に開き、 口縁部は外反する。10-78 は口縁部を、10-79 は底部 を欠く。	10-77・10-79 は体部外面 中段以下をケズリのちナ デ調整。10-78 は体部中段 以下をケズリにとどめる。 高台は貼り付け。内面の み厚く施釉する。	
	10-78	底径	6.6	明灰色 (5PB8/1 ~ N8/ 釉 灰緑色 (5GY7.5/2)			
	10-79	口径	16.4	明灰色 (5PB8/1 ~ N8/ 釉 灰色 (10Y6.5/3)			
	10-80	口径	14.4	明灰色 (10Y8.5/1) 釉 灰緑色 (7.5GY7.5/3)	体部は直線的に外上方へ 開く。口縁部は小さく内 湾し、端部は丸くおさめ る。体部中段以下を欠く。	ナデ調整。内面のみ施釉 する。	
灰釉陶器 皿	10-81	底径	8.0	灰白色 (10Y9/1 ~ 5PB 9/1) 釉 明灰緑色 (2.5GY7.5/2)	浅い体部に断面三角形の 輪高台が付く (II Be1)。 口縁部を欠く。	底部外面はケズリ。他の 部位はナデ調整。高台は 貼り付け。内面のみ施釉 する。	
	10-82	底径	7.4	灰白色 (5PB9/1 ~ 10Y 9/1) 釉 灰緑色 (5GY7.5/3)	浅い体部に断面方形の小 さな輪高台が付く (II Bb1)。 口縁部を欠く。	体部外面中段以下をケズ リ。他の部位はナデ調整。 内面のみ施釉する。高台 は貼り付け。	底部内面にメア トが認められる。
灰釉陶器 段皿	10-83	口径	17.4	明灰色 (10Y8/1 ~ N8/ 密 釉 明灰緑色 (2.5GY7 /3)	広縁の段皿。内面のみ明 瞭な段を付ける。底部を 欠く。	体部外面中段以下をケズ リ。他の部位はナデ調整。 内面のみ施釉する。	

観察表 17 十町地区 包含層出土土器 (図版 19・挿図 46・写真図版 49、50)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A	10-127	口径 14.0 高さ 2.0	外面 明灰褐色 (10YR8/3) 内面・断面 明茶褐色 (7.5YR8/4) 密	底部と口縁部との境は不 明瞭。口縁部は低く開き、 端部は丸くおさめる。	口縁部外面より底部内面 までナデ調整。底部外面 はヘラケズリ。	
	10-128	口径 13.6	明灰褐色 (10YR7/3) やや密 石英・雲母細 粒多く含む	口縁部は丸味を持って立 ち上がり、上位でゆるや かに外反する。端部は小 さくつまみ上げられる。	口縁部外面より底部内面 までナデ調整。他の部位 はオサエ。	
土師器 椀 A	10-131	口径 13.6 高さ 2.8	明茶褐色 (7.5YR8/3.5) 密 雲母細粒僅かに含 む	平底で体部は丸味を持っ て立ち上がり、外上方へ 開く。口縁部は外反し端 部は小さくつまみ上げら れる。	口縁部外面より底部内面 にかけてナデ調整。他の 部位はオサエ。	
	10-129	口径 13.6 高さ 2.4	明茶褐色 (7.5YR8/3) 密			
	10-130	口径 12.9 高さ 3.4	明灰褐色 (10YR8/3) 密	底部・体部共に丸味を持 ち、境は不明瞭である。 口縁端部は丸くおさめる。	内面はナデ調整。外面は ヘラケズリ。	
土師器 杯 A	10-132	口径 16.2	明茶灰色 (7.5YR8/3) 密	体部は外上方へ開き、口 縁部は僅かに外反する。 端部はつまみ上げられる。 底部は欠く。	口縁部外面より底部内面 までナデ調整。他の部位 はオサエ。	体部外面に粘土 の継目痕を残す。
土師器 杯 B	10-133	口径 16.9	明灰色 (2.5Y8/3) 密	体部は内湾気味に外上方	内面はナデ調整。外面は	

出土遺物観察表

			細い赤色粒含む	へ開く。口縁部はわずかに外反し端部は小さくつまみ上げられる。底部は欠く。	ヘラケズリ。口縁部外面にナデが残る。	
土師器 甕	10-134	口径 17.0	表面 明灰褐色 (10YR 7.5/3.5) 断面 明茶灰色 (5YR8/3) 密	外反する口縁部の破片。端部はつまみ上げられ上方に突出する。	器表面が摩滅し調整不明。	外面に煤が付着。
	10-135	口径 22.5	茶灰色 (7.5YR6/3) やや密 雲母含む	内傾する体部は頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部は大きく内側に巻き込む。	口縁部内面は横方向のハケメ。体部内面はナデ調整。口縁部外面中段より体部に縦方向のハケメ。頸部外面は横方向のナデ調整。	
	10-136	口径 22.0	明灰褐色 (10YR7/3)			
須恵器 壺	10-137	底径 3.6	灰色 (10B6/2) 密	平底で体部にはロクロ目が残る。口縁部は欠く。	底部は糸切り未調整。体部はロクロナデ調整。	
	10-138	口径 11.1	表面 灰色 (10Y5.5/1) 断面 明灰色 (10YR7/1 ~ 7/2) 密	口頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は水平に外方向へ折れ曲がる。端部は垂直な面をなし、上端が突出する。	ナデ調整。	
	10-139	口径 26.8	内面 茶色 (5YR4/4 ~ 5/4) 外面・断面 灰色 (7.5Y7/1) 密	頸部は「く」の字状に外上方に折れ、外反する口縁部に至る。端部の下端が突出し、幅広の面をなす。		
須恵器 杯蓋	10-140	口径 11.0	灰色 (N7/) 密	天井部の大部分を欠く。口縁部は屈曲し、下端は下方へ突出する。	ナデ調整。	
	10-141	口径 14.0 高さ 2.2	灰色 (10Y7.5/1) 密	平坦な天井部の中心に宝珠形のツマミが付く。口縁部は屈曲し、端部は外下方へ突出する。天井部と口縁部との境は明瞭である。	天井部外面はヘラオコシのちナデ調整。他の部位はナデ調整。	内面は磨滅し墨が付着する。
	10-142	口径 17.0	明灰色 (10B7/1) 密	天井部中心を欠く。天井部は平坦で、口縁部はゆるやかに屈曲し、端部は下方へ突出する。天井部と口縁部との境は不明瞭である。	天井部外面はヘラオコシのちナデ調整。他の部位はナデ調整。	
須恵器 皿A	10-143	口径 14.2 高さ 1.6	明灰色 (N7.5/) 密	平坦な底部と外上方へまっすぐ立ち上がる口縁部からなる。端部は外傾する面をなす。	底部外面はヘラオコシのち粗いナデ調整。他の部位はナデ調整。	
	10-144	口径 17.0 高さ 2.1	灰色 (N7/) 密			
須恵器 皿	10-145	底径 6.4	表面 灰色 (2.5PB6/2) 断面 灰紫色 (5RP6/2 ~ 5/2)	底部は円盤状の高台 (0A)。体部は大きく広がる。口縁部は欠く。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	底部内面は著しく磨滅。
須恵器 椀	10-146	底径 7.8	明灰褐色 (10YR8/3)	平坦な底部に断面台形の高台 (I Bb) が付く。	体部外面中段以下をケズリ。高台は削り出し。内面はナデ調整のち粗いミガキを施す。	底部外面にヘラ記号「+」。
須恵器 杯B	10-147	底径 8.8	灰色 (2.5PB7/2) 密	平らな底部に丸味を持った断面方形の高台が付く。体部はまっすぐ外上方へ立ち上がる。口縁部は欠く。	底部外面はヘラオコシのち粗いナデ調整。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。	底部外面にヘラ記号があるが、判読不能。
	10-148	底径 7.4	灰色 (10B6.5/1.5) 密			

須恵器鉢	10-149	口径 17.6	灰色 (N7/) 密	内湾する肩部に外傾する短い口縁が付く。口縁端部は水平な面をなし、内側に小さく突出する。	ナデ調整。	
	10-150	口径 21.6	明灰色 (10B7/1) 密	体部は僅かに肩が張る。口縁部は外反し端部は大きく肥厚する。		
緑釉陶器器形不明	10-151	底径 7.6	明灰褐色 (10YR8/3) 釉 淡黄緑灰色 (2.5GY 8/4)	円盤状高台 (I A) の破片。	外面はケズリのち軽くナデ調整。内面はミガキ。全釉。	底部外面に「三」のヘラ記号。底部内面にメアトが認められる。
	10-152	底径 8.2	明灰色 (5Y8/1) やや軟質 釉 淡黄緑灰色 (2.5GY 8.5/4)	細い輪高台 (II Bb2) の付く底部の破片。内面には陰刻花文を有する。	高台は貼り付け。内外面共ミガキを施し全面に厚く施釉する。	内外面共にメアトが認められる。
緑釉陶器皿	10-153	口径 15.2 高さ 2.8 底径 6.2	明灰色 (2.5Y8/3) やや軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7.5/7)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は浅く、口縁端部は小さく肥厚する。	口縁部外面以下をケズる。内面はナデのちミガキ。高台は削り出し。全面に施釉する。	
	10-154	口径 14.5 高さ 2.4 底径 6.2	灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 白色粒含む 釉 黄緑灰色 (2.5GY7/4 ~ 7/6)	底部は蛇の目高台 (I Ba)。体部は浅く、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。	高台は削り出し。全面にミガキを施し全面施釉する。	
緑釉陶器碗	10-155	底径 8.8	灰色 (2.5GY7/1) 釉 淡黄緑灰色 (2.5GY 8/4)	体部中段以下を欠く。底部に断面方形の高台 (II Bb1) が付く輪花椀。	高台は貼り付け。全面ミガキ。全釉。輪花は体部外面の四方にヘラで縦方向に線刻し、対応する内面に粘土を盛り上げ稜を付ける。	内外面にメアトが認められる。
	10-156	口径 9.8 高さ 3.4 底径 4.8	灰色 (2.5P6/2) 硬質 釉 暗黄緑色 (5GY5/4)	円盤状高台 (0A) を持つ小型の椀。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。底部外面以外を施釉する。	底部外面にヘラ記号があるが、判読不能。
	10-157	口径 12.4	明灰色 (10B7/1) 硬質 釉 灰緑色 (5G5/2)	体部は内湾し、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部は欠く。	10-157 は体部外面上段以下をケズる。他の部位はナデ調整。10-158 は全面にミガキ。いずれも残存部全釉。	
	10-158	口径 16.4	明灰色 (5PB8/1) 硬質 釉 灰色 (10Y7/3)			
緑釉陶器香炉蓋	10-159	口径 16.6	明灰色 (10Y8/1) 密 釉 黄灰色 (10Y7.5/5) 厚くなめらかで透明感あり細かい貫入が入る。	天井部は欠く。口縁部は内湾気味にほぼ垂直に立ち、端部は小さく外反し丸くおさめる。天井部と口縁部との境に二条の凸帯がめぐり、その上方に透かし穴が認められる。	内外面共にミガキを密に施し、内外面共に施釉する。	
緑釉陶器香炉	10-160	最大径 16.1	明灰色 (10Y8/1) やや軟質	底部には下方に広がる脚部が付く。体部は直立し、上段には内傾したのち直立する口縁が付く。口縁部・脚部共に端部を欠く。	ナデ調整のち、体部外面に粗いミガキを施す。脚部内面以外を施釉する。	底部内面にメアトが認められる。
緑釉陶器唾壺	10-161	頸部径 5.8	明灰色 (2.5Y8/1 ~ 8/2) やや軟質 釉 淡黄緑灰色 (5GY8/4) 緑灰色 (10GY7/6) の斑点あり	頸部から口縁部にかけての破片。やや丸味を持って外上方へ開く。	内面はナデのち粗いミガキ。外面はナデ調整。全面に施釉する。	
緑釉陶器耳皿	10-162	底径 5.0	明灰色 (10YR7.5/1.5) 釉 黄緑灰色 (5GY7/6)	円盤状高台 (0A) の底部の破片。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。底部外面以外を刷毛塗り施釉する。	

出土遺物観察表

緑釉陶器鉢	10-163	口径 19.0	淡黄白色 (2.5Y9/2) 細粒 釉 淡黄灰色 (7.5Y8/4)	丸味を持った深い体部に幅広の輪高台が付く。口縁部は直立し、端部は丸くおさめる。口縁部外面上段に一条の凸帯がめぐる。	高台は貼り付け。全面に丁寧なミガキを施す。口縁部から高台外面まで施釉する。	
灰釉陶器皿	10-164	口径 15.2 高さ 2.1 底径 7.5	明灰色 (7.5Y8/1 ~ 10Y8/1) 釉 灰緑色 (5GY7.5/2)	浅い体部に低い輪高台 (II Bb) が付く。口縁部は内側に向けわずかに折れ外反する。	外面は口縁直下以下をケズリ。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉する。	
	10-165	口径 19.4 高さ 2.3 底径 9.2	明灰色 (10Y8/1) 釉 灰色 (10Y7.5/2)	浅い体部に断面方形の輪高台 (II Bb1) が付き、口縁部はわずかに外反する。	内面から口縁部外面にかけてナデ調整。口縁部外面以下はケズリのちナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉。	底部外面にメアトが認められる。
灰釉陶器椀	10-166	口径 18.5 高さ 4.9 底径 8.0	明灰色 (7.5Y ~ 10Y8/1) 密 釉 明灰緑色 (2.5GY7/3)	平らな底部に断面方形の輪高台 (II Bb1) が付く。体部は内 wann 気味に開き、口縁部は外反し大きく外方へ引き出される。	体部外面下段以下をケズリ。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉する。	
	10-167	底径 5.4	明灰色 (10Y8/1) 釉 黄緑灰色 (5GY6.5/5)	丸みを持った体部に蛇の目高台 (II Ba) が付く。体部中段以下を欠く。	体部外面下段をケズリのちナデ調整。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉する。	
	10-168	口径 15.6 高さ 3.4 底径 7.0	明灰色 (10Y8/1) 釉 灰色 (10Y7/2)	底部には幅広の蛇の目高台 (II Ba) が付く。体部はまっすぐ外上方へ開き口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面上段以下をケズリのち軽くナデ調整。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉する。	
	10-169	底径 6.2	明灰色 (7.5Y8/1) 釉 明灰色 (10Y8/2)	断面方形の輪高台 (II Bb1) の付く底部の破片。底部内面には陰刻花文を有する。	外面はケズリ。内面はナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉する。	
灰釉陶器壺蓋	10-171	口径 8.6	灰色 (5Y7.5/1) やや密 釉 灰緑色 (5GY7/2)	天井部中央は欠く。口縁部は天井部より直角に折れ曲がり直立する。端部は丸くおさめる。	天井部外面はヘラケズリのち粗いナデ調整。他の部位はナデ調整。天井部外面のみ施釉する。	天井部内面は磨滅。
	10-172	口径 10.0	明灰色 (10Y8/1 ~ N8/) やや密 釉 灰色 (10Y6/2) 失透する			
	10-173	口径 16.0	明灰色 (10Y8/1 ~ N8/) やや密 釉 灰緑色 (5GY7.5/3) 透明			
灰釉陶器蓋	10-174	口径 14.6	明灰色 (N8 ~ 10Y8/1) 密 釉 灰緑色 (7.5GY7.5/3) ムラがある	天井部は中心を欠くが環状のツマミの付くものと思われる。天井部から口縁部までなだらかに広がり、口縁端部はごくわずかにふくらむ。	上面のみ厚く施釉する。内面はナデ調整。	
灰釉陶器香炉	10-175	口径 11.6	明灰色 (10Y8/1) 密	直立する体部に内傾する口縁部が付き、端部は丸くおさめる。体部上段に一条の沈線めぐらす。	体部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。釉はわずかに付着する程度。	
灰釉陶器三足盤	10-176	口径 17.6 高さ 3.4	明灰色 (10Y8/1) やや密 釉 灰緑色 (5GY7/2) 透明感が強い	やや丸味を帯びた底部に、大きく外傾する幅広の口縁と短い脚が付く。内面の体部と口縁部との境には稜が付き、口縁端部は丸くおさめる。	体部中段以下をケズリ。他の部位はナデ調整。脚はヘラで面取りし、獣脚とする。内面のみ厚く施釉する。	
灰釉陶器唾壺	10-177	底径 6.8	明灰色 (7.5Y8/1) 細粒	平らな底部に低い蛇の目	ナデ調整のち、外面のみ	

			釉 灰色 (5Y7/2)	高台が付き、底部は丸い。体部上段以上は欠く。	薄く施釉する。	
灰釉陶器浄瓶	10-170		明灰色 (5Y8/1) 密釉 明灰緑色 (5GY8/2)	注口部の破片。	筒部外面はへらで面取りを行う。外面に厚く施釉。	
灰釉陶器蓋	10-178	ツمام径 9.4	明灰色 (7.5Y8/1) 釉 明灰色 (2.5Y8/2.5GY8.5/1 の斑状)	天井部は断面方形の環状のツمامが付き、外下方になだらかに広がる。口縁部は欠く。内面に陰刻花文を有する。	天井部外面はケズリ。ツمامは貼り付け。天井部内面は丁寧なナデ調整。外面のみ施釉する。	
白色無釉陶器椀	10-179	底径 7.0	明灰色 (2.5Y8/2) 密やや硬質	底部は蛇の目高台 (I Ba)。体部は丸味を持って外上方へ広がる。	外面はケズリ。内面は丁寧なミガキ。高台は削り出し。	
白磁椀	10-180		白色 (N9/) 釉 薄い乳白色 (N9.5/)	体部は中段で屈曲し稜をなす。口縁部は外反し口縁端部は丸くおさめる。輪花椀。	輪花は口縁部内面に縦方向に粘土をわずかに盛り上げる。残存部全面に透明な釉がかけられる。	
	10-181	底径 6.0	乳白色 (N9/) 釉 透明 僅かに青味がかる	幅広の蛇の目高台の付く底部と体部の立ち上がり部の破片。	高台底部は施釉のちかき取る。その他の部位に透明な釉がかけられるが、内面に比べ外面はやや粗雑で、高台内側には釉のかかっていない部分がある。	
青磁椀	10-182	底径 5.6	明灰色 (7.5Y8/2) 釉 透明感のある灰色 (7.5Y6/2)	幅広の蛇の目高台から体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	高台は削り出しで、底部外面の中央部を円形に挟む。釉は全面に厚くかけられるが、高台底部にカキ取った部分がある。	
	10-183	底径 9.5	明灰色 (10YR8/1) 釉 灰色 (2.5Y5/3)	断面台形の輪高台。高台下端面にはメアトが認められる。	高台は削り出し。全面に厚く施釉するが、高台下端面はカキ取る。	
黄釉椀	10-184	口径 13.4	明灰色 (5Y7/1) 密釉 黄灰色 (5Y7.5/5) 釉は厚く細かい貫入が入る。	口縁部はわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。	ナデ調整。口縁外面から内面に掛けて白土を塗りその上に施釉する。	

観察表 18 四町地区 SK18 出土土器 (挿図 47)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A II	4-183	口径 13.8 高さ 2.1	明茶灰色 (7.5YR8/3) やや密 雲母含む	平底で体部は外上方へ低く開く。口縁部は屈曲し、端部は上方へ小さくつまみ上げられる。	口縁部および内面はナデ調整。外面はオサエ。口縁部のナデは強い。4-183は内面にハケメが残る。	口縁部に煤が付着。
	4-184	口径 14.2 高さ 2.2	明灰褐色 (10YR8/3) やや密			
	4-185	口径 14.8	肌色 (7.5YR9/4 ~ 9/3) やや密	体部は外上方へ低く開き、口縁部は屈曲し外反する。端部のつまみ上げは弱い。底部を欠く。		内面に丹が付着。
	4-186	口径 15.2 高さ 1.5	灰色 (10YR6/1.5) やや密	平底で、口縁部は丸味を持って立ち上がり大きく屈曲し外反する。端部は上方へ小さくつまみ上げられる。		
須恵器 鉢	4-187	口径 24.2	灰色 (10B6/1.5) やや密	体部はまっすぐ外上方へ広がり、上段で小さく内湾する。口縁部は短く外反し、断面三角形を呈する。底部を欠く。	ナデ調整。	
須恵器 甕	4-188		灰色 (10B6/1) やや密	口縁部は大きく外反し、端部は肥厚する。	ナデ調整。	

観察表 19 十町地区 SX47 出土土器 (挿図 48・写真図版 51)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿 A	10-84	口径 11.2 高さ 1.5	灰色 (2.5Y7/3) 密	広い底部に、外反する口縁部が付く。端部はわずかにつまみ上げられる。	底部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。	
	10-85	口径 12.2 高さ 1.7	外面 灰色 (10YR5/1) 内面・断面 明灰褐色 (10YR7/2) 密			
	10-86	口径 12.4 高さ 2.0	明灰褐色 (10YR8/2～8/3) 密 雲母細粒含む	底部は丸味を持ち、口縁部との境は不明瞭である。		
	10-87	口径 12.8	灰褐色 (10YR6/2) 密 雲母細粒含む	口縁部は上位で外反し、端部は小さくつまみ上げられる。10-87・10-88 は底部を欠く。		
	10-88	口径 12.9 高さ 1.3	肌色 (5YR8/4) 密 雲母細粒含む			
土師器 皿 A I	10-89	口径 16.8 高さ 2.0	明灰褐色 (10YR8/3) 密 雲母細粒含む	底部は丸味を持ち、口縁部との境が不明瞭のまま大きく開く。口縁端部は肥厚する。	口縁部外面上段から底部内面までをナデ調整し他の部位はヘラケズリ。	
土師器 碗 A	10-90	口径 12.6	明灰褐色 (10YR8/3) 密 雲母細粒含む	底部は比較的小さく、体部は外上方へ広がる。口縁部はナデによりやや外反し、端部は小さくつまみ上げられる。10-92 は底部を欠く。	口縁部外面から底部内面をナデ調整。体部外面から底部はオサエ。10-95 は体部外面に指痕が多く残る。10-96 は体部外面に粘土の継ぎ痕が残る。	
	10-91	口径 13.4 高さ 3.0	明茶褐色 (7.5YR7/4～8/4) 密 雲母細粒含む			
	10-92	口径 13.2	橙灰褐色 (5YR6/6) 密			
土師器 杯 A	10-94	口径 14.2 高さ 3.0	明茶褐色 (7.5YR7/4) 密 雲母細粒含む	底部は平坦で体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は上方へつまみ上げられる。10-95・10-96 は底部を欠く。		
	10-95	口径 14.6	明茶褐色 (7.5YR8/3)			
	10-96	口径 15.0	明茶褐色 (7.5YR8/4) やや密			
	10-97	口径 16.1	明灰褐色 (10YR7/3) 密	体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部に至る。端部は小さくつまみ上げられる。	内面はナデ調整。外面はヘラケズリ。口縁部にはナデが残る。	
土師器 杯 B	10-93	口径 17.8 高さ 4.3 底径 8.8	明灰褐色 (10YR8/3) 密	底部外面に断面方形でわずかに外へ張り出す高台が付く。体部は外上方に大きく開き、口縁部はやや外反し端部はつまみ上げられる。	内面はナデ調整。外面はヘラケズリ。口縁部外面にナデを残す。高台は貼り付け。	
土師器 高杯	10-98	口径 28.0	明灰褐色 (10YR8/3) 密 雲母微細粒含む	口縁部は外反して水平に外へ開く。端部は上方に丸く突出する。	口縁部外面から内面にかけてナデ調整。体部外面は外方向に向けて粗いヘラケズリを施す。	
	10-99	残高 7.9	明灰褐色 (10YR8/2) 密 雲母微細粒含む	断面七角形を呈する脚部の破片。	棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方に向けてケズる。杯部底面にはナデ調整を施す。	
須恵器 杯蓋	10-100	口径 12.5 高さ 1.4	灰色 (5B5/1～6/1) 密	平坦な天井部と屈曲する口縁部からなる。天井部と口縁部との境は明瞭で端部は下方へ突出する。中心部は欠く。	天井部はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
須恵器 皿	10-101	底径 6.2	明灰色 (10B7/1) やや密 黒色細粒含む	底部は円盤状の高台 (I A)。体部は大きく開く。緑釉皿に近似する器形。	高台は削り出し。体部外面はケズリ。内面にはミガキを施す。調整は丁寧である。	
須恵器 壺	10-102	底径 9.8	灰色 (N7.5/) 密	平坦な底部にわずかに外へ張り出す断面方形の高台が付く。体部はまっすぐ	底部外面には糸切り痕が残る。高台は貼り付け。体部外面下段はヘラケズ	底部内面は磨減。

				立ち上がる。	リ。底部内面はナデ調整。	
	10-103	底径 4.0 最大径 6.8	外面 灰色 (7.5Y6/1) 内面・断面 橙灰褐色 (5YR7/4) 密 やや軟質	底部は平坦で小さく、体部は中段でふくらみ、ロクロ目が強く残る。	底部外面はヘラオコシのちナデ調整。体部と底部内面はナデ調整。	
須恵器鉢	10-104	底径 9.0	明灰色 (2.5Y8/1 ~ 8/2) 密 やや軟質	平坦な底部と、外上方へ立ち上がる体部からなる。	底部外面は糸切り未調整。体部外面と内面はナデ調整を施す。10-104の外面は丁寧な仕上げられる。	
	10-105	底径 9.4	明灰色 (2.5Y8/1 ~ 8/2) 密 やや軟質	体部上段・口縁部は欠く。		
須恵器椀	10-106	底径 11.4	表面 明灰色 (10YR8/1) 断面 茶灰色 (2.5YR6/3) 密 やや軟質	平らな底部に外へ張り出す小さな高台が付く。体部は内湾気味に立ち上がる。	体部外面下半部はケズリのちナデ調整。高台は貼り付け。内面はナデ調整。	
緑釉陶器椀	10-108	口径 13.0	明灰色 (2.5Y8/3) 軟質 釉 淡黄緑灰色 (5GY8/4)	口縁部は外反気味に開き、端部は丸くおさめる。底部を欠く。	外面はナデ調整。内面はミガキ。残存部全釉。	口縁端部に煤が付着。
	10-109	底径 5.2	灰色 (10Y7/2) 釉 灰緑色 (5GY7/2)	底部は円盤状高台 (I A)。体部は丸味を持って立ち上がる。体部中段以上を欠く。	高台は削り出し。体部外面下段以下をケズリ、以上をナデ調整。内面はミガキを施す。全釉。	
	10-110	底径 5.2	明褐色 (10YR8/4) やや硬質 釉 黄灰色 (7.5Y7/6)	底部は蛇の目高台 (I Ba)。体部中段以上を欠く。	体部外面下段以下をケズる。他の部位にはミガキを施す。高台は削り出し。全釉。	内外面にメアトが認められる。
緑釉陶器皿	10-111	口径 16.0 高さ 3.2 底径 7.3	明灰褐色 (10YR8/3) 硬質 釉 黄緑灰色 (5GY7/4)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。底部の器壁は体部に比べ厚い。体部は低く開き、口縁部は立ち上がり上位で外反する。	体部外面上段以下をケズる。他の部位はナデのち内面のみミガキを施す。高台は削り出し。内外面に施釉する。	
	10-112	口径 14.0	明茶褐色 (7.5YR7/6 ~ 8/6) 釉 黄緑灰色 (2.5GY6/4)	浅い体部の破片。口縁端部は丸くおさめる。底部を欠く。	体部外面中段以下をケズる。他の部位はナデのち内面のみミガキを施す。残存部全釉。	
	10-113	底径 6.4	明灰色 (2.5Y8/3) 軟質 釉 淡黄灰色 (7.5Y8/4)	底部は下端面の内傾する蛇の目高台 (I Ba)。	外面はケズる。内面はミガキ。高台は削り出し。内外面に施釉する。	
	10-114	底径 6.2	明灰褐色 (10YR8/3) 硬質 釉 黄緑灰色 (2.5GY6/4)			
	10-115	底径 6.1	明灰色 (10Y8/1) 硬質 釉 淡黄緑灰色 (5GY8/4)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。器壁は厚い。	外面はケズリ。内面はミガキ。高台は削り出し。全面に施釉するが、高台内は非常に粗い。	
緑釉陶器椀	10-116	底径 6.5	淡黄灰色 (2.5Y8/4) 軟質 釉 淡黄灰色 (5Y8/6)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。底部の器壁は体部に比べ厚い。底部内面に陰刻花文を有する。	体部中段以下をケズる。他の部位はナデのち内面のみミガキを施す。高台は削り出し。全面施釉。	
	10-117	口径 18.6 高さ 5.9 底径 9.1	明灰色 (10Y8/1) やや軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7/4 ~ 7/6)	平らな底部に断面方形のやや外に張り出す輪高台 (II Bb3) が付く。体部は内湾気味に外上方へ開き、口縁端部は丸くおさめる。	高台から底部にかけてナデ調整。体部外面はケズリのち粗いミガキ、内面には細かいミガキを密に施す。高台は削り出し全面施釉。	外面にメアトが認められる。
緑釉陶器壺	10-118	底径 14.3	明灰色 (10PB7/1) 白色細粒含む 硬質 釉 黄緑灰色 (2.5GY7/6 ~ 7/4)	底部は平底で、わずかに丸味を持った体部は中段以上を欠く。	内面はナデ調整。底部付近にロクロ目が強く残る。外面は丁寧なミガキを施す。全面施釉。	
緑釉陶器唾壺	10-107	口径 16.9	明灰色 (10Y8/1 ~ N8/)	外上方へ直線的に開く口	全面に丁寧なミガキを施	

			硬質 釉 淡黄緑灰色 (2.5GY 8/4)	縁部の破片。端部は丸く おさめる。内面に細長く 粘土を盛り上げ輪花とす る。口縁部の切り込みは 不明。	す。全面施釉する。	
灰釉陶器 皿	10-121	口径 15.4	明灰色 (5PB8/1 ~ N8/ 硬質 釉 灰色 (10Y7/2 ~ 7/3)	体部は低く開き、口縁付 近で内側に折れ、外反す る。端部は丸くおさめる。 底部を欠く。	ナデ調整。内面のみ施釉 する。	
	10-122	口径 14.6 高さ 2.7 底径 7.3	明灰色 (10Y8/1 ~ N8/ 釉 明灰色 (10Y8/2)	浅い体部に端部の丸い輪 高台 (II Bd2) が付く。体 部外面にはロクロ目がき つく残る。	高台は貼り付け。ナデ調 整のち口縁部内外面を刷 毛塗り施釉する。	高台内に墨が付 着し磨滅する。
	10-123	口径 13.6 高さ 2.6 底径 5.5	明灰色 (10Y8.5/1) 釉 発色せず	浅い体部に先端のすぼま る輪高台 (II Be2) が付く。 底部の器壁は厚い。	高台は貼り付け。ナデ調 整のち口縁部内面のみ施 釉する。	
灰釉陶器 椀	10-124	口径 16.0	灰色 (2.5Y7/1) やや粗 釉 明灰色 (10Y8/2)	丸味を持った体部に、外 へ張り出す輪高台 (II Bd 2) と、小さく外反する口 縁が付く。10-126の器壁 は薄い。10-124・10-125 は底部を欠く。	体部外面中段以下をケズ リ。10-124は体部上段ま でケズリがおよぶ。他の 部位はナデ調整。高台は 貼り付け。10-125・10- 126は口縁部外面を、10- 124は内面を刷毛塗り施 釉する。	
	10-125	口径 18.4	明灰色 (5PB8/1 ~ N8/ 硬質 釉 淡黄緑灰色 (2.5GY 8/4)			
	10-126	口径 19.3 高さ 5.4 底径 8.8	明灰色 (2.5Y8/1) 釉 淡黄緑灰色 (5GY8/ 4)			
白色無釉 陶器 椀	10-119	底径 7.3	明褐色 (10YR8/4) 密 やや軟質	底部は断面方形の低い輪 高台 (I Bb)。	高台は削り出し。内面は ナデ調整のちミガキを施 す。	
白磁 椀	10-120		乳白色 (N9/ 釉 透明	口縁部は外側に巻き込み 玉縁状を呈する。	口縁部ナデ調整。体部中 段はケズリ。全面に厚く 施釉する。	

観察表 20 四町地区 SD11・12・13 上層埋土出土土器 (挿図 49)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 椀	4-151	口径 12.6	明灰色 (10B7.5/1) 密	体部は内湾しながら立ち 上がり、口縁部はわずか に外反する。端部は丸く おさめる。底部は欠く。	内外面共ナデ調整。	
	4-152	底径 8.0	表面 灰色 (10B5/1) 断面 明灰色 (5P7/1) 密	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は内湾しな がらゆるやかに立ち上 がる。体部中段にゆるい稜 を持つ。	高台は削り出し。体部外 面はケズる。内面はミガ キ。	
須恵器 皿	4-153	口径 15.6 高さ 3.4 底径 7.0	明灰色 (5PB8/1 ~ 10Y 8.5/1) 黄白色 (2.5Y 8.5/4) の御本様の斑点 が各所に現れる 密	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は大きく外 上方へ広がる。口縁部は 内側に折れ曲がりやや外 反し、端部は丸くおさめ る。口縁部と体部との境 は稜をなす。緑釉陶器の 皿に近似する器形。	高台は削り出し。外面は 体部上段までをケズる。 高台内以外をミガキ。	
灰釉陶器 椀	4-154	口径 10.2 高さ 3.4 底径 4.9	明灰色 (10Y8/1) 釉 灰色 (10Y7/2 ~ 7/3)	丸味を持つ体部に輪高台 が付き (4-154はII Bd3、 4-155はII Bd2)、口縁部 は上位で小さく外反する。 4-154は小型椀。	体部外面中段以下をケズ る。他の部位はナデ調整。 高台は貼り付け。4-154は 内面のみを施釉。4-155は 口縁部内外面を施釉する。	
	4-155	口径 16.2 高さ 5.6 底径 7.0	明灰色 (5PB8.5/1) 釉 黄灰色 (5Y7/4)			
灰釉陶器 皿	4-156	口径 14.1 高さ 3.0	灰白色 (5PB9/1) 釉 明灰緑色 (2.5GY7/ 2)	平らな底部には輪高台 (II Bd2) が付く。体部は外上 方へ大きく開	高台中央部にケズリを残 す以外ナデ調整。体部・ 口縁部の内外面に刷毛塗	底部内外面に墨 が付着し内面は 磨滅する。

				き、口縁部上位でやや立ち上る。口縁端部は外方へ丸く肥厚する。	り施釉する。調整は粗い。
緑釉陶器碗	4-157	口径 9.7 高さ 2.8 底径 4.6	灰色 (5B5/1) 硬質 釉 灰緑色 (2.5GY4/6)	円盤状の高台 (0A) を持つ小型の碗。	高台底部は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。底部外面以外を施釉する。
	4-158	底径 6.6	明灰色 (10Y8/1) 硬質 釉 暗黄緑灰色 (2.5GY4/6)	底部は断面台形の輪高台 (I Bb)。体部中段でわずかに内方へ折れ、稜を付ける。口縁端部は欠く。	高台は削り出し。体部外面上段以下をケズリ。他の部位はナデ調整。体部内外面に粗いミガキを施す。内外面及び高台内の一部に刷毛塗り施釉する。

観察表 21 四町地区 整地層 3 出土土器 (挿図 50)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器鉢	4-169	口径 24.3 高さ 21.2 最大径 24.8 底径 12.2	明灰色 (10B7/2) 密 やや軟質	平らな底部にやや丸味を帯びた断面方形の輪高台が付く。体部は外上方に立ち上がり上位で肩が張る。肩部は丸味を持って内傾し、外反する短い口縁が付く。肩部と口縁部の境は明瞭である。口縁端部はほぼ水平な平坦面をなす。	高台は貼り付け。底部外面は糸切り。他の部位はナデ調整。	底部外面に墨書が認められるが判読不能。
	4-170	口径 25.2 高さ 17.7 最大径 26.1 底径 12.6	明灰色 (5PB8.5/1) 密 やや軟質	平底で、他は4-169と似る。	底部外面の調整は不明。他の部位はロクロナデ調整。	
	4-171	口径 30.3	明灰色 (10B7/1 ~ 7/2) やや密	体部は口縁部に向かって大きく開く。口縁部は外傾する面をなし、上端が内側にわずかに突出する。底部は欠く。	体部外面下半はケズリ。他の部位はナデ調整。	
緑釉陶器碗	4-172	口径 13.2 高さ 3.5 底径 6.2	明灰色 (5PB8/1 ~ 10Y8/1) 硬質 釉 灰緑色 (5GY7/3)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb) が付く。高台端面は内湾しながら開き、口縁部は外反する。底部は厚い。	体部外面中段以下をケズリ、以上をナデ調整。内外面にミガキを施し全面に施釉する。	
	4-173	底径 7.3	橙灰褐色 (5YR7/4) 釉 暗黄緑色 (5GY4/4)	平らな底部に輪高台 (II Bc1) が付く。高台端面は内傾し、中央部がわずかに凹む。体部は内湾しながら開き、口縁端部は欠く。底部内面に凹線をめぐらす。	高台は貼り付け。他の部位はナデ調整。底部外面以外を厚く施釉する。	底部内面にメアトが認められる。
緑釉陶器皿	4-174	底径 8.6	灰白色 (N9/) やや軟質 釉 淡黄灰色 (5Y8/4)	浅い体部に端部の丸い輪高台 (II Bb2) が付く。口縁部は欠く。	全面ミガキ。全面施釉。	内外面共メアトが認められる。
	4-175		明灰色 (5PB8.5/1) 釉 黄灰白色 (7.5Y8.5/3)	方形皿の破片。隅部を切り欠き輪花とする。底部は欠く。	全面ミガキ。全面施釉。輪花は外面は線刻、対応する内面は粘土をわずかに盛り上げ稜を付ける。	
灰釉陶器段皿	4-176	口径 16.2	明灰色 (10Y8.5/1 ~ N8.25/) 硬質 釉 黄灰色 (5Y7/4)	狭縁の段皿。内外面共明瞭な段をなす。底部は欠く。	ナデ調整。内面のみ施釉する。	
灰釉陶器皿	4-177	口径 15.0 高さ 3.0 底径 7.7	明灰色 (10YR8.5/1) 釉 明灰色 (5Y8/2)	底部には丸味を持つ断面台形の輪高台 (II Be1) が付く。体部は外上方へ	高台は貼り付け。高台内はケズる。他の部位はナデ調整。高台内以外を薄	

出土遺物観察表

				低く開き、口縁部は小さく外反する。	く刷毛塗り施釉する。	
灰釉陶器 椀	4-180	口径 10.6 高さ 4.7 底径 4.9	灰白色 (N8/ ~ 5PB9/1) 釉 明灰緑色 (5GY8/2)	丸味を持った体部に三日月形の輪高台 (II Bd4) が付き、口縁部は外反する。小型椀。	底部外面をケズリ。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉。	
	4-181	口径 18.9	明灰色 (10Y8.5/1) 釉 明灰色 (7.5Y8/3)	体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。底部を欠く。	ナデ調整。口縁部内面を施釉する。	
	4-182	口径 18.0 高さ 5.0 底径 7.9	灰白色 (10Y9/1 ~ N8.75/) 釉 灰色 (7.5Y6.5/3)	底部には断面方形の輪高台 (II Bb1) が付く。体部は丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。口縁端部はやや薄く丸くおさめる。底部は上方へ変形する。	底部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。高台は貼り付け。内面から体部外面中段までを厚く施釉する。	
灰釉陶器 壺	4-178	口径 4.8	灰白色 (10Y9/1 ~ 10B9/1) やや密 釉 黄灰色 (5Y7/4)	体部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁部は大きく外反する。口縁端部、体部中段以下は欠く。	ナデ調整。体部内面にはロクロ目が強く残る。外面と口縁部内面を薄く施釉する。	
灰釉陶器 平瓶	4-179		明灰色 (10Y8/1) 密 釉 灰緑色 (2.5GY5/3)	注口部、把手、底部は欠く。肩部に稜が付き、天井部内面中央に円盤形粘土板でふさいだ痕が残る。天井部肩部寄りには注口部の接合痕が残る。	内面から体部外面はナデ調整を施す。注口部は天井部肩寄りに穴を開け、注口を差し込み接合する。天井部上面に厚く施釉する。	

観察表 22 三町地区 SX07 出土土器 (図版 20 ~ 25・挿図 51 ~ 55・写真図版 52 ~ 63・66)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿	3-1	口径 10.0 高さ 1.2	橙灰褐色 (5YR6/5)	平底で口縁部は短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。全体に厚い。	底部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。	
土師器 皿 A	3-2	口径 12.0 高さ 1.7	灰色 (2.5Y7/2) 雲母微細粒含む	平坦な底部に屈曲する口縁が付く。口縁端部は上方につまみ上げられる。	底部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。	
	3-3	口径 12.2 高さ 1.5	明灰色 (2.5Y8/3)			
	3-4	口径 13.4 高さ 1.4	明茶褐色 (7.5YR7/4)			
	3-5	口径 13.4 高さ 1.5	淡黄灰色 (2.5Y8/3 ~ 8/4) 雲母細粒含む			
	3-6	口径 13.6 高さ 1.5	明灰褐色 (10YR8/3 ~ 7/4) やや砂質 雲母細粒含む			
	3-7	口径 14.2 高さ 1.5	明茶褐色 (7.5YR7/4)			
	3-8	口径 14.2	明褐灰色 (10YR7/4) 雲母微細粒含む			
	3-9	口径 14.4 高さ 1.8	灰色 (2.5Y7/3) 雲母微細粒含む			
	3-10	口径 14.4	明灰褐色 (10YR8/3) 雲母微細粒含む			
	3-11	口径 14.5 高さ 2.2	明褐灰色 (10YR7/4)			
	3-12	口径 15.2 高さ 1.5	明茶灰色 (7.5YR7/3 ~ 7/4)			
	土師器 椀 A	3-13	口径 12.4 高さ 2.4			明灰褐色 (10YR8/2) 雲母細粒含む
3-14		口径 12.8 高さ 2.7	灰色 (7.5YR6/1 ~ 7/1)			内外面共に煤が付着。

	3-15	口径 高さ	13.0 2.3	明灰褐色 (10YR7/3)	られる。		
	3-16	口径 高さ	13.2 2.5	明灰褐色 (10YR7/3)			
	3-17	口径 高さ	13.2 2.3	明灰褐色 (10YR7.5/2)			
	3-18	口径 高さ	13.6 2.7	明灰色 (10YR8/1 ~ 8/2) やや粗			
	3-19	口径 高さ	13.6 2.3	灰褐色 (10YR6/2) 雲母細粒多く含む			
	3-20	口径 高さ	13.4 2.5	灰色 (7.5YR6/1 ~ 10YR 7/3)			
	3-21	口径 高さ	13.7 2.8	明灰褐色 (10YR8/2 ~ 8/ 3)			
土師器 杯 A	3-22	口径 高さ	14.0 2.5	明灰褐色 (10YR8/2)	底部は平坦で、体部はゆるやかに外上方へ開く。口縁部は屈曲し、端部は上方へ小さくつまみ上げられる。3-27は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部は屈曲しない。3-32は他のものに比べ厚い。	口縁部外面と内面はナデ調整。他の部位はオサエ。外面にヘラケズリを行うもの (3-26・3-27) もある。	
	3-23	口径 高さ	14.0 2.9	明茶褐色 (7.5YR7.5/4) 雲母微細粒含む			
	3-24	口径 高さ	14.3 2.9	明茶褐色 (7.5YR8/4)			
	3-34	口径	14.4	表面 明灰褐色 (10YR8/3) 断面 橙灰褐色 (5YR6/6) 密			外面に墨書。
	3-25	口径 高さ	14.4 2.9	明灰褐色 (10YR8/1 ~ 8/3) やや粗 砂粒を多く含む			
	3-26	口径 高さ	14.2 3.0	明灰色 (10YR7/1 ~ 8/1) 赤褐色粒含む			
	3-27	口径 高さ	14.3 2.8	明灰色 (10YR7/1 ~ 7/2)			
	3-28	口径 高さ	16.0 2.8	明茶灰色 (7.5YR7/3)			
	3-29	口径 高さ	15.1 3.0	灰色 (10YR6/1 ~ 7/1)			
	3-30	口径 高さ	15.3 2.3	外面 明茶褐色 (7.5YR 7/4) 内面・断面 明灰褐色 (10YR7/3)			
	3-31	口径	15.4	灰色 (2.5Y7/2) 長石・石英の微粒含む			内面に煤が付着。
	3-32	口径 高さ	16.0 2.7	明茶褐色 (7.5YR7/4)			
	3-33	口径 高さ	16.2 2.4	灰褐色 (10YR6/3 ~ 7/3)			
	土師器 杯 B	3-35	口径 高さ 底径	16.6 3.2 8.8			明灰褐色 (10YR7/3 ~ 7.5YR7/4) 雲母微細粒含む
3-36		口径 高さ 底径	21.2 4.4 11.5	褐灰色 (10YR7/3 ~ 6/4) 雲母細粒含む	底部には断面三角形の高台が付く。体部はゆるやかに外上方へ広がり、わずかに屈曲する口縁部に至る。端部はつまみ上げられる。	体部外面はヘラケズリ。他の部位はナデ調整。口縁部外面にナデを残す。	
土師器 高杯	3-37	口径	23.8	明茶灰色 (7.5YR8/3)	杯部の破片。杯底部は欠く。体部はゆるやかに外上方へ広がり、口縁部は外反する。3-39の外反はゆるい。口縁端部は上方	体部外面オサエのちケズリ。他の部位はナデ調整。3-37・3-38のケズリは非常に粗い。	
	3-38	口径	25.0	外面 灰色 (10YR6/1) 内面・断面 明茶褐色 (7.5YR8/4) 雲母細粒多く含む			

出土遺物観察表

	3-39	口径 26.8	肌色 (5YR8/4) 赤褐色粒含む	へ突出する。		
	3-40	底径 17.4	明茶灰色 (7.5YR8.5/3)	裾部の破片。下方に向かっ	ナデ調整	
	3-41	底径 15.4	淡黄色白色 (10YR9/3) 赤褐色粒含む	て大きく広がり、端部は 下方へ肥厚する。		
	3-42	残高 16.2	明灰褐色 (10YR7/2) 赤褐色粒含む	脚部は断面七角形を呈し、 中空部は下方に向かって やや広がる。裾部は脚部 との境で折れ曲がり、外 下方へ広がる。端部は欠 く。3-43は裾部を欠き杯 部底面が残存する。	脚部は棒状の芯に粘土を 巻き付け、外面を上方に 向かって削る。裾部内外 面と脚部内面下段をナデ 調整。	
	3-43	残高 14.0	明灰褐色 (10YR8/3)			
	3-44	残高 15.5	外面 明茶褐色 (7.5YR 8/4) 断面 明灰色 (7.5YR7/1 ~ 8/1)	脚部は断面八角形を呈し、 中空部は下方へ向かって 広がる。裾部は外下方へ 向かって折れ曲がる。	脚部は棒状の芯に粘土を 巻き付け、脚部外面を削 るが裾部までおよばず、 下段にはオサエを残す。 内面下段と裾部はナデ調 整。	
土師器 盤	3-45	底径 14.2	淡黄灰色 (7.5Y8/4) 雲母・赤褐色粒含む	やや丸味を持つ底部に、 外方へ開く台が付く。端 部は内側に肥厚する。	ナデ調整。	
	3-46	口径 35.8	明茶灰色 (7.5YR8/2 ~ 8/3)	平らな底部に高台剥離痕 を残す。体部はゆるやかに 広がり、口縁部で大きく 外反し、外方へのびる。 端部は上方に肥厚する。	体部・底部外面はオサエ のち軽いナデ。他の部位 は丁寧なナデ調整。	
土師器 甕	3-47	口径 23.0	明茶灰色 (7.5YR7/2 ~ 10YR5/1) やや粗	ほぼ直立する体部に、大 きく外傾する口縁が付く。 端部は上方に肥厚する。	体部外面は縦方向の粗い ハケメ。他の部位はナデ 調整。	外面に煤が付着。
	3-48	口径 15.0	茶灰色 (7.5YR6/2) 雲母細粒多く含む	体部は僅かに内傾し、頸 部で屈曲した口縁部は大 きく外傾する。端部は上 方へ肥厚する。	体部外面は斜方向の平行 タタキ。他の部位はナデ 調整。	
	3-49	口径 12.4	外面 明褐色 (10R8/ 4) 内面・断面 茶灰色 (2.5 YR6/2)	わずかに内傾する体部に、 外反する小さな口縁が付 く。端部は上方に突出す る。		
	3-50	口径 21.2	茶灰色 (7.5YR5/3) やや粗	内傾する体部に大きく外 傾する口縁部が付く。口 縁端部はわずかに上方へ 肥厚する。	体部外面は条痕のないタ タキ。他の部位はナデ調 整。	
	3-51	口径 12.4 最大径 14.6	橙灰褐色 (5YR7/4 ~ 6/4) やや密	丸い体部に、外傾する小 さい口縁が付く。端部は 丸くおさめるもの (3-51) と、水平な面をなすもの (3-54・3-55・3-52) とが ある。法量により二群に 分かれる。	体部外面はオサエ。他の 部位はナデ調整。3-52の 内面体部上段は粗いケズ リのちナデ調整。	外面に煤が厚く 付着。
	3-54	口径 12.4 最大径 14.2	明茶褐色 (7.5YR7/4) やや密			
	3-55	口径 17.6 最大径 20.4	橙灰褐色 (5YR6/5) やや粗			
	3-52	口径 17.0 最大径 20.0	茶褐色 (7.5YR6/5 ~ 6/ 2) やや粗			
	3-53	口径 16.4	明茶灰色 (7.5YR8.5/2) 粗 φ 1 ~ 2mm の砂粒 を多く含む。	卵形の体部に外傾する口 縁部が付く。口縁端部は やや外傾する面をなし、 外方にわずかに突出する。	体部外面は平行タタキ。 体部外面最上段より口縁 部内面までをナデ調整。 体部内面中段まではタタ キ目をナデ消し、以下は 同心円状のタタキ目を残 す。体部外面最上段に粘 土の継ぎ痕が残る。	
黒色土器 椀	3-56	口径 13.4	内面 金属光沢を帯び	平坦な底部に断面三角形	底部外面はケズリのちナ	A 類

		た黒色 外面 褐灰色 (10YR6/4)	の小さな高台が付く。体部はやや丸味を持って外上方へ開き、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。 3-62・3-81 は内面口縁端部直下に沈線をめぐる。	デ。体部外面はケズリのち粗いヘラミガキ。内面には細かいヘラミガキを施す。3-56・3-57・3-60・3-62の内面には暗文が認められる。3-60は体部外面をオサエ。	
3-57	底径 7.0	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 茶褐色 (7.5YR6/6)			A類
3-58	口径 13.3	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 茶褐色 (7.5YR6/5) 雲母細粒含む			A類、口縁端部に煤が付着。
3-59	口径 14.0	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 茶褐色 (7.5YR5/5) 断面 明灰褐色 (10YR8/3)			A類
3-60	口径 15.4 高さ 3.9	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 茶褐色 (7.5YR6/6 ~ 10YR7/3) 雲母細粒含む			A類
3-61	口径 16.0 高さ 4.0 底径 7.8	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 橙灰褐色 (5YR7/5)			A類
3-62	口径 18.6	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 茶褐色 (7.5YR6/4)			A類
3-63	口径 18.0 高さ 4.0 底径 8.6	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明灰褐色 (10YR7/2) 雲母細粒含む			A類
3-72	口径 14.0 高さ 3.8	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明灰褐色 (10YR8/3)		外面はオサエのち粗いケズリ。高台は貼り付け。口縁部はナデ調整。内面に細かいヘラミガキを施す。3-72・3-74・3-78・3-80・3-81・3-83・3-84には内面に暗文が認められる。3-82は体部中段以下を欠く。3-83・3-84・3-85は体部中段以上を欠く。	A類
3-73	口径 16.0 高さ 4.3 底径 8.0	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 灰褐色 (10YR6.5/2.5)			A類
3-74	口径 16.1	内面 黒色 外面 茶灰色 (7.5YR6/2) 断面 明茶灰色 (7.5YR8/2) 雲母僅かに含む			A類
3-75	口径 16.2 高さ 4.5 底径 7.6	内面 黒色 外面 橙褐色 (2.5YR5/6)			A類
3-76	口径 16.4	内面 黒色 外面上段 明灰褐色 (10YR8/3) 外面下段 明茶褐色 (7.5YR7/4) 雲母細粒・赤褐色粒含む			A類
3-77	底径 7.0	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 茶灰色 (5YR6/3)			A類
3-78	口径 17.4 高さ 5.0 底径 7.3	内面 黒色 外面 褐灰色 (10YR6/4) 雲母細粒・赤褐色粒含む			A類
3-79	口径 17.3 高さ 4.5 底径 8.0	内面 黒色 外面 灰色 (2.5Y6/2 ~ 7/2)			A類
3-80	口径 19.0 高さ 5.0 底径 8.7	内面 黒色 外面 灰褐色 (10YR7/2 ~ 5/2)			A類
3-81	口径 18.6	内面 金属光沢を帯びた黒色 断面 淡黄灰			A類

出土遺物観察表

			色 (2.5Y8/4) 外面 茶褐色 (7.5YR5/6) 雲母細粒わずかに含む					
	3-82	口径 19.0	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 明茶褐色 (7.5YR5.7/6) 雲母細粒含む			A 類		
	3-83	底径 7.8	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 茶褐色 (7.5YR5.5/7)			A 類、高台内に 線刻「一」。		
	3-84	底径 9.7	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 明茶褐色 (7.5YR7/6 ~ 6.6)			A 類		
	3-85	底径 9.4	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 茶灰色 (7.5YR6/3 ~ 6/4) 雲母細粒含む			A 類		
	3-64	口径 12.1	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 明茶灰色 (7.5YR7/2) 長石粒含む	平坦でやや小さな底部に 断面三角形の高台が付く。 体部は丸味を持って立ち上がり、 口縁部に至る。口縁端部は丸くおさ めるもの (3-64・3-67・3-69・3-70) と、端部直下に沈線をめぐらすもの (3-65・3-68) とがある。3-71 は底部の破片。	外面は粗いケズリ。口縁部はナデのち、 中段以上を粗くヘラミガキを密に施す。 3-65・3-67・3-68・3-69 には暗文が認められる。	A 類		
	3-65	口径 12.5 高さ 4.0 底径 6.6	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 茶褐色 (7.5YR6/4 ~ 5/4) 断面 明茶灰色 (10YR8/2)			A 類		
	3-66	口径 14.0 高さ 4.5 底径 8.0	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 茶褐色 (7.5YR5/4 ~ 5/6) 雲母細粒含む			A 類		
	3-67	口径 14.7	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 明茶褐色 (10YR7/3)					
	3-68	口径 16.0	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 明茶褐色 (7.5YR7/4)					
	3-69	口径 16.4 高さ 4.4 底径 8.0	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 明茶褐色 (10YR8/3)					
	3-70	口径 17.2	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 茶褐色 (7.5YR5/4) 断面 灰褐色 (10YR6/3) 雲母細粒含む					
	3-71	底径 7.6	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 暗灰色 (7.5YR4/2 ~ 4/1) 断面 明茶灰色 (7.5YR7/3)				底部外面に線刻。	
黒色土器 甕	3-86	口径 14.0	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 灰褐色 (10YR6/3)			丸い体部と外傾する口縁部 からなる。口縁端部は丸くおさ める。口縁部はナデ調整。	体部外面はケズリ。体部内 面はケズリのちナデ。口縁部 はナデ調整。	
	3-87	口径 18.6	内面 金属光沢を帯びた 黒色 外面 茶灰色 (7.5YR5/2) 断面 明茶 灰色 (7.5YR7/3)			丸い体部と外反する口縁部 からなる。口縁端部は丸くおさ める。	体部外面はオサエ。体部内 面と口縁部はナデ。口縁部 内面のみ粗いヘラミガキを 施す。	外面に煤が付着。
	3-88	口径 15.0	内面及び口縁部外面 金属光沢を帯びた黒色 体部外面 灰褐色 (10YR 6/2 ~ 6/3)	丸味を持つ体部と外反する 口縁部からなる。口縁部は 波打ちながら立ち上がり、 上位で外反する。端部は小 さく上方につまみ上げられ る。	体部外面はケズリ。体部内 面は横方向のハケメ。口縁 部外面はナデのちわずかに ヘラミガキを密に施す。	外面に煤が付着。		

	3-89	口径 17.0	内面及び口縁部外面 黒色 体部外面 暗灰色 (10YR 4/1)	体部は丸味を持ち、口縁部は立ち上がったのち外反する。端部は丸くおさめる。	体部外面はケズリのち粗いミガキ。頸部内面はカキ取り。他の部位はナデ調整。	
黒色土器鉢	3-90	口径 13.5	内面及び口縁部外面 金属光沢を帯びた黒色 体部外面 橙灰褐色 (5YR6/4 ~ 10YR7/2)	体部は外上方へ広がり、口縁部は内湾する。口縁端部は丸くおさめる。いわゆる鉄鉢型。	体部外面はオサエのち粗いケズリ。口縁部外面と内面にヘラミガキを密に施す。	
	3-91	口径 8.6	体部外面下半 明灰褐色 (10YR7/3) 他の部位 金属光沢を帯びた黒色	外傾して立ち上がる体部は中段より直立し、外反する小さな口縁が付く。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面中段以下はオサエ。体部上段より口縁部にかけてナデ調整。内面に粗いヘラミガキを密に施す。	
	3-92	口径 13.6	内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 橙褐色 (2.5YR6/4)	体部は丸味を持ち、口縁端部は内傾する面をなし、上端が突出する。	外面は粗いヘラミガキ。内面はヘラミガキを密に施す。	
	3-93	口径 9.0	内面 黒色 外面 灰色 (2.5Y6/2 ~ 7/2)	体部は深く、口縁端部は外上方へ小さくつまみ出す。	体部外面はケズリ。口縁部外面はナデのち粗いミガキ。内面にはヘラミガキを密に施す。	
	3-94	口径 21.0	内面及び体部外面中段以上 金属光沢を帯びた黒色 以下 茶灰色 (7.5YR4/3 ~ 5/3)	底部は欠く。体部は中位がわずかに膨らむ筒形を呈する。口縁端部はわずかに内傾する面をなし、先端が小さく突出する。	全面にヘラミガキを密に施す。	
黒色土器器形不明脚部	3-95	残高 13.2	体部内面 黒色	外下方に張り出したのち直立する。下端部は外へ突出し、切り込みを入れて獣脚とする。3-95には体部がわずかに残る。	棒状の粘土の外面を下方に向けてケズリ 3-95は11面の、3-96は9面の面取りを行う。3-95体部内面はヘラミガキを密に施す。	
	3-96		茶灰色 (7.5YR4/3 ~ 5/3) 密			
黒色土器器形不明	3-97		体部内面 金属光沢を帯びた黒色 外面 明茶灰色 (7.5YR7/2 ~ 8/2) 細砂粒含む	断面長方形を呈する把手と体部の破片。	把手は断面を長方形にヘラケズリしたのち、隅を小さく面取りする。体部内面はヘラミガキを密に施す。	
須恵器杯蓋	3-98	口径 14.2	明灰色 (10PB8/1) 密 白色細粒含む	天井部は平坦で、口縁部は屈曲し端部は下方へ突出する。天井部中心を欠く。	天井部内面と口縁部はナデ調整。天井部外面はヘラオコシのちナデ調整。	
須恵器皿A	3-99	口径 12.6 高さ 2.0	表面 灰色 (5PB6/1 ~ 7/1) 断面 明灰色 (10P7/1 ~ 2) やや粗	底部は平坦で、口縁部は丸味を持って立ち上がり、上段で外反する。端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	
須恵器杯B	3-100	底径 8.2	明灰色 (5Y8/1 ~ 8.5/1) やや軟質	平坦な底部に断面方形の高台が付く。体部は外上方に直線的に開く。口縁部は欠く。	底部外面はヘラオコシのちナデ調整。他の部位はナデ調整。	
	3-101	底径 10.4	暗灰色 (7.5PB4/1)			
須恵器杯A	3-102	口径 12.8 高さ 3.3 底径 7.2	灰色 (2.5PB7/1)	底部は平坦で体部は外上方へ開く。口縁部は厚く端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。	体部外面に煤が付着。
	3-103	口径 13.6 高さ 3.4 底径 8.0	表面 灰色 (10B5/1 ~ 6/1) 断面 明灰色 (10B7/1)	底部は平らで体部はやや丸味を持って立ち上がる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。		
須恵器杯A	3-104	口径 16.8	明灰色 (10YR7/1 ~ 8/1) やや軟質	体部はまっすぐ外上方へ立ち上がり深い。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。底部を欠く。	ナデ調整。	

出土遺物観察表

須恵器 椀	3-105	口径 18.8	明灰色 (10B7.5/1 ~ 5Y8/1)	底部は円盤状の高台。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。外面にロクロ目を残す。	底部外面は糸切りのち、軽くナデ調整。他の部位はナデ調整。	
	3-106	口径 16.0 底径 7.0	明灰色 (10B7/1)			
	3-107	口径 16.3	明灰色 (5P7/1)			
	3-108	口径 15.5 高さ 5.2 底径 5.7	灰白色 (10YR9/1 ~ 9/2) 軟質	底部は円盤状の高台。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反する。端部は丸くおさめる。		
須恵器 杯 A	3-109	口径 13.8 高さ 3.6	明灰色 (10PB6/1 ~ 7/1)	底部は平らで、体部はやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラオコシのちナデ調整。他の部位はナデ調整。	
	3-110	口径 13.8 高さ 2.9	灰色 (10B6/1) 黒色細粒含む			
須恵器 耳皿	3-111	底径 4.6	明灰色 (5Y8/1)	底部・口縁部下段の破片。底部は円盤状の高台 (0A)。口縁部は低く外方へ開く。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
須恵器 皿	3-112	口径 13.4	明灰色 (5BG7/1 ~ 8/1) やや粗	体部は外上方へ低く開きロクロ目を強く残す。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部は欠く。	粗いナデ調整。	
須恵器 椀	3-113	口径 14.6 高さ 4.8 底径 7.2	灰色 (5BG6/1 ~ 10BG5/1)	底部は円盤状の高台 (0A)。体部はやや丸味を持って外上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面はヘラケズリ。他の部位はナデ調整。	胎土・手法が 3-112 と似る。
	3-114	口径 15.7 高さ 5.1 底径 7.0	灰色 (10B6/1)	底部は円盤状の高台 (0A)。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外上方へ尖り気味におさめる。厚くつくられる。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	3-115	口径 15.4	灰色 (2.5PB7/2)	外反する椀の体部・口縁部の破片。口縁端部は丸くおさめる。	体部外面中段以下をケズリ。口縁部外面はナデ、内面は丁寧なミガキを施す。	
	3-116	底径 4.6	表面 明灰色 (2.5Y8/1) 断面 灰色 (5Y7.5/1)	底部は円盤状の高台 (0A)。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。外面をケズリのちミガキ。内面はミガキを密に施す。	
	3-117	底径 6.4	明灰色 (5Y8/1)			
	3-118	底径 6.8	灰色 (10BG7/1)			
須恵器 椀	3-119	底径 7.1	明灰色 (10YR7.5/1)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は外上方へ立ち上がり、中段以上を欠く。緑釉陶器に近似する器形。	高台は削り出し。外面はケズリ。内面はミガキ。3-120 は外面のケズリが粗い。	
	3-120	底径 6.5	灰色 (10BG7/1)			
	3-121	底径 7.1	明灰色 (10B8.5/1)			
須恵器 壺	3-122	底径 3.5 最大径 5.3	灰色 (10B5/1 ~ 6/1)	平底で体部は卵形を呈する。内面にロクロ目を強く残す。口頸部は欠く。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	3-124	底径 3.8 最大径 6.0	表面 灰色 (10B6/1) 断面 灰色 (10PB6/1 ~ 7/1)			
	3-123	口径 4.0	灰色 (5B5/1)	外反する口頸部の破片。口縁端部は垂直な面をなし上・下端が突出し帯状をなす。	ナデ調整。	
	3-125	口径 8.0	表面灰色 (10B6/2) 断面明灰色 (10B7/1)	頸部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で大きく外反し広がる。端部は垂	ナデ調整。	
	3-126		表面明灰色 (10RP7/1)			

			断面 明灰色 (10B7/1) 黒色粒含む	直な面をなし、上端が上方へ突出する。3-126 は口縁端部を欠く。		
	3-127	底径 12.8	明灰色 (5B7.5/1)	大きい平底に筒形の体部が付く。体部中段以上は欠く。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	3-128	底径 7.8	表面 灰色 (5PB6/1.5) 断面 灰色 (5PB7/1)	底部は平坦で体部は外上方に立ち上がる。体部中段以上を欠く。内面にロクロ目が強く残る。	底部外面はヘラオコシのもの (3-129・3-130) と、糸切り未調整のもの (3-128) がある。体部外面は3-128 がナデ調整。3-129 は粗いケズリ。3-130 はケズリのちナデ調整を行う。	
	3-129	底径 9.2	明灰色 (10B7.5/1) 粗 φ 1 ~ 3mm の白色砂粒含む			
	3-130	底径 12.2	灰色 (2.5PB6/2) やや粗 白色細砂粒含む			
	3-131	口径 4.0	灰色 (5Y7/1)	平坦な底部に断面方形の高台が付く。体部は丸味を持って立ち上がるもの (3-131・3-132・3-133) と、外上方へ直線的に立ち上がるもの (3-134) がある。いずれも体部中段以上を欠く。	底部外面は糸切り未調整。体部外面はケズリのちナデ。内面はナデ調整。	
	3-132	底径 8.0	灰色 (5PB6/1)		底部外面はヘラオコシ。体部外面はケズリのちナデ。内面はナデ調整。	
	3-133	底径 8.0	表面 暗灰色 (2.5PB4/2) 断面 灰桃色 (7.5RP4/2)			
	3-134	底径 14.0	灰色 (5PB6/1)			
	3-347	底径 10.2 最大径 17.5	外面 灰色 (10B6/1) 内面・断面 橙褐色 (2.5YR6/4 ~ 7.5YR6/2) 粗 やや軟質	平坦な底部に断面方形の輪高台が付く。体部は卵形を呈し、内外面共にロクロ目を強く残す。口頸部を欠く。	底部外面はヘラオコシ。他の部位はナデ調整。成形・調整が粗い	
須恵器 鉢	3-135	口径 24.8 高さ 9.0 底径 10.0	外面 灰色 (10B5/1) 内面・断面 灰色 (5Y7/1)	平底で体部は外上方へ向け大きく開く。口縁端部は水平な面をなし、外方へ突出する。	底部外面は表面が荒れ観察不能。他の部位はナデ調整。	
	3-138	口径 16.6	灰色 (2.5PB6/2)	体部は外上方へ立ち上がり上位で内方へ屈曲し、外傾する短い口縁に至る。口縁端部は外傾する面をなす。	ナデ調整。	
	3-136	口径 18.4	明灰色 (5B7/1)	体部は外上方へ広がり、口縁部でわずかに立ち上がる。口縁端部は中央部の凹む外傾する面をなし、下端は外方へ張り出す。	ナデ調整。体部にはロクロ目を残す。	
	3-139	口径 16.4	明灰色 (10PB7/1)	体部は外上方へ広がり、口縁部でわずかに屈曲する。口縁端部は外方にやや肥厚し、上端を丸くおさめる。		
	3-137	口径 19.6	明灰色 (2.5PB8.5/1)	体部は外上方へ立ち上がり上位で内方へ屈曲し、外傾する短い口縁に至る。口縁端部は肥厚し玉縁状を呈する。		
須恵器 甕	3-140	口径 14.5	表面 明灰色 (10B6/1 ~ 7/1) 断面 暗灰色 (2.5PB5/2) 芯部 灰色 (10RP5/1)	体部は内傾し頸部で「く」の字状に折れ曲がる。口縁部は外反し、端部は外傾する面をなし外方へ突出する。器壁は薄い。	ナデ調整。体部外面はタタキ目をナデ消す。	
	3-141	口径 20.4	灰白色 (5PB9/1) やや密	肩部は内傾し、口縁部は外上方へまっすぐ広が	体部外面は縦方向の平行タタキ。他の部位はナデ	

出土遺物観察表

				る。口縁端部は丸くおさめる。	調整。	
	3-142	口径 17.0	灰色 (5Y7/1)	内傾する体部に外反する口縁が付く。口縁端部は外傾する面をなし3-142は上端が、3-144は下端が突出する。	3-144の体部外面は縦方向の平行タタキ。3-142は横方向の平行タタキ。他の部位はナデ調整。3-144は口縁部内面に縦に3本のへう記号を有する。	
	3-144	口径 21.1	表面 明灰色 (10B7/1) 外面はツヤがある 断面 明灰色 (5P8/1)			
	3-143	口径 24.2	断面 暗黄灰色 (7.5Y5/4) 内面 暗灰色 (2.5PB5/2) 外面 灰色 (5Y5/1)	口頸部は外反しながら高く立ち上がり、口縁部で大きく外反する。端部は中央部のやや凹んだ外傾する面をなし、上・下端が突出し帯状をなす。	ナデ調整。	
	3-145	口径 49.6	表面 灰色 (2.5PB6/3) 断面 灰桃色 (10RP5/2) やや密	口縁部は外反し、端部は外下方へ折れ曲がり幅広の縁帯をなす。	頸部外面は縦方向の平行タタキをナデ消す。他の部位はナデ調整。	図
緑釉陶器 耳皿	3-146	底径 5.3	明灰色 (5Y8/1 ~ 7/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (5GY6/4)	底部は円盤状の高台 (0A)。口縁部の相対する二方が折れ曲がり端部は波打つ。	底部外面は糸切り未調整。口縁端部は指オサエ。他の部位はナデ調整。底部外面以外に施釉する。	
	3-147	底径 5.4	明灰色 (7.5Y8/1) 硬質 釉 灰緑色 (2.5GY6/2 ~ 6/4)			
緑釉陶器 椀	3-148	口径 8.5 高さ 3.1 底径 4.3	灰色 (10Y7.5/1) 密 硬質 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/4)	底部は円盤状の高台 (0A)。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は小さく外反する。3-150は外反しない。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。底部外面以外に薄く施釉する。	
	3-149	口径 9.1 高さ 3.0 底径 4.7	灰色 (10B6/1) 密 硬質 釉 暗黄緑色 (5GY4/4)			
	3-150	口径 9.6 高さ 2.8 底径 4.5	明褐色 (10YR7.5/5) 密 釉 黄灰色 (7.5Y6/4)			
	3-151	口径 9.8 高さ 3.0 底径 3.9	灰色 (5PB6/2) 密 硬質 釉 暗緑灰色 (5GY4.5/2)			
緑釉陶器 皿	3-152	口径 14.6	明灰色 (5Y8/3) 密 軟質 釉 黄灰色 (2.5Y6.5/4) 変色する	体部は丸味を持って低く開き、口縁部は外反する。口縁端部は丸くおさめる。底部を欠く。	体部外面中段以下をケズリ。他の部位をミガキ。残存部全釉。	
	3-153	口径 13.2	灰色 (10B6.5/1) 密 硬質 釉 灰緑色 (5GY6/2)		残存部全面にミガキを行ったのち施釉する。	
緑釉陶器 椀	3-154	口径 12.8 高さ 4.1 底径 5.8	明灰色 (2.5Y8.5/3) 密 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/4)	底部は円盤状の高台 (I A)。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。3-155は口縁部がやや外反する。	体部外面中段以下をケズリ。他の部位をミガキのち底部外面以外を施釉する。高台は削り出し。外面下半部をケズリ。他の部位をミガキのち全面に施釉する。	口縁端部に煤が付着。
	3-155	口径 19.0 高さ 6.1 底径 9.6	淡黄白色 (10YR9/2) 密 やや軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7/5)			
緑釉陶器 皿	3-156	口径 15.0 高さ 3.1 底径 6.2	灰白色 (10YR9/1) 密 軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7/4)	底部は蛇の目高台 (I Ba)。体部は浅く、3-156は口縁部が外反し3-157は外反せず口縁の内側がわずかに凹む。端部は丸くおさめる。	高台は削り出し。全面にミガキを施し全面に施釉をする。	
	3-157	口径 15.0 高さ 2.9 底部 6.0	灰色 (10B6/1 ~ 10R5/1) 密 硬質 釉 暗緑灰色 (5GY3/2)		外面下半をケズリ。外面上半はナデ調整。高台は削り出し。内面をミガキ、全面に施釉する。	
緑釉陶器 椀	3-158	口径 13.6	灰色 (10YR6/1 ~ 10Y6/	底部は蛇の目高台 (I B	外面下半はケズリ。内面	

		高さ 4.8 底径 6.5	1) 密 釉 暗黄灰色 (10Y4/2 ~ 7.5Y5/4)	a). 体部は丸味を持ち、 口縁端部は丸くおさめる。 3-159 の口縁部はやや外 反する。3-158 は輪花椀。	をミガキ。底部外面以外 を施釉する。高台は削り 出し。輪花は口縁部をへ らで外方よりおさえる。	
	3-159	口径 19.3 高さ 6.2 底径 8.7	明灰色 (2.5Y8/3) やや粗 やや軟質 釉 淡黄灰色 (5Y8/4)	3-211 は体部中段以上を欠 く。	外面はケズリ。口縁部外 面より体部内面中段まで をナデ。底部内面をミガ キ。高台は削り出し。全 面に施釉する。	
	3-211	底径 6.3	灰色 (5PB7.5/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (2.5GY7 /4)		外面はケズリ。内面は丁 寧なミガキ。高台底部以 外を粗く施釉する。高台 は削り出し。	外面底部に墨 書。図版 25
緑釉陶器 皿	3-160	口径 13.0 高さ 2.4 底径 6.0	灰色 (N7/~ 10B7/1) 密 釉 灰色 (10Y6/2)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は浅く、口 縁端部は丸くおさめる。3-	外面下半をケズリ。口縁 部外面はナデ。内面は丁 寧なミガキを施し、全面 に施釉する。高台は削り 出し。3-161 は底部の施釉 が粗い。	
	3-161	口径 14.6 高さ 2.7 底径 6.6	灰色 (10Y7/1) やや粗 釉 灰色 (10Y7/2)	161 は口縁部が外反する。		
	3-162	口径 13.8 高さ 2.7 底径 6.6	明灰色 (10B8/1) やや密 釉 灰緑色 (10GY5.5/2)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は浅く開き 口縁部は外反する。体部 と口縁部との境は、外面 では鈍い稜をつくり、内 面では凹線をなす。口縁 部は丸くおさめる。3-163	いずれも削り出し高台で、 外面は底部より体部上段 までをケズリ。口縁部は ナデ。内面にミガキを施 すもの (3-162・3-163・ 3-164) と、内外面共にミ ガキを施すもの (3-165) がある。3-163 の輪花 は外方から指でおさえ る。全釉のもの (3-162・ 3-165) と底部以外に施釉 するもの (3-163・3-164) とがある。	
	3-163	口径 14.1 高さ 3.0 底径 6.4	明灰色 (10B7/1) 密 釉 灰緑色 (2.5GY5/3)	は輪花皿。		
	3-164	口径 14.2 高さ 3.1 底径 6.0	明灰色 (5Y8/1) 底部 明灰褐色 (10YR8/3) 釉 淡黄緑灰色 (2.5GY 8/5)			
	3-165	口径 14.5 高さ 2.9 底径 6.4	明灰色 (2.5Y8/3) 釉 黄灰色 (7.5Y6/4)			
	3-166	口径 15.0 高さ 3.0 底径 6.9	灰色 (7.5Y7/1) 硬質 釉 黄灰色 (7.5Y6/4)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は浅く、口 縁部は外上方へ開き、端 部は丸くおさめる。内面 底部に凹線をめぐらす。	体部外面中段以下をケズ リ。以上をナデ。内面 にはミガキを粗く施す。	
緑釉陶器 椀	3-167	口径 13.5 高さ 4.3 底径 6.3	灰色 (7.5PB5.5/3) 硬質 釉 暗緑灰色 (5GY4/2)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は低く立ち 上がり、中段でわずかに 内方へ折れ稜をつくる。 口縁部はわずかに外反し、 端部は丸くおさめる。	外面、稜以下はケズリ。 3-170 は口縁部内外面共 ナデ、底部内面をミガキ。 3-167 は口縁部外面を粗い ミガキ。内面はミガキを 密に施す。高台は削り出 し。いずれも全面に施釉 するが高台内の施釉は粗 い。	底部外面にメア トが認められ る。
	3-170	口径 17.8 高さ 5.7 底径 8.0	明灰色 (10B7/1) 釉 暗黄灰色 (7.5Y5/4)			
	3-168	口径 13.0 高さ 4.5 底径 6.4	灰色 (5PB6/2) 密 釉 暗黄緑灰色 (2.5GY 4.5/4)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。3-169 は底部が厚 い。体部は内湾気味に立 ち上がり、口縁部はわず かに外反する。端部は丸 くおさめる。	底部外面より体部外面中 段までをケズリ。口縁部 外面はナデのち粗いミガ キ。内面は丁寧なミガキ。 高台は削り出し。底部外 面を除き施釉する。	
	3-169	口径 17.1 高さ 5.8 底径 8.2	灰色 (5Y7/1) 釉 黄灰色 (5Y7/4 ~ 10Y 7/4)		底部外面以外にミガキを 施すが外面は粗い。高台 は削り出し。全面施釉。	
	3-171	口径 21.0 高さ 7.2 底径 8.2	明灰色 (2.5Y8.5/2) 釉 黄灰色 (5Y6.5/5)		底部外面より体部外面中 段までをケズリ。体部中 段以上は内外面共にナデ 調整。底部内面に単位の	

出土遺物観察表

						大きいミガキを密に施す。高台は削り出し。全面施釉。	
緑釉陶器 皿	3-172	口径 14.0 高さ 3.0 底径 6.8	明灰色 (10B7.5/1.5) 釉 暗黄緑色 (5GY5.5/5)	平坦な底部に断面方形の高台 (II Bb3) が付く。口縁部は稜を持って立ち上がり、上段で小さく外反する。端部は丸くおさめる。	底部外面より口縁部外面上段までをケズリ高台は貼り付け。口縁部はナデ。内面はミガキを密に施す。全面施釉。		内外面にメアトが認められる。
	3-173	口径 14.3 高さ 2.8 底径 7.2	明灰色 (10PB7/1) 硬質 釉 緑黄緑色 (7.5GY6/4)	浅い体部に断面方形の輪高台 (II Bb3) が付く。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸くおさめる。底部内面には凹線をめぐらす。3-175は輪花皿。	体部外面中段より底部にかけてケズリ。外面より内面にかけてはナデのちやや粗いミガキを施す。高台は貼り付け。3-175はケズリの上よりナデ調整をし、輪花は口縁部の五方を外方からへらでオサエる。全面施釉。		底部を欠く。
	3-174	口径 14.3	灰白色 (2.5Y9/1) 釉 黄緑灰色 (2.5GY7/4)				
	3-175	口径 14.8 高さ 2.7 底径 7.7	明灰色 (5Y8/2) やや軟質 釉 暗緑黄色 (7.5GY5/4)				
	3-176	口径 15.7 高さ 2.8 底径 8.0	明灰色 (2.5Y8.5/2) 硬質 釉 暗黄緑灰色 (2.5GY5/4)				
	3-177	口径 16.4	明灰色 (10PB8/1) 硬質 釉 暗黄緑灰色 (2.5GY5/4 ~ 6/4)	体部は浅く口縁部上段で僅かに屈曲し外反する。口縁端部は丸くおさめる。高台を欠く。	外面はケズリ。全面にミガキを密に施す。全面施釉。		内外面にメアトが認められる。
緑釉陶器 椀	3-178	口径 13.7 高さ 3.9 底径 5.2	明灰色 (5Y8/2) やや軟質 釉 黄緑灰色 (2.5GY7/4)	丸味を持った体部に断面方形の高台 (II Bb3) が付く。底部内面には凹線をめぐらす。3-179・3-183は輪花皿。3-182の高台はII Bd4。	体部外面中段以下をケズリのち軽いナデ調整。高台は貼り付け。体部外面中段以上に粗いミガキ。内面にはミガキを密に施す。3-181・3-182はケズリのちナデ調整を加えない。3-183は口縁部までケズリがおよぶ。3-179・3-183の輪花は口縁部をへらで外方よりオサエる。全面施釉。		高台内にへら記号「一」。
	3-179	口径 13.8 高さ 4.7 底径 6.6	明灰色 (7.5Y8/1) 釉 黄緑灰色 (5GY7/4 ~ 2.5GY5/3)				
	3-180	口径 13.9 高さ 5.0 底径 7.0	明灰色 (10YR7/2 ~ 7.5PB8.5/2) 釉 緑黄緑色 (7.5GY7/4)				
	3-181	口径 14.4 高さ 4.7 底径 7.2	灰色 (10Y7/1) やや軟質 釉 明灰緑色 (2.5GY7/2)				
	3-182	底径 7.8	明灰色 (5Y8/1 ~ 10B7/1) 硬質 釉 灰緑色 (2.5GY6/2 ~ 6/4)				口縁部を欠く。
	3-183	口径 18.5	灰色 (5Y7/1) 硬質 釉 暗黄緑色 (5GY5/4)				底部を欠く。
	3-184	底径 8.0	明灰色 (7.5Y8/1 ~ 8/3) やや軟質 釉 黄緑灰色 (5GY7/4)	平らな底部に断面長方形の輪高台 (II Bb3) が付き、体部は内湾し立ち上がる。口縁端部は欠く。	高台は貼り付け。全面に幅広いミガキを密に施す。全面施釉。		
緑釉陶器 段皿	3-185	口径 14.5	明灰色 (10Y8/1 ~ 5P8.5/1) 硬質 釉 灰緑色 (5GY5/2)	狭縁の段皿。口縁部中段に段をつくり、内外面共に段がみられる。	内外面共ミガキ。残存部全釉。		口縁部の破片。
	3-186	口径 17.0	明灰色 (5P8/1) 硬質 釉 暗黄緑色 (2.5GY5.5/4)	広縁の段皿。内面に段をつくる。外面は段をなさない。3-187底部には断面方形の高台 (II Bb3) が付き、3-186は口縁部	高台は貼り付け。3-186は外面をケズリ、内面にはミガキを密に施す。3-187は全面にミガキを密に施す。全面施釉。		底部を欠く。
	3-187	底径 8.8	明灰色 (5RP7/1) 硬質 白色粒を含む				口縁部を欠く。

緑釉陶器 椀	3-188	底径 8.4	釉 灰色 (5Y6/2) 明灰色 (7.5Y8/1) やや軟質 釉 黄灰色 (5Y7/4)	内面に陰刻花文を施す。 高台の付いた底部の破片。 高台は小さく断面は丸味 をもった方形を呈する (II Bb2)。3-189 の底部は厚い。	高台は貼り付け。外面は ナデ。内面はミガキを密 に施したのち、全面に施 釉する。	底部外面にメア トが認められ る。
	3-189	底径 7.5	灰色 (7.5Y7/1) 硬質 釉 黄灰色 (10Y7/4)		高台は貼り付け。全面に ミガキを丁寧に施す。全 面施釉。	底部内外面にメ アトが認められ る。
緑釉陶器 皿	3-190	口径 8.2	灰白色 (10YR9/1) やや軟質 釉 暗黄緑色 (5GY5/4)	平らな底部に下端のやや 凹む断面方形の輪高台 (II Bb3) が付き、体部は外上 方に大きく開く。内面底 部に凹線をめぐらす。	高台は貼り付け。体部外 面はケズリ。内面はナデ 調整。全面施釉。	口縁端部を欠 く。
緑釉陶器 椀	3-191	口径 19.9 高さ 6.7 底径 9.4	明茶褐色 (7.5YR7/4) 硬質 釉 暗黄緑色 (5GY5/4 ～ 7.5Y5/6)	平らな底部に断面方形 のやや長めの輪高台 (II Bb3) が付く。3-192 の高 台端面は中央部が凹む。 体部は丸味を持って立ち 上がり外上方へ広がる。 口縁端部は丸くおさめる。 内面底部には凹線をめぐ らす。3-192 は体部中段以 上を欠く。	高台は貼り付け。底部は ナデ調整。体部外面はへ ラケズリのちナデ調整。 口縁部外面は粗いミガキ を、内面には丁寧にミガ キを施す。全面施釉。	底部内外面にメ アトが認められ る。
	3-192	底径 9.8	明灰色 (7.5YR7/1) やや軟質 釉 暗黄緑色 (5GY5/4)			
緑釉陶器 唾壺	3-193	底径 7.5 最大径 10.5	明灰色 (10Y8/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (2.5GY6 /6)	平坦で厚い底部に幅広で 低い輪高台 (II Ba) が付く。 体部は扁平な球形を呈し、 頸部には口縁部と体部と の接合痕が認められる。	外面は丁寧にミガキ。全 面に施釉する。	底部外面にメア トが認められ る。
緑釉陶器 三足盤	3-194		明灰色 (N8/1) やや軟質 釉 黄灰色 (7.5Y7/4)	三足盤脚部・底部の一部 の破片。	脚部はへらで面取りし、 獸脚とする。体部は内外 面共ミガキを施す。全面 施釉。	
緑釉陶器 香炉	3-195		明灰色 (7.5Y8.5/1) やや軟質	香炉蓋の破片。天井部に 陰刻花文を施し花卉の間 に三日月形の透かしをあ ける。	両面施釉。	同一個体か？
	3-197		釉 黄緑灰色 (2.5GY6/ 6)			
	3-196					
緑釉陶器 椀	3-202	口径 21.0 高さ 7.4 底径 8.8	灰色 (7.5Y6/1) 硬質 釉 灰緑色 (2.5GY5/2 ～ 10Y6/4)	底部には断面長方形の輪 高台 (II Bb3) が付く。体 部は内湾し、口縁端部は 外上方に小さく肥厚する。 内面に陰刻花文を有する。 底部の花文は二重で、四 弁の花文のそれぞれの弁 の外側に三弁の花文をお く。口縁部には半切りの 三弁花文を施し、いずれ も蕊 (しべ) は二本線で あらかず。3-203 は高台を 欠く。3-202 以外は底部の 破片。	全面にミガキを施し、全 面に施釉する。高台は貼 り付け、3-199 の高台内は ナデ調整。	
	3-199		明灰色 (5PB8/1) 硬質 釉 黄緑灰色 (5GY6/4)			
	3-203		灰白色 (7.5Y9/1) やや軟質 釉 外面 黄緑灰色 (5G Y7/4) 内面 黄灰色 (5 Y6/4)			
	3-204	底径 9.0	明灰色 (7.5Y8/1) やや軟質 釉 黄灰色 (10Y7/4)			
	3-198	底径 6.6	灰白色 (5P9/1) 釉 灰色 (10Y7/1)	端部がやや丸味を持つ輪 高台 (II Bb2) の付く底部 の破片。内面底部中央に 単弁四葉の花文を持つ。		
	3-200	底径 6.6	灰白色 (5P9/1) 硬質 釉 灰緑色 (2.5GY6/2)	蛇の目高台の付く (II Ba) 底部の破片。3-201 の高台 端面は内傾し、中央		
	3-201	底径 7.5	明灰色 (5PB8/1)			

出土遺物観察表

			釉 暗黄色 (7.5Y6.5/7)	部がやや凹む。内面底部には単弁の花文を持ち。蕊は一本の曲線によってあらかず。			
緑釉陶器 椀	3-205		明灰色 (2.5Y8/3) やや軟質 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/4)	口縁部の破片。内面に陰刻花文を持つ。	体部外面上段以下をケズリ。口縁部外面はナデ。内面に粗いミガキを施す。残存部全釉。		
	3-206		灰色 (5B6/1) 釉 黄灰色 (5Y6/4 ~ 10Y7/2)			残存部全面ミガキ。内外面共施釉する。	
	3-207	底径 5.8	灰色 (10BG5/1) 硬質 釉 灰緑色 (5GY5/2)	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。3-209 は内面底部に単弁四葉の陰刻花文を有する。3-207・3-208 は複弁の陰刻花文を有する。	高台は削り出し。外面ケズリ。内面ミガキ。全面に施釉。		
	3-208		暗灰色 (10BG4/1) 硬質 釉 暗緑灰色 (5GY4/2)				
	3-209	底径 7.7	灰色 (N6/) 硬質 白色細粒含む 釉 灰緑色 (2.5GY5/2)				
緑釉陶器 蓋	3-210		明灰色 (7.5YR7/1) やや軟質 釉 黄灰色 (2.5YR6/4)	天井部はなだらかに外下方へ広がる。口縁部は屈曲し端部は外下方に突出する。天井部外面から口縁部にかけて陰刻花文を施す。	全面ミガキ。全面施釉。	写真のみ。挿図53	
灰釉陶器 耳皿	3-212	底径 4.8	灰白色 (10Y9/1) 釉 灰色 (7.5Y6/3)	口縁部の相対する二方を折り曲げ耳皿とする。底部は平坦なもの (0C) (3-212) と、断面方形の小さな輪高台 (II Bb1) を付けるもの (3-213) とがある。	3-212 の底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。3-213 は貼り付け高台。いずれも内面のみ刷毛塗り施釉。	口縁部上半を欠く。	
	3-213		明灰色 (10PB8/1) 密 釉 灰色				
灰釉陶器 皿	3-214	口径 15.0 高さ 2.9 底部 7.7	明灰色 (5P8.5/1) 密 釉 黄灰色 (7.5YR7/4)	浅い体部に断面が丸味を持った方形の低い輪高台 (II Bb1) が付く。口縁部は上段でわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	外面下半部をケズリ。高台は貼り付け。口縁部外面及び内面をナデ。口縁部内面に刷毛塗り施釉。	底部内面が磨滅。	
	3-215	口径 13.9 高さ 3.0	明灰色 (5PB8.5/1) やや粗 釉 黄灰色 (7.5Y7/4)	わずかに内湾する浅い体部に輪高台が付く。高台は高く、中位で内傾し、端部を丸くおさめる (II Bb2)。2-216 は底部を欠く。	3-215 は外面をケズリ。高台は貼り付け。内面はナデ調整をし、口縁部内面に刷毛塗り施釉する。3-216 はナデ調整で口縁部内外面に漬け掛け施釉する。		
	3-216	口径 16.2	明灰色 (5PB8.5/1) やや密 釉 黄灰色 (10Y8/4)				
	3-217	口径 13.8 高さ 3.3 底径 6.4	明灰色 (10PB/8/1) 密 釉 黄灰色・淡黄灰色 (7.5Y7/4・8/4) 斑状を呈する	浅い体部に輪高台が付く。口縁部上段は外反し、端部は丸くおさめる。3-220 は端部が小さく肥厚する。高台は外下方へ張り出し、端部外面を丸く内方へおさめる (II Bd2)。3-224 は底部を欠く。	高台は貼り付け。外面下半部をケズリ。他の部位はナデ調整ののち、口縁部内外面に刷毛塗り施釉する。	底部内面が磨滅。	
	3-218	口径 14.4 高さ 3.3 底径 7.5	明灰色 (5Y8/1) 密 釉 黄灰色 (7.5Y7/4) 失透する				
	3-219	口径 14.7 高さ 3.0 底径 7.2	灰白色 (10Y9/1) 密 釉 明灰色 (10Y8/2) 失透する				
	3-220	口径 13.8 高さ 3.3 底径 6.4	明灰色 (5Y8/1.5) やや密 釉 発色せず				
	3-221	口径 15.4 高さ 2.9 底径 7.4	灰白色 (5P9/1) 密 釉 黄灰色 (10Y7/3 ~ 7/4)				内面は磨滅し、底部内外面に墨が付着。
3-222	口径 16.3	灰白色 (10Y8.5/1 ~ 5PB					

		高さ 3.6 底径 8.0	9/1) やや密 釉 発色せず					
	3-224	口径 19.0	明灰色 (5Y8/1.5) やや密 釉 灰色 (10Y7/3)					
	3-223	口径 16.2 高さ 3.2 底径 7.3	明灰色 (5PB8.5/1) 密 釉 灰色 (5GY7/1.5)	高台は断面三角形を呈し (II Be1)、端面を丸くおさめる。低く広がる体部は	高台は貼り付け。内面はナデ調整。外面はケズリ。3-223は口縁部内外面に漬			
	3-225	口径 14.0 高さ 2.7 底径 7.0	明灰色 (10PB8.5/1.5) やや密 釉 明灰緑色 (2.5GY 7.5/3)	口縁部上段でわずかに内側へ折れ曲がる。	掛け施釉。3-225は口縁部内面のみ刷毛塗り施釉。			
	3-226	底径 6.6	明灰色 (5Y8/1) 密 釉 黄灰色 (7.5Y6/5)	蛇の目高台 (II Ba) の付く底部の破片。高台端面は内傾し中央部がやや凹む。	高台は貼り付け。外面はケズリ。内面はナデ調整。施釉部位不明。			
灰釉陶器 段皿	3-227	口径 19.0 高さ 3.6 底径 8.6	明灰色 (5PB8.5/1) やや密 釉 明灰緑色 (2.5GY 8.5/2 ~ 7/2)	広縁の段皿。外面は段をなさない。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。高台は端部外面を丸く内方へおさめる (II Bd2)。	全面ナデ調整。高台は貼り付け。段以上の内外面及び底部内面中央部に刷毛塗り施釉する。			
灰釉陶器 椀	3-228	底径 4.7	灰色 (5PB7/1) 密 釉 灰緑色 (2.5GY6/2)	丸みを持って立ち上がる体部に輪高台が付く。口端部は上段で小さく外反し、端部は丸くおさめる。高台は外下方へ張り出し、端部外面を丸く内方へおさめる。3-231・3-232の高台はII Bd1。3-236・3-256はII Bd2。3-233はII Bd3。	全面にナデ調整を行うもの (3-228・3-231・3-232・3-235・3-236・3-256) と、体部外面中段以下をケズリのもの (3-229・3-230・3-233・3-234・3-237) とがある。いずれも口縁部の内外面を施釉するが、施釉方法は漬掛けのもの (3-230・3-234) と、刷毛塗りのものがある。いずれも貼り付け高台。	口縁部を欠く。		
	3-229	口径 11.0 高さ 3.4 底径 5.7	明灰色 (5RP8.5/1) 黒色細粒含む 釉 灰色 (5Y7/1)					
	3-230	口径 13.4 高さ 4.4 底径 7.2	灰白色 (5PB9/1) 白色細粒含む 釉 灰色 (10Y6/1 ~ 7/1)					
	3-231	口径 13.6 高さ 4.4 底径 6.3	灰白色 (5PB9/1) 密 釉 灰色 (7.5Y7/2)					
	3-232	口径 13.7 高さ 4.0 底径 6.4	灰白色 (5RP9/1) 釉 明灰色 (7.5Y8/1)				底部内面が磨滅し、朱が付着。	
	3-233	口径 14.9 高さ 4.5 底径 8.4	明灰色 (5PB8.5/1) 釉 灰緑色 (2.5GY6/2 ~ 7/2)					
	3-234	口径 15.0	灰白色 (5PB9/1) 密 釉 灰色 (7.5Y7/3)				底部を欠く。	
	3-235	口径 16.6 高さ 5.4 底径 7.6	灰白色 (10PB9/1) 黒色細粒含む 釉 明灰色 (7.5Y8/1 ~ 8/2)					
	3-236	底部 9.4	灰白色 (5RP9/1) 釉 明灰色 (7.5Y8/1 ~ 8/3)				口縁部を欠く。	
	3-237	口径 19.8	明灰色 (10PB8/1) やや密 釉 灰色 (10Y7.5/2)				底部を欠く。	
	3-256	口径 13.3 高さ 4.2 底径 6.2	明灰色 (5P8/1) 密 釉 灰白色 (7.5Y9/1)				底部外面に墨書。	
	3-238	口径 15.5 底径 6.7	灰白色 (5RP9/1) 黒色細粒含む 釉 灰色 (10Y6/2)			高台は高く、断面長方形を呈する (II Bb3)。	高台は貼り付け。3-238は体部外面上段以下をケズリ。口縁部外面と内面をナデ。内面のみ施釉する。3-239は全面ナデ調整。施釉部位不明。	
	3-239	底径 6.2	明灰色 (10P8/1) 密 釉 灰白色 (5Y9/1) 殆ど発色せず					

出土遺物観察表

	3-240	口径 14.4	灰白色 (5P9/1) やや密 釉 黄灰色 (7.5Y7/5)	体部下段以下を欠く。体部は丸味を持ち、口縁端部は水平な面をなす。	外面はケズリ。内面はナデ調整。口縁端部はヘラキリのち軽くナデ。残存部全面に刷毛塗り施釉。	
灰釉陶器鉢	3-241	口径 29.4 高さ 9.5 底径 14.8	明灰白色 (5P8.5/1) 密 白色細粒含む 釉 明灰緑色 (2.5GY7/2 ~ 7/3)	深く大きな体部に断面方形の輪高台が付く。口縁部は上段で外反し、端部は丸くおさめる。灰釉碗に共通する器形。	高台は貼り付け。体部外面中段以下をケズリ。口縁部外面より内面にかけてナデ調整。内面のみ刷毛塗り施釉する。	
灰釉陶器蓋	3-242		明灰色 (10PB8.5/1) 密 釉 灰色 (10Y7/2 ~ 7/3)	丸味を持った天井部中央にはツマミの接合痕が環状に残る。天井部外面には二つの、内面には一つの段を付ける。口縁部は欠く。	天井部外面ケズリ。他の部位はナデ調整。天井部外面に刷毛塗り施釉。	
灰釉陶器壺蓋	3-243	口径 18.4	明灰色 (10PB8/1) 釉 灰緑色 (5GY7/3)	天井部はややふくらみを持つ。口縁部は下方に折れ曲り、端部は丸くおさめる。中心部を欠く。	天井部外面はケズリ。他の部位はナデ調整のち、天井部外面のみ刷毛塗り施釉を行う。	
灰釉陶器短頸壺	3-244		明灰色 (5P8/1) 密 釉 暗黄緑灰色 (10Y5/4)	大きく内傾する肩部外面に耳が付く。口縁部・体部は欠く。	ナデ調整。外面のみ釉を施す。	
	3-248	口径 9.0	明灰色 (5PB8.5/1) 密 釉 灰緑色 (2.5GY6/3)	胴部と肩部の境は丸味を持ち、内傾する肩部に直立する短い口縁が付く。口縁端部はわずかに内傾する面をなす。	内面はナデ調整。外面は釉が厚く調整不明。外面のみ施釉。	
	3-249	口径 7.0	明灰色 (2.5PB8/2) 密 釉 明灰色 (2.5PB8/2)	大きく内傾する肩部と直立する短い口縁部の破片。口縁端部は丸くおさめる。		
灰釉陶器長頸瓶	3-245	底径 6.7	明灰色 (10PB8/1) 釉 灰緑色 (5GY7/2 ~ 7/3)	平底で下ぶくれの体部は頸部でくびれ、口縁部は外反する。3-245・3-246・3-247は体部中段以上を欠く。3-250は大型で肩部の一方に板状の把手を付ける。	底部外面は糸切り未調整。体部下段をケズリ。他の部位はナデ調整。体部外面中段以上を刷毛塗り施釉。	
	3-246	底径 5.4	明灰色 (10PB8.5/1) 釉 明灰緑色 (2.5GY8/2 ~ 7/2)			
	3-247	底径 4.0	灰白色 (5P9/2) やや軟質			
	3-250	底径 12.0	明灰色 (10P8.5/1) 密 釉 灰色 (10Y7/2 ~ 7/3)			口縁端部を欠く。
	3-251	口径 11.0	灰白色 (5P9/2) 密 釉 灰色 (10Y6/2)	口頸部の破片。外上方へ立ち上がり、上段で大きく外反する。3-251は内傾する。3-252はわずかに外傾する端面を持ち、上端は突出する。	ナデ調整。残存部全釉。	
	3-252	口径 12.9	明灰色 (10YR8.5/1) 釉 灰色 (10Y6/2)			
	3-253	底径 7.8	明灰色 (10PB8/1) 黒色細粒含む 釉 灰色 (10Y6/3)	輪高台の付く壺底部の破片。高台は断面台形を呈し、端面中央部がわずかに凹む。3-255は高台端面が内傾する。	外面はケズリ。内面はナデ調整。高台は貼り付け。3-255・3-253の体部外面に垂下した釉がわずかに残る。3-253は底部外面に糸切り痕を残す。	
	3-254	底径 14.0	明灰色 (10Y8.5/1) やや粗			
3-255	底径 16.4	明茶褐色 (7.5YR8/5) やや密 釉 灰白色 (5PB9/1) 発色せず				
白色無釉陶器椀	3-257	口径 16.7	淡黄白色 (10YR9/2) やや軟質	体部は丸味を持って外上方へ立ち上がり、口縁部	体部外面はケズリのちミガキ。内面はナデのちミ	

					はわずかに外反する。端部は丸くおさめる。底部を欠く。	ガキ。			
	3-258	底径	8.5	灰白色 (5Y9/1) 軟質	底部は蛇の目高台 (I Ba)。体部は外上方へ開く。	外面はケズリ。内面は器表面が摩滅しているが、ミガキが僅かにみとめられる。高台は削り出し。	底部外面にヘラ記号「一」。		
白色無釉陶器皿	3-259	底径	6.7	灰白色 (5Y9/1) 軟質	底部は断面方形の輪高台 (I Bb)。体部は外上方へ開く。	外面はケズリ。内面はミガキ。高台は削り出し。3-260は器表面が摩滅し調整不明。			
白色無釉陶器椀	3-260	底径	7.8	灰白色 (2.5Y9/1) 軟質					
	3-261	底径	8.8	淡黄白色 (10YR9/2) 軟質					
青磁椀	3-262	口径	14.5	明灰色 (5PB8.5/1) 密釉 灰緑色 (2.5GY6.5/3 ~ 10Y6/2)	底部は蛇の目高台。体部は外上方へ直線的に開き口縁部に至る。端部は丸くおさめる。3-265は体部中段以上を欠く。	外面はケズリ。内面はナデ調整。全面施釉のち高台底部の釉をカキ取る。	底部外面にメアトが認められる。		
		底径	5.5						
	高さ	5.0						底部外面の五ヶ所にメアトが認められる。	
	3-263	口径	14.5	明灰色 (10PB8.5/1) 釉 灰色 (5Y6/3)					
		底径	5.8						
	3-264	口径	17.1	明灰褐色 (10YR8.5/2) 密釉 淡黄灰色 (2.5Y7/4)					
		底径	6.2						いずれも底部外面にメアトが認められる。
	3-265	底径	6.2	明灰色 (5PB8/1) 密釉 灰色 (7.5Y6.5/2)					
		底径	6.2	灰色 (10Y7.5/1) 密釉 灰色 (10Y7/2)			底部は断面方形の輪高台。体部は外上方へ開く。		
3-266	底径	6.2	明灰色 (2.5Y8/2) 密釉 灰色 (5Y7/3)						
3-267	底径	10.4	明灰色 (2.5Y8/2) 密釉 灰色 (5Y7/3)						
3-268	口径	16.5	明灰色 (5PB8.5/1) 釉 灰色 (7.5Y7/3)	底部は平坦で体部は外上方へ直線的に開き口縁部に至る。端部は丸くおさめる。	底部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。底部外面には施釉しない。	いずれも底部内外面にメアトが認められる。			
3-269	底径	6.2	灰色 (5PB7/1) 釉 黄灰色 (5Y6/4)	底部は円盤状の高台。体部は外上方へ直線的に開く。	底部外面はケズリのちナデ調整。他の部位はナデ調整。体部内外面中段以上に白土を塗り施釉する。				
	底径	5.6	灰白色 (7.5PB9/2) 釉 灰色 (5Y6/3)						
3-270	底径	5.6	灰白色 (7.5PB9/2) 釉 灰色 (5Y6/3)		底部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。底部外面には施釉しない。				
3-271	口径	19.8	明灰色 (2.5Y8/3) 釉 淡黄灰色 (2.5Y7/4)	体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめる。輪花皿。	ナデ調整。輪花は口縁端部を小さくV字形に切り欠く。				
青磁皿	3-272	底径	4.8	明灰色 (2.5Y8.5/2) 釉 灰色 (5Y7/3)	平底で体部は外上方に低く開く。端部は欠く。	外面はケズリ。内面はナデ調整。全面施釉。	底部外面にメアトが認められる。		
青磁合子(身)	3-273	口径	4.9	灰白色 (10PB9/1) 釉 灰色 (10Y7/2)	体部は直立し、受部は内上方に突出する。底部を欠く。	受部外面ケズリ。他の部位はナデ調整。受部外面は施釉しない。			
白磁蓋	3-274	口径	4.9	乳白色 (N9.5/) 釉 透明	丸味を持つ天井部の中央にツマミの痕跡を残す。水平に広がる鏝を持ち、口縁部は内下方に伸び、端部は丸くおさめる。	外面はケズリ。内面はナデ調整。鏝・口縁端部はナデ調整。上面のみ施釉する。			
		鏝径	9.1						
白磁椀	3-275	口径	13.8		口縁部は外上方へ開き、口縁端部は玉縁状に小さく肥厚する。	外面はケズリ。内面はナデ調整。残存部全釉。			
		口径	15.6						
白磁皿	3-276	口径	14.4		体部中段はゆるい稜を持ち、口縁部は外反する。				

					端部は丸くおさめる。	
白磁 椀	3-278	底径 6.2	乳白色 (N9.5/)	釉 透明	底部は蛇の目高台。体部は外上方へ広がる。	外面はケズリ、内面はナデ調整。3-278は高台下端面を不整方向にカギ取る。3-279は底部外面には施釉しない。
	3-279	底径 6.6				
	3-280	底径 6.4	乳白色 (N9.5/) 釉 透明 (やや緑がかかる)	底部は断面方形の輪高台。体部は丸味を持って外上方へ広がる。	外面はケズリ。内面はナデ調整。底部外面には施釉しない。	

観察表 23 三町地区 SB01・SB04 出土土器 (挿図 56・写真図版 64)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 椀 A	3-281	口径 12.6	明茶褐色 (7.5YR8/6) 密 雲母細粒含む	体部はやや丸味をもって立ち上がり外上方へ開く。口縁部は屈曲し、端部は上方につまみ上げられる。3-283は口縁端部を丸くおさめる。	体部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。	SB01 出土。
	3-282	口径 13.6 高さ 2.3	明茶褐色 (7.5YR7/5) 密 雲母細粒含む			SB01 出土。
	3-283	口径 13.2	明茶褐色 (7.5YR7/4～8/4) やや密			SB04 出土。
土師器 杯 A	3-284	口径 14.2	明茶灰色 (7.5YR8/3) 密 雲母細粒含む			SB01 出土。
	3-285	口径 14.2	明茶褐色 (7.5YR8/4) 密			SB01 出土。
	3-286	口径 15.2	明茶褐色 (7.5YR8/4) やや密 雲母細粒含む			SB04 出土。
土師器 甕	3-287	口径 11.8	明茶褐色 (7.5YR7/4～6/4) 密	体部はわずかに内傾し、口縁部は外反する。口縁端部は巻き込む様に突出する。	口縁部内外面はナデ調整。体部内面はオサエ。体部外面は横方向の平行タタキをナデ消す。	内外面共に煤が付着。SB04 出土。
須恵器 壺	3-288	口径 5.8 底径 7.6 高さ 10.3	外面 灰色 (5B5/1) 断面 灰色 (5GY5/1) 外面底部 灰色 (10B6/1)	平底でつり鐘形の体部に、大きく外反する口縁が付く。端部は丸くおさめる。	底部外面糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	SB01 出土。
緑釉陶器 椀	3-289	口径 13.4 底径 6.3 高さ 3.6	明灰色 (7.5PB8/2) 硬質 釉 灰色 (5Y7/3～6/3)	底部は円盤状高台 (I A)。体部は丸味を持って立ち上がり外上方に広がる。口縁端部は丸くおさめる。体部内面中段と口縁部外面に沈線をめぐらす。	体部外面下半をケズリ。他の部位はナデ調整高台は削り出し。底部外面以外を施釉する。	SB01 出土。

観察表 24 三町地区 SE06 出土土器 (挿図 57・写真図版 64)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿	3-290	口径 10.8 高さ 1.7	明茶褐色 (7.5YR7/4) 密	底部は平坦で、口縁部はやや丸味を持って立ち上がり上位でわずかに外反する。端部は丸くおさめる。	底部外面はオサエ。他の部位はナデ調整。底部内面にハケメが残る。	
土師器 椀 A	3-291	口径 13.8 高さ 2.2	明灰褐色 (10YR7/3) 密	底部は平坦で、体部は外上方へ立ち上がり、口縁部は屈曲し外反する。端部はつまみ上げられ上方に小さく肥厚する。	底体部外面をオサエ。他の部位をナデ調整。3-292は底部内面にハケメが残る。	
	3-292	口径 14.4 高さ 2.3	外面 明茶褐色 (7.5YR7/6) 内面 明灰褐色 (10YR8/3) 密			
土師器 杯 A	3-293	口径 15.6 高さ 2.5	肌色 (5YR8/4) 密	底部は平坦で、体部は外上方へ広がる。口縁部はやや外反し端部は上方へ突出する。	底部・体部外面をオサエ。他の部位はナデ調整。口縁部外面はきついナデ。	体部中段に粘土の継目が明瞭に残る。
土師器 杯 B	3-294	口径 19.6 高さ 4.5 底径 9.3	肌色 (5YR8/6) 密 雲母細粒含む	底部には断面三角形の小さな高台が付く。体部は外上方へ大きく開き、口縁部で屈曲し外反する。	底部・体部外面は粗いオサエ。他の部位はナデ調整。底部内面にハケメが残る。	

					端部はつまみ上げられ上方へ肥厚する。		
土師器 盤	3-295	底径 13.7	明灰色～明茶褐色 (2.5YR7.5/1～7.5YR7/4) やや密		高台の付く盤底部の破片。高台は外下方へ張り出し、端部は丸くおさめる。	ナデ調整。底部内面に粗いハケメが残る。	
土師器 高杯	3-296	残高 11.4	明茶褐色 (7.5YR7/4～5YR7/4) 芯部 暗灰色 (7.5YR4/1) 密 雲母細粒含む		脚上半部・杯部底面の破片。脚部は断面七角形を呈し、中空部は下方に向かって広がる。	棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方に向けて削る。杯部内面はナデ調整。杯部と脚部との境は明瞭である。	
黒色土器 椀	3-297	口径 14.6	口縁部外面から内面 金属光沢を帯びた黒色 体部外面 茶灰色 (7.5YR5/3) やや粗		底部を欠く。体部は丸味を持って立ち上がり外上方へ開く。口縁端部は小さく丸くおさめ、内面端部直下に沈線をめぐらす。	体部外面は粗いケズリでオサエ痕を残す。口縁部外面はナデ調整。内面は密なミガキの上に暗文を施す。	
須恵器 杯 A	3-298	口径 14.4 高さ 3.4	明灰色 (10Y8.5/1)		平底で体部は丸味を持って立ち上がり外上方へ広がる。口縁端部は内側に肥厚する。	底部外面はヘラオコシのちナデ調整。他の部位はナデ調整。	底部内面が磨滅し墨が付着する。
須恵器 鉢	3-299	底径 8.0	灰色 (10B6.5/1)		底部は円盤状を呈する。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。内外面にロクロ目が強く残る。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	内面が磨滅する。
緑釉陶器 椀	3-300	口径 12.2	明灰色 (10YR8.5/1) 密 やや軟質 釉 淡黄灰色 (2.5Y7/5)		体部中段以下を欠く。丸味を持った体部は口縁部でわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	ナデ調整。残存部全釉。	
	3-301	底径 7.0	明灰色 (10YR8/1～8/2) やや軟質 釉 淡黄灰色 (2.5Y7/4)		底部は円盤状の高台 (I A)。体部は丸味を持って立ち上がる。体部中段以上を欠く。	外面下半部をケズリ。以上をナデ調整。高台は削り出し。内面にはミガキを密に施し、全面にハケ塗り施釉する。いずれも底部外面の施釉は粗い。	
	3-302	底径 7.5	明灰色 (5Y8/1) 密 硬質 釉 暗黄緑灰色 (10Y6/4)		底部は幅広の蛇の目高台 (I Ba)。体部は丸味を持ち厚く、底部内面に凹線をめぐらす。		内外面にメアトが認められる。
緑釉陶器 皿	3-303	口径 14.4 高さ 2.8 底径 7.0	明灰色 (10Y8.5/1) 密 釉 黄緑灰色 (5GY7/4)		平らな底部に断面方形の比較的高い高台が付く。体部は丸味を持って外上方に広がり、口縁端部は丸くおさめる。内面底部に凹線をめぐらす。	外面はケズリ。他の部位はナデ調整。輪花は口縁部をヘラで外側からおさえる。刷毛塗り全釉。	
	3-304	底径 7.5	灰色 (10PB5/1) やや密 釉 暗黄緑色 (5GY4/4～7.5GY4/4)		平らな底部に比較的高い輪高台 (II Bb4) が付く。高台はやや内湾し、端部は丸い。内面底部に凹線をめぐらす。	内面は密なミガキ。外面はケズリ。高台は貼り付け。刷毛塗り全釉。	底部内外面の三方にメアトが認められる。
灰釉陶器 皿	3-305	底径 6.0	灰白色 (10PB9/1) 釉 灰色 (10Y7/3)		底部に先端のすぼまる高台 (II Be2) が付く。端部は丸い。	ナデ調整。高台は貼り付け。内面のみ施釉。	

観察表 25 十町地区 SX46 出土土器 (挿図 58、59・写真図版 65)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 皿	10-189	口径 13.4 高さ 2.0	明灰色 (2.5Y8/2) 密	底部と口縁部の境は不明瞭で、低く立ち上がる。	底部外面より口縁部外面中段までオサエ。口縁部上段はナデ調整。内面はナデ調整。	棺蓋上より出土。
	10-190	口径 13.7 高さ 1.8	明灰褐色 (10YR8/2) 密	口縁部上段は強いナデのために大きく外反し、端部は上方につまみ上げられる。		

黒色土器 椀	10-191	口径 15.3 高さ 5.4 底径 6.9	金属光沢を帯びた黒色	やや丸味を持つ底部には、断面方形でやや外へ張り出す高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸くおさめ、口縁部内面には凹線がめぐる。	体部、口縁部は内外面共横方向に密なミガキ。底部内面は一方に密なミガキを施す。底部外面はナデ調整のみ。高台は貼り付け。	B類
須恵器 壺	10-192	口径 4.8 高さ 10.3 底径 7.5	外面 暗灰色 (N3/ 断面 灰色 (N5/) 軟質	底部は平坦で広く、体部は直立し頸部に向かい丸味を持って内傾する。頸部はゆるやかに屈曲し口縁部は外反する。口縁部と体部の境は不明瞭である。	底部外面は糸切り未調整。他の部位はナデ調整。	
	10-193	口径 4.7 高さ 11.3 底径 7.8	外面 暗灰色 (N3/ ~ 4/ 断面 明灰色 (5PB8/1) 軟質	底部は平坦で広く、体部は中位でふくらみ、丸い肩を持つ。頸部の屈曲は弱く、口縁部は外反する。端部は外側に丸く肥厚する。		

観察表 26 硯 (挿図 60、61・写真図版 68、69)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考	
須恵器 円面硯	4-191	外堤径 13.8 高さ 6.7 底径 19.3	灰色 (10B6/1) 密	硯部と裾広がりの圏台からなり、圏台の上端に高い外堤をめぐらす。外堤下端に断面三角形の凸帯をめぐらす。4-189の凸帯は断面方形を呈し外方へ張り出す。硯面は凸面のも (3-306・3-307・4-190) と、硯面を平坦にし、陸部と海部との境に弱い稜をつけるもの (4-191) とがある。圏台には長方形の透かしを入れる。4-191・4-189・3-309は透かしと縦方向の線刻を交互に配する。	ナデ調整。3-306・3-307は硯部裏面をオサエ。	透かしは幅9mm前後のものを10箇所配する。SK14出土。	
	3-306	外堤径 11.4	灰色 (2.5PB7/2) 密			硯面に渦巻状の凹線が残る。SX07出土。	
	3-307	外堤径 13.0					
	4-189	外堤径 12.5	明灰色 (5Y8/1) 密				四町地区包含層出土。
	4-190	外堤径 12.7	明灰色 (5B7/1) 密				硯面に渦巻状の凹線が残る。四町地区包含層出土。
	3-309	外堤径 15.5	明灰色 (10B7/1 ~ 8/1)				SX07出土。
	10-185	外堤径 14.0	明灰色 (N7.5/) 密 芯部 灰色 (2.5Y7/3)				SD38出土。
須恵器 風字硯	3-310		表面 灰色 (5PB7/1) 断面 灰色 (2.5PB7/1と10PB6/1の層状)	海部の破片。外堤端部は平坦面をなす。	内面と底部外面はナデ調整。外堤部外面と端面は粗いヘラケズリ。	SX07出土。	
	3-313		明灰色 (10B7/1)	陸部の破片。外堤の立ち上がりがわずかに認められ、裏面には脚の接合痕が残る。	ケズリ。調整はやや粗い。	SX07出土。	
	3-308		表面 明灰色 (10B7/1) 断面 灰色 (5P6/1) やや粗	陸部の破片。裏面には脚部がわずかに残る。端部はわずかに立ち上がる。	外面底部をケズリ。他の部位はナデ。脚の貼り付けは粗い。	SX07出土。	
	4-192		明灰色 (5PB8/1) やや密	硯面の海部と陸部との境に弧状の内堤が付く。	内堤は貼り付け。	SD12出土。	
	3-312		表面 明灰色 (10PB/1) 断面 明灰紫色 (2.5RP 8.5/2) 密	硯面を縦断する内堤の付く二面硯陸部の破片。陸部の両側には低い外堤が付き、対応する二方向に断面方形の脚を付ける。	外堤部・内堤部・陸部裏面はナデ。陸部はケズリ。陸端部はヘラ切り。脚部は貼り付けのちヘラで四方を面取りする。	SX07出土。	
須恵器硯	3-311		灰色 (5PB6/1 ~ 7/1)	三脚のつく底部の破片。形状は不明。内面はロクロ目が残る。	脚部は手づくね。外面底部はヘラオコシ未調整。内面はナデ。	SX07出土。	

須恵器 転用硯	5-333	径 9.5	明灰色 (10B7/1.5) やや密	壺の体部を欠いて、底部 外面を硯に転用したもの。	硯面は糸切り未調整。他 の部位はナデ。	SD19 出土。
黒色土器 風字硯	3-314		黒色 (N2/ ~ 3/ 一部金属光沢を帯びる	海部の破片。丸味を持っ て立ち上がる外堤端部内 面に、浅い沈線をめぐら す。	全面に丁寧なミガキを施 す。	SX07 出土。
	3-315		金属光沢を帯びた黒色	陸部の破片。側面には低 い外堤が付き、端部内面 に沈線をめぐらす。底部 には脚部の痕跡が認めら れる。	脚部はヘラケズリ。他の 部位はミガキを施す。	SX07 出土。
緑釉陶器 風字硯	5-331		明灰色 (10Y8.5/1) 硬質 釉 緑灰色 (10GY6/4)	海部外堤の破片。内面は 陰刻花文を施す。	外面はケズリ。内面はミ ガキ。両面に施釉する。	同一個体。SD19 出土。
	5-332					
	3-316		灰白色 (5Y9/1) 釉 淡黄灰色 (2.5Y8/6)	陸部の破片。外堤は低く、 端部は水平な面をなす。 裏面には脚が剥離した痕 跡をとどめる。硯面には 陰刻花文を施す。	裏面から口縁部端面まで をケズリ。	SX07 出土。
	3-317		灰白色 (5Y9/1) 釉 淡黄灰色 (2.5Y8/6)	海部付近の破片。外堤の 立ち上がりがわずかに残 る。硯面には陰刻花文を 施す。	裏面はケズリ。内面は磨 減する。硯面中央部以外 を施釉する。	3-316 と同一個 体？ SX07 出土。
灰釉陶器 風字硯	10-186		明灰色 (10Y8/1) 釉 明灰緑色 (2.5GY7/2)	断面十角形を呈する脚部 の破片。	貼り付けのち十面の面取 りを行う。裏面のみ施釉。	十町地区包含層 出土。

観察表 27 金属製品 (図版 26・写真図版 69、70)

種類	番号	法量	形態・手法の特徴	備考
銅鈔帯 表金具	5-335	横幅 3.33 縦幅 3.18 厚さ 0.15 透穴 1.80 × 0.62	ほぼ正方形で下方寄りに長方形の透かし穴をあける。裏面を凹ませ四隅に鉾足を付ける。表面には黒漆膜が残る。鋳造品。	SD19 出土。
	5-336	横幅 2.90 縦幅 2.49 厚さ 0.20 透穴 不明 × 0.5	やや横長の方形を呈し、上辺をわずかに丸くする。下方寄りに長方形の透かし穴をあけ、裏面の三方に鉾足を付ける。凹ませた裏面には皮革の痕跡が残る。鋳造品。	5-336 と 5-337 は組合い。鉾足の長さから帯の厚さは約 2mm 程度の厚さと推定出来る。 SD19 出土。
銅鈔帯 裏金具	5-337	横幅 2.75 縦幅 2.40 厚さ 0.18	5-336 とほぼ法量の一致する平板で 5-337 の鉾足と対応する部分に鉾の先端部が残る。鋳造品。	
銅製 飾金具	3-331	厚さ 0.05 ~ 0.10	板状の製品で、三辺を折り曲げる。	SX07 出土。
	3-332	横方向残長 4.45 縦方向残長 1.40 厚さ 0.02	板状の金具の一部で、二つの穴を穿つ。穴の周囲は一方方向に盛り上がる。	SX07 出土。
銅鈴	3-333	直径 1.95 高さ (鈕を 含む) 1.20 厚さ 0.25	球形の鈴の上半。半球体の下縁端は外反する。鈕は頂部に円孔を穿ち、長方形の銅版の一端を貫通させてかしめる。成形は叩き出し。	3-333 と 3-334 は組合う。 SX07 出土。
	3-334	直径 2.0 高さ 1.2 厚さ 0.25	球形の鈴の下半。半球体の下部に長方形の透かしをあける。成形は叩き出し。	
銅鈔	3-335	長径 1.12 頭高 0.40	鈔頭は六弁の花弁形を呈する。頭部と足を一体に鋳造する。	SX07 出土。

観察表 28 石製品 (図版 26・写真図版 70)

種類	番号	法量	色調・材質	形態の特徴	手法の特徴	備考
石錘	3-328	長径 3.8 短径 3.1 厚さ 1.8	砂岩	丸く扁平な自然石の中央部付近に円形の小孔を穿つ。	穿孔は両側より行う。	SE06 出土。
石鈔帯	10-187	長辺 3.40 短辺 不明 厚さ 0.50	暗青色斑入緑灰色	矩形の石板で四方を面取りし、その断面は台形を呈する。10-187 は長方形の透かし穴を穿ち、裏面の四隅に二孔一対の帯装着のための小孔をあける。一対の孔は斜め方向にあげ連結する。3-329 は裏面の三方に孔を穿つ。	裏面を除いて各面は平滑に研磨する。	十町地区包含層出土。
	3-329	長辺 2.43 短辺 2.32 厚さ 0.60	黄緑灰色			SX07 出土。
	3-330	横幅 5.10 縦幅 4.10 厚さ 0.80	黒灰色縞入半透明乳白色	矩形の石板の一边を弧状につくり、長辺の基部 8 mmほど残し面取りを施す。その断面は横方向で平行四辺形、縦方向は台形を呈する。裏面の三方に潜り穴を穿つ。	裏面を除く各面を研磨する。	
	10-188	横幅 3.9 縦幅 2.3 厚さ 8.0	黒灰色 (の変成岩)?	半円形の石板で、10-188 の裏面には縦方向と横方向の二対の潜り穴をあける。4-197 は長方形の透かし穴を開け、裏面の三方に潜り穴を穿つ。	裏面を除いて各面は平滑に研磨する。	十町地区包含層出土。
	4-197	厚さ 0.65	緑灰色の変成岩			SD11B 出土。

観察表 29 土製品 (図版 26・写真図版 70)

種類	番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土馬	4-193	残長 7.4	明灰色 (2.5Y8.5/2)	土師質でいずれも破損している。3-319 以外は頭部を欠く。	粘土塊より首・足・尾をつまみ出し二つ折りにする。頭部には別の粘土を貼り付ける。	SD11A 出土。
	4-194	残長 8.0	明灰褐色 (10YR8/2 ~ 8.5/2) 芯部暗灰色 (10YR3/1)			SD13 出土。
	4-195	残長 5.1 残長 5.9	明灰色 (2.5Y8.5/2)			SD11・12 交点出土。
	3-318	残長 7.0	明灰褐色 (10YR8/3) 赤褐色粒含む			SX07 出土。
	3-319	残長 5.0 残長 5.9	明茶褐色 (7.5YR7/6) やや粗 雲母・長石・石英粒含む			
	5-338	残長 6.2	淡黄白色 (10YR9/2) 密			SD19 出土。
土錘	3-320	全長 6.2 最大径 2.1	褐灰色 (10YR6/4) やや粗	中空の管形を呈する。紡錘形のもの、円筒形のものがある。	粘土を棒状の芯に巻き付け、外面を指ナデにより仕上げる。	SX07 出土。
	3-321	全長 4.3 最大径 1.2	肌色 (58/4) 密 やや軟質			
	3-322	残長 3.9 最大径 1.1	灰白色 (2.5Y9/1) やや軟質			
	3-323	残長 2.9 最大径 1.1	明茶褐色 (7.5YR8/4) 密			
	3-324	全長 2.9 最大径 1.0	明灰褐色 (10YR8/2) やや粗石英・長石・雲母細粒含む			
	3-325	全長 2.5 最大径 1.1	明灰褐色 (10YR8/2) 密			
	3-326	残長 2.2 最大径 0.9	淡肌色 (7.5YR9/3) やや軟質			
	3-327	残長 2.5 最大径 1.0	淡黄白色 (10YR9/3) やや軟質			
	4-196	全長 4.2 最大径 1.1	肌色 (7.5YR9/4) やや軟質			

ミニチュア鍋	5-334	口径 6.3	橙灰褐色 (5YR7/6) やや粗	丸い体部に、外反する小さな口縁が付く。	体部・底部はケズリ。他の部位はナデ。	SD19 出土。
--------	-------	--------	----------------------	---------------------	--------------------	----------

観察表 30 三町地区 古墳時代の土器 (挿図 64)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器甕	3-339	口径 17.8	灰色 (10Y7/3 ~ 6/4) 外面 黒 やや密 雲母細粒含む	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外上方へ開く。端部は内側に肥厚する。	ナデ調整。	
土師器高杯	3-340	残高 6.8	明茶灰色 (2.5YR8/3) 粗	外下方へ向けて広がる脚部の破片。	外面ナデ調整。内面上段はヘラケズリ。以下はシボリ目が残る。	
須恵器高杯	3-341	底径 8.0	明灰色 (2.5PB8/3) 密	脚部は外下方に向けて広がり裾部で大きく外方へ開く。裾端部は内傾する面をなすがやや丸味を帯びる。脚部には長方形の透かしを三方に入れる。杯部を欠く。	ナデ調整。	
須恵器杯蓋	3-342	口径 14.1	外面 灰色 (5Y7/1) 内面 茶灰色 (10R6/3) やや密	天井部は丸味を持ち、稜は殆ど突出せず、凹線をめぐらす。口縁部は外下方へわずかに開き、端部は中央部の凹んだ内傾する面をなす。	天井部外面はケズリ。天井部内面は同心円文が認められる。他の部位はナデ調整。	
	3-343		灰色 (10B5/2) やや密 白色粒含む	天井部はやや丸味を持ち、稜は小さく外方へ突出する。口縁部は下方へ下がり、端部は欠く。	天井部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。	
須恵器杯身	3-344	口径 11.9 最大径 14.4	灰色 (10B7/1) やや粗 白色粒・黒色粒含む	立ち上がりは高く、やや内傾する。端部は内傾する面をなし中央部が凹む。受部は外方へのび、端部は丸味を持つ。底部中央を欠く。	底部外面はケズリ。他の部位はナデ調整。	
	3-345	口径 10.6 ~ 12.6 最大径 13.8 高さ 5.0	明灰色 (5Y8/1 ~ 5B8/1) 密 白色粒含む	立ち上がりは高く、やや内傾し、端部は丸くおさめる。受部は外方へのび、端部は丸味を持つ。体部は深く、やや丸味を持つ。焼き歪む。	底部・体部外面をケズリ。底部内面中央部に同心円文を残す。他の部位はナデ調整。	

観察表 31 十町地区 SD48 出土土器 (挿図 66・写真図版 80、81)

器種器形	土器番号	法量	色調・胎土	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器碗	10-202	口径 13.0 高さ 6.0	橙灰褐色 (5YR6/4) 均質 白色細粒含む	小さな平底で体部は内湾し口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。10-203は口縁部が強く内湾する。	底部外面より体部上段までヘラケズリ。口縁部外面より内面はナデのちミガキを施す。	
	10-203	口径 13.0 高さ 5.5	赤褐色 (10R4/6) 細砂粒含む		底部外面より体部上段までヘラケズリのち丁寧なミガキ。口縁部外面より内面はナデのちミガキを施す。	
	10-204	口径 16.4 高さ 5.2	茶色 (2.5YR4/6) 均質	小さな平底で体部は内湾し口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部外面より体部上段まではヘラケズリのち粗いミガキ。口縁部外面より内面はナデ調整。	
	10-205	口径 15.5 高さ 7.0	赤褐色 (10R4/6) 均質 白色細粒を含む	丸底で体部はやや内湾しながら立ち上がる。体部と口縁部の境には内外面	底部外面から体部上段までは丁寧なヘラケズリ。口縁部外面より底部内面	

出土遺物観察表

				共ゆるい凹線がめぐり、口縁部はわずかに内傾しながら立ち上がる。端部は丸くおさめる。	までをナデ調整のち、体部内面に放射状の暗文を施す。器表面には丹を塗る。	
土師器壺	10-206	最大径 7.4	灰褐色 (10YR6/2) 細砂粒含む	底部は平らで、下ぶくれの体部にやや外傾する口縁部が付く。体部と口縁部の境は内面は稜があり明瞭だが、外面は不明瞭。口縁端部は欠く。	体部中段以下は内外面共オサエ。体部上段から口縁部はナデ調整のち、口縁部内面にハケメ調整を施す。	
土師器高杯	10-207	残高 4.7	橙灰褐色 (5YR7/6) 細粒	杯部体部は口縁部に向けやや内湾しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。脚部は下外方にやや広がり裾部は大きく開く。端部は丸くおさめる。脚部内面にはしぼり目が残る。10-207は脚部の破片。	巻き上げのちナデ調整。	
	10-208	口径 12.9 高さ 10.2 底径 8.5	橙褐色 (2.5YR6/8) 細粒 均質			
土師器甕	10-209	口径 13.6	橙灰褐色 (5YR7/4) チャート粒含む	体部上段は大きく内傾し頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部はわずかに外反し端部は丸くおさめる。	体部内面は横方向のケズリ。口縁部内面はナデ調整。外面はハケメをナデ消す。	
	10-210	口径 16.9	明灰褐色 (10YR7/2 ~ 8/2)	体部上段は内傾頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は外傾し端部は丸くおさめる。	体部内面は横方向のケズリ。口縁部内面は横方向のハケメ調整のちかろくナデ調整。口縁部外面は縦方向のハケメをナデ消す。体部外面は方向のハケメ調整。	
	10-211	口径 18.7	明茶褐色 (7.5YR7/4) 長石・石英細粒多く含む	体部は丸味を持ち内傾しながら立ち上がり、頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は外反し端部は丸くおさめる。	体部内面はオサエのち軽いナデ調整。体部外面は方向の丁寧なハケメ調整。口縁部は内外面共ナデ調整。	体部内面には粘土の接合痕が残る。体部外面には煤が付着。
	10-212	口径 15.2	明灰褐色 (10YR8/2) 石英・チャート粒多く含む	体部はやや丸味を持って内傾し、頸部で「く」の字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部は外傾する小さな面をなす。	口縁部内外面と体部内面上段はハケメをナデ消す。体部内面中段はケズリ調整。体部外面は主に縦方向のハケメ調整を施す。	外面に煤が付着。
須恵器高杯	10-213	底径 9.2	暗灰色 (5PB5/1 ~ 4/1)	杯部は欠く。脚部は外下方へ広がり、端部近くで垂直に屈曲する。端部は鋭い。脚部には長方形の透かしを三方向に入れる。	脚部上段にカキ目を施す。他の部位はナデ調整。	
須恵器高杯蓋	10-214	口径 12.3 最大径 12.5 高さ 5.0	暗灰色 (10BG4/1 ~ 5B3/1)	やや丸味を持った天井部外面中央に上面の凹むツマミが付く。稜は鋭く外方へ突出する。口縁部は内湾気味に立ち、内傾する端面を持つ。	天井部外面は回転ケズリ。他の部位はナデ調整を施す。	天井部に自然釉がかかる。
須恵器杯蓋	10-215	口径 12.3	明灰色 (5PB8/1) 白色細粒含む	稜は丸味を持って外方へ突出する。口縁部は直立し下段でわずかに外反する。内傾する端面は中央部がやや凹む。天井部のほとんどを欠く。		
	10-216	口径 12.5 高さ 4.5	暗灰色 (5B4/1)	天井部は丸味を持ち、稜は小さく外方へ突出す	天井部外面はケズリ調整。天井部内面は不整方	

				る。口縁部は直立し、内傾する端面は中央部がやや凹む。	向のナデ調整。他の部位は回転ナデ調整。	
須恵器 杯身	10-217	口径 11.7 最大径 13.6	表面 暗灰色 (5PB4/1) 断面 灰色 (10Y7/1)	底部は欠く。立ち上がりは内傾したのち直立し、端部は水平な面をなし、中央がやや凹む。受部は水平にのび、端部は丸味を持つ。	体部下半をケズリ。他の部位はナデ調整。	
	10-218	口径 10.6 最大径 13.0	明灰色 (10PB8/1) 密	立ち上がりは内傾してのび、端部は丸味を持つ。受部は水平にのび、端部は鋭く断面三角形を呈する。底部の平坦部は比較的小さく、体部は丸味を持ち深い。	外面体部下半から底部にかけてケズリ。他の部位はナデ調整を施す。	
	10-219	口径 11.3 最大径 13.2	表面 暗灰色 (5PB5/1) 断面 灰色 (5RP5/1)	立ち上がりはやや内傾しながらのび、端部は丸味を持つ。受部は外上方へのび、端部はやや丸味を持つ。底部は平らで、体部は丸い。		底部外面にヘラ記号「→」。
須恵器 甕	10-220	口径 17.2 最大径 27.1 高さ 26.8	暗灰色 (2.5PB5/2) 白色砂粒含む やや軟質	ほぼ球形の体部に外反する口頸部が付く。頸部と胴部の境は明瞭。口頸部外面には三条の凸帯がめぐり、凸帯間に波状文を配する。	口頸部はナデ調整。胴部・底部外面は平行タタキの上からカキメを施す。底部のタタキは体部のタタキの後つけられる。胴部内面には同心円文が残る。	
	10-221	最大径 32.0	表面 灰色 (5B2/1) 断面 明灰色 (5B8/1) 密 やや軟質	卵形の胴部。口頸部は欠く。	体部外面上半は疑似格子タタキの上よりカキメ。体部外面下半は斜方向の平行タタキを行う。内面上部は同心円文を粗くナデ消す。	